



Unable to locate subtitle

AWS Data Exchange ユーザーガイド



AWS Data Exchange ユーザーガイド: ***Unable to locate subtitle***

Copyright © 2025 Amazon Web Services, Inc. and/or its affiliates. All rights reserved.

Amazon の商標およびトレードドレスは Amazon 以外の製品およびサービスに使用することはできません。また、お客様に誤解を与える可能性がある形式で、または Amazon の信用を損なう形式で使用することもできません。Amazon が所有していないその他のすべての商標は Amazon との提携、関連、支援関係の有無にかかわらず、それら該当する所有者の資産です。

Table of Contents

とは AWS Data Exchange	1
のデータ許可とは AWS Data Exchange	1
AWS Marketplace データ製品とは	2
サポートされるデータセット	3
アクセス AWS Data Exchange	4
データレシーバー	4
データ送信者とデータプロバイダー	4
サポート対象の リージョン	4
関連サービス	5
設定	6
にサインアップする AWS アカウント	6
にサインアップする AWS アカウント	6
管理アクセスを持つユーザーを作成する	7
ユーザーの作成	8
AWS データセットでの Open Data の使用	10
コンソールの使用 AWS Data Exchange 開始	11
ステップ 1: AWS データセットでオープンデータを検索する	11
ステップ 2: AWS データセットでオープンデータを使用する	12
を使用せずに開始する AWS アカウント	12
ステップ 1: AWS データセットでオープンデータを検索する	12
ステップ 2: AWS データセットでオープンデータを使用する	13
のデータ AWS Data Exchange	14
アセット	14
アセットの構造	14
アセットタイプ	15
改訂	17
リビジョンの構造	18
データセット	19
所有データセット	20
権限を持つデータセット	20
データセットタイプ	20
Amazon S3 データアクセスデータセット	21
AWS Lake Formation データセット (プレビュー)	22
AWS リージョン および データセット	22

データセットの構造	22
データセットのベストプラクティス	23
[タグ]	24
データ許可の作成	25
プログラマ的なアクセス	26
ファイルベースのデータを含む	26
ステップ 1: アセットを作成する	26
ステップ 2: データセットを作成する	27
ステップ 3: リビジョンを作成する	27
ステップ 4: リビジョンにアセットをインポートする	28
ステップ 5: 新しいデータ許可を作成する	29
APIs を含む	30
前提条件	31
ステップ 1: API リソースポリシーを更新する	33
ステップ 2: API データセットを作成する	34
ステップ 3: リビジョンを作成する	35
ステップ 4: リビジョンに API アセットを追加する	37
ステップ 5: API を含む新しいデータ許可を作成する	42
Amazon Redshift データセットの格納	44
ステップ 1: Amazon Redshift のデータ共有アセットを作成する	44
ステップ 2: Amazon Redshift データセットを作成する	45
ステップ 3: リビジョンを作成する	45
ステップ 4: リビジョンに Amazon Redshift のデータ共有アセットを追加する	46
ステップ 5: 新しいデータ許可を作成する	47
Amazon S3 データアクセスの抑制	48
ステップ 1: Amazon S3 データセットを作成する	57
ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを設定する	57
ステップ 3: データセットを確認して完成する	59
ステップ 4: 新しいデータ許可を作成する	59
データアクセス許可データセットを含む AWS Lake Formation (プレビュー)	60
ステップ 1: AWS Lake Formation データセットを作成する (プレビュー)	61
ステップ 2: AWS Lake Formation データアクセス許可を作成する (プレビュー)	62
ステップ 3: 確認して確定する	62
ステップ 4: リビジョンを作成する	63
ステップ 5: AWS Lake Formation データセットを含む新しいデータ許可を作成する (プレビュー)	63

AWS Lake Formation データ許可データセットを含むデータ許可を作成する際の考慮事項 (プレビュー)	65
データ許可の承諾と のデータへのアクセス AWS Data Exchange	66
関連トピック	67
データ許可の承諾後にデータセットにアクセスする	67
ファイルベースのデータを含む	68
APIs を含む	69
Amazon Redshift データセットの格納	70
Amazon S3 データアクセスの抑制	71
AWS Lake Formation データセットを含む (プレビュー)	74
組織内でのデータ許可ライセンスの共有	75
ライセンス共有の前提条件	76
ライセンスの表示	76
ライセンスの共有	77
データ製品のサブスクライブ	78
関連トピック	79
製品のサブスクリプション	79
データセットとリビジョン	82
データディクショナリ、サンプル	83
サブスクライバーとしての使用の開始	83
ステップ 1: をセットアップする AWS Data Exchange	84
ステップ 2: カタログを参照する	84
ステップ 3 : (オプション) データ製品に関するレコメンデーションをリクエストする	85
ステップ 4: (オプション) データディクショナリとサンプルを含む製品を評価する	86
ステップ 2: 製品をサブスクライブおよびアクセスする	88
製品のサブスクライブ	89
ファイルベースのデータを含む	90
APIs を含む	94
Amazon Redshift データセットの格納	98
Amazon S3 データアクセスの抑制	101
AWS Lake Formation データセットを含む (プレビュー)	106
データディクショナリの表示とダウンロード	108
サブスクライバーのサブスクリプション検証	109
サブスクリプションリクエストの完了	109
保留中のサブスクリプションリクエストを確認する	110
E メール通知	111

組織内でのライセンスサブスクリプションの共有	111
ライセンス共有の前提条件	112
ステップ 1: ライセンスを表示する	112
ステップ 2: ライセンスを共有する	113
BYOS オフナー	113
プライベート製品とオフナー	115
サブスクリプションの管理	116
サブスクリプションの表示	116
サブスクリプションの自動更新を有効にする、無効にする	117
製品のサブスクリプションを解除する	117
とのやり取りについて学ぶための製品 AWS Data Exchange	118
AWS Data Exchange ハートビート	118
AWS Data Exchange APIs用の	121
ワールドワイドイベント出席	125
AWS Data Exchange for AWS Lake Formation (プレビュー)	128
AWS Data Exchange Amazon S3 用の	133
AWS Data Exchange プロバイダー生成通知	137
でのデータ製品の提供 AWS Marketplace	140
拡張プロバイダープログラム (EPP)	142
プログラマ的なアクセス	142
関連トピック	142
プロバイダーとしての使用開始	143
ステップ 1: 登録資格を確認する	143
ステップ 2: プロバイダーになるための登録を行う	145
ステップ 3: データの適格性を確認する	146
公開ガイドライン	146
新しい製品の公開	149
ファイルベースのデータを含む	149
APIs を含む	156
Amazon Redshift データセットの格納	175
Amazon S3 データアクセスの抑制	181
AWS Lake Formation データアクセス許可データセットを含む (プレビュー)	198
製品のベストプラクティス	205
製品の可視性	205
機密カテゴリの情報	206
製品の詳細	208

リビジョンアクセスルール	211
データディクショナリ	212
サンプル	212
製品の説明テンプレート	213
汎用テンプレート	214
金融サービステンプレート	216
ヘルスケアとライフサイエンスのテンプレート	219
マーケティングおよび広告テンプレート	221
メディアおよびエンターテインメントテンプレート	223
公共部門テンプレート	226
小売およびロケーションテンプレート	227
オファ어의作成	230
オファ어의料金	231
米国の消費税と使用税	231
データサブスクリプション契約	231
返金ポリシー	232
サブスクリプション検証	232
オファ어의自動更新	232
プライベートオファ어	232
BYOS オファ어	234
サブスクリプションの表示	236
製品の更新	237
製品とオファ어의詳細の更新	238
データディクショナリの更新	240
サンプルを更新する	241
カスタムメタデータの更新	241
データセットの新しいリビジョンを発行する	242
製品を発行解除する	244
リビジョンの削除	245
リビジョンの取り消し	246
プロバイダーのサブスクリプション検証	250
E メール通知	252
サブスクリプション検証リクエストの表示	252
リクエストを承認または拒否する	253
プロバイダー生成通知	255
でのプロバイダー財務 AWS Marketplace	256

支払い	256
米国の消費税と使用税	256
AWS Marketplace 販売者レポート	257
サブスクライバーの返金リクエスト	257
のジョブ AWS Data Exchange	258
ジョブプロパティ	258
AWS リージョン および ジョブ	260
アセットのインポート	260
S3 バケットから	260
署名付き URL から	262
Amazon API Gateway API から	263
Amazon Redshift のデータ共有から	265
から AWS Lake Formation (プレビュー)	267
アセットのエクスポート	269
S3 バケットへ	269
署名付き URL へ	272
リビジョンのエクスポート	274
リビジョンをエクスポートするときのキーパターン	275
AWS SDKs の使用	277
コンソール (サブスクライバー) の使用	278
コンソール (プロバイダー) の使用	279
リビジョンの自動エクスポート (サブスクライバー)	279
クォータ	286
Service Quotas	286
サービスエンドポイント	286
エクスポートとインポートジョブのガイドライン	286
リソースフィールドに対する制約	288
ログ記録とモニタリング	290
モニタリング	290
の Amazon EventBridge イベント AWS Data Exchange	291
ファイルベースのデータセットを追加するイベント	294
Amazon S3 データアクセスデータセットの追加に関するイベント	295
AWS Lake Formation データアクセス許可データセットを追加するためのイベント	296
Amazon Redshift データ共有データセットを追加するためのイベント	297
Amazon API Gateway API データセットの追加に関するイベント	298
リビジョンの追加に関するイベント	299

Amazon S3 データアクセスデータセットのリビジョンを追加する	300
AWS Lake Formation データアクセス許可データセットリビジョンを追加するためのイベント ト (プレビュー)	301
Amazon Redshift データ共有データセットのリビジョンを追加する	302
Amazon API Gateway API データセットのリビジョンをデータセットのリビジョンを追加す る	303
リビジョンを取り消すためのイベント	307
Amazon Redshift リソースで実行されるアクションのイベント	308
Amazon Redshift データ共有にアクセスできなくなった場合のイベント	309
自動エクスポートジョブのイベントが完了しました	310
自動エクスポートジョブのイベントが失敗しました	311
プロバイダーが生成するデータ更新通知のイベント	312
プロバイダーが生成するスキーマ変更通知のイベント	313
プロバイダーが生成するデータ遅延通知のイベント	315
プロバイダーが生成するデータ廃止通知のイベント	316
データ許可を受け入れるためのイベント	317
データ許可を拡張するためのイベント	318
データ許可を取り消すためのイベント	319
AWSAWS Data Exchange イベントのユーザー通知	319
を使用した AWS Data Exchange API コールのログ記録 AWS CloudTrail	321
AWS Data Exchange CloudTrail の情報	323
AWS Data Exchange ログファイルエントリについて	324
AWS Data Exchange CloudTrail ログ記録の今後の変更	326
セキュリティ	329
データ保護	329
保管中の暗号化	331
転送中の暗号化	331
コンテンツに対するアクセス制限	331
Amazon S3 データアクセスのキー管理	331
AWS KMS 許可の作成	332
暗号化コンテキストと許可制約	332
AWS KMS keys での のモニタリング AWS Data Exchange	332
アイデンティティとアクセス権の管理	336
認証	337
アクセスコントロール	338
API アクセス許可のリファレンス	346

AWS マネージドポリシー	354
サービスリンクロールの使用	361
のサービスにリンクされたロールの作成 AWS Data Exchange	362
のサービスにリンクされたロールの編集 AWS Data Exchange	362
のサービスにリンクされたロールの削除 AWS Data Exchange	362
AWS Data Exchange サービスにリンクされたロールでサポートされているリージョン	363
ライセンス管理のサービスにリンクされたロール	363
AWS Organization Discovery のサービスにリンクされたロール	364
コンプライアンス検証	366
PCI DSS コンプライアンス	367
耐障害性	367
インフラストラクチャセキュリティ	368
VPC エンドポイントAWS PrivateLink	368
AWS Data Exchange VPC エンドポイントに関する考慮事項	369
AWS Data Exchangeのインターフェイス VPC エンドポイントの作成	369
の VPC エンドポイントポリシーの作成 AWS Data Exchange	369
AWS Marketplace カタログ API	372
AddDataSets	372
チュートリアル: 公開済みのデータ製品への新しいデータセットの追加	373
AddDataSets 例外	377
ドキュメント履歴	378
.....	cdii

とは AWS Data Exchange

AWS Data Exchange は、AWS お客様が他の組織のデータ使用権限を大規模に簡単に共有および管理できるようにするサービスです。

データレシーバーは、すべてのデータ許可と AWS Marketplace データサブスクリプションを 1 か所で追跡および管理できます。AWS Data Exchange データセットにアクセスできる場合は、互換性のある AWS またはパートナー分析と機械学習を使用して、データセットからインサイトを抽出できます。からデータ製品を購入する方法については AWS Marketplace、「」を参照してください [AWS Data Exchange のデータ製品のサブスクリプション](#) [AWS Data Exchange](#)。

データ送信者の場合、はデータ配信と使用権限インフラストラクチャを構築および維持する必要性 AWS Data Exchange を排除します。を持つユーザーは誰でも、データ権限を作成してデータレシーバーに送信 AWS アカウント できます。でデータを製品として販売するには AWS Marketplace、ガイドラインに従って適格性を判断してください。詳細については、「[で AWS Data Exchange のデータ製品の提供 AWS Marketplace](#)」を参照してください。

さらに、の有無にかかわらず、誰でも AWS アカウント Open [Data on AWS](#) プログラムの一部である公開されているデータセットを検索して使用できます。詳細については、「[での AWS データセットでの Open Data の使用 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

トピック

- [のデータ許可とは AWS Data Exchange](#)
- [AWS Marketplace データ製品とは](#)
- [サポートされるデータセット](#)
- [アクセス AWS Data Exchange](#)
- [サポート対象の リージョン](#)
- [関連サービス](#)

のデータ許可とは AWS Data Exchange

データ許可は、データセットへのアクセス権をデータレシーバーに付与するためにデータ送信者によって作成される の交換単位 AWS Data Exchange です。データ送信者がデータ許可を作成すると、許可リクエストがデータレシーバーの AWS アカウントに送信されます。データレシーバーはデータ許可を承諾し、基になるデータへのアクセス権を取得します。

データ製品は、以下の部分で構成されます。

- データセット – データセット AWS Data Exchange は、送信者によってキュレートされたリソースです。これには、データグラントを承諾した後にレシーバーがアクセスするデータアセットが含まれます。は、ファイル、API、Amazon Redshift、Amazon S3、および AWS Lake Formation (プレビュー) の 5 種類のデータセット AWS Data Exchange をサポートします。
- データ許可の詳細 – この情報には、データ受信者に表示されるデータ許可の名前と説明が含まれます。
- 受信者アクセスの詳細 – この情報には受信者の AWS アカウント ID が含まれ、受信者がデータにアクセスできる期間を指定します。

AWS Marketplace データ製品とは

製品は、プロバイダーによって AWS Marketplace 公開され、サブスクライバーが使用できる の交換単位です。データ製品は、AWS Data Exchange データセットを含む製品です。データプロバイダーがデータ製品を公開すると、その製品は当社のガイドラインと利用規約 AWS に照らして によって確認されると、AWS Marketplace 製品カタログに一覧表示されます。発行された各製品は、その製品 ID によって一意に識別されます。

データ製品には、次の部分があります。

- 製品の詳細 – この情報には、名前、説明 (簡単な説明と詳しい説明の両方)、データサンプル、ロゴ画像、およびサポート連絡先情報が含まれます。製品の詳細は、プロバイダーが入力します。
 - サブスクライバーである場合の詳細については、「[の製品サブスクリプション AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
 - プロバイダーである場合の詳細については、「[の製品ベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
- 製品オファー – オファーは、サブスクライバーが製品をサブスクライブするときに同意する条件を定義します。製品をパブリック AWS Marketplace カタログで利用できるようにするには、プロバイダーがパブリックオファーを定義する必要があります。このオファーには、料金と期間、データサブスクリプション契約、返金ポリシーが含まれ、カスタムオファーを作成するオプションもあります。
 - サブスクライバーである場合の詳細については、「[でのプライベート製品とオファーの受け入れ AWS Data Exchange](#)」と「[での Bring Your Own Subscription \(BYOS\) オファーの承諾 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

- プロバイダーである場合の詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファ어의作成](#)」を参照してください。
- データセット – 製品には、1 つ、または複数のデータセットを含めることができます。のデータセット AWS Data Exchange は、データプロバイダーによってキュレートされたリソースであり、データグラントを受け入れた後にレシーバーがアクセスするデータアセットが含まれています。は、ファイル、API、Amazon Redshift、Amazon S3、および AWS Lake Formation (プレビュー) の 5 種類のデータセット AWS Data Exchange をサポートしています。
- サブスクライバーである場合の詳細については、「[データセットとリビジョン](#)」を参照してください。
- プロバイダーである場合の詳細については、「[のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

サポートされるデータセット

AWS Marketplace は、サービスを使用して透明性を高めることで、データトランザクションを促進するための責任あるアプローチを取ります。は、許可されたデータ型 AWS Marketplace を確認し、許可されていない製品を制限します。プロバイダーによるデータセットの配信は、AWS Marketplace 販売者向けの利用規約に規定された法的な適格要件を満たすデータセットに制限されています。

許可されるデータのタイプに関する詳細については、「[の公開ガイドライン AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

Important

お客様は AWS、適用されるデータプライバシー法を確実に遵守するために、独自の追加のデューデリジェンスを実施することが推奨されます。上の製品やその他のリソース AWS Data Exchange が虐待的または違法な目的で使用されている疑いがある場合は、[Amazon AWS 不正使用レポートフォーム](#)を使用して報告してください。

アクセス AWS Data Exchange

データレシーバー

データレシーバーは、AWS Data Exchange コンソールから現在、保留中、期限切れのデータ許可をすべて表示できます。

また、AWS Data Exchange を通じて [AWS Marketplace カタログ](#) から新しいサードパーティのデータセットを見つけてサブスクライブすることもできます。

データ送信者とデータプロバイダー

データ送信者またはプロバイダーは、次のオプション AWS Data Exchange を使用して にアクセスできます。

- [AWS Data Exchange コンソール](#) を使用して直接アクセス ([データを発行])
- で利用可能なデータ製品を持つデータプロバイダー AWS Marketplace は、次の APIs を使用してプログラムで にアクセスできます。
 - AWS Data Exchange API – API オペレーションを使用して、データセットとリビジョンを作成、表示、更新、削除します。これらの API 操作は、リビジョンに対するアセットのインポートとエクスポートにも使用できます。詳細については、「[APIリファレンスAWS Data Exchange](#)」を参照してください。
 - AWS Marketplace Catalog API – API オペレーションを使用して、公開されているデータ製品を表示および更新します AWS Marketplace。詳細については、「[AWS Marketplace カタログ API リファレンス](#)」を参照してください。

サポート対象の リージョン

AWS Data Exchange データ許可、サブスクリプション、データセット、リビジョン、アセットは、サポートされているリージョンでプログラムまたは AWS Data Exchange コンソールを介して管理できるリージョンリソースです。サポートされているリージョンの詳細については、「[グローバルインフラストラクチャのリージョン表](#)」を参照してください。に公開されたデータ製品は、グローバルに利用可能な単一の製品カタログで AWS Marketplace 利用できます。サブスクライバーは、使用しているカタログに関係なく、同じカタログを表示できます AWS リージョン。

関連サービス

以下のサービスが関連しています AWS Data Exchange。

- Amazon S3 – AWS Data Exchange プロバイダーが Amazon S3 バケットからデータファイルをインポートして保存できるようにします。データ受信者は、これらのファイルをプログラムで Amazon S3 にエクスポートできます。AWS Data Exchange また、 を使用すると、受信者はプロバイダーの Amazon S3 バケットに直接アクセスして使用できます。詳細については、「Amazon Simple Storage Service ユーザーガイド」の「[Amazon S3 とは?](#)」を参照してください。
- Amazon API Gateway — データセット用にサポートされるもう 1 つのアセットタイプは API です。データ受信者は、プログラムで API を呼び出すか、AWS Data Exchange コンソールから API を呼び出すか、OpenAPI 仕様ファイルをダウンロードすることができます。詳細については、「Amazon API Gateway デベロッパーガイド」の「[Amazon API Gateway とは何ですか?](#)」を参照してください。
- Amazon Redshift – Amazon Redshift データセット AWS Data Exchange をサポートします。データ受取人は、データを抽出、変換、ロードすることなく Amazon Redshift 内のデータをクエリするための読み取り専用アクセス権を取得できます。詳細については、「Amazon Redshift 入門ガイド」の「[Amazon Redshift の開始方法](#)」、および「Amazon Redshift データベースデベロッパーガイド」の「[Amazon Redshift システムの概要](#)」を参照してください。
- AWS Marketplace – で製品としてデータセットを発行 AWS Data Exchange することを許可します AWS Marketplace。AWS Data Exchange データプロバイダーは販売者として登録 AWS Marketplace する必要があり、AWS Marketplace 管理ポータル または を使用できます AWS Marketplace Catalog API。AWS Marketplace サブスクライバーになる方法については、「AWS Marketplace 購入者ガイド」の「[とは AWS Marketplace](#)」を参照してください。AWS Marketplace 販売者になる方法については、「販売者ガイド」の「[とは AWS Marketplace](#)」を参照してください。AWS Marketplace
- AWS Lake Formation – AWS Lake Formation データアクセス許可データセット (プレビュー) AWS Data Exchange をサポートします。データ受信者は、データプロバイダーのデータレイクに保存されている AWS Lake Formation データにアクセスし、独自の AWS Lake Formation データセットからこのデータへのアクセスをクエリ、変換、共有できます。詳細については、[AWS 「Lake Formation」](#) を参照してください。

セットアップ AWS Data Exchange

以下を含む を使用する前に AWS のサービス、次のタスクを完了 AWS Data Exchange する必要があります。

タスク

- [にサインアップする AWS アカウント](#)
- [ユーザーの作成](#)

にサインアップする AWS アカウント

にサインアップする AWS アカウント

がない場合は AWS アカウント、次の手順を実行して作成します。

にサインアップするには AWS アカウント

1. <https://portal.aws.amazon.com/billing/signup> を開きます。
2. オンラインの手順に従います。

サインアップ手順の一環として、電話またはテキストメッセージを受け取り、電話キーパッドで検証コードを入力します。

にサインアップすると AWS アカウント、AWS アカウントのルートユーザー が作成されます。ルートユーザーには、アカウントのすべての AWS のサービス とリソースへのアクセス権があります。セキュリティベストプラクティスとして、ユーザーに管理アクセス権を割り当て、[ルートユーザーアクセスが必要なタスク](#)の実行にはルートユーザーのみを使用するようにしてください。

AWS サインアッププロセスが完了すると、 から確認メールが送信されます。<https://aws.amazon.com/> の [マイアカウント] をクリックして、いつでもアカウントの現在のアクティビティを表示し、アカウントを管理することができます。

管理アクセスを持つユーザーを作成する

にサインアップしたら AWS アカウント、日常的なタスクにルートユーザーを使用しないように AWS アカウントのルートユーザー、のセキュリティを確保し AWS IAM Identity Center、を有効にして管理ユーザーを作成します。

を保護する AWS アカウントのルートユーザー

1. ルートユーザーを選択し、AWS アカウント E メールアドレスを入力して、アカウント所有者 [AWS Management Console](#) として にサインインします。次のページでパスワードを入力します。

ルートユーザーを使用してサインインする方法については、AWS サインイン ユーザーガイドの [ルートユーザーとしてサインインする](#) を参照してください。

2. ルートユーザーの多要素認証 (MFA) を有効にします。

手順については、IAM [ユーザーガイドの AWS アカウント 「ルートユーザー \(コンソール\) の仮想 MFA デバイス](#) を有効にする」 を参照してください。

管理アクセスを持つユーザーを作成する

1. IAM アイデンティティセンターを有効にします。

手順については、「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の [「AWS IAM Identity Centerの有効化」](#) を参照してください。

2. IAM アイデンティティセンターで、ユーザーに管理アクセスを付与します。

を ID ソース IAM アイデンティティセンターディレクトリ として使用する方法のチュートリアルについては、AWS IAM Identity Center 「ユーザーガイド」の [「デフォルトを使用してユーザーアクセスを設定する IAM アイデンティティセンターディレクトリ」](#) を参照してください。

管理アクセス権を持つユーザーとしてサインインする

- IAM アイデンティティセンターのユーザーとしてサインインするには、IAM アイデンティティセンターのユーザーの作成時に E メールアドレスに送信されたサインイン URL を使用します。

IAM Identity Center ユーザーを使用してサインインする方法については、AWS サインイン [「ユーザーガイド」の AWS 「アクセスポータルにサインインする」](#) を参照してください。

追加のユーザーにアクセス権を割り当てる

1. IAM アイデンティティセンターで、最小特権のアクセス許可を適用するというベストプラクティスに従ったアクセス許可セットを作成します。

手順については、「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[権限設定を作成する](#)」を参照してください。

2. グループにユーザーを割り当て、そのグループにシングルサインオンアクセス権を割り当てます。

手順については、「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[グループの結合](#)」を参照してください。

ユーザーの作成

管理者ユーザーを作成するには、以下のいずれかのオプションを選択します。

管理者を管理する方法を1つ選択します	目的	方法	以下の操作も可能
IAM Identity Center 内 (推奨)	<p>短期の認証情報を使用して AWS にアクセスします。</p> <p>これはセキュリティのベストプラクティスと一致しています。ベストプラクティスの詳細については、IAM ユーザーガイドの「IAM でのセキュリティのベストプラクティス」</p>	AWS IAM Identity Center ユーザーガイドの「 開始方法 」の手順に従います。	AWS Command Line Interface ユーザーガイドの を使用する AWS CLI ようにを設定 AWS IAM Identity Center して、プログラムによるアクセスを設定します。

管理者を管理する方法を1つ選択します	目的	方法	以下の操作も可能
	テイス 」を参照してください。		
IAM 内 (非推奨)	長期認証情報を使用して AWS にアクセスする。	IAM ユーザーガイドの「 緊急アクセス用の IAM ユーザーを作成する 」の手順に従います。	IAM ユーザーガイドの「 IAM ユーザーのアクセスキーを管理する 」の手順に従って、プログラムによるアクセスを設定します。

Note

でデータ製品を提供するために登録されている AWS アカウント AWS Marketplace と AWS Data Exchange のみが製品を作成できます。

での AWS データセットでの Open Data の使用 AWS Data Exchange

AWSの [Open Data](#) プログラムには、無料で公開されている 300 を超えるデータセットが集められています。AWS Marketplace を使用すると、AWS データセットのオープンデータ、その他の無料製品、有料製品をすべて 1 か所で検索できます。

カタログで利用可能な AWS データセットのオープンデータは、以下の関連プログラムの一部です。

- [オープンデータスポンサーシッププログラム](#) – AWS このプログラムは、公開されている高価値のクラウド最適化データセットのストレージコストをカバーします。
- [Amazon Sustainability Data Initiative \(ASDI\)](#) — この AWS プログラムは、大規模な持続可能性データセットの取得と分析に必要なコストと時間を最小限に抑えます。

これらの無料の Open Data は、の有無にかかわらず、誰でも AWS データセットで検索および検索できます。サブスクリプション AWS アカウントは必要ありません。

Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2)、Amazon Athena、Amazon EMR などのコンピューティングおよびデータ分析サービスを使用することで AWS Lambda、誰でもオープンデータデータセットに基づいてサービスを分析および構築できます。

Note

該当するデータセットドキュメントに特に明記されていない限り、のオープンデータのレジストリを通じて利用可能なデータセット AWS は、によって提供および保守されません AWS。データセットは、さまざまなライセンスに基づいてさまざまな第三者によって提供および管理されています。データセットをアプリケーションに使用できるかどうかを判断するには、データセットのライセンスと関連ドキュメントを確認してください。

以下のトピックでは、AWS データセットで Open Data の使用を開始する方法について説明します。

トピック

- [AWS Data Exchange コンソールを使用した AWS データセットでの Open Data の開始方法](#)
- [を使用せずに AWS データセットで Open Data の使用を開始する AWS アカウント](#)

AWS Data Exchange コンソールを使用した AWS データセットでの Open Data の開始方法

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソール AWS Data Exchange を使用して の AWS データセットで Open Data を検索して使用する 方法について説明します。このプロセスを完了する AWS アカウントには、 が必要です。

このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: AWS データセットでオープンデータを検索する](#)
- [ステップ 2: AWS データセットでオープンデータを使用する](#)

ステップ 1: AWS データセットでオープンデータを検索する

で AWS データセットのオープンデータを検索するには AWS Data Exchange

1. にサインイン AWS Management Console し、 [AWS Data Exchange コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインで、サブスクライブ で AWS Marketplaceカタログを参照を選択します。
3. 絞り込む結果については、次のいずれかを実行します。
 - a. 関連プログラムフィルターで、次のオプションのいずれかまたは両方を選択します。
 - AWS オープンデータスポンサーシッププログラム
 - Amazon Sustainability Data Initiative
 - b. (オプション) 契約タイプフィルタで、[Open Data Licenses] を選択すると、公開されているアフィリエイトデータセットと非アフィリエイトデータセットがすべて表示されます。

詳細については、「[カタログを参照](#)」を参照してください。

4. (オプション) 検索バーに用語または語句を入力し、[検索] を選択します。

検索語に一致する AWS データセットのオープンデータのリストが表示されます。

5. AWS データセットでオープンデータを選択し、詳細ページを表示します。

詳細ページの情報には、説明、 のリソース AWS、使用例、リンクが含まれています。

- a. (オプション) 「提供者情報」で、プロバイダーの情報へのリンクを選択すると、そのプロバイダーに関する詳細情報が表示されます。
- b. (オプション) ラベルでラベルを選択すると、類似商品のリストが表示されます。

ステップ 2: AWS データセットでオープンデータを使用する

AWS データセットで Open Data を使用するには

1. [製品の詳細] ページで、[AWSのリソース] タブを選択します。
2. Amazon リソースネーム (ARN)の下に表示される Amazon リソースネーム (ARN) をコピーします。
3. AWS CLI アクセス (AWS アカウント不要) の場合は、AWS CLIリンクを選択します。
AWS Command Line Interface (AWS CLI) ドキュメントが開きます。
4. コマンドラインから AWS CLI を呼び AWS のサービス 出すために を使用する方法については、ドキュメントを参照してください。

詳細については、[AWS Command Line Interface ユーザーガイド](#)をご参照ください。

を使用せずに AWS データセットで Open Data の使用を開始する AWS アカウント

以下のトピックでは、を使用しない AWS データセットで Open Data を検索して使用方法について説明します AWS アカウント。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: AWS データセットでオープンデータを検索する](#)
- [ステップ 2: AWS データセットでオープンデータを使用する](#)

ステップ 1: AWS データセットでオープンデータを検索する

AWS データセットでオープンデータを検索するには

1. [AWS Data Exchange](#)に進み、「3,000 以上のサードパーティのデータセットを参照」を選択します。

AWS Marketplace カタログが表示され、AWS Data Exchange 配信方法、AWS Open Data Sponsorships Program、Amazon Sustainability Data Initiative 関連プログラムが選択されています。

2. (オプション) 契約タイプ フィルタで [Open Data Licenses] を選択すると、公開されているアフィリエイトデータセットと非アフィリエイトデータセットがすべて表示されます。
3. (オプション) 検索バーに用語または語句を入力します。

検索語に一致する AWS データセットのオープンデータのリストが表示されます。

4. Open Data データセットを選択して、その詳細ページを表示します。

詳細ページの情報には、説明、 のリソース AWS、使用例、リンクが含まれています。

- a. (オプション) 「提供者情報」で、プロバイダーの情報へのリンクを選択すると、そのプロバイダーに関する詳細情報が表示されます。
- b. (オプション) ラベルでラベルを選択すると、類似商品のリストが表示されます。

ステップ 2: AWS データセットでオープンデータを使用する

AWS データセットで Open Data を使用するには

1. [製品の詳細] ページで、[AWSのリソース] タブを選択します。
2. Amazon リソースネーム (ARN)の下に表示される Amazon リソースネーム (ARN) をコピーします。
3. AWS CLI アクセス (AWS アカウント不要) の場合は、AWS CLIリンクを選択します。

AWS Command Line Interface (AWS CLI) ドキュメントが開きます。

4. コマンドラインから AWS CLI を呼び AWS のサービス 出すために を使用する方法については、ドキュメントを参照してください。

詳細については、[AWS Command Line Interface ユーザーガイド](#)をご参照ください。

のデータ AWS Data Exchange

データは 3 つの構成要素 AWS Data Exchange を使用して整理されます。

- [アセット](#) – 1 つのデータ
- [リビジョン](#) – 1 つ、または複数のアセットのコンテナ
- [データセット](#) – 1 つ、または複数のリビジョンの一連

これら 3 つの構成要素は、AWS Data Exchange コンソールまたは AWS Data Exchange API を使用して管理する製品の基盤を形成します。

データセットを作成、表示、更新、または削除するには、AWS Data Exchange コンソール、AWS Command Line Interface (AWS CLI)、独自の REST クライアント、またはいずれかの AWS SDKs を使用できます。プログラムによる AWS Data Exchange データセットの管理の詳細については、[AWS Data Exchange API リファレンス](#)を参照してください。

アセット

アセットは のデータです AWS Data Exchange。

アセットのタイプは、データセット、データ許可、およびデータ格納元の製品を通じてレシーバーやサブスクライバーにどのようにデータを配信するかを定義します。

アセットは、以下のいずれかになり得ます。

- ローカルコンピュータに保存されたファイル
- Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) にオブジェクトとして保存されているファイル
- Amazon API Gateway で作成された REST API
- Amazon Redshift のデータセット
- AWS Lake Formation データアクセス許可 (プレビュー)
- Amazon S3 データアクセスデータセット

アセットの構造

アセットには、以下のパラメータがあります。

- DataSetId – このアセットが含まれるデータセットの ID。
- RevisionId – このアセットが含まれるリビジョンの ID。
- Id – アセットの作成時に生成された一意の ID。
- Arn – AWS リソース名の一意の識別子。
- CreatedAt および UpdatedAt – アセットの作成と最終更新の日付とタイムスタンプ。
- AssetDetails – アセットに関する情報。
- AssetType – Amazon S3 オブジェクト、Amazon API Gateway API、Amazon Redshift データセット、または Amazon S3 データセットのスナップショット。

Example アセットリソース

```
{
  "Name": "automation/cloudformation.yaml",
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1::data-sets/29EXAMPLE24b82c6858af3cEXAMPLEcf/
revisions/bbEXAMPLE74c02f4745c660EXAMPLE20/assets/baEXAMPLE660c9fe7267966EXAMPLEf5",
  "Id": "baEXAMPLE660c9fe7267966EXAMPLEf5",
  "CreatedAt": "2019-10-17T21:31:29.833Z",
  "UpdatedAt": "2019-10-17T21:31:29.833Z",
  "AssetType": "S3_SNAPSHOT",
  "RevisionId": "bbEXAMPLE74c02f4745c660EXAMPLE20",
  "DataSetId": "29EXAMPLE24b82c6858af3cEXAMPLEcf",
  "AssetDetails": {
    "S3SnapshotAsset": {
      "Size": 9423
    }
  }
}
```

アセットタイプ

型

- [ファイルデータセット](#)
- [API アセット](#)
- [Amazon Redshift データ共有アセット](#)
- [AWS Lake Formation データアクセス許可 \(プレビュー\)](#)
- [Amazon S3 データアクセス](#)

ファイルデータセット

ファイルを使用すると、加入者は資格のあるデータセットとしてデータセットのコピーにアクセスし、資産をエクスポートできます。

データセット所有者は、AWS Data Exchange コンソール、プログラム、独自の REST アプリケーション AWS CLI、またはいずれかの AWS SDKs。Amazon S3 アセットのインポートに関する詳細については、「[S3 バケットからの AWS Data Exchange アセットのインポート](#)」を参照してください。アセットのエクスポートに関する詳細については、「[S3 バケットへの AWS Data Exchange アセットのエクスポート](#)」を参照してください。

API アセット

API アセットの場合、データ受取人またはサブスクライバーは API を表示し、権限を持つデータセットとしての API 仕様をダウンロードできます。マネージドエンドポイントへの API コールを行うこともできます AWS Data Exchange。このエンドポイントは API 所有者エンドポイントにプロキシされます。

既存の Amazon API Gateway API を持つデータセット所有者は、AWS Data Exchange コンソール、プログラムで、AWS CLI またはいずれかの AWS SDKs を使用して API アセットを追加できます。API アセットのインポートに関する詳細については、「[Amazon API Gateway API からの AWS Data Exchange アセットのインポート](#)」を参照してください。

Note

現在、以下の SDK では SendApiAsset 操作がサポートされていません。

- SDK for .NET
- AWS SDK for C++
- SDK for Java 2.x

既存の Amazon API Gateway API を持たないデータセット所有者は、API を作成してから API アセットを追加する必要があります。詳細については、「Amazon API Gateway デベロッパーガイド」の「[API Gateway での REST API の開発](#)」を参照してください。

Amazon Redshift データ共有アセット

Amazon Redshift データ共有アセットの場合、受取人はデータを抽出、変換、ロードすることなく Amazon Redshift 内のデータをクエリするための読み取り専用アクセス権を取得できます。

Amazon Redshift データ共有アセットのインポートに関する詳細については、「[Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有からの AWS Data Exchange アセットのインポート](#)」を参照してください。

AWS Lake Formation データアクセス許可 (プレビュー)

AWS Lake Formation データアクセス許可アセットを使用すると、受信者またはサブスクライバーは、指定されたタグに関連付けられたすべてのデータベース、テーブル、または列にアクセスしてクエリを実行できます。

データセット所有者は、AWS Data Exchange アセットの一部としてタグインポートする前に、データを作成してタグ付けする必要があります。Lake Formation データ権限アセットのインポートの詳細については、「[からの AWS Data Exchange アセットのインポート AWS Lake Formation \(プレビュー\)](#)」を参照してください。

Amazon S3 データアクセス

Amazon S3 データアクセスアセットを使用すると、受取人またはサブスクライバーは、データのコピーを作成または管理しなくても、プロバイダーのデータに直接アクセスして使用できます。データセット所有者は、既存の Amazon S3 バケットの上に AWS Data Exchange for Amazon S3 をセットアップして、S3 バケット全体または特定のプレフィックスと Amazon S3 オブジェクトへの直接アクセスを共有できます。

改訂

リビジョンは、1 つ、または複数のアセットのコンテナです。

リビジョンは、Amazon S3 内のデータを更新するために使用します。たとえば、.csv ファイルのコレクションまたは単一の .csv ファイルとディクショナリをグループ化してリビジョンを作成できます。新しいデータが利用可能になるとともに、リビジョンを作成して、アセットを追加します。AWS Data Exchange コンソールを使用してリビジョンを作成し、確定したら、そのリビジョンはサブスクライバーに対して直ちに利用可能になります。詳細については、「[での新製品の公開 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

以下に留意してください。

- リビジョンを確定するには、リビジョンに少なくとも 1 つのアセットが含まれている必要があります。
- リビジョンを確定する前にアセットが正しいことを確認するのは、ユーザーの責任になります。

- 少なくとも 1 つのデータ許可または製品に発行された確定済みリビジョンは、その方法を問わず、未確定状態にしたり、変更したりすることはできません (リビジョンの取り消しプロセスを除く)。
- リビジョンが確定されると、データ許可または製品に自動的に発行されます。

リビジョンの構造

リビジョンには、以下のパラメータがあります。

- `DataSetId` – このリビジョンが含まれるデータセットの ID。
- `Comment` – リビジョンに関するコメント。このフィールドは 128 文字にすることができます。
- `Finalized` – `true` または `false` です。リビジョンが確定されているかどうかを示すために使用されます。
- `Id` – リビジョンの作成時に生成されたリビジョン用の一意の識別子。
- `Arn` – AWS リソース名の一意的識別子。
- `CreatedAt` – リビジョンの作成の日付とタイムスタンプ。権限のあるリビジョンは、リビジョンの発行時に作成されます。
- `UpdatedAt` – リビジョンの最終更新の日付とタイムスタンプ。
- `Revoked` – リビジョンへのサブスクライバーのアクセスが取り消されたことを示すステータス。
- `RevokedAt` – リビジョンへのサブスクライバーのアクセスが取り消された日時を示す日付とタイムスタンプ。
- `RevocationComment` – リビジョンへのアクセスが取り消された理由を購読者に知らせるための必須コメント。必要最小長は 1 文字です。このフィールドは 10 ~ 512 文字にすることができます。
- `SourceID` – 表示中のタイトル付きリビジョンに対応する所有リビジョンのリビジョン ID。このパラメータは、リビジョン所有者が所有リビジョンのエンタイトルドコピーを閲覧しているときに返されます。

Example リビジョンリソース

```
{
  "UpdatedAt": "2019-10-11T14:13:31.749Z",
  "DataSetId": "1EXAMPLE404460dc9b005a0d9EXAMPLE2f",
  "Comment": "initial data revision",
```

```
"Finalized": true,
  "Id": "e5EXAMPLE224f879066f9999EXAMPLE42",
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/1EXAMPLE404460dc9b005a0d9EXAMPLE2f/revisions/e5EXAMPLE224f879066f9999EXAMPLE42",
  "CreatedAt": "2019-10-11T14:11:58.064Z"
}
```

データセット

のデータセット AWS Data Exchange は、時間の経過とともに変化する可能性のあるデータのコレクションです。

受信者またはサブスクライバーが Files データセットにアクセスすると、データセット内の特定のレビジョンにアクセスします。この構造は、プロバイダーが、履歴データに対する変更について心配することなく、データセットで利用可能なデータを徐々に変更していくことを可能にします。

受信者またはサブスクライバーが API データセットにアクセスすると、API アセットを含むデータセットにアクセスします。これにより、サブスクライバーは AWS Data Exchange マネージドエンドポイントに対して API コールを行い、プロバイダーエンドポイントにプロキシされます。

受取人またはサブスクライバーが Amazon Redshift データセットにアクセスする場合は、Amazon Redshift の AWS Data Exchange データ共有にアクセスすることになります。このデータ共有は、データ所有者がデータ共有に追加したスキーマ、テーブル、ビュー、およびユーザー定義の関数に対する読み取り専用アクセス権をサブスクライバーに付与します。

受信者またはサブスクライバーが AWS Lake Formation データアクセス許可データセットにアクセスすると、データセット所有者によって指定された LF タグでタグ付けされたデータベース、テーブル、および/または列にアクセスします。

受取人またはサブスクライバーが Amazon S3 データアクセスデータセットにアクセスする場合は、プロバイダーの Amazon S3 バケットでホストされている Amazon S3 共有オブジェクトへの読み取り専用アクセスが許可されます。受取人またはサブスクライバーは、このデータを他の AWS のサービスで直接使用できます。

プロバイダーは、AWS Data Exchange コンソール、CLI、AWS 独自の REST クライアント、またはいずれかの AWS SDKs。プログラムによる AWS Data Exchange データセットの管理の詳細については、[AWS Data Exchange API リファレンス](#)を参照してください。

トピック

- [所有データセット](#)

- [権限を持つデータセット](#)
- [データセットタイプ](#)
- [Amazon S3 データアクセスデータセット](#)
- [AWS Lake Formation データセット \(プレビュー\)](#)
- [AWS リージョン および データセット](#)
- [データセットの構造](#)
- [データセットのベストプラクティス](#)

所有データセット

データセットは、それを作成したアカウントが所有します。所有データセットは、OWNED に設定されている origin パラメータを使用して識別できます。

権限を持つデータセット

権限を持つデータセットは、送信者が所有するデータセットの読み取り専用ビューです。権限を持つデータセットは、データ許可の作成時または製品の発行時に作成され、製品に対するアクティブなデータ許可またはサブスクリプションを持つ受取人またはサブスクライバーが利用できます。権限を持つデータセットは、ENTITLED に設定されている origin パラメータで識別できます。

受信者は、API または AWS Data Exchange コンソールを使用して AWS Data Exchange、権限のあるデータセットを表示および操作できます。

データセット所有者も、受取人またはサブスクライバーに表示される権限を持つデータセットビューにアクセスできます。これを行うには、AWS Data Exchange API を使用するか、AWS Data Exchange コンソールのデータ許可または製品ページでデータセット名を選択します。

データセットタイプ

では、次のデータセットタイプがサポートされています AWS Data Exchange。

- [the section called “ファイルデータセット”](#)
- [API データセット](#)
- [Amazon Redshift のデータセット](#)
- [the section called “Amazon S3 データアクセスデータセット”](#)
- [AWS Lake Formation データセット \(プレビュー\)](#)

ファイルデータセット

ファイルデータセットは、Amazon S3 によって許可されたフラットファイルが含まれるデータセットです。

受取人またはサブスクライバーは、データをローカルにエクスポート (コンピュータにダウンロード) するか、Amazon S3 バケットにエクスポートできます。

データセット所有者は、Amazon S3 バケットから任意のタイプのフラットファイルをインポートして、データセットに追加できます。

API データセット

API データセットは、API アセットが含まれるデータセットです。API アセットを使用すると、受信者またはサブスクライバーは AWS Data Exchange マネージドエンドポイントに API コールを行い、データセット所有者エンドポイントにプロキシされます。

データセット所有者は、Amazon API Gateway で API を作成してデータセットに追加し、データ許可の作成時やサブスクリプション時に API にアクセスするライセンスを供与します。

Amazon Redshift のデータセット

Amazon Redshift データセットには、Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有が含まれています。データ共有が含まれたデータセットをサブスクライブすると、データ共有のコンシューマーとして追加されます。これにより、データセット所有者がデータ共有に追加したスキーマ、テーブル、ビュー、およびユーザー定義の関数に対する読み取り専用アクセス権が付与されます。

データセット所有者は、Amazon Redshift でデータ共有からデータベースを作成し、ファイルを抽出、変換、ロードすることなく、ライブデータにクエリを実行できます。データ許可またはサブスクリプションがアクティブ化されると、データ共有へのアクセス権が自動的に付与され、いずれかの有効期限が切れると、アクセス権が失われます。

データセット所有者は、Amazon Redshift でデータ共有を作成してデータセットに追加し、データ許可の作成時やサブスクリプション時にデータ共有にアクセスするライセンスを付与します。

Amazon S3 データアクセスデータセット

AWS Data Exchange for Amazon S3 データアクセスを使用すると、データ受信者またはサブスクライバーは、データセット所有者の Amazon S3 バケットから直接サードパーティーのデータファイルにアクセスできます。

AWS Data Exchange for Amazon S3 データアクセス製品をサブスクライブすると、は以下 AWS Data Exchange を自動的に実行します。

- Amazon S3 アクセスポイントをプロビジョニングします。Amazon S3 アクセスポイントは Amazon S3 バケットへのデータ共有を簡素化する Amazon S3 の機能です。
- S3 アクセスポイントのリソースポリシーを更新して、読み取り専用アクセスを許可します。

AWS Data Exchange for Amazon S3 を使用すると、データセット所有者は Amazon S3 バケット全体、または特定のプレフィックスと Amazon S3 オブジェクトへの直接アクセスを共有できます。さらに、を使用して、データ許可、サブスクリプション、使用権限、請求、支払いを自動的に管理 AWS Data Exchange できます。

AWS Lake Formation データセット (プレビュー)

AWS Lake Formation データセットは、AWS Lake Formation データアクセス許可アセットを含むデータセットです。

データ受取人またはサブスクライバーは、AWS Lake Formationで利用できるデータを管理できます。でリソースリンクを作成したら AWS Lake Formation、Amazon Athena などの分析サービスを使用してデータをクエリできます。

データセット所有者は、で LF タグを使用してデータをタグ付け AWS Lake Formation し、データセットの作成時にそれらのタグをアセットとしてインポートします。

AWS リージョン および データセット

データセットはサポートされている任意の に存在することができますが AWS リージョン、単一のデータ許可または製品内のすべてのデータセットは同じ に存在する必要があります AWS リージョン。

データセットの構造

データセットには、以下のパラメータがあります。

- Name – データセットの名前。この値は最大 256 文字にすることができます。
- Description – データセットの説明。この値は最大 16,348 文字にすることができます。
- AssetType – データセットに含まれるアセットのタイプを定義します。

- Origin – データセットを、プロバイダーのアカウントによって Owned (所有) されている、またはサブスクライバーのアカウントに Entitled (権利が付与) されているとして定義するプロパティ。
- Id – データセットを一意に識別する ID。データセット ID は、データセットの作成時に生成されます。権限を持つデータセットには、元の所有データセットとは異なる ID があります。
- Arn – AWS リソース名の一意の識別子。
- CreatedAt および UpdatedAt – データセットの作成と最終更新の日付とタイムスタンプ。

Note

データセット所有者は、名前や説明など、所有データセットの一部のプロパティを変更できます。所有データセットのプロパティを更新しても、対応する権限を持つデータセットのプロパティは更新されません。

Example データセットリソース

```
{
  "Origin": "OWNED",
  "AssetType": "S3_SNAPSHOT",
  "Name": "MyDataSetName",
  "CreatedAt": "2019-09-09T19:31:49.704Z",
  "UpdatedAt": "2019-09-09T19:31:49.704Z",
  "Id": "fEXAMPLE1fd9a5c8b0d2e6fEXAMPLEe1",
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-2:123456789109:data-sets/fEXAMPLE1fd9a5c8b0d2e6fEXAMPLEe1",
  "Description": "This is my data set's description that describes the contents of the data set."
}
```

データセットのベストプラクティス

データセット所有者は、データセットを作成および更新するときに、以下のベストプラクティスに留意してください。

- データセットの名前は、カタログのデータ許可または製品の詳細に表示されます。顧客がデータセットの内容を簡単に理解できるように、内容を説明する簡潔な名前を選択することをお勧めします。

- 説明は、製品に対するアクティブなデータ許可またはサブスクリプションを持つ受取人またはサブスクライバーに表示されます。これには、データセットのカバレッジ情報、機能、および利点を含めることをお勧めします。

[タグ]

所有データセットとそのリビジョンにはタグを追加できます。タグ付けを使用する場合、AWS Identity and Access Management (IAM) ポリシーでタグベースのアクセスコントロールを使用して、これらのデータセットとリビジョンへのアクセスを制御することもできます。

権限を持つデータセットにタグを付けることはできません。所有データセットとそのリビジョンのタグは、対応する権限のあるバージョンには反映されません。つまり、権限を持つデータセットやリビジョンに対する読み取り専用アクセス権を持つ受取人やサブスクライバーには、元の所有データセットのタグは表示されません。

Note

現在、アセットとジョブはタグ付けをサポートしていません。

でのデータ許可の作成 AWS Data Exchange

大まかに言うと、これは以下のデータ許可を作成する方法です AWS Data Exchange。

1. の作成 AWS アカウント – データ許可を作成する前に、に AWS サインアップしてユーザーを作成する必要があります。詳細については、「[設定](#)」を参照してください。
2. データセット、リビジョンの作成、アセットのインポート – AWS Data Exchange コンソールまたは API を使用してデータセットを作成できます。データセットの作成後、データセットでリビジョンを作成し、そのリビジョンにアセットを追加できます。
3. データ許可の作成 – データ許可を作成するには、データ許可の名前と説明を指定し、データ許可に含めるデータセットを選択し、データ許可を共有する受信者の AWS アカウント ID を指定し、オプションでデータ許可の有効期限が切れる終了日を設定する必要があります。詳細については、以下のトピックを参照してください。
4. 新しいリビジョンを公開する – AWS Data Exchange API またはコンソールを使用して新しいリビジョンを作成することで、時間の経過とともに動的データセットを更新できます。次に、これらのリビジョンをアクティブなデータ許可に発行できます。

Note

でデータ許可を作成する前に AWS Data Exchange、の情報を確認してください[設定](#)。

以下のトピックでは、で新しいデータ製品を公開する方法について詳しく説明します AWS Data Exchange。

トピック

- [プログラマ的なアクセス](#)
- [ファイルベースのデータ AWS Data Exchange を含む でのデータ許可の作成](#)
- [APIs AWS Data Exchange を含む でのデータ許可の作成](#)
- [Amazon Redshift データセット AWS Data Exchange を含む でデータ許可を作成する](#)
- [Amazon S3 データアクセスを含む で AWS Data Exchange のデータ許可の作成](#)
- [データアクセス許可データセット AWS Data Exchange を含む AWS Lake Formation に対するデータ許可の作成 \(プレビュー\)](#)

プログラムのアクセス

AWS Data Exchange は、次の API を使用して リソースへのプログラムによるアクセスも提供します。

- AWS Data Exchange API – これらの API オペレーションを使用して、データセットとリビジョンを作成、表示、更新、削除します。これらの API 操作は、リビジョンに対するアセットのインポートとエクスポートにも使用できます。詳細については、「[APIリファレンスAWS Data Exchange](#)」を参照してください。

ファイルベースのデータ AWS Data Exchange を含む でのデータ許可の作成

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソール AWS Data Exchange を使用して、データセットとファイルベースのデータを含む新しいデータ許可を作成するプロセスについて説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: アセットを作成する](#)
- [ステップ 2: データセットを作成する](#)
- [ステップ 3: リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 4: リビジョンにアセットをインポートする](#)
- [ステップ 5: 新しいデータ許可を作成する](#)

ステップ 1: アセットを作成する

アセットは のデータです AWS Data Exchange。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

新しいファイルベースのデータ許可を作成する前に、以下を実行する必要があります。

1. ファイルを作成します。

AWS Data Exchange は、すべてのファイルタイプをサポートしています。

2. ファイルをオブジェクトとして Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) またはローカルコンピュータに保存します。

Amazon S3 でのファイルの保存に関する詳細については、「[Amazon S3 ユーザーガイド](#)」を参照してください。

ステップ 2: データセットを作成する

のデータセット AWS Data Exchange は動的で、リビジョンを使用してバージョンングされ、各リビジョンには少なくとも 1 つのアセットが含まれます。詳細については、「[のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

データセットを作成する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. [データセットタイプを選択] で [ファイル] を選択します。
5. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
6. (オプション) [タグを追加 – オプション] でタグを追加します。
7. [データセットを作成] を選択します。

ステップ 3: リビジョンを作成する

以下の手順では、AWS Data Exchange コンソールでデータセットを作成した後でリビジョンを作成します。詳細については、「[改訂](#)」を参照してください。

リビジョンを作成する

1. データセットの詳細ページの [データセットの概要] セクションで以下を実行します。
 - a. (オプション) [名前を編集] を選択してデータセットに関する情報を編集します。
 - b. (オプション) [削除] を選択してデータセットを削除します。
2. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
3. [リビジョンを定義] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。

4. (オプション) [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
5. [リビジョンを作成] を選択します。
6. 前のステップからの変更を確認、編集、または削除します。

ステップ 4: リビジョンにアセットをインポートする

次の手順では、データアセットをインポートし、AWS Data Exchange コンソールでリビジョンを確定します。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

リビジョンにアセットをインポートする

1. データセットの詳細ページの [インポートされたアセット] で、データセットのデータアセットが現在保存されている場所に基づいて [Amazon S3 からインポート] または [アップロード] (コンピュータからアップロードするため) を選択します。
2. 選択内容に応じて、プロンプトに従います。アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。
3. ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。
4. 追加するデータがある場合は、ステップ 1 を繰り返します。
5. [リビジョンの概要] で、リビジョンとそのアセットを確認します。
6. [リビジョンの最終処理] を選択します。

データセットのリビジョンが正常に確定されました。

リビジョンは、製品に追加する前に編集または削除できます。

トピック

- [リビジョンを編集する](#)
- [リビジョンを削除する](#)

リビジョンを編集する

確定後にリビジョンを編集する

1. [リビジョンの概要] で [確定解除] を選択します。

このリビジョンは確定済み状態ではなくなりましたというメッセージが表示されます。

2. リビジョンを編集するには、[リビジョンの概要] で、[アクション]、[編集] の順に選択します。
3. 変更を行ってから、[更新] を選択します。
4. 変更内容を確認してから、[確定] を選択します。

リビジョンを削除する

確定後にリビジョンを削除する

1. [リビジョンの概要] で [削除] を選択します。
2. [リビジョンを削除しますか?] ダイアログボックスに **Delete** を入力してから、[削除] を選択します。

Warning

これで、リビジョンとそのアセットのすべてが削除されます。このアクションを元に戻すことはできません。

ステップ 5: 新しいデータ許可を作成する

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットを含むリビジョンを確定すると、そのデータセットをデータ許可の一部として使用する準備が整います。

新しいデータ許可を作成するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) の左側のナビゲーションペインで、[交換されたデータ許可] の [送信されたデータ許可] を選択します。
2. [送信されたデータ許可] から [データ許可を作成] を選択し、[データ許可を定義] ウィザードを開きます。
3. [所有しているデータセットを選択] セクションで、追加するデータセットの横にあるチェックボックスをオンにします。

Note

選択するデータセットには、確定されたリビジョンが必要です。確定されたリビジョンのないデータセットは、データ許可に追加できません。

で共有されるデータ製品に含まれるデータセットとは異なり AWS Marketplace、データ許可に追加されたデータセットにはリビジョンアクセスルールはありません。つまり、データ許可が承認されると、データ許可の受信者は、特定のデータセットの確定されたすべてのリビジョン (データ許可の作成前に確定された過去のリビジョンを含む) にアクセスできます。

4. [許可の概要] セクションに、データ許可名やデータ許可の説明など、データ許可に関して受取人に表示する情報を入力します。
5. [Next (次へ)] を選択します。

詳細については、「[の製品ベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

6. 「受信者アクセス情報」セクションの AWS アカウント ID に、データ許可を受け取る受信者アカウントの AWS アカウント ID を入力します。
7. [アクセスの終了日] で、データ許可の有効期限が切れる特定の終了日を選択するか、許可を永続的にする場合は [終了日なし] を選択します。
8. [Next (次へ)] を選択します。
9. [確認して送信] セクションで、データ許可情報を確認します。
10. データ許可を作成して、選択した受取人に送信することを確定する場合は、[データ許可を作成して送信] を選択します。

これで、データ許可を手動で作成する部分が完了しました。データ許可は、送信済みデータ許可ページの送信済みデータ許可タブに表示され、受信者アカウントが承諾するまで、ステータスが承諾保留中と表示されます。

APIs AWS Data Exchange を含む でのデータ許可の作成

以下のトピックでは、REST API データセットを作成し、APIs を含むデータ許可に追加するプロセスについて説明します AWS Data Exchange。このプロセスは、AWS Data Exchange コンソール、または AWS Command Line Interface を使用して完了することができます。

Amazon API Gateway REST API をセットアップしたら、AWS Data Exchange で新しい API データセットを作成できます。その後、リビジョンを作成して、API アセットを追加できます。

API アセットを使用してデータ許可を作成すると、AWS Data Exchange エンドポイントへの受信者リクエストが API Gateway API にプロキシスルーされます。

このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [前提条件](#)
- [ステップ 1: API リソースポリシーを更新する](#)
- [ステップ 2: API データセットを作成する](#)
- [ステップ 3: リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 4: リビジョンに API アセットを追加する](#)
- [ステップ 5: API を含む新しいデータ許可を作成する](#)

前提条件

API が含まれる製品を発行するには、以下の前提条件を満たす必要があります。

- など AWS のサービス、を使用する前に AWS Data Exchange、にサインアップ AWS して管理ユーザーを作成する必要があります。詳細については、AWS IAM Identity Center ユーザーガイドの「[使用開始](#)」を参照してください。
- REST API は、Amazon DynamoDB や AWS Lambda など、データにアクセスするために適切なリクエストとレスポンスモデルを使用する統合が設定された Amazon API Gateway 上にある必要があります。詳細については、Amazon API Gateway デベロッパーガイドの「[API Gateway での REST API の開発](#)」と「[REST API の操作](#)」を参照してください。

Note

サポートされるのはパブリック API Gateway API のみです。

- API Gateway REST API は、サービスプリンシパルからの呼び出しを AWS Data Exchange 認証および認可できる必要があります。から API AWS Data Exchange へのすべてのリクエストは、AWS Data Exchange Credentials. AWS Data Exchange works で署名された署名バージョン 4 (SigV4) プロトコルを使用し、カスタムドメインとドメインキーマッピングを使用します。

Note

AWS Data Exchange は、Amazon Cognito、No-Auth、および AWS Lambda オーソライザーをサポートしていません。

- API Gateway REST API が認証と認可にカスタムアイデンティティシステムを使用する場合は、IAM 認証を使用し、API を記述する OpenAPI スキーマをインポートするように設定します。

AWS Data Exchange は、独自のサービス認証情報を使用して API Gateway REST API を呼び出し、アカウント ID などのサブスクライバー情報を含めます。

- バックエンドとの統合に対する責任は、API Gateway REST API が担います。これを行うには、以下のいずれかを実行します。
 - API Gateway REST API を通じて行われるすべてのリクエストに、バックエンドが検証できる継続期間の長い認証トークンをアタッチする。
 - API Gateway を使用して、認証情報の生成と API の呼び出しを実行できる Lambda 関数を呼び出す。

API は、[API 統合リクエスト仕様](#)に従って呼び出されます。

詳細については、以下の各トピックを参照してください。

トピック

- [API データセットのセキュリティ](#)
- [API 統合リクエスト仕様](#)
- [ヘッダー転送](#)

API データセットのセキュリティ

AWS Data Exchange は、Transport Layer Security (TLS) 1.2 を使用してトラフィックをエンドツーエンドで暗号化します。すべてのメタデータは保管時に暗号化されます。AWS Data Exchange は、サブスクライバーリクエストやバックエンドからのレスポンスを保存しません。

API 統合リクエスト仕様

この API は、すべてのヘッダー（「」にリストされているヘッダーを除く[ヘッダー転送](#)）、本文、http メソッド、パス、クエリ文字列をそのままカスタマーリクエストから AWS Data Exchange パスルーし、次のヘッダーを追加します。

```
// These headers help prevent Confused Deputy attacks. They enable the SourceAccount
// and SourceArn variables in IAM policies.
'x-amz-source-account': ACCOUNT_ID,
'x-amz-source-arn': `arn:aws:dataexchange:${REGION}:${OWNER_ACCOUNT_ID}:data-sets/
${DATA_SET_ID}/revisions/${REVISION_ID}/assets/${ASSET_ID}`,

// These headers identify the API Asset in Data Exchange.
'x-amzn-dataexchange-asset-id': ASSET_ID,
```

```
'x-amzn-dataexchange-data-set-id': DATA_SET_ID,
'x-amzn-dataexchange-revision-id': REVISION_ID,

// This header identifies the Data Exchange Product.
'x-amzn-dataexchange-product-id': PRODUCT_ID,

// This header identifies the caller of Data Exchange. It will contain subscriber
// information.
'x-amzn-dataexchange-requester-account-id': REQUESTER_ACCOUNT_ID,

// Providers can attach custom metadata in the form of key/value pairs
// to a particular subscription. We will send these key/value pairs as stringified
// JSON.
'x-amz-dataexchange-subscription-metadata': STRINGIFIED_METADATA,
```

ヘッダー転送

AWS Data Exchange は、データ所有者のバックエンドに転送する前に、Amazon への認証または名前空間に関連するヘッダーを削除します。具体的には、以下 AWS Data Exchange を削除します。

- Authentication ヘッダー
- x-amz で始まるヘッダー

host ヘッダーは、プロキシの結果として上書きされます。

ステップ 1: API リソースポリシーを更新する

[前提条件](#)を満たす Amazon API Gateway REST API がある場合は、サブスクライバーが API のスキーマを取得するリクエストを行ったときに API を呼び出す AWS Data Exchange 機能を付与するように API リソースポリシーを更新する必要があります。

API リソースポリシーを更新する

1. API のリソースポリシーに、以下のポリシーを追加します。

```
{
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {"Service": "dataexchange.amazonaws.com"},
  "Action": "execute-api:Invoke",
  "Resource": "*",
  "Condition": {"StringEquals": {"aws:SourceAccount": "<account-id>"}}
```

```
}
```

2. `account-id` は、API データセットを作成することになるアカウントに置き換えます。

API Gateway リソースを持つアカウントが、データセットを作成しているアカウントと同じアカウントである必要はありません。

このポリシーは、これらのアクセス許可を AWS Data Exchange サービスプリンシパルによって行われた呼び出しに制限し、アカウントのみが API との統合 AWS Data Exchange を許可できることを要求します。

Note

この呼び出しの実行 AWS Data Exchange を明示的に拒否するリソースポリシーがある場合は、この拒否を削除または制限する必要があります。

これで、[API データセットを作成する](#) 準備が整いました。

ステップ 2: API データセットを作成する

のデータセット AWS Data Exchange は動的で、リビジョンを使用してバージョンングされ、各リビジョンには少なくとも 1 つのアセットが含まれます。詳細については、「[のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange コンソールまたは `awscli` を使用して API AWS Command Line Interface データセットを作成します。

- [API データセットの作成 \(コンソール\)](#)
- [API データセットの作成 \(AWS CLI\)](#)

API データセットの作成 (コンソール)

API データセットを作成する (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。

4. [データセットタイプを選択] で、[Amazon API Gateway API] を選択します。
5. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
6. (オプション) [タグを追加 – オプション] でタグを追加します。
7. [作成] を選択します。

これで、リビジョンを作成する準備が整いました。

API データセットの作成 (AWS CLI)

API データセットを作成する (CLI)

1. create-data-set コマンドを使用して、API データセットを作成します。

```
$ AWS dataexchange create-data-set \  
-\\-asset-type API_GATEWAY_API \  
-\\-description 'Data Set Description' \  
-\\-name 'Data Set Name'  
  
{  
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/$DATA_SET_ID",  
  "AssetType": "API_GATEWAY_API",  
  "CreatedAt": "2021-09-11T00:16:46.349000+00:00",  
  "Description": "Data Set Description",  
  "Id": "$DATA_SET_ID",  
  "Name": "Data Set Name",  
  "Origin": "OWNED",  
  "UpdatedAt": "2021-09-11T00:16:46.349000+00:00"  
}
```

2. 新しいアセットタイプの API_GATEWAY_API に注目してください。

これで、リビジョンを作成する準備が整いました。

ステップ 3: リビジョンを作成する

以下の手順では、データセットの作成後にリビジョンを作成します。詳細については、「[改訂](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange コンソールまたは AWS Command Line Interface を使用してリビジョンを作成します。

- [リビジョンの作成 \(コンソール\)](#)
- [リビジョンの作成 \(AWS CLI\)](#)

リビジョンの作成 (コンソール)

リビジョンを作成する (コンソール)

1. データセットの詳細ページの [データセットの概要] セクションで以下を実行します。
 - a. (オプション) [名前を編集] を選択してデータセットに関する情報を編集します。
 - b. (オプション) [削除] を選択してデータセットを削除します。
2. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
3. [リビジョンを定義] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
4. (オプション) [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
5. [リビジョンを作成] を選択します。
6. 前のステップからの変更を確認、編集、または削除します。

これで、[リビジョンに API アセットを追加する](#)準備が整いました。

リビジョンの作成 (AWS CLI)

リビジョンを作成する (AWS CLI)

1. create-revision コマンドを使用して、リビジョンを作成します。

```
$ AWS dataexchange create-revision \  
-\\-data-set-id $DATA_SET_ID \  
-\\-comment 'First Atlas Revision' \  
{ \  
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/$DATA_SET_ID/  
revisions/$REVISION_ID", \  
  "Comment": "First Atlas Revision", \  
  "CreatedAt": "2021-09-11T00:18:49.160000+00:00", \  
  "DataSetId": "$DATA_SET_ID",
```

```
"Finalized": false,  
"Id": "$REVISION_ID",  
"UpdatedAt": "2021-09-11T00:18:49.160000+00:00"  
}
```

2. [リビジョンに API アセットを追加します。](#)

Note

ステージだけでなく、インポートする API Gateway REST API の ID も把握しておく必要があります。

ステップ 4: リビジョンに API アセットを追加する

API アセットには、サブスクライバーが API を呼び出すために必要な情報が含まれています。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

以下の手順では、データアセットをインポートし、その後リビジョンを確定します。

リビジョン AWS CLI にアセットを追加するには、AWS Data Exchange コンソールまたは [CLI](#) を使用します。

- [リビジョンへの API アセットの追加 \(コンソール\)](#)
- [リビジョンへの API アセットの追加 \(AWS CLI\)](#)

リビジョンへの API アセットの追加 (コンソール)

リビジョンにアセットを追加する (コンソール)

1. データセットの詳細ページの [API アセット] セクションで、[追加] を選択します。
2. [API ステージを選択] にある [Amazon API Gateway API] で、入力ボックスに API を入力するか、ドロップダウンリストから以下のいずれかを選択します。
 - 別の の API AWS アカウント – これは、アクセス許可が付与されたクロスアカウント API です。
 - これ AWS アカウント — これは の API です AWS アカウント。

- a. 別の API AWS アカウント を選択した場合は、入力ボックスに API ID と API ステージ名を入力します。
- b. これ AWS アカウントを選択した場合は、ドロップダウンリストから API ステージ名を選択します。

 Note

新しい API ステージを作成するには、[新規作成] を選択し、[Amazon API Gateway で新しい API を作成] モーダルの手順に従います。新しいステージが作成されたら、ステップ 2 を繰り返します。

3. [Advanced configuration – optional] (高度な設定 – オプション) では、[Connect existing Amazon API Gateway usage plan] (既存の Amazon API Gateway の使用量プランを接続) することを選択して既存の使用プランに定義されているスロットリングとクォータ制限を使用し、[API key] (API キー) を入力することができます。
4. [サブスクライバーのドキュメント API] で、受取人がデータ許可を承諾した後に表示する API の詳細を指定します。
 - a. [API 名] に、受取人が API アセットを識別するために使用できる名前を入力します。

 Note

[この AWS アカウントの中で] が選択されている場合、[API 名] が自動入力されますが、これは必要に応じて変更できます。

[別の AWS アカウントの API] を選択した場合、[API 名] にはデフォルトの名前が入力されます。これを、受取人が API を簡単に理解できるような名前に変更してください。

- b. [OpenAPI 3.0 specification] (OpenAPI 3.0 仕様) には、以下のいずれかを実行します。
 - i. OpenAPI 3.0 仕様ファイルを入力するか、コピーして貼り付ける。
 - ii. [JSON ファイルからインポート] を選択して、ローカルコンピュータからインポートする .json ファイルを選択する。

インポートされた仕様がボックスに表示されます。

- iii. [Import from Amazon API Gateway] (Amazon API Gateway からインポート) を選択して、インポートする仕様を選択する。

インポートされた仕様がボックスに表示されます。

- c. [その他のドキュメント – オプション] には、サブスクライバーが API について知っておくと役に立つ追加情報を入力します。Markdown がサポートされています。

 Note

このアセットをリビジョンに追加した後で、OpenAPI 仕様とその他のドキュメントを編集することはできません。

リビジョンが確定されていないときにこの情報を更新する場合は、アセットを置き換えることができます。

リビジョンが確定されているときにこの情報を更新する場合は、更新されたアセットで新しいリビジョンを作成できます。

5. [API ステージを追加] を選択します。

アセット (この場合は API) をデータセットにインポートするジョブが開始されます。

 Note

Amazon API Gateway に API がない場合は、API を作成するように求められます。

6. ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。
7. 追加する API がある場合は、ステップ 2 を繰り返します。
8. [リビジョンの概要] で、リビジョンとそのアセットを確認します。
9. [確定] を選択します。

データセットのリビジョンが正常に確定されました。

リビジョンをデータ許可に追加する前に、リビジョンを[編集](#)または[削除](#)できます。

これで、[API を含む新しいデータ許可を作成](#)する準備ができました。

リビジョンへの API アセットの追加 (AWS CLI)

API アセットは、IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API ジョブを実行することによって追加できます。

リビジョンに API アセットを追加する (AWS CLI)

1. create-job コマンドを使用して、リビジョンに API アセットを追加します。

```
$ AWS dataexchange create-job \  
  -\\-type IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API \  
  -\\-details '{"ImportAssetFromApiGatewayApi":  
{  
  "DataSetId": "$DATA_SET_ID", "RevisionId": "$REVISION_ID", "ApiId": "$API_ID", "Stage": "$API_STAGE"  
  {  
    "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:jobs/$JOB_ID",  
    "CreatedAt": "2021-09-11T00:38:19.875000+00:00",  
    "Details": {  
      "ImportAssetFromApiGatewayApi": {  
        "ApiId": "$API_ID",  
        "DataSetId": "$DATA_SET_ID",  
        "ProtocolType": "REST",  
        "RevisionId": "$REVISION_ID",  
        "Stage": "$API_STAGE"  
      }  
    },  
    "Id": "$JOB_ID",  
    "State": "WAITING",  
    "Type": "IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API",  
    "UpdatedAt": "2021-09-11T00:38:19.875000+00:00"  
  }  
}  
  
$ AWS dataexchange start-job -\\-job-id $JOB_ID  
$ AWS dataexchange get-job -\\-job-id $JOB_ID  
{  
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:0123456789012:jobs/$JOB_ID",  
  "CreatedAt": "2021-09-11T00:38:19.875000+00:00",  
  "Details": {  
    "ImportAssetFromApiGatewayApi": {  
      "ApiId": "$API_ID",  
      "DataSetId": "$DATA_SET_ID",  
      "ProtocolType": "REST",  
      "RevisionId": "$REVISION_ID",  
      "Stage": "$API_STAGE"  
    }  
  }  
}
```

```
        "ApiEndpoint": "string",
        "ApiKey": "string",
        "ApiName": "string",
        "ApiDescription": "string",
        "ApiSpecificationDownloadUrl": "string",
        "ApiSpecificationDownloadUrlExpiresAt": "string"
    }
},
"Id": "$JOB_ID",
"State": "COMPLETED",
"Type": "IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API",
"UpdatedAt": "2021-09-11T00:38:52.538000+00:00"
}
```

2. `list-revision-assets` コマンドを使用して、新しいアセットが適切に作成されたことを確認します。

```
$ AWS dataexchange list-revision-assets \
-\\-data-set-id $DATA_SET_ID \
-\\-revision-id $REVISION_ID
{
  "Assets": [
    {
      "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/$DATA_SET_ID/
revisions/$REVISION_ID/assets/$ASSET_ID",
      "AssetDetails": {
        "ApiGatewayApiAsset": {
          "ApiEndpoint": "https://$API_ID.execute-api.us-
east-1.amazonaws.com/$API_STAGE",
          "ApiId": "$API_ID",
          "ProtocolType": "REST",
          "Stage": "$API_STAGE"
        }
      },
      "AssetType": "API_GATEWAY_API",
      "CreatedAt": "2021-09-11T00:38:52.457000+00:00",
      "DataSetId": "$DATA_SET_ID",
      "Id": "$ASSET_ID",
      "Name": "$ASSET_ID/$API_STAGE",
      "RevisionId": "$REVISION_ID",
      "UpdatedAt": "2021-09-11T00:38:52.457000+00:00"
    }
  ]
}
```

```
}
```

これで、API を含む新しいデータ許可を作成する準備ができました。

リビジョンを編集する

確定後にリビジョンを編集する

1. [リビジョンの概要] で [確定解除] を選択します。

このリビジョンは確定済み状態ではなくなりましたというメッセージが表示されます。

2. リビジョンを編集するには、[リビジョンの概要] で、[アクション]、[編集] の順に選択します。
3. 変更を行ってから、[Update] (アップデート) を選択します。
4. 変更内容を確認してから、[確定] を選択します。

リビジョンを削除する

確定後にリビジョンを削除する

1. [リビジョンの概要] で [削除] を選択します。
2. [リビジョンを削除しますか?] ダイアログボックスに **Delete** を入力してから、[削除] を選択します。

Warning

これで、リビジョンとそのアセットのすべてが削除されます。この操作は元に戻すことができません。

ステップ 5: API を含む新しいデータ許可を作成する

少なくとも 1 つのデータセットを作成して、アセットを含むリビジョンを確定すると、そのデータセットをデータ許可の一部として発行する準備が整います。

新しいデータ許可を作成するには

1. AWS Data Exchange コンソールの左側のナビゲーションペインで、Exchanged data grants で、Sent data grants を選択します。
2. [送信されたデータ許可] から [データ許可を作成] を選択し、[データ許可を定義] ウィザードを開きます。
3. [所有しているデータセットを選択] セクションで、追加するデータセットの横にあるチェックボックスをオンにします。

Note

選択したデータセットには、確定されたリビジョンが必要です。確定されたリビジョンのないデータセットは、データ許可に追加できません。

で共有されるデータ製品に含まれるデータセットとは異なり AWS Marketplace、データ許可に追加されたデータセットにはリビジョンアクセスルールはありません。つまり、データ許可が承認されると、データ許可の受信者は、特定のデータセットのすべての確定済みリビジョン (データ許可の作成前に確定された過去のリビジョンを含む) にアクセスできます。

4. [許可の概要] セクションに、データ許可名やデータ許可の説明など、データ許可に関して受取人に表示する情報を入力します。
5. 次へ を選択します。
6. 「受信者アクセス情報」セクションの AWS アカウント ID に、データ許可を受け取る受信者アカウントの AWS アカウント ID を入力します。
7. また、[受信者アクセス情報] セクションの [アクセスの終了日] で、[終了日なし] を選択してデータ許可を永続的に実行するか、[特定の終了日] を選択して希望の終了日を選択します。
8. [Next (次へ)] を選択します。
9. [確認して送信] セクションで、データ許可情報を確認します。
10. データ許可を作成して、選択した受取人に送信することを確定する場合は、[データ許可を作成して送信] を選択します。

これで、データ許可を手動で作成する部分が完了しました。データ許可は、送信データ許可ページの送信データ許可タブに表示され、受信者アカウントが承諾するまで承認保留中のステータスになります。

Amazon Redshift データセット AWS Data Exchange を含むで データ許可を作成する

Amazon Redshift データセットには、Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有が含まれています。データ共有を含む製品をサブスクライブすると、データ所有者がデータ共有に追加したテーブル、ビュー、スキーマ、およびユーザー定義の関数に対する読み取り専用アクセス権が付与されます。

データ所有者は、クラスターに Amazon Redshift データ共有 AWS Data Exchange 用の を作成します。次に、受取人にアクセスを許可するスキーマ、テーブル、ビュー、およびユーザー定義の関数をデータ共有に追加します。次に AWS Data Exchange、データ共有を にインポートし、データセットを作成して、データ許可に追加します。受取人は、データ許可リクエストを承諾すると、データ共有へのアクセス権が付与されます。

Amazon Redshift で Amazon Redshift のデータ共有を設定したら、AWS Data Exchange で新しい Amazon Redshift データセットを作成できます。その後、リビジョンを作成し、Amazon Redshift のデータ共有アセットを追加できます。これにより、AWS Data Exchange エンドポイントへのリクエストが Amazon Redshift データ共有にプロキシされます。次に、このデータセットをデータ許可に追加できます。

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して Amazon Redshift データセットとデータ許可に含まれるデータセットを作成するプロセスについて説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: Amazon Redshift のデータ共有アセットを作成する](#)
- [ステップ 2: Amazon Redshift データセットを作成する](#)
- [ステップ 3: リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 4: リビジョンに Amazon Redshift のデータ共有アセットを追加する](#)
- [ステップ 5: 新しいデータ許可を作成する](#)

ステップ 1: Amazon Redshift のデータ共有アセットを作成する

アセットは のデータです AWS Data Exchange。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

Amazon Redshift のデータ共有アセットを作成する

1. Amazon Redshift クラスター内にデータ共有を作成します。

データ共有の作成方法の詳細については、「[Amazon Redshift データベースデベロッパーガイド](#)」の「プロデューサーとして AWS Data Exchange のデータ共有の使用」を参照してください。

Note

データ共有はパブリックアクセス可能に設定することをお勧めします。そうしなければ、パブリックアクセス可能なクラスターを持つ顧客がデータを消費できなくなります。

2. [ステップ 2: Amazon Redshift データセットを作成する](#).

ステップ 2: Amazon Redshift データセットを作成する

Amazon Redshift データセットには、Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有が含まれています。詳細については、「[Amazon Redshift のデータセット](#)」を参照してください。

Amazon Redshift データセットを作成する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. [データセットタイプを選択] で、[Amazon Redshift のデータ共有] を選択します。
5. [データセットの定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
6. [タグを追加 - オプション] でタグを追加します。
7. [作成] を選択します。

ステップ 3: リビジョンを作成する

以下の手順では、AWS Data Exchange コンソールでデータセットを作成した後でリビジョンを作成します。詳細については、「[改訂](#)」を参照してください。

リビジョンを作成する

1. データセットの詳細ページの [データセットの概要] セクションで以下を実行します。
 - a. (オプション) [名前を編集] を選択してデータセットに関する情報を編集します。
 - b. (オプション) [削除] を選択してデータセットを削除します。
2. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
3. [リビジョンを定義] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
4. [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
5. [作成] を選択します。
6. 前のステップからの変更を確認、編集、または削除します。

ステップ 4: リビジョンに Amazon Redshift のデータ共有アセットを追加する

次の手順では、Amazon Redshift データ共有アセットをリビジョンに追加し、AWS Data Exchange コンソールでリビジョンを確定します。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

リビジョンにアセットを追加する

1. データセットの詳細ページの AWS Data Exchange [Amazon Redshift のデータ共有] セクションで [データ共有を追加] を選択します。
2. [AWS Data Exchange Amazon Redshift のデータ共有] でデータ共有を選択し、[データ共有を追加] を選択します。

Note

リビジョンには、最大 20 個のデータ共有を追加できます。

アセットをリビジョンにインポートするジョブが開始されます。

3. ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。
4. 追加するデータがある場合は、ステップ 1 を繰り返します。
5. [リビジョンの概要] で、リビジョンとそのアセットを確認します。

6. [確定] を選択します。

データセットのリビジョンが正常に確定されました。

リビジョンは、データ許可に追加する前に[編集](#)または[削除](#)できます。

ステップ 5: 新しいデータ許可を作成する

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットを含むリビジョンを確定すると、そのデータセットをデータ許可の一部として使用する準備が整います。

新しいデータ許可を作成するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#)の左側のナビゲーションペインで、[交換されたデータ許可] の [送信されたデータ許可] を選択します。
2. [送信されたデータ許可] から [データ許可を作成] を選択し、[データ許可を定義] ウィザードを開きます。
3. [所有しているデータセットを選択] セクションで、追加するデータセットの横にあるチェックボックスをオンにします。

Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットはデータ許可に追加されません。
で共有されるデータ製品に含まれるデータセットとは異なり AWS Marketplace、データ許可に追加されたデータセットにはリビジョンアクセスルールはありません。つまり、データ許可が承認されると、データ許可の受信者は、特定のデータセットのすべての確定済みリビジョン (データ許可の作成前に確定された過去のリビジョンを含む) にアクセスできます。

4. [許可の概要] セクションに、データ許可名やデータ許可の説明など、データ許可に関して受取人に表示する情報を入力します。
5. [Next (次へ)] を選択します。

詳細については、「[の製品ベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

6. 「受信者アクセス情報」セクションの AWS アカウント ID の下に、データ許可受信者アカウントの AWS アカウント ID を入力します。

7. [受取人アクセス情報] セクションの [アクセスの終了日] で、[終了日なし] を選択してデータ許可を永続的に実行するか、[特定の終了日] を選択して希望の終了日を指定するかを選択します。
8. [Next (次へ)] を選択します。
9. [確認して送信] セクションで、データ許可情報を確認します。
10. データ許可を作成して、選択した受取人に送信することを確定する場合は、[データ許可を作成して送信] を選択します。

これで、データ許可を手動で作成する部分が完了しました。データ許可は、送信済みデータ許可ページの送信済みデータ許可タブに表示され、受信者アカウントが承認するまで、ステータスが承認保留中と表示されます。

Amazon S3 データアクセスを含むで AWS Data Exchange のデータ許可の作成

AWS Data Exchange for Amazon S3 を使用すると、データ所有者は Amazon S3 バケットまたは特定のプレフィックスと Amazon S3 オブジェクトへの直接アクセスを共有できます。また、データ所有者は を使用して AWS Data Exchange 、データ付与を通じて使用権限を自動的に管理します。

データ所有者は、コピーを作成または管理しなくても、Amazon S3 バケット全体、または特定のプレフィックスと Amazon S3 オブジェクトへの直接アクセスを共有できます。これらの共有 Amazon S3 オブジェクトは、(AWS KMS) または AWS マネージドキー (SSE-S3) に保存 AWS Key Management Service されているカスターマネージドキーを使用してサーバー側で暗号化できます。KMS キーのモニタリングおよび暗号化コンテキストの理解の詳細については、[the section called “Amazon S3 データアクセスのキー管理”](#) を参照してください。受信者がデータ製品にアクセスすると、 は Amazon S3 アクセスポイント AWS Data Exchange を自動的にプロビジョニングし、ユーザーに代わってリソースポリシーを更新して、受信者に読み取り専用アクセスを許可します。受取人は、Amazon S3 バケット名を使用して Amazon S3 のデータにアクセスする場所で、Amazon S3 アクセスポイントのエイリアスを使用できます。

サブスクリプションが終了すると、レシーバーの許可は取り消されます。

Amazon S3 データアクセスを含むデータ許可を作成する前に、以下の前提条件を満たす必要があります。

前提条件

- データをホストする Amazon S3 バケットが、Amazon S3 バケット所有者による強制設定で [ACL 無効] をオンにして設定されていることを確認します。詳細については、Simple Storage Service ユーザーガイドの[オブジェクトの所有権のコントロールとバケットに対する ACL の無効化](#)を参照してください。
- 共有オブジェクトに受信者が正常にアクセスするには、共有オブジェクトが Amazon S3 Standard ストレージクラス内に存在するか、Amazon S3 Intelligent Tiering を使用して管理されている必要があります。共有オブジェクトが他のストレージクラス内に存在しているか、Intelligent Tiering を Deep Archive で有効にしている場合、レシーバーは RestoreObject への許可がないため、エラーが発生します。
- データをホストする Amazon S3 バケットで暗号化が無効になっているか、Amazon S3 マネージドキー (SSE-S3) または AWS Key Management Service () に保存されているカスタマーマネージドキーで暗号化されていることを確認しますAWS KMS。
- カスタマー管理キーを使用している場合は、次のものがが必要です。
 1. KMS キーに対する kms:CreateGrant へのIAM 権限。これらの権限には、キーポリシー、IAM 認証情報、または KMS キーへの AWS KMS 許可を通じてアクセスできます。キー管理と が KMS AWS 許可 AWS Data Exchange を使用する方法の詳細については、「」を参照してください[AWS KMS 許可の作成](#)。

アクセス権限を付与するにはユーザー、グループ、またはロールにアクセス許可を追加します。

- 以下のユーザーとグループ AWS IAM Identity Center :

アクセス許可セットを作成します。「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[権限設定を作成する](#)」の手順に従ってください。

- IAM 内で、ID プロバイダーによって管理されているユーザー:

ID フェデレーションのロールを作成します。詳細については「IAM ユーザーガイド」の「[サードパーティー ID プロバイダー \(フェデレーション\) 用のロールを作成する](#)」を参照してください。

- IAM ユーザー:

- ユーザーが担当できるロールを作成します。手順については「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ユーザーのロールの作成](#)」を参照してください。

- (お奨めできない方法) ポリシーをユーザーに直接アタッチするか、ユーザーをユーザーグループに追加します。詳細については「IAM ユーザーガイド」の「[ユーザー \(コンソール\) へのアクセス権限の追加](#)」を参照してください。

ユーザーが の AWS 外部とやり取りする場合は、プログラムによるアクセスが必要です AWS Management Console。プログラムによるアクセスを許可する方法は、 がアクセスするユーザーのタイプによって異なります AWS。

ユーザーにプログラマチックアクセス権を付与するには、以下のいずれかのオプションを選択します。

プログラマチックアクセス権を必要とするユーザー	目的	方法
ワークフォースアイデンティティ (IAM アイデンティティセンターで管理されているユーザー)	一時的な認証情報を使用して、AWS CLI、AWS SDKs、または AWS APIs。	使用するインターフェイスの指示に従ってください。 <ul style="list-style-type: none"> • については AWS CLI、AWS Command Line Interface 「ユーザーガイド」の「を使用する AWS CLI ように を設定する AWS IAM Identity Center」を参照してください。 • AWS SDKs、ツール、API については、SDK および AWS APIs 「IAM Identity Center 認証」を参照してください。AWS SDKs
IAM	一時的な認証情報を使用して、AWS CLI、AWS SDKs、または AWS APIs。	「IAM ユーザーガイド 」の「 AWS リソースでの一時的な認証情報の使用 」の手順に従います。

プログラマチックアクセス権を必要とするユーザー	目的	方法
IAM	(非推奨) 長期認証情報を使用して、AWS CLI、AWS SDKs、または AWS APIs。	<p>使用するインターフェイスの指示に従ってください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • については AWS CLI、「AWS Command Line Interface ユーザーガイド」の「IAM ユーザー認証情報を使用した認証」を参照してください。 • AWS SDKs 「SDK とツールリファレンスガイド」の「長期的な認証情報を使用した認証」を参照してください。AWS SDKs • API AWS APIs 「IAM ユーザーガイド」の「IAM ユーザーのアクセスキーの管理」を参照してください。

KMS キーのキーポリシーに追加する方法を示す JSON ポリシーの例を次に示します。

```
{
  "Sid": "AllowCreateGrantPermission",
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {
    "AWS": "<IAM identity who will call Dataexchange API>"
  },
  "Action": "kms:CreateGrant",
  "Resource": "*"
}
```

次のポリシーは、使用される IAM ID のポリシー追加例を示しています。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Sid": "AllowCreateGrantPermission",
      "Action": [
        "kms:CreateGrant"
      ],
      "Resource": [
        <Enter KMS Key ARNs in your account>
      ]
    }
  ]
}
```

Note

前のステップで KMS キーに対する `kms:CreateGrant` 権限を取得していれば、クロスアカウント KMS キーも許可されます。別のアカウントがキーを所有している場合は、上記の例で説明されているように、キーポリシーと IAM 認証情報に対する権限が必要です。

2. Amazon S3 バケットキー機能を使用して、必ず KMS キーを使用して Amazon S3 バケット内の既存のオブジェクトと新しいオブジェクトを暗号化してください。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[S3 バケットキーの設定](#)」を参照してください。
 - Amazon S3 バケットに追加された新しいオブジェクトについては、デフォルトで Amazon S3 バケットキー暗号化を設定できます。Amazon S3Bucket キー機能を使用せずに既存のオブジェクトを暗号化した場合、これらのオブジェクトは Amazon S3 バケットキーを使用して暗号化するように移行する必要があります。

既存のオブジェクトの Amazon S3 バケットキーを有効にするには、`copy` オペレーションを使用します。詳細については、「[バッチオペレーションを使用してオブジェクトレベルで Amazon S3 バケットキーを設定する](#)」を参照してください。

- AWS マネージド KMS キー または AWS 所有のキー はサポートされていません。サポートされていない暗号化スキームから現在サポートされている暗号化スキームに移行できます。詳細については、AWS ストレージブログの[Amazon S3暗号化の変更](#)を参照してください。

- データをホストする Amazon S3 バケットを設定して、AWS Data Exchange 所有アクセスポイントを信頼します。これらの Amazon S3 バケットポリシーを更新して、Amazon S3 アクセスポイントを作成し、ユーザーに代わってサブスクライバーのアクセスを許可または削除するための AWS Data Exchange アクセス許可を付与する必要があります。ポリシーステートメントがない場合は、バケットポリシーを編集して Amazon S3 ロケーションをデータセットに追加する必要があります。

次にポリシーの例を示します。<Bucket ARN> を適切な値に置き換えてください。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "AWS": "*"
      },
      "Action": [
        "s3:GetObject",
        "s3:ListBucket"
      ],
      "Resource": [
        "<Bucket ARN>",
        "<Bucket ARN>/*"
      ],
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "s3:DataAccessPointAccount": [
            "337040091392",
            "504002150500",
            "366362662752",
            "330489627928",
            "291973504423",
            "461002523379",
            "036905324694",
            "540564263739",
            "675969394711",
            "108584782536",
            "844053218156"
          ]
        }
      }
    }
  ]
}
```

```
    }  
  ]  
}
```

を通じて Amazon S3 バケット全体にデータ共有 AWS Data Exchange を委任できます。ただし、データセット内で共有したいバケットの特定のプレフィックスとオブジェクトに委任の範囲を委任することができます。以下に、スコープ付きポリシーの例を示します。<Bucket ARN> と "mybucket/folder1/*" を自分の情報で置き換えます。

```
{  
  "Version": "2012-10-17",  
  "Statement": [  
    {  
      "Sid": "DelegateToAdxGetObjectsInFolder1",  
      "Effect": "Allow",  
      "Principal": {  
        "AWS": "*"  
      },  
      "Action": [  
        "s3:GetObject"  
      ],  
      "Resource": [  
        "arn:aws:s3:::mybucket/folder1/*"  
      ],  
      "Condition": {  
        "StringEquals": {  
          "s3:DataAccessPointAccount": [  
            "337040091392",  
            "504002150500",  
            "366362662752",  
            "330489627928",  
            "291973504423",  
            "461002523379",  
            "036905324694",  
            "540564263739",  
            "675969394711",  
            "108584782536",  
            "844053218156"  
          ]  
        }  
      }  
    ]  
  }  
  ],  
}
```

```
{
  "Sid": "DelegateToAdxListObjectsInFolder1",
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {
    "AWS": "*"
  },
  "Action": "s3:ListBucket",
  "Resource": "arn:aws:s3:::mybucket",
  "Condition": {
    "StringLike": {
      "s3:prefix": [
        "folder1/*"
      ]
    }
  },
  "StringEquals": {
    "s3:DataAccessPointAccount": [
      "337040091392",
      "504002150500",
      "366362662752",
      "330489627928",
      "291973504423",
      "461002523379",
      "036905324694",
      "540564263739",
      "675969394711",
      "108584782536",
      "844053218156"
    ]
  }
}
```

同様に、アクセス範囲を1つのファイルのみに限定する場合、データ所有者は次のポリシーを使用できます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "DelegateToAdxGetMyFile",
      "Effect": "Allow",
```

```
"Principal": {
  "AWS": "*"
},
"Action": [
  "s3:GetObject"
],
"Resource": [
  "arn:aws:s3:::mybucket/folder1/myfile"
],
"Condition": {
  "StringEquals": {
    "s3:DataAccessPointAccount": [
      "337040091392",
      "504002150500",
      "366362662752",
      "330489627928",
      "291973504423",
      "461002523379",
      "036905324694",
      "540564263739",
      "675969394711",
      "108584782536",
      "844053218156"
    ]
  }
}
]
```

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して Amazon S3 データセットと Amazon S3 データセットを使用したデータ許可を作成するプロセスについて説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: Amazon S3 データセットを作成する](#)
- [ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを設定する](#)
- [ステップ 3: データセットを確認して完成する](#)
- [ステップ 4: 新しいデータ許可を作成する](#)

ステップ 1: Amazon S3 データセットを作成する

Amazon S3 データセットを作成するには

1. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [所有データセット] を選択します。
2. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
3. [データセットタイプを選択] で [Amazon S3 オブジェクト] を選択します。
4. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
5. (オプション) [タグを追加 – オプション] でタグを追加します。
6. [データセットを作成] を選択して、続行します。

ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを設定する

受取人に提供する Amazon S3 バケットまたは Amazon S3 バケットロケーションを選択します。Amazon S3 バケット全体を選択することも、Amazon S3 バケット内で最大 5 つのプレフィックスまたはオブジェクトを指定することもできます。Amazon S3 バケットをさらに追加するには、別の Amazon S3 データ共有を作成する必要があります。

Amazon S3 データ共有アクセスを設定する

1. 「Amazon S3 データアクセスの設定」ページで、「Amazon S3 ロケーションの選択」を選択します。
2. [Amazon S3 ロケーションの選択] で、検索バーに Amazon S3 バケット名を入力するか、Amazon S3 バケット、プレフィックス、または Amazon S3 ファイルを選択して [選択項目を追加] を選択します。次に、[アプリケーションを追加] を選択します。

Note

データ所有者がどのプレフィックスやオブジェクトを共有するかを再設定する必要がないように、大半のオブジェクトやプレフィックスが保存されている最上位のフォルダを選択することをお勧めします。

3. 「設定の詳細」で、リクエスト支払い設定を選択します。2 つのオプションがあります。

- リクエスト支払いを有効にする (推奨) — リクエストは Amazon S3 バケット内のすべてのリクエストと転送に対して支払いを行います。このオプションをお勧めするのは、レシーバーのリクエストや転送に伴う意図しないコストを防ぐのに役立つためです。
- リクエスト支払いを無効にする — Amazon S3 バケット内のレシーバーのリクエストと転送に対して支払います。

リクエスト支払いの詳細については、「Amazon Simple Storage Service デベロッパガイド」の「[リクエスト支払いバケットのオブジェクト](#)」を参照してください。

4. ニーズに最適なバケットポリシーを選択してください。Amazon S3 バケット全体に 1 つのバケットポリシーを使用するには、[一般] を選択します。これは 1 回限りの設定で、future プレフィックスやオブジェクトを共有するために追加の設定を行う必要はありません。選択した Amazon S3 ロケーションに固有のバケットポリシーを使用するには、[特定] を選択します。共有 Amazon S3 バケットには、Amazon S3 データアクセスデータセットを正常に作成するためのバケットポリシーが必要で、ACL を有効にすることはできません。
 - a. ACL を無効にするには、バケット権限に移動し、[オブジェクト所有権] を [バケット所有者強制] に設定します。
 - b. バケットポリシーを追加するには、バケットステートメントをクリップボードにコピーします。Amazon S3 コンソールの Amazon S3 権限タブのバケットポリシーセクションで、[編集] を選択し、バケットポリシーをステートメントに貼り付けて、変更を保存します。
5. Amazon S3 バケットに AWS KMS カスタマーマネージドキーを使用して暗号化されたオブジェクトが含まれている場合は、そのようなすべての KMS キーをと共有する必要があります AWS Data Exchange。KMS キーを使用して Amazon S3 バケット内のオブジェクトを暗号化する際に必要な前提条件については、[the section called “Amazon S3 データアクセスの抑制”](#) を参照してください。これらの KMS キーをと共有するには AWS Data Exchange、以下を実行します。
 - Amazon Amazon S3 データアクセスの設定ページから、カスタマーマネージド KMS キーで、 から選択 AWS KMS keysするか AWS KMS key ARN を入力するを選択し、Amazon S3 共有ロケーションの暗号化にAWS KMS keys現在使用されているすべてのを選択します。は、これらの KMS キー AWS Data Exchange を使用して、受信者が共有ロケーションにアクセスするための許可を作成します。詳細については、「[AWS KMSの許可](#)」を参照してください。

Note

AWS KMS には、既存の許可を含め、KMS キーごとに 50,000 個の許可の制限があります。

6. Amazon S3 の場所、選択した KMS キー、設定の詳細を確認し、[保存して続行] を選択します。

ステップ 3: データセットを確認して完成する

新しく作成したデータセットを確認して完成させます。別の Amazon S3 データアクセスを作成して追加し、追加の Amazon S3 バケット、プレフィックス、オブジェクトへのアクセスを共有する場合は、[別の Amazon S3 データアクセスを追加] を選択します。

Note

これは、最初の Amazon S3 データアクセスで選択した Amazon S3 バケットとは別の Amazon S3 バケットでホストされているデータへのアクセスを共有する必要がある場合にお勧めします。

公開前に変更を加える場合は、[下書きを保存] を選択してデータセットをドラフトとして保存できます。次に、[データセットを確定] を選択してデータ許可に追加します。

ステップ 4: 新しいデータ許可を作成する

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットを含むリビジョンを確定すると、そのデータセットをデータ許可の一部として使用する準備が整います。

新しいデータ許可を作成するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) の左側のナビゲーションペインで、[交換されたデータ許可] の [送信されたデータ許可] を選択します。
2. [送信されたデータ許可] から [データ許可を作成] を選択し、[データ許可を定義] ウィザードを開きます。
3. [所有しているデータセットを選択] セクションで、追加するデータセットの横にあるチェックボックスをオンにします。

Note

選択したデータセットには、確定されたりビジョンが必要です。確定されたりビジョンのないデータセットは、データ許可に追加できません。

で共有されるデータ製品に含まれるデータセットとは異なり AWS Marketplace、データ許可に追加されたデータセットにはリビジョンアクセスルールはありません。つまり、データ許可が承認されると、データ許可の受信者は、特定のデータセットのすべての確定済みリビジョン (データ許可の作成前に確定された過去のリビジョンを含む) にアクセスできます。

4. [許可の概要] セクションに、データ許可名やデータ許可の説明など、データ許可に関して受取人に表示する情報を入力します。

5. [Next (次へ)] を選択します。

詳細については、「[の製品ベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

6. 「受信者アクセス情報」セクションの AWS アカウント ID に、データ許可を受け取る受信者アカウントの AWS アカウント ID を入力します。

7. [アクセスの終了日] で、データ許可の有効期限が切れる特定の終了日を選択するか、許可を永続的にする場合は [終了日なし] を選択します。

8. [Next (次へ)] を選択します。

9. [確認して送信] セクションで、データ許可情報を確認します。

10. データ許可を作成して、選択した受取人に送信することを確定する場合は、[データ許可を作成して送信] を選択します。

これで、データ許可を手動で作成する部分が完了しました。データ許可は、送信済みデータ許可ページの送信済みデータ許可タブに表示され、受信者アカウントが承諾するまで、ステータスが承諾保留中と表示されます。

データアクセス許可データセット AWS Data Exchange を含む AWS Lake Formation に対するデータ許可の作成 (プレビュー)

このプレビュー中にデータアクセス許可データセットを含む AWS Lake Formation データ許可を作成する場合は、[お問い合わせください AWS サポート](#)。

AWS Lake Formation データアクセス許可データセットには、が管理するデータの LF タグとアクセス許可のセットが含まれています AWS Lake Formation。Lake Formation データ許可を含むデータ許可を承諾すると、データセットに追加された LF タグに関連するデータベース、テーブル、および列に対する読み取り専用アクセス権が付与されます。

データ所有者は、で LF タグを作成し AWS Lake Formation、それらのタグを受信者が利用できるようにするデータに関連付けることから始めます。Lake Formation でのリソースのタグ付けについて詳しくは、「AWS Lake Formation デベロッパーガイド」の「[Lake Formation タグベースのアクセス制御](#)」を参照してください。次に、これらの LF タグと一連のデータアクセス許可をアセット AWS Data Exchange としてにインポートします。受取人は、データ許可を承諾すると、これらの LF タグに関連付けられたデータへのアクセス権を付与されます。

以下のトピックでは、データアクセス許可を含む AWS Lake Formation データ許可を作成するプロセスについて説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: AWS Lake Formation データセットを作成する \(プレビュー\)](#)
- [ステップ 2: AWS Lake Formation データアクセス許可を作成する \(プレビュー\)](#)
- [ステップ 3: 確認して確定する](#)
- [ステップ 4: リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 5: AWS Lake Formation データセットを含む新しいデータ許可を作成する \(プレビュー\)](#)
- [AWS Lake Formation データ許可データセットを含むデータ許可を作成する際の考慮事項 \(プレビュー\)](#)

ステップ 1: AWS Lake Formation データセットを作成する (プレビュー)

AWS Lake Formation データセットを作成するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [製品] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. 「データセットタイプを選択」で、AWS Lake Formation データ権限を選択します。
5. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[the section called “データセットのベストプラクティス”](#)」を参照してください。

6. [タグを追加 — オプション] で [新しいタグを追加] を選択します。
7. [データセットを作成]を選択して続行します。

ステップ 2: AWS Lake Formation データアクセス許可を作成する (プレビュー)

AWS Data Exchange は LF タグを使用してデータアクセス許可を付与します。共有するデータに関連付けられている LF タグを選択して、データに対する許可を受取人に付与します。

AWS Lake Formation データアクセス許可を作成するには

1. 「Lake Formation のデータ許可を作成」ページで、「LF タグを追加」を選択します。
2. キーを入力し、LF タグ値を選択します。
3. 「リソースをプレビュー」を選択すると、LF タグがどのように解釈されるかを確認できます。
 - 「リソースのプレビュー」から、関連するデータカタログリソースを選択します。

Note

以下のリソースの IAMAllowedPrincipals グループを必ず取り消してください。詳細については、IAM ユーザーガイドの「[IAM ロールの一時的なセキュリティ認証情報の取り消し](#)」を参照してください。

4. 下のダイアログボックスの LF タグ表現の解釈と、データセットに関連する権限を確認してください。
5. [サービス アクセス] では、AWS Data Exchange がそのロールを引き受け、ユーザーに代わって Lake Formation データ権限へのアクセス、付与、資格の取り消しを許可する既存のサービスロールを選択します。次に、「Lake Formation のデータ許可を作成」を選択します。このロールの作成の詳細については AWS のサービス、「[にアクセス許可を委任するロールの作成 AWS のサービス](#)」を参照してください。

ステップ 3: 確認して確定する

AWS Lake Formation データアクセス許可 (プレビュー) を作成したら、データセットを確認して確定できます。

確認して確定するには

1. ステップ 1 のデータセットの詳細とタグが正しいかどうかを確認してください。
2. LF タグ表現を確認し、別の Lake Formation データ権限 (オプション)、関連するデータカタログリソース、ジョブの詳細を追加します。

Note

ジョブは、作成されてから 90 日後に削除されます。

3. [確定] を選択します。

ステップ 4: リビジョンを作成する

リビジョンを作成する

1. 「所有データセット」セクションから、リビジョンを追加したいデータセットを選択します。
2. [リビジョン] タブを選択します。
3. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
4. 「Lake Formation データ権限を変更」ページで、「LF タグを追加」を選択します。
5. 「データベース」と「テーブル」の権限を確認してください。
6. 「サービスアクセス」から、既存のサービスロールを選択し、「Lake Formation データ権限を作成」を選択します。

ステップ 5: AWS Lake Formation データセットを含む新しいデータ許可を作成する (プレビュー)

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットを使用してリビジョンを確定したら、データアクセス許可データセットを使用して AWS Lake Formation データ許可を作成する準備が整います。

新しいデータ許可を作成するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) の左側のナビゲーションペインで、[交換されたデータ許可] の [送信されたデータ許可] を選択します。
2. [送信されたデータ許可] から [データ許可を作成] を選択し、[データ許可を定義] ウィザードを開きます。

3. [所有しているデータセットを選択] セクションで、追加するデータセットの横にあるチェックボックスをオンにします。

 Note

選択したデータセットには、確定されたりビジョンが必要です。確定されたりビジョンのないデータセットは、データ許可に追加できません。

で共有されるデータ製品に含まれるデータセットとは異なり AWS Marketplace、データ許可に追加されたデータセットにはリビジョンアクセスルールはありません。つまり、データ許可が承認されると、データ許可の受信者は、特定のデータセットのすべての確定済みリビジョン (データ許可の作成前に確定された過去のリビジョンを含む) にアクセスできます。

4. [許可の概要] セクションに、データ許可名やデータ許可の説明など、データ許可に関して受取人に表示する情報を入力します。
 5. [Next (次へ)] を選択します。
- 詳細については、「[の製品ベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
6. 「受信者アクセス情報」セクションの AWS アカウント ID に、データ許可を受け取る受信者アカウントの AWS アカウント ID を入力します。
 7. [アクセスの終了日] で、データ許可の有効期限が切れる特定の終了日を選択するか、許可を永続的にする場合は [終了日なし] を選択します。
 8. [Next (次へ)] を選択します。
 9. [確認して送信] セクションで、データ許可情報を確認します。
 10. データ許可を作成して、選択した受取人に送信することを確定する場合は、[データ許可を作成して送信] を選択します。

これで、データ許可を手動で作成する部分が完了しました。データ許可は、送信済みデータ許可ページの送信済みデータ許可タブに表示され、受信者アカウントが承諾するまで、ステータスが承諾保留中と表示されます。

AWS Lake Formation データ許可データセットを含むデータ許可を作成する際の考慮事項 (プレビュー)

レシーバーエクスペリエンスを最適化するために、製品に Lake Formation データセット (プレビュー) AWS Data Exchange の が含まれているアクセス許可に対して、以下の変更を行わないことを強くお勧めします。

- AWS Lake Formation データセットを含むアクティブなデータ許可 AWS Data Exchange で に渡された IAM ロールを削除または変更しないことをお勧めします。このような IAM ロールを削除または変更すると、以下の問題が発生します。
 - AWS アカウント Lake Formation データアクセス許可にアクセスできる は、アクセスを無期限に保持する場合があります。
 - AWS アカウント はデータ許可の受信者ですが、Lake Formation のデータ許可へのアクセスをまだ受け取っていない場合、アクセスの受信に失敗します。

AWS Data Exchange は、削除または変更した IAM ロールに対して責任を負いません。

- AWS Lake Formation データセットを含む AWS Lake Formation データ許可 AWS Data Exchange で に渡された IAM ロールから、付与されたデータ許可を取り消さないことをお勧めします。そのような IAM ロールから付与されたデータ権限を取り消すと、以下の問題が発生します。
 - AWS アカウント Lake Formation データアクセス許可にアクセスできる は、アクセスを無期限に保持する場合があります。
 - AWS アカウント 製品にサブスクライブしているが、Lake Formation データアクセス許可へのアクセスをまだ受け取っていない は、アクセスを受信できません。
- AWS Lake Formation データセットを含むアクティブな AWS Lake Formation データ許可 AWS アカウント を使用して、 から付与されたデータ許可を取り消すことはお勧めしません。データ付与の受信者である付与 AWS アカウント されたデータ許可を取り消すと、それらのアカウントはアクセスを失い、カスタマーエクスペリエンスが低下します。
- AWS Lake Formation データセットを含むデータ許可を作成するときは、 のクロスアカウントバージョン AWS Glue Data Catalog をバージョン 3 に設定することをお勧めします。データセットを含む AWS Lake Formation アクティブなデータ許可がある間に Data Lake Catalog のクロスアカウントバージョンをダウングレードすると、データ許可のレシーバー AWS アカウント であるが、Lake Formation データ許可へのアクセスをまだ受け取っていない が、データへのアクセスに失敗する可能性があります。

データ許可の承諾と のデータへのアクセス AWS Data Exchange

次の手順では、AWS Data Exchange コンソール AWS Data Exchange を使用して データ許可を受け入れるプロセスについて説明します。

データ許可の承諾

1. データ許可を受け入れる前に、AWS アカウントにサインアップし、ユーザーを作成する必要があります。詳細については、「[the section called “にサインアップする AWS アカウント”](#)」を参照してください。
2. AWS Data Exchange コンソールの左側のナビゲーションペインで、Exchanged data grants で、Received data grants を選択します。
3. [このレシーバー AWS アカウント](#) であるデータ許可は、保留中のデータ許可のタブのテーブルに表示され、保留中のデータ許可の詳細と保留中の承認のステータスが表示されます。
4. データ許可を承諾するには、承諾するデータ許可の横にあるチェックボックスをオンにして、[データ許可を承諾] を選択します。
5. データ許可の承諾処理が完了すると、データ許可が [承諾済みおよび期限切れのデータ許可] タブに表示され、データ許可の詳細と [承諾済み] ステータスが示されます。
6. データ許可を承諾したら、[権限を持つデータセット] テーブルからデータ許可名を選択してデータにアクセスします。[マイデータ] から [権限を持つデータ] ページに移動して、データ許可を確認し、アカウントで共有するすべてのデータセットを表示することもできます。
7. 次に、含まれているデータセットを使用します。アクセスできるデータセットの種類に応じて、以下のアクションのいずれかを実行できます。
 - a. 関連するファイルを Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) にエクスポートする、または署名付き URL を用いてローカルにエクスポートする。
 - b. Amazon API Gateway API Gateway API を呼び出す
 - c. Amazon Redshift データ共有をクエリする。
 - d. Amazon S3 データにアクセスする。
 - e. AWS Lake Formation データレイクをクエリする (プレビュー)。

Note

データ付与を承諾すると、基になるデータセットの使用が、お客様による当該サービスの使用 AWS を管理する AWS カスタマーアグリーメントまたはその他の契約の対象となることに同意します。

関連トピック

- [データ許可を承諾した後の AWS Data Exchange データセットへのアクセス](#)
- [ファイルベースのデータを含む AWS Data Exchange データセットにアクセスする](#)
- [APIs を含む AWS Data Exchange データセットにアクセスする](#)
- [Amazon Redshift AWS Data Exchange データセットを含むデータセットにアクセスする](#)
- [Amazon S3 データアクセスを含む AWS Data Exchange データセットにアクセスする](#)
- [AWS Data Exchange データセットを含む AWS Lake Formation データセットにアクセスする \(プレビュー\)](#)

データ許可を承諾した後の AWS Data Exchange データセットへのアクセス

以下のトピックでは、コンソール AWS Data Exchange を使用して AWS Data Exchange のデータセットにアクセスするプロセスについて説明します。

トピック

- [ファイルベースのデータを含む AWS Data Exchange データセットにアクセスする](#)
- [APIs を含む AWS Data Exchange データセットにアクセスする](#)
- [Amazon Redshift AWS Data Exchange データセットを含むデータセットにアクセスする](#)
- [Amazon S3 データアクセスを含む AWS Data Exchange データセットにアクセスする](#)
- [AWS Data Exchange データセットを含む AWS Lake Formation データセットにアクセスする \(プレビュー\)](#)

ファイルベースのデータを含む AWS Data Exchange データセットにアクセスする

以下のトピックでは、ファイルとして保存されているファイルベースのデータを含むデータセットにアクセスするプロセスについて説明します AWS Data Exchange。プロセスを完了するには、AWS Data Exchange コンソールを使用します。

データ許可を正常に承諾すると、データ許可に含まれているデータセットにアクセスできるようになります。

データセット、リビジョン、アセットを表示するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [権限を持つデータセット] を選択します。
3. データセットを選択します。
4. データセットの [データセットの概要]、[自動エクスポートの宛先] (Amazon S3 データセットのみ)、[リビジョン]、および [説明] を表示します。

(オプション) データのエクスポート

データ許可をアクティブにしたら、エクスポートしたアセットを受け取るように Amazon S3 バケットを設定できます。関連するアセットを Amazon S3 にエクスポートする、または署名付き URL を用いたジョブを使用できます。

新しいリビジョンを取得するなど、後でデータをエクスポートまたはダウンロードする場合は、「[the section called “アセットのエクスポート”](#)」を参照してください。

Important

データを Amazon S3 にエクスポートするときは、Amazon S3 のセキュリティ機能を検討することをお勧めします。一般的なガイドラインとベストプラクティスの詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[Amazon S3 のセキュリティのベストプラクティス](#)」を参照してください。

データのエクスポート方法に関する詳細については、「[the section called “アセットのエクスポート”](#)」と「[the section called “リビジョンのエクスポート”](#)」を参照してください。

APIs を含む AWS Data Exchange データセットにアクセスする

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用しての AWS Data Exchange APIs を含むデータセットにアクセスするプロセスについて説明します。

API の表示

API を表示する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [権限を持つデータセット] を選択します。
3. データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. [API アセット] で、API を選択します。
6. アセットの概要を表示します。
7. [統合に関する注意事項] にあるガイドラインに従って API を呼び出します。

API 仕様のダウンロード

API 仕様をダウンロードする

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [権限を持つデータセット] を選択します。
3. データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. [API アセット] で、API を選択します。
6. [OpenAPI 3.0 仕様] で、[API 仕様をダウンロード] を選択します。

お使いのローカルコンピュータに仕様がダウンロードされます。次に、SDK 生成のために、アセットをサードパーティツールにエクスポートできます。

API コールの実行 (コンソール)

AWS Data Exchange コンソールで 1 つのエンドポイントを呼び出すことができます。

コンソールから API コールを実行する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [権限を持つデータセット] を選択します。
3. データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. [API アセット] で、API を選択します。
6. [統合に関する注意事項] で以下を実行します。
 - a. [コピー] を選択して [ベース URL] を使用します。
 - b. [コピー] を選択して [コード構造] を使用します。
 - c. 仕様ドキュメントに記載されている情報に従って API を呼び出します。

API コールの実行 (AWS CLI)

API コールを行うには (AWS CLI)

- `send-api-asset` コマンドを使用して API を呼び出します。

```
$ AWS dataexchange send-api-asset \  
--asset-id $ASSET_ID \  
--data-set-id $DATA_SET_ID \  
--revision-id $REVISION_ID \  
--body "... " \  
{  
  "headers": {  
    ...  
  },  
  "body": "..."  
}
```

Amazon Redshift AWS Data Exchange データセットを含むデータセットにアクセスする

受取人向けの概要

Amazon Redshift データセットは、Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有を含むデータセットです。データ共有を使用すると、データ所有者がデータ共有に追加するテーブル、ビュー、スキーマ、ユーザー定義関数への読み取り専用アクセスが可能になります。

受取人は、データ許可の承諾後に、データを抽出、変換、ロードすることなく Amazon Redshift 内のデータをクエリするためのアクセス権を取得します。データ許可が期限切れになると、データ共有にアクセスできなくなります。

Note

データ許可の承諾後にデータ共有にアクセスできるようになるまで数分かかる場合があります。

データ許可を承諾すると、以下の操作を実行できます。

- データを抽出、変換、ロードすることなく、データにクエリを実行する。

データ所有者が更新すると同時に、最新のデータにアクセスする。

詳細については、「Amazon Redshift データベースデベロッパーガイド」の「[AWS Data Exchange データ共有の管理](#)」を参照してください。

Amazon S3 データアクセスを含む AWS Data Exchange データセットにアクセスする

受取人向けの概要

AWS Data Exchange for Amazon S3 を使用すると、受信者はデータ所有者の Amazon S3 バケットから直接サードパーティーのデータファイルにアクセスできます。

受信者は、Amazon S3 データセット AWS Data Exchange の資格を取得したら、Amazon Athena、SageMaker AI Feature Store、Amazon EMR AWS のサービスなどでデータ分析を開始できます。Amazon S3

以下の点を考慮してください。

- データ所有者は、提供されたデータをホストする Amazon S3 バケットで、Amazon S3 の機能であるリクエスト支払いを有効にすることができます。有効にすると、受取人は Amazon S3 バケットへのデータの読み取り、使用、転送、エクスポート、またはコピーに対して料金を支払います。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[ストレージ転送と使用量にリクエスト支払いバケットを使用する](#)」を参照してください。

- AWS Data Exchange for Amazon S3 データ製品へのデータ許可を受け入れると、は Amazon S3 アクセスポイント AWS Data Exchange を自動的にプロビジョニングし、そのリソースポリシーを更新して読み取り専用アクセスを許可します。Amazon S3 Access Points は、Amazon S3 バケットへのデータ共有を簡素化する Amazon S3 の機能です。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[Amazon S3 アクセスポイントを使用したデータアクセスの管理](#)」を参照してください。
- Amazon S3 Access Points の Amazon リソースネーム (ARN) またはエイリアスを使用して共有データにアクセスするには、事前に IAM 権限を更新する必要があります。現在のロールおよび関連ポリシーで、プロバイダーの Amazon S3 バケットと AWS Data Exchange が提供する Amazon S3 アクセスポイントへの GetObject および ListBucket 呼び出しが許可されていることを確認できます。

以下のセクションでは、AWS Data Exchange コンソールを使用してデータ許可を承諾した後、Amazon S3 データセット AWS Data Exchange の にアクセスする完全なプロセスについて説明します。

独自の Amazon S3 バケットを設定したり、データファイルを Amazon S3 バケットにコピーしたり、関連するストレージ料金を支払ったりすることなく、クエリを実行してデータをインプレースで分析できます。データ所有者が管理しているのと同じ Amazon S3 オブジェクトにアクセスして、最新の利用可能なデータを使用できます。

データ許可では、次のことを実行できます。

- Amazon S3 バケットを個別に設定したり、ファイルをコピーしたり、ストレージ料金を支払ったりすることなく、データを分析できます。
- データ所有者が更新すると同時に最新のプロバイダーデータにアクセスする。

データセット、リビジョン、アセットを表示するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [権限を持つデータセット] を選択します。
3. [権限を持つデータセット] ページで、データセットを選択します。
4. データセットの概要を表示します。

Note

提供されたデータは、データ所有者の Amazon S3 バケットに保存されます。このデータにアクセスする場合、所有者が特に指定しない限り、リクエストと所有者の Amazon S3 バケットからダウンロードされたデータのコストはお客様の負担となります。

5. 開始する前に、権限が付与された Amazon S3 データアクセスを使用するには、ロールに IAM アクセス権限が必要です。[データセットの概要] ページの [Amazon S3 データアクセス] タブで、[IAM 権限の検証] を選択して、ロールにデータにアクセスするための正しい権限があるかどうかを確認します。
6. 必要な IAM 権限がある場合は、表示される IAM ポリシープロンプトで [次へ] を選択します。必要な権限がない場合は、プロンプトに従って JSON ポリシーをユーザーまたはロールに埋め込みます。
7. 共有場所を確認して、Amazon S3 バケット、またはデータ所有者が共有しているプレフィックスとオブジェクトを表示します。Amazon S3 アクセスポイント情報のデータアクセス情報を参照し、データ所有者がリクエスト支払いを有効にしているかどうかを確認します。
8. データ所有者の Amazon S3 バケット、プレフィックス、および共有オブジェクトを表示および探索するには、共有 Amazon S3 の場所を参照を選択します。Amazon S3
9. Amazon S3 バケット名を使用する場所ならどこでも アクセスポイント エイリアスを使用して、資格のあるデータにプログラムでアクセスできます。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[互換性のある Amazon S3 オペレーションでのアクセスポイントの使用](#)」を参照してください。
10. (オプション) データ所有者の で暗号化されたデータを含む Amazon S3 データアクセスデータセットの使用権限を取得すると AWS KMS key、コンソールで KMS キー ARN を表示できます。AWS Data Exchange は、暗号化されたデータにアクセスできるように、キーに対する AWS KMS 許可を作成します。使用権限を取得した Amazon S3 アクセスポイントから暗号化されたデータを読み取る AWS KMS key には、 に対する kms:DecryptIAM アクセス許可を取得する必要があります。次の IAM ポリシーステートメントを選択できます。
 - a. ユーザーが任意の KMS キーを使用してデータを復号化または暗号化できるようにする IAM ポリシー。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [{
```

```
    "Effect": "Allow",
    "Action": ["kms:Decrypt"],
    "Resource": ["*"]
  }
]
```

- b. 受取人のコンソールに表示される正確な KMS キー ARN を指定できるようにする IAM ポリシー。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [{
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "kms:Decrypt"
    ],
    "Resource": [
      "<KMS key Arn from recipient's console>"
    ]
  }
]
```

Note

AWS KMS 許可は、オペレーションが結果整合性を達成するまで最大 5 分かかる場合があります。これが完了するまでは、Amazon S3 データアクセスデータセットにアクセスできない場合があります。詳細については、AWS KMS key 「Management Service デベロッパーガイド」の [「KMS AWS でのグラント」](#) を参照してください。

AWS Data Exchange データセットを含む AWS Lake Formation データセットにアクセスする (プレビュー)

受取人向けの概要

AWS Lake Formation データセットは、AWS Lake Formation データアクセス許可アセットを含むデータセットです。

受信者は、AWS Lake Formation データセットを含むデータ許可を受け入れることができます。AWS Lake Formation データセット AWS Data Exchange の 権限が付与されたら、AWS アカウントを使用して、または を使用して AWS 組織全体のデータへのアクセスをクエリ、変換 AWS Lake Formation、共有できます AWS License Manager。

AWS Lake Formation データセットを含むデータ許可を受け入れると、Amazon Athena などの Lake Formation 互換クエリエンジンを使用してデータをクエリできます。

データ許可の承諾が完了したら、以下の操作を行う必要があります。

1. データ許可を受け入れてから 12 時間以内に AWS Resource Access Manager (AWS RAM) 共有を受け入れます。AWS Data Exchange コンソールのデータ AWS Lake Formation アクセス許可データセットの権限のあるデータセットページから AWS RAM 共有を受け入れることができます。AWS RAM 共有を受け入れる必要があるのは、プロバイダーごとに 1 回のみです。からのリソース共有の招待を受け入れる方法の詳細については AWS RAM、[「からのリソース共有の招待を受け入れる AWS RAM」](#)を参照してください。
2. 新しい共有リソースに移動 AWS Lake Formation し、リソースリンクを作成します。
3. Amazon Athena または AWS Lake Formation 互換性のある別のクエリエンジンに移動して、データをクエリします。

組織内での AWS Data Exchange データ付与ライセンスの共有

データ許可を承諾すると、以下の条件で基盤となるデータセットを共有できるライセンスが付与されます。

- データ許可送信者は、基盤となるデータセットを共有できます。
- AWS アカウントは組織に属しています。詳細については AWS Organizations、[AWS Organizations 「ユーザーガイド」](#)を参照してください。

Note

アクセスは、組織内のアカウントとのみ共有できます。

以下のトピックでは、アカウント間でライセンスを共有する方法について説明します。

トピック

- [ライセンス共有の前提条件](#)
- [AWS Data Exchange ライセンスの表示](#)
- [AWS Data Exchange ライセンスの共有](#)

ライセンス共有の前提条件

ライセンスを共有する前に、以下のセットアップタスクを完了する必要があります。

- AWS Data Exchange コンソールで、データ許可設定ページを使用してとの統合を有効にします AWS Organizations。
- 組織内のアカウントに関する情報を読み取り、ユーザーに代わってライセンスを管理するアクセス AWS Data Exchange 許可を付与して、ライセンスを共有するときに関連するライセンス付与を作成できるようにします。詳細については、このガイドの「[AWS Data Exchangeのサービスにリンクされたロールの使用](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange ライセンスの表示

以下のトピックでは、AWS Data Exchange ライセンスを表示する方法について説明します。

トピック

- [すべてのライセンスの表示](#)
- [単一のライセンスの表示](#)

すべてのライセンスの表示

AWS License Manager コンソールを使用して、アクセスできる AWS Data Exchange データ許可のすべてのライセンスを表示できます。

すべてのライセンスを表示するには

1. [AWS Management Console](#)にサインインします。
2. AWS License Manager コンソールを開きます。
3. 左側のナビゲーションペインで [付与されたライセンス] を選択します。
4. 承認したデータ許可のすべてのライセンスを表示します。

単一のライセンスの表示

AWS License Manager コンソールを使用して、AWS Data Exchange データ許可の 1 つのライセンスを表示できます。

単一のライセンスを表示するには

1. AWS Data Exchange コンソールにサインインします。
2. 「交換データ許可」で、「受信データ許可」を選択します。
3. データ許可を選択します。
4. 次のページで、ライセンスを表示するまたは License Manager で配布を選択します。表示される内容は、データ許可のディストリビューション許可によって異なります。
5. [License detail] (ライセンスの詳細) ページで詳細を確認します。

AWS Data Exchange ライセンスの共有

レシーバーの概要

を使用して、組織内の他のアカウントと AWS Data Exchange ライセンスを管理および共有できます AWS License Manager。

AWS マネージドライセンス AWS License Manager で 使用方法の詳細については、AWS License Manager ユーザーガイドの [「付与されたライセンス」](#) および [「販売者が発行したライセンス」](#) を参照してください。

で AWS Data Exchange のデータ製品のサブスクライブ

AWS Data Exchange

大まかに言うと、 を通じて利用可能な AWS Data Exchange データ製品をサブスクライブする方法は次のとおりです AWS Marketplace。

1. の作成 AWS アカウント – データ製品をサブスクライブする前に、 にサインアップ AWS してユーザーを作成する必要があります。詳細については、「[設定](#)」を参照してください。
2. パブリックカタログを参照する – 製品は AWS Marketplace カタログに公開されます。製品を検索し、関連するパブリックまたはカスタムオファーと製品の詳細を確認することができます。プロバイダーが見込みサブスクライバーのアカウントにプライベートオファーを発行した場合、その製品は AWS Data Exchange コンソールの [My product offers] (製品オファー) ページから利用できます。
3. サブスクリプションのリクエストを送信する – サブスクライブのリクエストを送信する必要があります。リクエストフォームには、ID と意図したユースケースに関する追加情報が必要です。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
4. サブスクライバーが製品をサブスクライブする – 有料製品をサブスクライブすると、AWS 請求書に請求されます。権限を持つデータセットにアクセスできます。
5. 含まれているデータセットを使用 — 製品のデータセットには、データサブスクリプション契約の条件に従ってアクセスできます。アクセスできるデータセットの種類に応じて、以下のアクションのいずれかを実行できます。
 - 関連するファイルを Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) にエクスポートする、または署名付き URL を用いてローカルにエクスポートする。
 - Amazon API Gateway API Gateway API を呼び出す
 - Amazon Redshift データ共有をクエリする。
 - プロバイダーの Amazon S3 データにアクセスする。
 - プロバイダー AWS Lake Formation のデータレイクをクエリします (プレビュー)。

詳細については、「[のジョブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

6. データ製品のレコメンデーションをリクエストする – カタログで製品を見つけることができない場合は、AWS Data Exchange コンソールの「データ製品のリクエスト」ページを使用して、AWS Data Exchange データ検出チームからパーソナライズされたレコメンデーションをリクエスト

トできます。詳細については、[データ製品のレコメンデーションをリクエストする](#)を参照してください。

Note

米国外の販売者からのデータ製品をサブスクライブするときは、その販売者から税金請求書
が送信される場合もあります。詳細については、「[Tax Help - AWS Marketplace Sellers](#)」を
参照してください。

関連トピック

- [の製品サブスクリプション AWS Data Exchange](#)
- [でのサブスクライバーとしての開始方法 AWS Data Exchange](#)
- [AWS Data Exchange 製品のサブスクライブとアクセス](#)
- [のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)
- [組織での AWS Data Exchange ライセンスサブスクリプションの共有](#)
- [での Bring Your Own Subscription \(BYOS\) オファターの承諾 AWS Data Exchange](#)
- [でのプライベート製品とオファターの受け入れ AWS Data Exchange](#)
- [AWS Data Exchange ハートビート](#)
- [AWS Data Exchange APIs用 \(テスト製品\)](#)
- [でのワールドワイドイベント出席 \(テスト製品\) AWS Data Exchange](#)
- [AWS Data Exchange for AWS Lake Formation \(テスト製品\) \(プレビュー\)](#)
- [AWS Data Exchange for Amazon S3 \(テスト製品\)](#)
- [AWS Data Exchange プロバイダー生成通知 \(テスト製品\)](#)
- [のデータ AWS Data Exchange](#)

の製品サブスクリプション AWS Data Exchange

すべての AWS Data Exchange 製品はサブスクリプションベースです。製品をサブスクライブするときは、料金、期間、支払いスケジュール、データサブスクリプション契約、および返金ポリシーなどの製品のオファター規約に同意します。製品を購読するときは、サブスクライブした期間中、プロバイダーが選択した支払いスケジュールに従って料金を支払います。

⚠ Important

データサブスクリプション契約 (DSA) は、データ製品に対するプロバイダーの利用規約を規定します。でサブスクライブするデータ製品の使用は、AWS カスタマーアグリーメントまたはの使用に適用されるその他の契約にも準拠 AWS Data Exchange している必要があります AWS のサービス。

ℹ Note

AWSの [Open Data](#) プログラムの一部であるデータ製品は、誰でも無料で使用でき、サブスクリプションも必要ありません。詳細については、「[での AWS データセットでの Open Data の使用 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

各製品のパブリックオファー規約には、1つ、または複数の料金と期間の組み合わせを含めることができます。製品をサブスクライブするときは、サブスクリプションの期間を選択できます。プロバイダーが製品に対してサブスクリプションの自動更新を有効にしている場合は、それを有効にするかどうかを選択することもできます。

⚠ Important

製品に機密データまたは個人データ (モバイル ID など) のカテゴリが含まれていることをデータプロバイダーが表明している場合は、その旨が製品の詳細に表示されます。機密データのカテゴリに関する詳細については、「[の機密情報のカテゴリ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

データプロバイダーが、1996 年の医療保険の相互運用性と説明責任に関する法律 (HIPAA) の対象となる保護医療情報 (PHI) を製品に含めていることを示した場合、HIPAA アカウント (にある AWS 事業提携契約で定義) として AWS アカウント 指定されている AWS アカウント 場合を除き、製品のデータセットを にエクスポートすることはできません [AWS Artifact](#)。

サブスクリプションが処理されてアクティブになると、AWS Marketplace 料金の一部として支払いスケジュールに従って AWS 請求書に表示されます。詳細については、「[AWS Marketplace 製品への支払い](#)」を参照してください。

サブスクリプションの期間中は、すべての製品のデータセットを表示し、アクセスすることができます。また、ジョブでデータセットのアセットをエクスポートすることもできます。詳細について

は、「[「のジョブ AWS Data Exchange」](#)」を参照してください。サブスクリプションの有効期限が切れると、データセットを表示したりエクスポートしたりすることができなくなります。

Note

サブスクリプションを使用して何にアクセスできるかに関する詳細を含めたデータセットとリビジョンに関する情報については、「[「データセットとリビジョン」](#)」を参照してください。

プロバイダーが製品の非公開化を決定した場合でも、サブスクリプションがアクティブである限り、データセットには引き続きアクセスできます。ただし、有効期限が切れたときにサブスクリプションを自動更新することはできません。

アクティブな製品サブスクリプションと自動更新ステータスはすべて、AWS Data Exchange コンソールのサブスクリプションページで確認できます。詳細については、「[「AWS Data Exchange サブスクリプションの管理」](#)」を参照してください。

Important

自動更新を有効にしており、更新時に製品のオファー規約が変更されている場合は、製品の新しいオファー規約 (新しい料金と新しい DSA を含む) が適用されます。これは、オファー規約が変更されている可能性にかかわらず、データに対するアクセス権を保持できることを確実にします。

有効なサブスクリプションに基づいて、特定の の権限のあるデータセットをすべて検索してアクセスするには AWS リージョン、権限のあるデータセットページにアクセスしてください。

データ製品を購読すると、お客様の連絡先情報をプロバイダーと共有する場合があります。詳細については、AWS Marketplace 購入者ガイドの「[「AWS Marketplaceでのセキュリティ」](#)」を参照してください。

前払いのコミットメント AWS Data Exchange がある でデータ製品を購入すると、Amazon Web Services (AWS) からすぐに請求書が届きます。各データ製品の料金は、請求書の詳細セクションに製品名別に記載されています。Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) または Amazon Athena などの AWS のインフラストラクチャおよび分析サービスの使用については、個別の請求書を受け取ります。詳細については AWS Billing and Cost Management、「[「AWS Marketplace 購入者ガイド」](#)」の「[「製品の支払い」](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange Files データセットのサブスクリプションが終了すると、既にエクスポートしたファイルへのアクセスが保持されます。データサブスクリプション契約を確認して、サブスクリプションの終了時にエクスポートされたデータを削除することが契約で義務付けられているかどうかを確認してください。

データセットとリビジョン

のすべての製品は AWS Data Exchange 1 つ以上のデータセットで構成され、それぞれに 1 つ以上のリビジョンがあります。のデータセット AWS Data Exchange は通常、異なるデータであり、リビジョンは同じデータの新しいバージョンまたは変更されたバージョンです。データセットとリビジョンに関する詳細については、「[のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

各リビジョンには、データセットのすべてのデータ (リビジョン用に更新されたもの) が含まれる場合と、前回のリビジョン以降の新しいデータのみが含まれる場合があります。各リビジョンにまったく異なるデータが含まれる可能性もあります。各リビジョンで提供するデータは、データプロバイダーが決定します。

製品をサブスクライブすると、その製品内のすべてのデータセットにアクセスできます。データプロバイダーがオファーを作成するときは、履歴リビジョン (0 個 ~ 全リビジョン) に対するアクセス権を提供します。プロバイダーは、サブスクリプション期間中に利用可能になる将来のリビジョンに対するアクセス権も提供できます。サブスクリプションの条件は、AWS Data Exchange コンソールの製品詳細ページに表示されます。

ファイルが含まれる製品をサブスクライブすると、各リビジョンまたはアセットを手動で個別にエクスポートすることができます。または、プロバイダーが新しいリビジョンを発行するときに、それらを Amazon S3 バケット (最大 5 バケット) に自動的にエクスポートすることも選択できます。詳細については、「[ファイルベースのデータを含む AWS Data Exchange 製品のサブスクライブとアクセス](#)」を参照してください。リビジョンのエクスポート方法に関する詳細については、「[からのリビジョンのエクスポート AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

Amazon API Gateway API が含まれる製品をサブスクライブすると、データプロバイダーの API を表示して呼び出すことができます。詳細については、「[APIs を含む AWS Data Exchange 製品のサブスクライブとアクセス](#)」を参照してください。

Amazon Redshift データセットが含まれる製品をサブスクライブすると、Amazon Redshift 内のデータをクエリするためのアクセス権を取得します。詳細については、「[Amazon Redshift データセットを含む製品のサブスクライブとアクセス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

Amazon S3 データアクセスデータセットを購読すると、プロバイダの Amazon S3 オブジェクトを表示して直接使用することができます。詳細については、「[the section called “Amazon S3 データアクセスの抑制”](#)」を参照してください。

データ AWS Lake Formation アクセス許可データセット (プレビュー) を含む製品をサブスクライブした後、でデータを管理し AWS Lake Formation、Amazon Athena などのダウンストリームサービスでクエリを実行できます。

データディクショナリ、サンプル

一部の製品には、データディクショナリとサンプルを含むデータセットがあります。製品を購読するかどうかを判断しやすくするため、購読する前にデータディクショナリとサンプルを表示してダウンロードできます。

データディクショナリはデータセットの内容を視覚的に表現したものです。含まれている列とその意味に関する詳細が含まれています。

サンプルは、製品を購読した後に受け取るデータを反映したデータです。サンプルは Amazon S3 でサポートされるどのファイル型でもかまいません。

データディクショナリとサンプルを含む製品を見つける方法の詳細については、「[カタログを参照](#)」を参照してください。

データディクショナリとサンプルを使用して製品を評価する方法の詳細については、「[データディクショナリとサンプルを含む製品の評価](#)」を参照してください。

でのサブスクライバーとしての開始方法 AWS Data Exchange

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソール AWS Data Exchange を使用してでデータ製品サブスクライバーになるための完全なプロセスについて説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: をセットアップする AWS Data Exchange](#)
- [ステップ 2: カタログを参照する](#)
- [ステップ 3 : \(オプション \) データ製品に関するレコメンデーションをリクエストする](#)
- [ステップ 4: \(オプション\) データディクショナリとサンプルを含む製品を評価する](#)

• [ステップ 2: 製品をサブスクライブおよびアクセスする](#)

ステップ 1: をセットアップする AWS Data Exchange

を使用する前に AWS Data Exchange、 にサインアップ AWS してユーザーを作成する必要があります。詳細については、「[セットアップ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

をセットアップするには AWS Data Exchange

1. AWS アカウントにサインアップします。詳細については、「[にサインアップする AWS アカウント](#)」を参照してください。
2. ユーザーを作成します。詳細については、「[ユーザーの作成](#)」を参照してください。

ステップ 2: カタログを参照する

製品を検索し、AWS Marketplace と の両方で関連するパブリックオファーまたはカスタムオファーと製品の詳細を確認できます AWS Data Exchange。

プロバイダーがアカウントにプライベートオファーを発行した場合、その製品は AWS Data Exchange コンソールのマイ製品オファーページから入手できます。詳細については、「[で AWS Data Exchange のデータ製品のサブスクライブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

カタログを参照するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [カタログを参照] を選択します。
3. 検索バーに用語または語句を入力し、[検索] を選択します。
4. (オプション) [カタログを参照] で、単語またはフレーズを入力してから [検索] を選択して、クエリに一致する結果を表示します。
5. (オプション) [結果を絞り込む] で、特定のカテゴリから 1 つを選択して、特定のデータ製品を参照します。
6. (オプション) 結果の絞り込みで、データセットタイプフィルターを使用し、次のオプションから選択して製品を検索します。
 - ファイル (Amazon S3 オブジェクト) — ファイルベースのデータを含む製品
 - Amazon Redshift — Amazon Redshift データ共有を含む製品

- API — API を含む製品
 - Amazon S3 へのアクセス — Amazon S3 データアクセスを含む製品
 - AWS Lake Formation – AWS Lake Formation データアクセス許可を含む製品 (プレビュー)
7. 返された結果のリストから製品を選択し、その製品詳細ページを確認します。

ステップ 3 : (オプション) データ製品に関するレコメンデーションをリクエストする

カタログで製品を見つけられない場合は、[AWS Data Exchange データ検出チーム](#)にパーソナライズされたレコメンデーションをリクエストできます。

データ製品レコメンデーションをリクエストする

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [データ製品をリクエスト] を選択します。
3. 「データのリクエスト」製品ページの「詳細」に、データの説明を入力します。
4. (オプション) [その他の詳細 (任意)] を展開し、指示に従ってフィールドに入力します。
 - a. 1 つ以上の製品カテゴリを選択します。
 - b. サンプルデータ製品 URL を入力します。
 - c. データセットタイプについては、ファイル (Amazon S3 オブジェクト)、AmazonAPI ゲートウェイ API、Amazon Redshift データ共有、AWS Lake Formation データ権限(プレビュー)、または Amazon S3 データアクセスから選択します。
 - d. 配信間隔、サンプルデータ製品 URL、サブスクリプション開始日、サブスクリプション期間、サブスクリプション予算など、必要な製品に関する具体的な詳細情報を入力します。
 - e. 選択したデータセットタイプが Amazon API Gateway API の場合は、[サブスクリプション予算] で [従量制コストを含む] を選択します。
5. データプロバイダーの場合は、既存のプロバイダーのリストから選択するか、その他のプロバイダーの名前を入力します。次に、プロバイダーと既存の関係があるかどうかを示してください。
6. [送信] を選択します。

2 営業日以内に AWS Data Exchange Data Discovery Team からレスポンスを受け取る必要があります。

ステップ 4: (オプション) データディクショナリとサンプルを含む製品を評価する

プロバイダーは、データディクショナリとデータセットのサンプルを製品に組み込む場合があります。製品のデータセットがニーズに合っているかどうかを判断しやすくするため、登録する前にデータディクショナリとサンプルを表示してダウンロードできます。詳細については、「[データディクショナリ、サンプル](#)」を参照してください。

次のアクションを実行して、製品のデータセットの評価に役立てることができます。

- [データディクショナリを表示する](#)
- [データディクショナリをダウンロードする](#)
- [すべてのデータディクショナリを表示とダウンロード](#) (複数のデータセットを含む製品用)
- [サンプルをプレビューする](#)
- [サンプルをダウンロード](#)

データディクショナリを表示する

プロバイダーは、表示可能なデータセットごとに 1 つのデータディクショナリを追加できます。

データディクショナリを表示するには

1. 商品詳細ページで、「データディクショナリとサンプル」タブを選択します。
2. 次のいずれかの方法でデータディクショナリを参照します。
 - 製品概要セクションまでスクロールすると、「データディクショナリを表示」にデータディクショナリが表示されます。
 - 「データディクショナリとサンプル」タブを選択し、データセットの行を展開し、データディクショナリの横にあるオプションボタンを選択して、「すべてのデータディクショナリを表示」を選択します。
3. (オプション) 検索バーにキーワードまたは語句を入力して、すべてのデータセットとすべてのテーブルを検索します。
4. (オプション) 必要に応じて検索とフィルターを変更します。

データディクショナリをダウンロードする。

プロバイダーは、ダウンロードできるデータセットごとに1つのデータディクショナリを追加できます。

データディクショナリをダウンロードするには

1. 商品詳細ページで、「データディクショナリとサンプル」タブを選択します。
2. 展開アイコン (データセット名の左にあるプラスアイコン) を選択して、データセットの行を拡張します。
3. データディクショナリ名の隣にあるオプションボタンを選択します。
4. [ダウンロード] を選択します。

データディクショナリファイルがコンピュータにダウンロードされます。

すべてのデータディクショナリを表示とダウンロード

製品に複数のデータセットがある場合、プロバイダーは各データセットにデータディクショナリを追加することがあります。すべてのデータセットを評価するには、すべてのデータディクショナリを表示してダウンロードすることをお勧めします。

すべてのデータディクショナリを表示してダウンロードするには

1. 商品詳細ページで、「データディクショナリとサンプル」タブを選択します。
2. [すべてのデータディクショナリを表示] を選択します。
3. 「データディクショナリを表示」ダイアログボックスで、「ダウンロード (CSV)」を選択して.csv ファイルをダウンロードします。

.csv ファイルがコンピュータにダウンロードされます。

4. [閉じる] を選択してダイアログボックスを閉じます。

サンプルをプレビューする

サンプルをプレビューするには

1. 商品詳細ページで、「データディクショナリとサンプル」タブを選択します。
2. 展開アイコン (データセット名の左にあるプラスアイコン) を選択してデータセットを拡張します。

3. サンプル名の横にあるオプションボタンを選択します。
4. [サンプルをプレビュー (CSV のみ)] を選択してサンプルをプレビューします。
 - a. (オプション) プレビューダイアログボックスで、「ダウンロード」を選択して.csv ファイルをダウンロードします。

.csv ファイルがコンピュータにダウンロードされます。
 - b. [閉じる] を選択してダイアログボックスを閉じます。

サンプルをダウンロードする。

サンプルをダウンロードするには

1. 商品詳細ページで、「データディクショナリとサンプル」タブを選択します。
2. 展開アイコン (データセット名の左にあるプラスアイコン) を選択してデータセットを拡張します。
3. サンプル名の横にあるオプションボタンを選択します。
4. [ダウンロード] を選択します。

サンプルがコンピュータにダウンロードされます。

ステップ 2: 製品をサブスクライブおよびアクセスする

AWS Data Exchange カタログで製品を見つけ、ニーズを満たしていることを確認したら、製品をサブスクライブして製品にアクセスできます。

有料製品をサブスクライブすると、AWS 請求額が請求されます。権限を持つデータセットにアクセスできます。詳細については、「[で AWS Data Exchange のデータ製品のサブスクライブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

さまざまなタイプのデータセットを含む製品をサブスクライブする方法の詳細については、以下を参照してください。

- [ファイルベースのデータを含む AWS Data Exchange 製品のサブスクライブとアクセス](#)
- [APIs を含む AWS Data Exchange 製品のサブスクライブとアクセス](#)
- [Amazon Redshift データセットを含む製品のサブスクライブとアクセス AWS Data Exchange](#)
- [Amazon S3 データアクセスを含む AWS Data Exchange 製品のサブスクライブとアクセス](#)

- [AWS Lake Formation データセットを含む製品のサブスクライブとアクセス AWS Data Exchange \(プレビュー\)](#)

AWS Data Exchange 製品のサブスクライブとアクセス

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して AWS Data Exchange 製品をサブスクライブしてアクセスするプロセスについて説明します。

トピック

- [ファイルベースのデータを含む AWS Data Exchange 製品のサブスクライブとアクセス](#)
- [APIs を含む AWS Data Exchange 製品のサブスクライブとアクセス](#)
- [Amazon Redshift データセットを含む製品のサブスクライブとアクセス AWS Data Exchange](#)
- [Amazon S3 データアクセスを含む AWS Data Exchange 製品のサブスクライブとアクセス](#)
- [AWS Lake Formation データセットを含む製品のサブスクライブとアクセス AWS Data Exchange \(プレビュー\)](#)
- [でのデータディクショナリの表示とダウンロード AWS Data Exchange](#)

Note

製品をサブスクライブすることにより、製品の使用には、価格情報やデータサブスクリプション契約 (DSA) などのプロバイダーのオファー結果の絞り込みファー条件が適用されることに同意したものとみなされます。

また、プライバシー [AWS 通知](#) に従って、が取引に関する情報 (支払い条件と製品使用状況メトリクスを含む) を、必要に応じてそれぞれの販売者、リセラー、または基盤となるプロバイダーと共有 AWS できることに同意し、承認します。AWS は、を通じて、ユーザーに代わって請求書を発行し、支払いを収集します AWS アカウント。お客様による の使用 AWS のサービスには、お客様による のサービスの使用 AWS を管理する AWS カスタマーアグリメントまたはその他の契約が適用されます。

ファイルベースのデータを含む AWS Data Exchange 製品のサブスクライブとアクセス

以下のトピックでは、ファイルとして保存されているファイルベースのデータを含む製品をサブスクライブしてアクセスする完全なプロセスについて説明します AWS Data Exchange。このプロセスを完了するには、AWS Data Exchange コンソールを使用してください。

サブスクライブする前に製品を評価する方法については、「[データディクショナリとサンプルを含む製品を評価する](#)」を参照してください。

このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [フステップ 1: ファイルベースのデータが含まれる製品のサブスクライブ](#)
- [ステップ 2: ファイルベースのデータが含まれる製品にアクセスする](#)

ファイルベースのデータが含まれる製品のサブスクライブやアクセスについては、「[AWS Data Exchange ハートビート](#)」を参照してください。

フステップ 1: ファイルベースのデータが含まれる製品のサブスクライブ

有料製品をサブスクライブすると、AWS 請求額が請求されます。すべての権限を持つデータセットにアクセスできます。詳細については、「[で AWS Data Exchange のデータ製品のサブスクライブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

ファイルベースのデータが含まれる製品をサブスクライブするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品を検出] で [カタログを参照する] を選択します。
3. 「結果の絞り込み」で、データセットタイプフィルターを使用し、ファイル (Amazon S3 オブジェクト) を選択して、ファイルベースのデータを含む製品を検索します。Amazon S3

詳細については、「[カタログを参照する](#)」を参照してください。

4. ファイル (Amazon S3 オブジェクト) を含むデータ製品を選択し、その製品の詳細ページを表示します。

製品詳細ページの情報には、製品の説明、プロバイダーの連絡先情報、および製品のパブリックオファーの詳細が含まれます。パブリックオファー情報には、料金と期間、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーが含まれます。製品に含まれるデータセットの名前と、それらが利用可能な AWS リージョン を表示できます。「類似製品」で製品を選択すると、引き続き他の製品詳細ページを閲覧できます。

プロバイダーがユーザーのアカウントにカスタムオファー ([プライベートオファー](#)、または [Bring Your Own Subscription \(BYOS\) オファー](#)など) を発行した場合は、それらの詳細も表示されます。

5. 右上隅にある [サブスクリプションを続行する] を選択します。
6. 希望の価格と期間の組み合わせを選択し、サブスクリプションの自動更新を有効にするかどうかを選択し、DSA を含むオファーの詳細を確認します。

Note

一部の製品では、サブスクリプションの検証が必要です。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

7. 料金情報を確認し、料金オファーを選択してから、[サブスクライブ] を選択します。

Note

有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

8. [サブスクリプションに含まれるデータセット] に、リストされているデータセットが表示されず。

サブスクリプションの処理が終了したら、データセットを選択して権限のあるデータにアクセスするか、[サブスクリプションを表示] を選択してサブスクリプションを表示できます。

9. (オプション) [エクスポートを設定] (オプション) では、エクスポートするリビジョンを含むデータセットのチェックボックスを選択します。データセットを選択すると、最近発行されたリビジョンがエクスポート用に準備されます。
 - a. Simple destination オプションを選択して Amazon S3 バケットの場所を選択するか、Advanced を選択して Amazon S3 キーの命名パターンを設定します。この選択で、リビジョンがエクスポートされる場所が決まります。キーパターンの使用に関する詳細に

については、「[からアセットリビジョンをエクスポートする際の主要なパターン AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

- b. [今後のリビジョンを自動エクスポート] では、リビジョンの自動エクスポートをオンにするかオフにするかを選択します。
- オン — 今後のすべてのリビジョンがエクスポートされます。
 - オフ — 最新リビジョンが 1 回だけエクスポートされます。
- c. [暗号化オプション] を選択して、[Amazon S3 の料金] を確認します。

Note

AWS Key Management Service (AWS KMS) 暗号化を使用してエクスポートする場合は、選択した で許可を作成および取り消すための正しい AWS Identity and Access Management (IAM) アクセス許可がアカウントに付与されていることを確認します AWS KMS key。これらの許可がない場合、自動エクスポートは失敗します。

- d. [エクスポート] を選択してデータを Amazon S3 にエクスポートします。後ほどエクスポートまたはダウンロードする場合は [スキップ] を選択します。サブスクライブ後にデータをエクスポートする方法の詳細については、「[\(オプション\) データのエクスポート](#)」を参照してください。

Note

[サブスクライブ] を選択してからサブスクリプションがアクティブになるまでは、数分かかる場合があります。サブスクリプションがアクティブになる前に [エクスポート] を選択すると、完了するまで待つように求められます。サブスクリプションがアクティブになると、エクスポートが開始されます。サブスクリプションがアクティブになる前にこのページから移動しても、サブスクリプションの処理は停止されませんが、データのエクスポートが行われなくなります。

ステップ 2: ファイルベースのデータが含まれる製品にアクセスする

製品を正常にサブスクライブすると、データ サブスクリプション契約 (DSA) の条件に従って製品データセットにアクセスできるようになります。

次のトピックでは、ファイルベースのデータが含まれる製品にアクセスする方法について説明します。

データセット、リビジョン、アセットの表示

データセット、リビジョン、アセットを表示するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーション ウィンドウで、[サブスクリプション] を選択し、製品を選択します。
3. [権限を持つデータセット] に、製品の一部であるデータセットが表示されます。
4. データセットを選択します。
5. データセットの概要、自動エクスポートジョブの宛先 (Amazon S3 製品のみ)、リビジョン、およびデータセットの説明を表示します。

詳細については、「[のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

6. リビジョンを選んでください。

リビジョンは、最新のものから古いものの順に一覧表示されます。

7. リビジョンの概要、アセット、実行されたジョブが表示されます。

ファイルベースのアセットのエクスポートに関する詳細については、「[サブスクリバードとして S3 バケットに AWS Data Exchange アセットをエクスポートする \(コンソール\)](#)」を参照してください。

(オプション) データのエクスポート

サブスクリプションがアクティブになった後は、エクスポートしたアセットを受け取るように Amazon S3 バケットを設定できます。

関連するアセットを Amazon S3 にエクスポートする、または署名付き URL を用いたジョブを使用できます。

新しいリビジョンを取得するなど、後でデータをエクスポートまたはダウンロードする場合は、「[サブスクリバードとして S3 バケットに AWS Data Exchange アセットをエクスポートする \(コンソール\)](#)」を参照してください。

⚠ Important

データを Amazon S3 にエクスポートするときは、Amazon S3 のセキュリティ機能を検討することをお勧めします。一般的なガイドラインとベストプラクティスの詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[Amazon S3 のセキュリティのベストプラクティス](#)」を参照してください。

データのエクスポート方法に関する詳細については、「[からのアセットのエクスポート AWS Data Exchange](#)」と「[からのリビジョンのエクスポート AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

APIs を含む AWS Data Exchange 製品のサブスクライブとアクセス

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソール AWS Data Exchange を使用して APIs を含む製品をサブスクライブおよびアクセスする完全なプロセスについて説明します。

サブスクライブする前に製品を評価する方法については、「[データディクショナリとサンプルを含む製品を評価する](#)」を参照してください。

このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: API が含まれる製品をサブスクライブする](#)
- [ステップ 2: API プロダクトにアクセスする](#)

API を含む製品のサブスクリプションとアクセスについては、「[AWS Data Exchange APIs用 \(テスト製品\)](#)」を参照してください。

ステップ 1: API が含まれる製品をサブスクライブする

有料製品をサブスクライブすると、AWS 請求額が請求されます。すべての権限を持つデータセットにアクセスできます。詳細については、「[で AWS Data Exchange のデータ製品のサブスクライブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

プロバイダーは、API を含む製品に従量課金を適用する場合があります。プロバイダーが従量課金を引き下げると、その値下げは直ちに有効になります。プロバイダーが従量課金を引き上げる際にお客様が既存のサブスクライバーである場合は、値上げが提出されてから 90 日後、または更新時 (どちらか早い方) に値上げが有効になります。価格変更が送信されると、既存のサブスクライバーにメールメッセージが送信されます。

Example

例えば、プロバイダーが 5 月 10 日に従量課金の値上げを提出したとします。既存のサブスクライバーには、価格変更に関する電子メールメッセージが届きます。値上げは 9 月 1 日に発効します。

API が含まれる製品をサブスクライブするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品を検出] で [カタログを参照する] を選択します。

詳細については、「[カタログを参照](#)」を参照してください。

3. 「結果の絞り込み」で、データセットタイプフィルターを使用して API を選択し、API を含む製品を検索します。 APIs

詳細については、「[カタログを参照する](#)」を参照してください。

4. API が含まれる製品を選択して、その製品詳細ページを表示します。

製品詳細ページの情報には、製品の説明、プロバイダーの連絡先情報、および製品のパブリックオファーの詳細が含まれます。パブリックオファー情報には、料金と期間、データサブスクリプション契約、および返金ポリシーが含まれます。製品に含まれるデータセットの名前と、それらが利用可能な AWS リージョンを表示できます。「類似製品」で製品を選択すると、引き続き他の製品詳細ページを閲覧できます。

プロバイダーがユーザーのアカウントにカスタムオファー ([プライベートオファー](#)、または [Bring Your Own Subscription \(BYOS\) オファーなど](#)) を発行した場合は、それらの詳細も表示されます。

- a. [パブリックオファー] には API の従量課金 (該当する場合) が表示されます。
 - b. (オプション) [従量課金計算ツール] で [従量課金の選択] を選択してユニット数を入力すると、費用の例が表示されます。
5. 右上隅にある [サブスクリプションを続行する] を選択します。
 6. 希望の価格と期間の組み合わせを選択し、サブスクリプションの自動更新を有効にするかどうかを選択し、DSA を含むオファーの詳細を確認します。

Note

一部の製品では、サブスクリプションの検証が必要です。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

7. 料金情報を確認し、料金オファーを選択してから、[サブスクライブ] を選択します。

Note

有料製品をサブスクライブすると、サブスクライブの決定を確認するプロンプトが表示されます。

8. [サブスクリプションに含まれるデータセット] に、リストされているデータセットが表示されません。

サブスクリプションの処理が終了したら、データセットを選択して権限のあるデータにアクセスするか、[サブスクリプションを表示] を選択してサブスクリプションを表示できます。

ステップ 2: API プロダクトにアクセスする

以下のトピックで、API データセットが含まれる製品のアクセス方法を詳しく説明します。

トピック

- [API の表示](#)
- [API 仕様のダウンロード](#)
- [API コールの実行 \(コンソール\)](#)
- [API コールを実行する \(AWS CLI\)](#)

API の表示

API を表示する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. データセットを選択します。

4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. [API アセット] で、API を選択します。
6. アセットの概要を表示します。
7. [統合に関する注意事項] にあるガイドラインに従って API を呼び出します。

API 仕様のダウンロード

API 仕様をダウンロードする

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. [API アセット] で、API を選択します。
6. [OpenAPI 3.0 仕様] で、[API 仕様をダウンロード] を選択します。

お使いのローカルコンピュータに仕様がダウンロードされます。その後、SDK 生成のためにアセットをサードパーティーツールにエクスポートできます。

API コールの実行 (コンソール)

AWS Data Exchange コンソールで 1 つのエンドポイントを呼び出すことができます。

コンソールから API コールを実行する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. [API アセット] で、API を選択します。
6. [統合に関する注意事項] で以下を実行します。
 - a. [コピー] を選択して [ベース URL] を使用します。

- b. [コピー] を選択して [コード構造] を使用します。
- c. 仕様ドキュメントに記載されている情報に従って API を呼び出します。

API コールを実行する (AWS CLI)

API コールを実行する (AWS CLI)

- send-api-asset コマンドを使用して API を呼び出します。

```
$ AWS dataexchange send-api-asset \  
  --asset-id $ASSET_ID \  
  --data-set-id $DATA_SET_ID \  
  --revision-id $REVISION_ID \  
  --body "... " \  
{  
  "headers": {  
    ...  
  },  
  "body": "... "  
}
```

Amazon Redshift データセットを含む製品のサブスクリプションとアクセス AWS Data Exchange

受取人向けの概要

Amazon Redshift データセットは、Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有を含むデータセットです。データ共有は、プロバイダーがデータ共有に追加するテーブル、ビュー、スキーマ、およびユーザー定義の関数に対する読み取り専用アクセス権を付与します。

データサブスクリイバーは、Amazon Redshift データセットが含まれる製品を検索してサブスクリプションできます。サブスクリプションが開始されると、データを抽出、変換、およびロードすることなく Amazon Redshift 内のデータをクエリするための読み取り専用アクセス権を取得します。サブスクリプションの有効期限が切れると、製品のデータ共有へのアクセス権を失います。

以下の点を考慮してください。

- サブスクリプションを開始してからデータ共有にアクセスできるようになるまで数分かかる場合があります。

以下のセクションでは、AWS Data Exchange コンソール AWS Data Exchange を使用して Amazon Redshift データ共有製品のサブスクライバーになるための完全なプロセスについて説明します。

サブスクライブする前に製品を評価する方法については、「[データディクショナリとサンプルを含む製品を評価する](#)」を参照してください。

このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: Amazon Redshift データセットが含まれる製品をサブスクライブする](#)
- [ステップ 2: Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有にアクセスする](#)

Amazon Redshift データセットを含む製品のサブスクライブとアクセスについては、「[でのワールドワイドイベント出席 \(テスト製品\) AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

ステップ 1: Amazon Redshift データセットが含まれる製品をサブスクライブする

有料製品をサブスクライブすると、AWS 請求額が請求されます。製品に含まれるすべてのデータセットにアクセスできます。詳細については、「[で AWS Data Exchange のデータ製品のサブスクライブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

Amazon Redshift データセットが含まれる製品をサブスクライブする

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品を検出] で [カタログを参照する] を選択します。

詳細については、「[カタログを参照](#)」を参照してください。

3. 「結果の絞り込み」で、データセットタイプフィルターを使用し、Amazon Redshift を選択して、Amazon Redshift データ共有を含む製品を検索します。

詳細については、「[カタログを参照する](#)」を参照してください。

4. 製品を選択し、その製品詳細ページを表示します。

製品詳細ページの情報には、製品の説明、プロバイダーの連絡先情報、および製品のパブリックオファーの詳細が含まれます。パブリックオファー情報には、料金と期間、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーが含まれます。製品に含まれるデータセットの名

前と、それらが利用可能な AWS リージョン を表示できます。「類似製品」で製品を選択すると、引き続き他の製品詳細ページを閲覧できます。

プロバイダーがユーザーのアカウントにカスタムオファー ([プライベートオファー](#)、または [Bring Your Own Subscription \(BYOS\) オffer](#)など) を発行した場合は、それらの詳細も表示されます。

⚠ Important

クラスターのメンテナンスウィンドウの日付、時刻、および継続時間を確認するようにしてください。メンテナンスウィンドウ中は、データ共有にアクセスできません。

5. 右上隅にある [サブスクリプションを続行する] を選択します。
6. [製品オファー]、[サブスクリプション条件]、オファーに含まれる [データセット]、および [サポート情報] を確認します。
7. サブスクリプションについて [オファーの自動更新] を有効にするかどうかを選択します。

i Note

一部の製品では、サブスクリプションの検証が必要です。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

8. [サブスクライブ] を選択します。

i Note

有料製品をサブスクライブすると、サブスクライブの決定を確認するプロンプトが表示されます。

9. [サブスクリプションに含まれるデータセット] に、リストされているデータセットが表示されます。

サブスクリプションの処理が終了したら、データセットを選択して権限のあるデータにアクセスするか、[サブスクリプションを表示] を選択してサブスクリプションを表示できます。

ステップ 2: Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有にアクセスする

製品のデータセットには、データサブスクリプション契約 (DSA) の条件に従った方法でアクセスできます。サブスクライバーとして、Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有を含む製品のサブスクリプションを使用すると、データ共有内のテーブル、ビュー、スキーマ、および関数への読み取り専用アクセスが可能になります。

サブスクリプションを使用すると、以下が可能になります。

- データを抽出、変換、またはロードすることなくクエリする。
- プロバイダーが更新すると同時に最新のプロバイダーデータにアクセスする。

詳細については、[「Amazon Redshift データベースデベロッパーガイド」の AWS Data Exchange 「データ共有の使用」](#)を参照してください。

Note

サブスクリプションの有効期限が切れると、製品のデータ共有へのアクセス権を失います。

Amazon Redshift データセットをサブスクライブする方法の詳細については、[「でのワールドワイド イベント出席 \(テスト製品\) AWS Data Exchange」](#)を参照してください。

Amazon S3 データアクセスを含む AWS Data Exchange 製品のサブスクライブとアクセス

AWS Data Exchange for Amazon S3 を使用すると、データサブスクライバーはデータプロバイダーの Amazon S3 バケットから直接サードパーティーのデータファイルにアクセスできます。

データサブスクライバーは、Amazon S3 データセット AWS Data Exchange の資格を取得したら、Amazon Athena、SageMaker AI Feature Store、Amazon EMR AWS のサービスなどでデータ分析を開始できます。Amazon S3

以下の点を考慮してください。

- プロバイダーは、提供されたデータをホストする Amazon S3 バケットで Amazon S3 の機能であるリクエスト支払いを有効にすることができます。有効にすると、サブスクライバーは Amazon S3 バケットに対するデータの読み取り、使用、転送、エクスポート、またはコピーに対して料金

を支払います。詳細については、「Amazon S3 ユーザーガイド」の「[ストレージ転送と使用量のリクエスト支払いバケットの使用](#)」を参照してください。

- AWS Data Exchange for Amazon S3 データ製品をサブスクライブすると、は Amazon S3 アクセスポイント AWS Data Exchange を自動的にプロビジョニングし、そのリソースポリシーを更新して読み取り専用アクセスを許可します。Amazon S3 Access Points は、Amazon S3 バケットへのデータ共有を簡素化する Amazon S3 の機能です。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[Amazon S3 アクセスポイントを使用したデータアクセスの管理](#)」を参照してください。
- Amazon S3 Access Points の Amazon リソースネーム (ARN) またはエイリアスを使用して共有データにアクセスするには、事前に IAM 権限を更新する必要があります。現在のロールとその関連ポリシーで、プロバイダーの Amazon S3 バケットと AWS Data Exchange が提供する Amazon S3 Access Points への GetObject および ListBucket 呼び出しが許可されていることを確認できます。

以下のセクションでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して Amazon S3 サブスクライバー AWS Data Exchange の になる完全なプロセスについて説明します。

このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: Amazon S3 データアクセスを含む製品のサブスクライブ](#)
- [ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを含む製品にアクセスする](#)

ステップ 1: Amazon S3 データアクセスを含む製品のサブスクライブ

有料製品をサブスクライブすると、AWS 請求額が請求されます。製品に含まれるすべてのデータセットにアクセスできます。詳細については、「[で AWS Data Exchange のデータ製品のサブスクライブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

Amazon S3 へのアクセスが含まれる製品をサブスクライブする

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品を検出] で [カタログを参照する] を選択します。

詳細については、「[カタログを参照](#)」を参照してください。

- 「結果の絞り込み」で、データセットタイプフィルターを使用し、Amazon S3 へのアクセス」を選択して、Amazon S3 データへのアクセスを含む製品を検索します。

詳細については、「[カタログを参照する](#)」を参照してください。

- 製品を選択し、その製品詳細ページを表示します。

製品詳細ページの情報には、製品の説明、プロバイダーの連絡先情報、および製品のパブリックオファーの詳細が含まれます。パブリックオファー情報には、料金と期間、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーが含まれます。製品に含まれるデータセットの名前と、それらが利用可能な AWS リージョン を表示できます。「類似製品」で製品を選択すると、引き続き他の製品詳細ページを閲覧できます。

プロバイダーがユーザーのアカウントにカスタムオファー ([プライベートオファー](#)、または [Bring Your Own Subscription \(BYOS\) オファー](#)など) を発行した場合は、それらの詳細も表示されます。

- 右上隅にある [サブスクリプションを続行する] を選択します。
- [製品オファー]、[サブスクリプション条件]、オファーに含まれる [データセット]、および [サポート情報] を確認します。
- サブスクリプションについて [オファーの自動更新] を有効にするかどうかを選択します。

Note

一部の製品では、サブスクリプションの検証が必要です。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

- [サブスクライブ] を選択します。

Note

有料製品をサブスクライブすると、サブスクライブの決定を確認するプロンプトが表示されます。

- [サブスクリプションに含まれるデータセット] に、リストされているデータセットが表示されず。

サブスクリプションの処理が終了したら、データセットを選択して権限のあるデータにアクセスするか、[サブスクリプション]を表示 を選択してサブスクリプションを表示できます。

ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを含む製品にアクセスする

独自の Amazon S3 バケットを設定したり、データファイルを Amazon S3 バケットにコピーしたり、関連するストレージ料金を支払ったりすることなく、クエリを実行してデータをインプレースで分析できます。データプロバイダーが管理しているのと同じ Amazon S3 オブジェクトにアクセスして、利用可能な最新のデータを使用できます。

サブスクリプションを使用すると、以下が可能になります。

- Amazon S3 バケットを個別に設定したり、ファイルをコピーしたり、ストレージ料金を支払ったりすることなく、データを分析できます。
- プロバイダーが更新すると同時に最新のプロバイダーデータにアクセスする。

データセット、リビジョン、アセットを表示するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. 「権利付与データ」ページで、製品を展開してデータセットを選択します。
4. データセットの概要を表示します。

Note

提供されたデータは、プロバイダーの Amazon S3 バケットに保存されます。このデータにアクセスする場合、プロバイダーが別途指定しない限り、リクエストの費用とプロバイダーの Amazon S3 バケットからダウンロードされたデータの費用を負担する必要があります。

5. 開始する前に、権限が付与された Amazon S3 データアクセスを使用するには、ロールに IAM アクセス権限が必要です。[データセットの概要] ページの [Amazon S3 データアクセス] タブで、[IAM 権限の検証] を選択して、ロールにデータにアクセスするための正しい権限があるかどうかを確認します。
6. 必要な IAM 権限がある場合は、表示される IAM ポリシープロンプトで [次へ] を選択します。必要な権限がない場合は、プロンプトに従って JSON ポリシーをユーザーまたはロールに埋め込みます。
7. 共有クエリを確認して、Amazon S3 バケット、またはプロバイダーが共有するプレフィックスとオブジェクトを確認してください。Amazon S3 アクセスポイント情報のデータア

- アクセス情報を確認して、プロバイダーがリクエスト支払いを有効にしているかどうかを判断します。
8. [共有 Amazon S3 ロケーションを参照] を選択すると、プロバイダーの Amazon S3 バケット、プレフィックス、共有オブジェクトを表示および確認できます。
 9. Amazon S3 バケット名を使用する場所ならどこでも アクセスポイント エイリアスを使用して、資格のあるデータにプログラムでアクセスできます。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[互換性のある Amazon S3 オペレーションでのアクセスポイントの使用](#)」を参照してください。
 10. (オプション) プロバイダーの で暗号化されたデータを含む Amazon S3 データアクセスデータセットの使用権限を取得すると AWS KMS key、サブスクライバーコンソールで KMS キー ARN を表示できます。は、暗号化されたデータにアクセスできるように、キーに対する AWS KMS 許可 AWS Data Exchange を作成します。権限を取得した Amazon S3 アクセスポイントから暗号化されたデータを読み取るには、KMS キーの `kms:DecryptIAM` 権限を取得する必要があります。次の IAM ポリシーステートメントを選択できます。
 - a. ユーザーが任意の KMS キーを使用してデータを復号化または暗号化できるようにする IAM ポリシー。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "kms:Decrypt"
      ],
      "Resource": [
        "*"
      ]
    }
  ]
}
```

- b. サブスクライバーコンソールに表示される正確な KMS キー ARN をユーザーが指定できるようにする IAM ポリシー。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
```

```
"Statement": [  
  {  
    "Effect": "Allow",  
    "Action": [  
      "kms:Decrypt"  
    ],  
    "Resource": [  
      "<KMS key Arn from subscriber's console>"  
    ]  
  }  
]
```

Note

AWS KMS 許可は、オペレーションが結果整合性を達成するまで最大 5 分かかる場合があります。これが完了するまでは、Amazon S3 データアクセスデータセットにアクセスできない場合があります。詳細については、「AWS Key Management Service デベロッパーガイド」の「[AWS KMSの許可](#)」を参照してください。

Amazon S3 データセットをサブスクライブする方法の詳細については、「[the section called “Amazon S3 データアクセスの抑制”](#)」を参照してください。

AWS Lake Formation データセットを含む製品のサブスクライブとアクセス AWS Data Exchange (プレビュー)

AWS Lake Formation データセットは、AWS Lake Formation データアクセス許可アセットを含むデータセットです。

データサブスクライバーは、AWS Lake Formation データセットを含む製品を検索してサブスクライブできます。AWS Lake Formation データセット AWS Data Exchange の に対する権限が付与されたら、AWS アカウント を使用して、または を使用して組織全体のデータへのアクセスをクエリ、変換 AWS Lake Formation、共有できます AWS AWS License Manager。

ステップ 1: AWS Lake Formation データセットを含む製品をサブスクライブする

有料製品をサブスクライブすると、AWS 請求額が請求されます。製品に含まれるすべてのデータセットにアクセスできます。詳細については、「[で AWS Data Exchange のデータ製品のサブスクライブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

AWS Lake Formation データセットを含む製品をサブスクライブするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品を検出] で [カタログを参照する] を選択します。

詳細については、「[カタログを参照](#)」を参照してください。

3. 「結果の絞り込み」で、データセットタイプフィルターを使用して を選択しAWS Lake Formation、AWS Lake Formation データセットを含む製品を検索します。
4. 製品を選択し、その製品詳細ページを表示します。

製品詳細ページの情報には、製品の説明、プロバイダーの連絡先情報、および製品のパブリックオファーの詳細が含まれます。パブリックオファー情報には、料金と期間、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーが含まれます。製品に含まれるデータセットの名前と、それら AWS リージョン が利用可能な を表示できます。[類似商品] で商品を選択することで、他の商品詳細ページを引き続き閲覧することもできます。

プロバイダーがユーザーのアカウントにカスタムオファー ([プライベートオファー](#)、または [Bring Your Own Subscription \(BYOS\) オファーなど](#)) を発行した場合は、それらの詳細も表示されます。

5. 右上隅にある [サブスクリプションを続行する] を選択します。
6. [製品オファー]、[サブスクリプション条件]、オファーに含まれる [データセット]、および [サポート情報] を確認します。
7. サブスクリプションについて [オファーの自動更新] を有効にするかどうかを選択します。

Note

一部の製品では、サブスクリプションの検証が必要です。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

8. [サブスクライブ] を選択します。有料製品をサブスクライブすると、サブスクライブの決定を確認するプロンプトが表示されます。

9. [サブスクリプションに含まれるデータセット] に、リストされているデータセットが表示されません。

サブスクリプションの処理が終了したら、データセットを選択して権限のあるデータにアクセスするか、[サブスクリプションを表示] を選択してサブスクリプションを表示できます。

ステップ 2: AWS Data Exchange のデータ共有にアクセスする AWS Lake Formation

AWS Lake Formation データセットを含む製品をサブスクライブしたら、Amazon Athena などの Lake Formation 互換クエリエンジンを使用してデータをクエリできます。

サブスクライブが完了したら、以下を実行する必要があります。

1. 製品をサブスクライブしてから 12 時間以内に AWS Resource Access Manager (AWS RAM) 共有を受け入れます。AWS RAM 共有は、サブスクリプションページまたは AWS Data Exchange コンソールのデータアクセス許可データセットのエンタイトルメントのある AWS Lake Formation データページから承諾できます。AWS RAM 共有を受け入れる必要があるのは、プロバイダーごとに 1 回のみです。からのリソース共有の招待を受け入れる方法の詳細については AWS RAM、[「からのリソース共有の招待を受け入れる AWS RAM」](#) を参照してください。
2. 新しい共有リソースに移動 AWS Lake Formation し、リソースリンクを作成します。
3. Athena または AWS Lake Formation 互換性のある別のクエリエンジンに移動して、データをクエリします。

でのデータディクショナリの表示とダウンロード AWS Data Exchange

プロバイダーは、すべての AWS Data Exchange 製品にデータディクショナリをアタッチできます。次の手順では、データディクショナリを表示しダウンロードする方法について説明します。

データディクショナリおよびサンプルの詳細については、[「データディクショナリ、サンプル」](#) を参照してください。

データディクショナリを表示してダウンロードするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. 「権限を持つデータ」ページで、製品を展開してデータセットを選択します。

4. データセットの詳細ページで、[データディクショナリ] タブを選択します。
 - データディクショナリは [データディクショナリ] タブに表示されます。
 - [ダウンロード]を選択してデータディクショナリをダウンロードし、ファイルをコンピューターに保存します。

のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange

AWS Data Exchange パブリック製品をサブスクライブするときは、アイデンティティと意図したユースケースに関する追加情報を送信する必要があります。プロバイダーは、この情報を確認してからサブスクリプションを承認します。

トピック

- [でのサブスクリプションリクエストの完了 AWS Data Exchange](#)
- [保留中の AWS Data Exchange サブスクリプションリクエストの確認](#)
- [でサブスクリプションを検証するための E メール通知 AWS Data Exchange](#)

でのサブスクリプションリクエストの完了 AWS Data Exchange

AWS Data Exchange パブリック製品にはサブスクリプション検証が必要です。サブスクライブの継続を選択したら、サブスクリプションリクエストの完了ページで追加のフォームを入力する必要があります。

サブスクリプションリクエストを完了する

1. 「サブスクリプションリクエストの完了」ページで、製品オファーを確認して選択します (複数のオファーがある場合)。
2. サブスクリプション条件、含まれているデータセット、サポート情報、返金ポリシーを確認してください。
3. オファーの有効期限が切れたときに自動的に更新するかどうかを選択します。
4. サブスクリプションリクエストフォームでは、AWS アカウント ID が自動的に追加されます。次のフィールドに入力してフォームに入力します。
 - 会社名

- 名前
- [E メールアドレス]
- 会社の所在地
- ユースケース

提案されたユースケースに加えて、プロバイダーがリクエストを評価するのに役立つ追加のコメントを含めることができます。

5. [サブスクリプションリクエストをプロバイダーに送信] を選択します。

リクエストを送信すると、プロバイダーが最長で 45 日以内にリクエストを承認または拒否します。

保留中の AWS Data Exchange サブスクリプションリクエストの確認

サブスクリプションの検証が必要な AWS Data Exchange 製品の保留中のサブスクリプションを確認します。

保留中の AWS Data Exchange サブスクリプションリクエストを確認するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. [サブスクリプション] を選択します。
3. [サブスクリプションリクエスト] を選択します。
4. 保留中のサブスクリプションリクエストのステータスを確認する

各サブスクリプションリクエストは、その ID で一意に識別されます。ID は、プロバイダーとサブスクライバーの両方に表示されます。サブスクリプションリクエスト ID は、プロバイダーとの通信でリクエストを特定するために使用できます。

プロバイダーがリクエストを承認すると、そのサブスクリプションが [サブスクリプション] ページに表示されます。

Note

保留中のサブスクリプションリクエストは、有効期限が切れている、または既に処理済みである場合を除き、いつでもキャンセルできます。

でサブスクリプションを検証するための E メール通知 AWS Data Exchange

リクエストが承認、拒否、または期限切れになると、AWS アカウント E メールアドレスに E メール通知が送信されます。サブスクリプションリクエストのステータス変更のほとんどは E メールで通知されますが、これらの Eメールの送信はベストエフォートベースで行われます。

Note

リクエスト者自身が開始したサブスクリプションリクエストのステータス変更 (サブスクリプションのキャンセルなど) に関する E メール通知は送信されません。

組織での AWS Data Exchange ライセンスサブスクリプションの共有

AWS Data Exchange 製品をサブスクライブすると、それらの製品を使用するライセンスを付与する契約が作成されます。AWS アカウント が組織のメンバーである場合は、製品のライセンスをその組織内の AWS Data Exchange 他のアカウントと共有できます。

Note

詳細については AWS Organizations、[AWS Organizations 「ユーザーガイド」](#) を参照してください。

以下のトピックで、アカウント間でライセンスを共有するプロセスの概要を説明します。

トピック

- [ライセンス共有の前提条件](#)
- [ステップ 1: ライセンスを表示する](#)
- [ステップ 2: ライセンスを共有する](#)

ライセンス共有の前提条件

データ製品のライセンスを共有する前に、まず組織のライセンス共有をセットアップする必要があります。以下のタスクを完了して、組織のライセンス共有をセットアップしてください。

- ライセンスを購入または共有するときに、関連するライセンス付与を作成できるように、ユーザーに代わってライセンスを管理するアクセス AWS Marketplace 許可を付与します。詳細については、「[AWS Marketplace 購入者ガイド](#)」の [AWS 「Marketplace のサービスにリンクされたロール」](#) を参照してください。
- 初回使用 AWS License Manager のために をセットアップします。詳細については、「[AWS License Manager ユーザーガイド](#)」の「[AWS License Manager の使用開始](#)」を参照してください。

ステップ 1: ライセンスを表示する

以下のトピックで、ライセンスを表示するプロセスの概要を説明します。

トピック

- [すべてのライセンスの表示](#)
- [単一のライセンスの表示](#)

すべてのライセンスの表示

AWS License Manager コンソールを使用して、購入した AWS Data Exchange 製品のすべてのライセンスを表示できます。

サブスクリプションした製品のすべてのライセンスを表示する

1. [AWS マネジメントコンソール](#) にサインインします。
2. [AWS License Manager コンソール](#) を開きます。
3. 左側のナビゲーションペインで [Granted licenses] (付与されたライセンス) を選択します。
4. サブスクリプションした製品のすべてのライセンスを表示します。

単一のライセンスの表示

AWS License Manager コンソールを使用して、AWS Data Exchange データ許可の単一のライセンスを表示できます。

単一のサブスクリプションのライセンスを表示する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. [My subscriptions] (マイサブスクリプション) で [Subscription] (サブスクリプション) を選択します。
3. サブスクリプションを選択します。
4. 次のページで、ライセンスを表示するまたは License Manager で配布を選択します。表示される内容は、データ許可のディストリビューション許可によって異なります。
5. [License detail] (ライセンスの詳細) ページで詳細を確認します。

ステップ 2: ライセンスを共有する

AWS License Managerを使用することで、ライセンスを管理し、組織内の他のアカウントとライセンスを共有することができます。

AWS マネージドライセンスで License Manager を使用方法の詳細については、AWS License Manager 「ユーザーガイド」の [「付与されたライセンス」](#) および [「販売者が発行したライセンス」](#) を参照してください。

での Bring Your Own Subscription (BYOS) オファ어의承諾 AWS Data Exchange

サブスクライバーには、既存のデータサブスクリプションを AWS Data Exchangeに移行することが推奨されます。Bring Your Own Subscription (BYOS、サブスクリプションの持ち込み使用) 機能は、追加のコストなしで参加データプロバイダーとの既存のサブスクリプションを移行して満了することを可能にします。

BYOS オフアーでは、プロバイダーとサブスクライバー間の請求関係が継続されます。BYOS オフアーはフルフィルメント料金の対象にはなりません。サブスクライバーは、フルフィルメント料金なしでサブスクリプションの AWS Marketplace 請求書を受け取ります。

サブスクリプションライフサイクルは の外部で開始されるため AWS Data Exchange、BYOS AWS Data Exchange を使用して既存のサブスクリプションを に移行するワークフローには、プロバイダーとサブスクリャイバー間のコラボレーションが必要です。

Important

BYOS オファーでは、この製品の可用性より前のサブスクリプションを に移行します AWS。既存のサブスクリプション契約で BYOS オファーを検証する AWS 可能性があります。が BYOS オファーを検証 AWS できない場合、オファーと使用権限は予告なしに取り消すことができます。

で BYOS オファーを作成または承諾する前に AWS Data Exchange、プロバイダーとサブスクリャイバーは一緒に次の手順を実行する必要があります。

前提条件

1. プロバイダーとサブスクリャイバーが、BYOS AWS Data Exchange ソリューションの実装について連絡を取り合う。
2. サブスクリャイバーは、データ製品のサブスクリャイブに使用する AWS アカウント ID を提供します AWS Data Exchange。

サブスクリャイバーは、BYOS オファーを以下のように承諾します。

BYOS オファーを承諾する

1. AWS Data Exchange コンソールにサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインの [データ製品の検出] で [製品オファー] を選択します。
3. サブスクリャイブするオファーを選択します。ページの上にあるフィルターを使用して、[すべての製品]、[プライベート製品]、および [パブリック製品] のいずれかを選択できます。
4. [サブスクリプションを続行する] を選択します。
5. オファーの条件、データサブスクリプション契約、および含まれているデータセットを確認します。
6. オファーの条件に同意する場合は、確認内容を見直して同意し、[サブスクリャイブ] を選択します。

でのプライベート製品とオファアの受け入れ AWS Data Exchange

データプロバイダーは、一般公開 AWS Data Exchange されていない で製品を提供するか、公開されているオファア条件とは異なる条件で製品を提供することができます。プライベートオファアは、料金、期間、支払いスケジュール、データサブスクリプション契約、または払い戻しポリシーなどの面でパブリックオファアとは異なるものにすることができます。

Note

Bring Your Own Subscription (BYOS) オファアとは異なり、プライベートオファアは、AWS Data Exchangeで製品が利用可能になる前からある既存のサブスクリプションに基づいている必要はありません。

プロバイダーは、オファアをターゲットにするために、AWS アカウント ID のカスタムオファアを作成する必要があります。プライベートオファアが提供されていない場合は、パブリックオファアの詳細ページにある連絡先情報を使用してプロバイダーに連絡することで、プライベートオファアをリクエストできます。

サブスクライバーは、以下のようにプライベートオファアを受諾できます。

プライベートオファアを受諾する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインの [データ製品の検出] で [製品オファア] を選択します。
3. リスト内で、探している製品オファアを検索します。ページの上で [All products] (すべての製品)、[Private products] (プライベート製品)、および [Public products] (パブリック製品) のいずれかを選択して、フィルタリングできます。
4. サブスクライブするオファアを選択します。
 - a. 「カスタムオファア」で、API の従量制料金 (含まれている場合) を表示します。
 - b. (オプション) 従量制コスト計算ツールで [従量制コストを選択] を選択し、コストの例を表示するユニット数を入力します。
5. [サブスクリプションを続行する] を選択します。
6. オファアの条件、支払いスケジュール、データサブスクリプション契約、および含まれているデータセットを確認します。

Note

複数支払いスケジュールが設定されたプライベートオファーを受諾するには、請求書払いを使用する必要があります。請求書払いに切り替えたい場合は、[サポートチケットを作成](#)できます。

複数支払いスケジュールが設定されたプライベートオファーは、自動更新の対象にはなりません。

7. オファーの条件に同意する場合は、確認内容を見直して同意し、[Subscribe] (サブスクライブ) を選択します。

Note

アカウントには、支払いスケジュールで指定された日付に従って自動的に請求が行われます。

AWS Data Exchange サブスクリプションの管理

以下のトピックでは、でサブスクリプションを管理する方法について説明します AWS Data Exchange。

トピック

- [AWS Data Exchange サブスクリプションの表示](#)
- [でサブスクリプションの自動更新をオンまたはオフにする AWS Data Exchange](#)
- [AWS Data Exchange 製品のサブスクリプション解除](#)

AWS Data Exchange サブスクリプションの表示

AWS Data Exchange コンソールからサブスクリプションを表示します。

スクリプションを表示するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左のナビゲーションペインで、[サブスクリプション] を選択します。
3. サブスクリプションのリストを表示します。

でサブスクリプションの自動更新をオンまたはオフにする AWS Data Exchange

AWS Data Exchange コンソールを使用してサブスクリプションの自動更新を管理します。

サブスクリプションの自動更新をオンまたはオフにするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーション ウィンドウで、[サブスクリプション] を選択し、製品を選択します。
3. 商品詳細ページの [更新条件] で、[自動更新] をオンにするか、[自動更新] をオフにします。

更新設定を更新したことを確認する成功メッセージが表示されます。

AWS Data Exchange 製品のサブスクリプション解除

AWS Data Exchange コンソールを使用して、データ製品のサブスクリプションを解除します。

Note

サブスクリプションをすぐに削除する必要がある場合は、を使用して AWS Data Exchange カスタマーサポートにお問い合わせください[AWS Support Center Console](#)。

製品のサブスクリプションを解除する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [サブスクリプション] を選択します。
3. 解除するサブスクリプションを選択します。
4. [更新条件] で、[自動更新有効] オプションをオフにします。
5. その後はデータをエクスポートせず、サブスクリプションの有効期限が切れるまでそのままにしておきます。

Note

有料製品については、プロバイダーの返金ポリシーを参照してください。例外については、プロバイダーにお問い合わせください。

とのやり取りについて学ぶための製品 AWS Data Exchange

AWS Data Exchange は、サブスクライバーが AWS Data Exchange データ製品をサブスクライブして操作する方法を理解するのに役立つ以下の製品を提供しています。

トピック

- [AWS Data Exchange ハートビート](#)
- [AWS Data Exchange APIs用 \(テスト製品\)](#)
- [でのワールドワイドイベント出席 \(テスト製品\) AWS Data Exchange](#)
- [AWS Data Exchange for AWS Lake Formation \(テスト製品\) \(プレビュー\)](#)
- [AWS Data Exchange for Amazon S3 \(テスト製品\)](#)
- [AWS Data Exchange プロバイダー生成通知 \(テスト製品\)](#)

AWS Data Exchange ハートビート

AWS Data Exchange ハートビート (テスト製品) は、サブスクライバーが製品サブスクリプションを操作する方法を理解するために使用できる無料の AWS Data Exchange 製品です。テスト目的で使用したり、AWS Data Exchange API と概念を理解したりできます。

AWS Data Exchange ハートビートには、ハートビートという名前のデータセットが 1 つ含まれています。このデータセットには、約 15 分ごとに新しいリビジョンが発行されます。

リビジョンのコンテンツ例

新しいリビジョンにはそれぞれ 2 つのアセットが含まれています。

- エポックアセット
- マニフェストアセット

エポックアセット

各 AWS Data Exchange ハートビートリビジョンには、単一の配列を含む JSON ファイル Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) オブジェクトが含まれています。配列の名前は `TimestampsSinceLastRevision` で、その値は最後のリビジョンから経過した各 UNIX エポック秒のリストです。

アセットの名前の形態は `Epoch{start}-{end}.json` で、`{start}` と `{end}` はリビジョンが適用される期間に対応するエポック秒を表します。

マニフェストアセット

各 AWS Data Exchange ハートビートリビジョンには、リビジョンに関するメタデータとエポックアセット JSON ファイルのスキーマを含む JSON ファイル S3 オブジェクトが含まれています。アセットの名前の形態は `Manifest{start}-{end}.json` で、`{start}` と `{end}` はリビジョンが適用される期間に対応するエポック秒を表します。以下は、マニフェストファイルの内容の例です。

```
{
  "manifestSchemaVersion": "1.0",
  "schema": "{
    \"type\": \"object\",
    \"properties\": {
      \"TimestampsSinceLastRevision\": {
        \"type\": \"array\",
        \"description\": \"List of epoch timestamps in seconds.\",
        \"items\": {
          \"type\": \"number\",
          \"description\": \"Epoch timestamp in seconds.\"
        }
      }
    }
  }",
  "startTimestamp": 1554898111,
  "endTimestamp": 1554905311,
  "numberOfTimestamps": 7201
}
```

次のトピックでは、AWS Data Exchange Heartbeat にサブスクライブする方法について説明します
AWS Data Exchange。

トピック

- [での AWS Data Exchange ハートビートへのサブスクライブ AWS Data Exchange](#)

での AWS Data Exchange ハートビートへのサブスクライブ AWS Data Exchange

次の手順は、AWS Data Exchange カタログを参照して AWS Data Exchange Heartbeat を検索してサブスクライブする方法を示しています。

AWS Data Exchange ハートビートを検索してサブスクライブするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [カタログを参照] を選択します。
3. 検索フィールドに **AWS Data Exchange Heartbeat** を入力して、[Enter] キーを押します。
4. AWS Data Exchange ハートビート 製品を選択して、その詳細ページを表示します。
 - a. (オプション) データディクショナリを表示するには、製品[概要]セクションまで下にスクロールして、[データディクショナリ]の下にあるデータディクショナリを確認します。
 - b. (オプション) データディクショナリをダウンロードするには、[データディクショナリとサンプル] タブを選択し、[データディクショナリ] の横にあるオプションボタンを選択し、[ダウンロード] を選択します。
 - c. (オプション) サンプルをダウンロードするには、サンプル名 (Heartbeat manifest sample.json) の横にあるオプションボタンを選択し、[ダウンロード] を選択します。
5. 右上隅にある [サブスクリプションを続行する] を選択します。
6. 希望する料金と期間の組み合わせを選択し、サブスクリプションの自動更新を有効にするかどうかを選択してから、データサブスクリプション契約を含むオファーの詳細を確認します。

Note

AWS Data Exchange ハートビートはサブスクリプション検証を必要としませんが、一部の製品では検証が必要です。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

7. 料金情報を確認し、料金オファーを選択してから、[サブスクライブ] を選択します。

Note

AWS Data Exchange ハートビートは無料の製品です。有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

8. [最初のエクスポートを設定] ページで、エクスポートするリビジョンが含まれるデータセットのチェックボックスをオンにします。データセットを選択すると、最近発行されたリビジョンがエクスポート用に準備されます。
9. Amazon S3 バケットの場所を選択する、または Amazon S3 キーの命名パターンを設定します。これにより、リビジョンがエクスポートされる場所が決まります。キーパターンの使用に関する詳細については、「[からアセットリビジョンをエクスポートする際の主要なパターン AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
10. [Export] (エクスポート) を選択してデータを Amazon S3 にエクスポートします。後ほどエクスポートまたはダウンロードする場合は [Skip] (スキップ) を選択します。

Note

[Subscribe] (サブスクライブ) を選択してからサブスクリプションがアクティブになるまでは、数分かかる場合があります。サブスクリプションがアクティブになる前に [エクスポート] を選択すると、完了するまで待つように求められます。サブスクリプションがアクティブになると、エクスポートが開始されます。

サブスクリプションがアクティブになる前にこのページから移動しても、サブスクリプションの処理は停止されませんが、データのエクスポートが行われなくなります。

AWS Data Exchange APIs用 (テスト製品)

AWS Data Exchange for APIs (テスト製品) は、API データセットを含む製品を操作する方法を理解するためにサブスクライバーが利用できる無料の AWS Data Exchange 製品です。この製品をテスト目的で使用したり、API ベースのデータを取得するためにプロバイダーに API 呼び出しを行う方法を学習したりできます。

AWS Data Exchange for APIs (テスト製品) には、米国東部 (バージニア北部) リージョンにある API AWS Data Exchange (テスト製品) のという名前APIs データセットが含まれています。

トピック

- [での APIs \(テスト製品\) AWS Data Exchange の へのサブスクライブ AWS Data Exchange](#)
- [AWS Data Exchange API の表示](#)
- [AWS Data Exchange API 仕様のダウンロード](#)
- [AWS Data Exchange API コールの実行](#)

での APIs (テスト製品) AWS Data Exchange の へのサブスクライブ AWS Data Exchange

次の手順は、AWS Data Exchange カタログを参照して APIs (テスト製品) AWS Data Exchange のを検索してサブスクライブする方法を示しています。

AWS Data Exchange APIs (テスト製品) を検索してサブスクライブするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [カタログを参照] を選択します。
3. 検索フィールドに **AWS Data Exchange for APIs** を入力して、[Enter] キーを押します。
4. API 用AWS Data Exchange (テスト製品) を選択し、その詳細ページを表示します。
 - (オプション) サンプルをダウンロードするには、「データディクショナリとサンプル」タブを選択し、サンプル名 (ADX for API sample.json) の横にあるオプションボタンを選択し、「ダウンロード」を選択します。
5. 右上隅にある [サブスクリプションを続行する] を選択します。
6. 製品オファーを選択します。

Note

AWS Data Exchange for APIs (テスト製品) は無料製品です。

7. サブスクリプション条件、データセット、サポート情報を確認してください。
8. サブスクリプションについて [オファーの自動更新] を有効にするかどうかを選択します。

Note

AWS Data Exchange for APIs (テスト製品) はサブスクリプション検証を必要としませんが、一部の製品では検証が必要です。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

9. [サブスクライブ] を選択します。

[サブスクライブ] を選択してからサブスクリプションがアクティブになるまでは、数分かかる場合があります。サブスクリプションがアクティブになる前にこのページから移動しても、サブスクリプションの処理は停止されませんが、

AWS Data Exchange API の表示

次のステップを使用して、for API (テスト製品) AWS Data Exchange で APIs を表示できます。

API を表示するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. API 用 AWS Data Exchange (テスト製品) というタイトルの製品を選択し、次に API 用AWS Data Exchange データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. [API アセット] で、API を選択します。
6. アセットの概要を表示します。
7. [統合に関する注意事項] にあるガイドラインに従って API を呼び出します。

AWS Data Exchange API 仕様のダウンロード

次のステップを使用して、for API (テスト製品) AWS Data Exchange を使用して APIs 仕様をダウンロードできます。

API 仕様をダウンロードする

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. API 用 AWS Data Exchange (テスト製品) というタイトルの製品を選択し、次に API 用AWS Data Exchange データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. [API アセット] で、API を選択します。

6. [OpenAPI 3.0 仕様] で、[API 仕様をダウンロード] を選択します。

お使いのローカルコンピュータに仕様がダウンロードされます。その後、SDK 生成のためにアセットをサードパーティーツールにエクスポートできます。

AWS Data Exchange API コールの実行

AWS Data Exchange コンソールで 1 つのエンドポイントを呼び出すことができます。

コンソールから API コールを実行する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. 「API 用 AWS Data Exchange (テスト製品)」というタイトルの製品を選択し、次に「API 用 AWS Data Exchange 」データセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
5. [API アセット] で、API を選択します。

API リクエストを構造化するためのサンプル Code 構造と OpenApi 3.0 仕様が表示されます。これについては、 で API AWS Command Line Interface を呼び出すために使用できます。

6. 「統合メモ」で、「コピー」を選択してコード構造をコピーし、AWS CLIに貼り付けます。
7. 仕様書に記載されている情報を使用して、サンプル値を必要なパラメータのキーと値のペアに置き換えます。

API 用AWS Data Exchange (テスト製品) の API リクエストの例を以下に示します。

```
aws dataexchange send-api-asset \  
  --data-set-id 8d494cba5e4720e5f6072e280daf70a8 \  
  --revision-id b655d5be3da04fcbdca21a5a2932d789 \  
  --asset-id 8550cfab16b444a794402f2c3f11eae1 \  
  --method POST \  
  --path "someresource" \  
  --query-string-parameters 'param1=value1,param2=value2' \  
  --request-headers 'header=header_value' \  
  --body "{\"body_param\": \"body_param_value\"}"
```

でのワールドワイドイベント出席 (テスト製品) AWS Data Exchange

Worldwide Event Attendance (テスト製品) は、サブスクライバーが Amazon Redshift データセットを含む製品をサブスクライブして操作する方法を理解するのに役立つ無料の AWS Data Exchange 製品です。この製品はテスト目的で使用でき、アプリケーションのクエリ、分析、構築の方法を数分で習得できます。

Worldwide Event Attendance (テスト製品) には、米国東部 (バージニア北部) AWS リージョンにある Worldwide Event Data (テストデータ) という名前の Amazon Redshift データセットが含まれています。

AWS Data Exchange コンソールを使用して、Worldwide Event Attendance (テスト製品) を検索してサブスクライブします。その後、Amazon Redshift コンソールまたは SQL コマンドのいずれかを使用してデータ共有をクエリできます。

トピック

- [でワールドワイドイベント出席 \(テスト製品\) をサブスクライブする AWS Data Exchange](#)
- [Amazon Redshift クラスター \(コンソール\) による Worldwide Event Attendance \(テスト製品\) データのクエリ](#)
- [Amazon Redshift \(SQL\) での Worldwide Event Attendance \(テスト製品\) データのクエリ](#)

でワールドワイドイベント出席 (テスト製品) をサブスクライブする AWS Data Exchange

次の手順は、AWS Data Exchange カタログを参照して Worldwide Event Attendance (テスト製品) を検索してサブスクライブする方法を示しています。

Worldwide Event Attendance (テスト製品) を検索してサブスクライブするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [カタログを参照] を選択します。
3. 検索フィールドに **Worldwide Event Attendance (Test Product)** を入力して、[Enter] キーを押します。
4. Worldwide Event Attendance (テスト製品) を選択すると、詳細ページが表示されます。
 - a. (オプション) データディクショナリを表示するには、製品 [概要] セクションまで下にスクロールして、[データディクショナリ] の下にあるデータディクショナリを確認します。

- b. (オプション) データディクショナリをダウンロードするには、「データディクショナリとサンプル」タブを選択し、「データディクショナリ」の横にあるオプションボタンを選択し、「ダウンロード」を選択します。
- c. (オプション) サンプルをプレビューするには、サンプル名の横にあるオプションボタン (Worldwide Event Attendance Sample.csv) を選択し、「サンプルをプレビュー (CSVのみ)」を選択します。
- d. (オプション) サンプルをダウンロードするには、サンプル名の横にあるオプションボタン (Worldwide Event Attendance Sample.csv) を選択し、「ダウンロード」を選択します。

サンプルをプレビューする場合は、サンプルプレビューダイアログボックスの「ダウンロード」を選択することもできます。

5. 右上隅にある [サブスクライブを続行] を選択します。
6. 希望する料金と期間の組み合わせを選択し、サブスクリプションの自動更新を有効にするかどうかを選択してから、データサブスクリプション契約を含むオファーの詳細を確認します。

Note

Worldwide Event Attendance (テスト製品) にサブスクリプション検証は必要ありませんが、必要となる製品もあります。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

7. 料金情報を確認し、料金オファーを選択してから、[サブスクライブ] を選択します。

Note

Worldwide Event Attendance (テスト製品) は無料製品です。有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

[サブスクライブ] を選択してからサブスクリプションがアクティブになるまでは、数分かかる場合があります。

サブスクリプションがアクティブになる前にこのページから移動しても、サブスクリプションの処理は停止されませんが、

Amazon Redshift クラスター (コンソール) による Worldwide Event Attendance (テスト製品) データのクエリ

以下の手順では、Amazon Redshift コンソールを使用してデータ共有をセットアップし、クエリを実行する方法が説明されています。

Amazon Redshift (コンソール) で Worldwide Event Attendance (テスト製品) データをクエリするには

1. Amazon Redshift コンソールを開いてサインインします。
2. [クラスター] を選択し、既存の RA3 クラスターを選択します。
3. データ共有タブを選択します。
4. データベースの作成元となるデータ共有を選択します。
5. AWS Data Exchange データ共有のサブスクリプションで、データ共有からデータベースを作成するを選択します。
6. [データ共有からデータベースを作成] に新しいデータベースの [データベース名] を入力し、[作成] を選択します。
7. ナビゲーションペインの Marketplace アイコンを選択し、クエリエディターを開きます。
8. 「リソース」で、データベースとスキーマを選択します。
9. 次の SQL クエリを実行します。

```
select * from database.schema.table
```

Amazon Redshift (SQL) での Worldwide Event Attendance (テスト製品) データのクエリ

次の手順は、SQL コマンドを使用してデータ共有をセットアップし、クエリする方法を示しています。

Amazon Redshift (SQL) で Worldwide Event Attendance (テスト製品) データをクエリするには

1. データ共有を見つけるには、以下のコマンドを実行します。

```
SHOW DATASHARES [ LIKE 'namepattern' ]
```

このコマンドは、プロバイダーの account_id および namespace に加えて、Worldwide Event Attendance (テスト製品) のデータ共有を含むすべてのデータ共有を一覧表示します。詳細につ

いては、「Amazon Redshift データベースデベロッパーガイド」の「[データベースを表示する](#)」を参照してください。

2. 次のコマンドを実行して、データ共有からデータベースを作成します。

```
CREATE DATABASE database_name

FROM DATASHARE datashare_name OF ACCOUNT account_id NAMESPACE
namespace_guid
```

詳細については、「Amazon Redshift データベースデベロッパーガイド」の「[データベースを作成する](#)」を参照してください。

3. 次の SQL クエリを実行します。

```
select * from database.schema.table
```

AWS Data Exchange for AWS Lake Formation (テスト製品) (プレビュー)

AWS Data Exchange for AWS Lake Formation (テスト製品) は、サブスクライバーが AWS Lake Formation データセットを含む製品をサブスクライブして操作する方法を理解するのに役立つ無料の AWS Data Exchange 製品です。この製品をテスト目的で使用して、データを社内で数分でクエリ、分析、共有する方法を学ぶことができます。

トピック

- [\(プレビュー\)での AWS Data Exchange for AWS Lake Formation \(テスト製品\) AWS Data Exchange へのサブスクライブ](#)
- [AWS Data Exchange Lake Formation \(テスト製品\) のセットアップとクエリ \(プレビュー\)](#)

(プレビュー)での AWS Data Exchange for AWS Lake Formation (テスト製品) AWS Data Exchange へのサブスクライブ

次の手順は、AWS Data Exchange カタログを参照して Lake Formation (テスト製品) AWS Data Exchange を検索してサブスクライブする方法を示しています。(プレビュー)

Lake Formation AWS Data Exchange の をサブスクライブするには (プレビュー)

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。

2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [カタログを参照] を選択します。
3. 検索フィールドに **AWS Data Exchange for Lake Formation (Test product)** を入力して、[Enter] キーを押します。
4. [Lake Formation のAWS Data Exchange (テスト製品)] を選択すると、詳細ページが表示されます。
 - a. (オプション) データディクショナリを表示するには、製品[概要] セクションまで下にスクロールして、[データディクショナリ] の下にあるデータディクショナリを確認します。
 - b. (オプション) データディクショナリをダウンロードするには、[データディクショナリとサンプル] タブを選択し、[データディクショナリ] の横にあるオプションボタンを選択し、[ダウンロード] を選択します。
 - c. (オプション) サンプルをプレビューするには、サンプル名 (AWS Data Exchange Lake Formation (テスト製品) の場合) の横にあるオプションボタンを選択し、サンプルのプレビュー (CSV のみ) を選択します。
 - d. (オプション) サンプルをダウンロードするには、サンプル名 (AWS Data Exchange Lake Formation (テスト製品) の場合) の横にあるオプションボタンを選択し、ダウンロードを選択します。
5. サンプルをプレビューする場合は、サンプルプレビューダイアログボックスの[ダウンロード]を選択することもできます。
6. 右上隅にある [サブスクリプションを続行] を選択します。
7. 希望の価格と期間の組み合わせを選択し、データサブスクリプション契約を含むオファーの詳細を確認します。

 Note

AWS Data Exchange Lake Formation (テスト製品) の ではサブスクリプションの検証は必要ありませんが、一部の製品では検証が必要です。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

8. 料金情報を確認し、料金オファーを選択してから、[サブスクライブ] を選択します。

Note

AWS Data Exchange for Lake Formation (テスト製品) は無料製品です。有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

[サブスクライブ] を選択してからサブスクリプションがアクティブになるまでは、数分かかる場合があります。

サブスクリプションがアクティブになる前にこのページから移動しても、サブスクリプションの処理は停止されませんが、

AWS Data Exchange Lake Formation (テスト製品) のセットアップとクエリ (プレビュー)

以下は、AWS Management Consoleを使用して Lake Formation データ権限セット (プレビュー) を設定してクエリする方法を説明する手順です。

Lake Formation (テスト製品) データセット AWS Data Exchange の でクエリを有効にするには (プレビュー)

1. を開き、AWS Data Exchange コンソールにサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. 製品一覧から、[Lake Formation のAWS Data Exchange (テスト製品) (プレビュー)]を選択します。
4. Accept を選択して AWS RAM 共有を受け入れます。

Note

データ製品をサブスクライブしてから 12 時間以内に AWS RAM 共有を受け入れる必要があります。AWS RAM 共有招待の有効期限が切れた場合は、招待をリクエストを選択し、新しい共有が送信されるまで数営業日かかります。AWS RAM 共有を受け入れる必要があるのは、Lake Formation データセットのライセンスを取得するプロバイダーごとに 1 回だけです。

5. [Lake Formation コンソール](#) を開く

6. Lake Formation CREATE_TABLEまたは アクセスCREATE_DATABASE許可、および glue:CreateTableまたは glue:CreateDatabase AWS Identity and Access Management (IAM) アクセス許可を持つプリンシパルとしてサインインします。

7. ナビゲーションペインで [テーブル] を選択してから、[テーブルを作成] を選択します。

8. [テーブルを作成] ページで [リソースリンク] を選択し、以下の情報を入力します。

- リソースリンク名 - テーブル名と同じルールに従う名前を入力します。名前は、ターゲット共有テーブルの名前と同じにすることができます。
- データベース - ローカル データ カタログ内のデータベースにはリソース リンクが含まれている必要があります。
- 共有テーブル — Lake Formation (テスト製品) の AWS Data Exchange を通じて共有されるテーブルの 1 つを選択します。その製品を通じて共有されるテーブル名はすべて adxlf_test で始まるか、ローカル (所有) テーブル名または共有テーブル名を入力します。

このリストには、アカウントと共有されているすべてのテーブルが含まれています。データベースと所有者のアカウント ID が各テーブルにリストされます。アカウントと共有されていることが分かっているテーブルが表示されない場合は、以下を確認してください。

- データ レイク管理者ではない場合は、テーブルに対する Lake Formation 権限が付与されていることを管理者に確認してください。
- あなたがデータ レイク管理者で、アカウントが付与アカウントと同じ AWS 組織ではない場合は、テーブルの AWS Resource Access Manager (AWS RAM) リソース共有の招待を承諾したことを確認してください。詳細については、「[からのリソース共有の招待を受け入れる AWS RAM](#)」を参照してください。
- 共有テーブルのデータベース - リストから共有テーブルを選択した場合、このフィールドには外部アカウントにある共有テーブルのデータベースが入力されます。共有テーブルを選択しなかった場合は、ローカル テーブルへのリソース リンクのローカル データベースを入力するか、外部アカウントの共有テーブルのデータベースを入力します。
- 共有テーブル所有者 - リストから共有テーブルを選択した場合、このフィールドには共有テーブルの所有者アカウント ID が入力されます。共有テーブルを選択しなかった場合は、ローカルテーブルへのリソースリンクの AWS アカウント ID、またはテーブルを共有 AWS アカウントした の ID を入力します。

Amazon Athena で Lake Formation (テスト製品) データセット (プレビュー) AWS Data Exchange のクエリするには (コンソール)

1. Amazon Athena のアクセス権限を持つロールを使用して [Amazon Athena コンソール](#) にサインインします。
2. Amazon Athena クエリエディタで、以前に作成したリソースリンクを選択します。
3. source_data の横にある追加のメニューオプションアイコンを選択し、テーブルをプレビュー) を選択します。
4. [クエリを実行] を選択します。

Lake Formation (テスト製品) データセット AWS Data Exchange のでのクエリを許可するには (プレビュー) (AWS CLI)

1. で使用できるすべての招待のリストを取得するには AWS アカウント、次のコマンドを入力します。AWS CLI query パラメータを使用すると、共有元の招待のみに出力を制限できます AWS Data Exchange。

```
$ AWS ram get-resource-share-invitations
```

```
--region us-east-1
```

```
--query 'resourceShareInvitations[?
```

```
senderAccountId==147854383891]'
```

2. Lake Formation データセットの AWS Data Exchange の招待を検索します。次に、次のコマンドで承諾できるように出力内の resourceShareInvitationArn を書き留めます。

```
$ AWS ram accept-resource-share-invitation --region us-east-1 --resource-share-invitation-arn [resourceShareInvitationArn]
```

成功すると、ステータスが 保留中 から 承諾済み に変更されたことが応答に示されます。

3. 次のコマンドを使用して、AWS Data Exchange for Lake Formation データセットを通じて共有されるテーブルの 1 つへのリソースリンクを作成します。

```
aws glue create-table --database-name
```

```
[local_database_to_store_resource_link] --table-
```

```
input '{"Name":"resource_link_name","TargetTable":
```

```
{"CatalogId":"[account_owning_original_table]","DatabaseName":"[shared_db_in
```

Note

リソース リンクを作成するには、Lake Formation CREATE_TABLE または CREATE_DATABASE 権限と、`glue:CreateTable` または `glue:CreateDatabase` IAM 権限を使用します。

AWS Data Exchange for Amazon S3 (テスト製品)

AWS Data Exchange for Amazon S3 (テスト製品) は、サブスクライバーが製品をサブスクライブして操作する方法を理解するのに役立つ AWS Data Exchange 製品です。このチュートリアルでは、製品に Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) のデータアクセスデータセットが含まれています。この製品をテスト目的で使用したり、データプロバイダーの Amazon S3 バケットから直接データをクエリして分析する方法を学習したりできます。

独自の Amazon S3 バケットを設定したり、データファイルを Amazon S3 バケットにコピーしたり、関連するストレージ料金を支払ったりすることなく、クエリを実行してデータをインプレースで分析できます。

トピック

- [Amazon S3 \(テスト製品\) AWS Data Exchange の へのサブスクライブ](#)
- [AWS Data Exchange Amazon S3 \(テスト製品\) のセットアップとクエリ](#)

Amazon S3 (テスト製品) AWS Data Exchange の へのサブスクライブ

次の手順は、AWS Data Exchange カタログを参照して、Amazon S3 (テスト製品) AWS Data Exchange の を検索してサブスクライブする方法を示しています。

AWS Data Exchange for Amazon S3 (テスト製品) を検索してサブスクライブするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [カタログを参照] を選択します。
3. 検索フィールドに **AWS Data Exchange for Amazon S3 (Test Product)** を入力して、[Enter] キーを押します。
4. Amazon S3 のAWS Data Exchange (テスト製品)を選択すると、詳細ページが表示されます。

- a. (オプション) データディクショナリを表示するには、製品[概要] セクションまで下にスクロールして、[データディクショナリ]の下にあるデータディクショナリを確認します。
- b. (オプション) データディクショナリをダウンロードするには、「データディクショナリとサンプル」タブを選択し、「データディクショナリ」の横にあるオプションボタンを選択し、「ダウンロード」を選択します。
- c. (オプション) サンプルをプレビューするには、「ブロックチェーントランザクション (テストデータ)」のサンプル名の横にあるオプションボタンを選択し、「サンプルをプレビュー (CSV のみ)」を選択します。
- d. (オプション) サンプルをダウンロードするには、「ブロックチェーントランザクション (テストデータ)」のサンプル名の横にあるオプションボタンを選択し、「ダウンロード」を選択します。

サンプルをプレビューする場合は、サンプルプレビューダイアログボックスの「ダウンロード」を選択することもできます。

5. 右上隅にある [サブスクライブを続行] を選択します。
6. 希望する価格と期間の組み合わせを選択してください。サブスクリプションの自動更新を有効にするかどうかを選択し、データサブスクリプション契約を含むオファーの詳細を確認します。

Note

AWS Data Exchange for Amazon S3 (テスト製品) にはサブスクリプション検証は必要ありませんが、一部の製品では検証が必要です。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

7. 料金情報を確認し、料金オファーを選択してから、[サブスクライブ] を選択します。

Note

AWS Data Exchange for Amazon S3 (テスト製品) は無料製品です。有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

[サブスクライブ] を選択してからサブスクリプションがアクティブになるまでは、数分かかる場合があります。

サブスクリプションがアクティブになる前にこのページから移動しても、サブスクリプションの処理は停止されませんが、

AWS Data Exchange Amazon S3 (テスト製品) のセットアップとクエリ

次の手順は、AWS Command Line Interface () を使用して Amazon S3 データアクセスデータセットをセットアップしてクエリする方法を示していますAWS CLI。クエリを実行する前に、ユーザーにポリシーをアタッチするための適切な AWS Identity and Access Management (IAM) アクセス許可を取得する必要があります。Amazon S3 配信方法を使用してプロバイダーのバケット内のデータに直接アクセスするには、次の JSON ポリシーをユーザーまたはロールに埋め込みます。

Amazon S3 (テスト製品) AWS Data Exchange をセットアップするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. マイサブスクリプションの左側のナビゲーションペインから、データセットをホスト AWS リージョン `us-east-1` で使用権限のあるデータを選択します。このチュートリアルでは、リージョンは `us-east-1` です。
3. 製品のリストから Amazon S3 のAWS Data Exchange (テスト製品) を選択し、次にブロックチェーントランザクション (テストデータ) データセットを選択します。
4. [IAM 権限を検証] を選択します。

Note

適切な権限がない場合は、IAM ポリシーを作成してユーザーまたはロールにアタッチする方法を詳述した通知が届きます。次の例では、各 `#####` を独自の情報に置き換えます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "s3:ListBucket",
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:us-east-1:111122223333:accesspoint/my-access-point",
        "arn:aws:s3:::aws-data-exchange-s3-data-access-btc-demo-us-east-1"
      ]
    }
  ],
}
```

```
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": "s3:GetObject",
  "Resource": [
    "arn:aws:s3:us-east-1:111122223333:accesspoint/my-access-point/object/*",
    "arn:aws:s3::aws-data-exchange-s3-data-access-btc-demo-us-east-1/*"
  ]
}
```

を使用して Amazon S3 (テスト製品) データセット AWS Data Exchange の に対するクエリを許可するには AWS CLI

1. us-east-1 でAWS CloudShell を開きます。
2. アクセスポイントのエイリアスの横にあるコピーボタンを選択し、コードをコピーして内部に貼り付けます。コマンドを正しいアクセスポイントエイリアスAWS CloudShell で に追加した後、この製品に含まれる Amazon S3 オブジェクトのリストを確認できます。

Important

プロバイダーがリクエスト支払いを有効にすると、サブスクライバーはデータ転送とリクエストの代金を支払います。プロバイダーはデータストレージの費用を支払います。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[ストレージ転送と使用量にリクエスト支払いバケットを使用する](#)」を参照してください。

3. (オプション) 次のコマンドを実行して、オブジェクトをローカルシステムにコピーすることもできます。

```
aws s3api get-object --bucket <Access point alias> --key 'v1.0/btc/transactions/date=2022-11-27/part-00000-03a88dba-27dd-4f59-a890-70a3d2c7ad26-c000.snappy.parquet' AWS_btc.snappy.parquet --request-payer requester
```

AWS Data Exchange プロバイダー生成通知 (テスト製品)

AWS Data Exchange プロバイダー生成通知 (テスト製品) は、プロバイダー生成通知を使用して製品をサブスクライブして操作する方法をサブスクライバーが理解するのに役立つ無料の AWS Data Exchange 製品です。

プロバイダーはこの機能を使用して、自社のデータセットに関連する重要なイベントを通知します。これらのイベントは、Amazon EventBridge を使用して一貫性のある構造化された形式で受信され、自動化されたワークフローを構築するために使用できます。プロバイダーが生成した通知は、[AWS ユーザー通知を使用した E メールやチャットプログラムへの人間が読み取れる通知の配信もサポートします](#)。

トピック

- [プロバイダー生成通知 AWS Data Exchange の へのサブスクライブ \(テスト製品\)](#)
- [Amazon EventBridge を使用した AWS Data Exchange プロバイダー生成通知の設定](#)

プロバイダー生成通知 AWS Data Exchange の へのサブスクライブ (テスト製品)

次の手順は、AWS Data Exchange プロバイダー生成通知 (テスト製品) をサブスクライブする方法を示しています。

プロバイダー生成通知 (テスト製品) AWS Data Exchange の を検索してサブスクライブするには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品の検出] で [カタログを参照] を選択します。
3. 検索フィールドに **AWS Data Exchange Provider-Generated Notifications (Test Product)** を入力して、[Enter] キーを押します。
4. 「プロバイダー生成通知 (テスト製品) のAWS Data Exchange」を選択すると、詳細ページが表示されます。
5. 右上隅にある [サブスクリプションを続行] を選択します。
6. 希望する価格と期間の組み合わせを選択してください。サブスクリプションの自動更新を有効にするかどうかを選択し、データサブスクリプション契約を含むオファーの詳細を確認します。

Note

AWS Data Exchange プロバイダー生成通知 (テスト製品) の場合、サブスクリプション検証は必要ありませんが、一部の製品では必須です。詳細については、「[のサブスクライバーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

7. 料金情報を確認し、料金オファーを選択してから、[サブスクライブ] を選択します。

Note

AWS Data Exchange for Provider-Generated Notifications (テスト製品) は無料製品です。有料製品をサブスクライブする場合は、サブスクライブする決定を確認するためのプロンプトが表示されます。

[サブスクライブ] を選択してからサブスクリプションがアクティブになるまでは、数分かかる場合があります。

サブスクリプションがアクティブになる前にこのページから移動しても、サブスクリプションの処理は停止されませんが、

Amazon EventBridge を使用した AWS Data Exchange プロバイダー生成通知の設定

AWS Data Exchange は、Amazon EventBridge を使用してプロバイダーが生成した通知を送信します。ロールには、Amazon EventBridge ルール、ターゲットを作成できる必要があり、データ製品に登録できる必要があります。

AWS Data Exchange イベントは、データセットがある場所 AWS リージョン と同じ のデフォルトの Amazon EventBridge イベントバスに発行されます。プロバイダーが生成した通知用の Amazon EventBridge ルールを作成するには、次のステップを使用します。

プロバイダーが生成した通知用の Amazon EventBridge ルールを作成するには

1. Amazon EventBridge ルール用のターゲットを作成します。Python でシンプルな Lambda 関数を作成するには、次のようにします。
 - a. AWS Lambda コンソールに移動します。
 - b. [関数を作成]、[一から作成] の順に選択します。

- c. この関数に名前を付け、ランタイムとして Python 3.10 を選択します。[関数を作成]を選択します。
- d. lambda_function.py に次のコードを入力します。

```
import json

def lambda_handler(event, context):
    print(" ".join(["Event of type", event["detail-type"], "received!"]))
    print(" ".join(["Details", json.dumps(event["detail"])]))

    return {"statusCode": 200, "body": json.dumps("Hello from Lambda!")}
}
```

2. EventBridge コンソールに移動します。
 3. ルールに移動し、デフォルトのイベントバスを選択します。
 4. [ルールを作成] を選択し、名前とオプションの説明を入力します。ルール タイプが [イベントパターン付きのルール] であることを確認します。
 5. [Next (次へ)] を選択します。
- イベントソースが AWS イベントまたは EventBridge パートナーイベントであることを確認します。[作成方法] で [カスタムパターン (JSON エディター)] を選択します。[イベントパターン] では、次のように入力します。

```
{
  "source": ["aws.dataexchange"],
  "detail-type": ["Data Set Update Delayed", "Data Updated in Data Set",
    "Deprecation Planned for Data Set", "Schema Change Planned for Data Set"]
}
```

6. [次] をクリックします。
 - a. [ターゲット 1] では、AWS のサービス と [Lambda 関数] を選択します。
 - b. [関数] で、ステップ 1 で作成した 関数を選択します。[ルールを作成] を完了します。

この Lambda 関数は、プロバイダーが生成した通知が配信されるたびにトリガーされます。Lambda コンソールの [モニター] タブから、関数の最近の呼び出しを確認できます。

で AWS Data Exchange のデータ製品の提供 AWS Marketplace

大まかに言うと、データ AWS Data Exchange 製品を一覧表示する方法は次のとおりです AWS Marketplace。

1. プロバイダー候補の登録先 – 登録すると、で製品を一覧表示 AWS Data Exchange し、で利用できるようになります AWS Marketplace。詳細については、「[ステップ 2: プロバイダーになるための登録を行う](#)」を参照してください。
2. データの公開対象 – AWS Data Exchange 販売者は、AWS Marketplace 販売者の利用規約に規定された法的資格要件を満たすデータセットを配布することに限定されます。許可されるデータのタイプに関する詳細については、「[の公開ガイドライン AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
3. プロバイダーがデータセット、リビジョンを作成し、アセットをインポートする – AWS Data Exchange コンソールまたは API を使用してデータセットを作成できます。データセットの作成後、データセットでリビジョンを作成し、そのリビジョンにアセットを追加できます。詳細については、「[のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
4. プロバイダーが製品とそのオファーを作成する – 製品を作成するには、製品の詳細を提供し、1 つ、または複数のデータセットを含め、オプションでパブリックオファーの詳細を提供する必要があります。詳細については、「[での新製品の公開 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
 - ファイルを含む製品 (Amazon S3 オブジェクト) – Amazon S3 オブジェクトを含む 所有のデータセットが製品で公開されると、はデータセットのコピー AWS Data Exchange を作成します。サブスクライバーは、権限を持つデータセットとしてデータセットのコピーにアクセスすることができます。
 - Amazon API Gateway APIs を含む製品 – Amazon API Gateway APIsを含む 所有のデータセットが製品で公開されると、AWS Data Exchange は AWS Data Exchange エンドポイントへのリクエストを Amazon API Gateway API にプロキシスルーすることを許可します。サブスクライバーは、API を表示し、権限を持つデータセットとして API 仕様をダウンロードすることができます。サブスクライバーは、AWS Data Exchange コンソールから API を呼び出すこともできます。
 - Amazon Redshift データセットを含む製品 – Amazon Redshift データセットを含む 所有データセットが製品で公開されると、AWS Data Exchange は AWS Data Exchange エンドポイントへのリクエストを Amazon Redshift データ共有にプロキシできるようにします。サブスクライ

バーは、プロバイダーがデータ共有に追加したテーブル、ビュー、スキーマ、およびユーザー定義の関数に対する読み取り専用アクセス権を持つことができます。

- Amazon S3 データアクセスを含む製品 – Amazon S3 データアクセスを含む 所有のデータセットが製品で公開されると、 は、データプロバイダーが管理するのと同じ Amazon S3 オブジェクトをサブスクライバーに AWS Data Exchange 許可します。この方法では、入手可能な最新のデータが得られます。プロバイダーは、Amazon S3 バケットまたは特定のプレフィックスと Amazon S3 オブジェクトへの直接アクセスを共有し、サブスクリプション、使用権限、請求、支払いを管理する AWS Data Exchange ために を使用します。
 - AWS Lake Formation データセットを含む製品 (プレビュー) – Lake Formation データセットのアクセス許可データセットを含む 所有データセットが製品で公開されると、 は、データセットに含めた LF タグに関連付けられたデータへの読み取り専用アクセス AWS Data Exchange を付与します。サブスクライバーは、Amazon Athena や Redshift Spectrum などの Lake Formation と統合されたダウンストリームクエリサービスを使用して、共有しているデータベース、テーブル、または列をサブスクライブできます。
5. (オプション) プロバイダーがサブスクリプション検証を有効にする – サブスクリプション検証を有効にする場合、サブスクライバーは製品のサブスクリプションをリクエストする必要があります。これは、データセットへのアクセス前にサブスクライブ希望者を審査する機会を提供します。詳細については、「[のプロバイダーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
 6. (オプション) プロバイダーが製品のカスタムオファーを作成する – パブリックオファーに加えて、一部の顧客向けのカスタムオファーを作成できます。これには、プライベートオファーと Bring Your Own Subscription (BYOS) オファーが含まれます。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。
 7. (オプション) プロバイダーが新しいリビジョンを発行 – AWS Data Exchange API またはコンソールを使用して新しいリビジョンを作成することで、時間の経過とともに動的データセットを更新できます。その後、これらのリビジョンを発行できます。詳細については、[改訂またはで製品を更新する AWS Data Exchange](#)を参照してください。
 8. プロバイダーは を通じてレポートを確認します AWS Marketplace 管理ポータル – レポートは登録済みのすべての AWS Marketplace 販売者が利用でき、定期的に (毎日、毎週、または毎月) リリースされます。詳細については、「[AWS Data Exchange でのプロバイダー財務 AWS Marketplace](#)」を参照してください。
 9. プロバイダーは によって配布された資金を受け取ります AWS Marketplace – 詳細については、「[AWS Data Exchange でのプロバイダー財務 AWS Marketplace](#)」を参照してください。

拡張プロバイダープログラム (EPP)

拡張プロバイダープログラム (EPP) は、資格のあるデータプロバイダーが、機密性の高いカテゴリの個人情報および/または一般公開されていない個人情報を含むデータ製品を公開するためのプログラムです。

EPP への参加を希望するプロバイダーは、AWS Data Exchange チームによる追加のレビュープロセスを完了する必要があります。Extended Provider Program への登録資格に関する詳細については、[サポート](#) にお問い合わせください。

EPP に登録しているデータプロバイダー向けの公開ガイドラインの詳細については、[の公開ガイドライン AWS Data Exchange](#) を参照してください。

プログラムのアクセス

AWS Data Exchange プログラムで を使用している場合、2 つの異なる APIs を持つ 2 つの異なるリソースセットがあります。

- AWS Data Exchange API – これらの API オペレーションを使用して、データセットとリビジョンを作成、表示、更新、削除します。これらの API 操作は、リビジョンに対するアセットのインポートとエクスポートにも使用できます。詳細については、「[APIリファレンスAWS Data Exchange](#)」を参照してください。
- AWS Marketplace Catalog API – プロバイダーが および で製品を表示および更新するために使用します AWS Data Exchange AWS Marketplace。詳細については、「[AWS Marketplace カタログ API リファレンス](#)」を参照してください。

でデータ製品プロバイダーになる前に AWS Data Exchange、次のトピックを確認してください。

- [セットアップ AWS Data Exchange](#)

このトピックの確認後、手順を開始する準備が整います。

関連トピック

- [の公開ガイドライン AWS Data Exchange](#)
- [の製品ベストプラクティス AWS Data Exchange](#)
- [でのプロバイダーとしての開始方法 AWS Data Exchange](#)

- [での新製品の公開 AWS Data Exchange](#)
- [の製品説明テンプレート AWS Data Exchange](#)
- [で製品を更新する AWS Data Exchange](#)
- [AWS Data Exchange 製品のオファターの作成](#)
- [でのプロバイダー生成通知 AWS Data Exchange](#)
- [のデータ AWS Data Exchange](#)

でのプロバイダーとしての開始方法 AWS Data Exchange

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソール [AWS Data Exchange](#) を使用して [でデータ製品プロバイダーになるための完全なプロセス](#)について説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: 登録資格を確認する](#)
- [ステップ 2: プロバイダーになるための登録を行う](#)
- [ステップ 3: データの適格性を確認する](#)

ステップ 1: 登録資格を確認する

登録する前に、以下の要件を満たして登録資格を確認する必要があります。

データ製品を公開するための要件

AWS Data Exchange データ製品を請求するかどうかにかかわらず、その製品を販売することになります AWS Marketplace。データ製品を作成して提供するには、以下の要件を満たす必要があります。

- 明確なカスタマーサポートプロセスおよびサポート組織があること。
- 定期的に更新され、脆弱性がない状態にデータを維持する手段を提供すること。
- 製品のマーケティングにおけるベストプラクティスとガイドラインに従うこと。
- 優良な AWS 顧客であり、AWS Marketplace 販売者および AWS Data Exchange プロバイダーの利用規約の要件を満たしている。
- [対象管轄区域](#) 内の永住者もしくは市民である、またはこれらの区域のいずれかで組織化もしくは法人化された事業体であること。

- データ製品を提供するには、[ケース作成](#)ウィザードを使用してオンボーディングをリクエストする必要があります サポート。AWS Data Exchange チームは、資格と登録プロセスを完了するために連絡します。

さらに、製品を提供してそれらの料金を請求する場合は、以下の情報を提供する必要があります。

- 税金および銀行口座の情報を提供する必要があります。米国を拠点とする企業の場合は、W-9 フォームと、米国を拠点とする銀行からの銀行口座が必要です。
- 米国以外の販売者は、W-8 フォーム、付加価値税 (VAT) または商品サービス税 (GST) 登録番号、および米国の銀行情報を提供する必要があります。米国銀行口座がない場合は、[Hyperwallet](#) から仮想米国銀行口座を登録できます。

AWS Data Exchange 製品の対象管轄区域

データ製品を提供するには AWS Data Exchange、次のいずれかの国または SARs の永住者または市民であるか、その中に組織または法人化された事業体である必要があります。

- オーストラリア¹
- バーレーン¹²
- 欧州連合 (EU) 加盟国¹
- 香港特別行政区
- イスラエル¹²
- 日本²³
- ニュージーランド¹
- ノルウェー¹²
- カタール
- スイス¹²
- アラブ首長国連邦 (UAE)¹²
- 英国 (UK)¹
- [米国 (US)]

¹ これらの国の有料製品のプロバイダーは、設立国の VAT 登録情報を提供する必要があります。

² プロバイダーであるお客様が加入者と同じ国に居住している場合、税金の請求、徴収、送金の責任を負う場合があります。税務顧問にお問い合わせください。

³ 日本を拠点とするプロバイダーには、出品料金に対する日本消費税 (JCT) を申告する義務があります。

プロバイダーとしての VAT、請求、および納税義務に関する詳細については、「[Amazon Web Service 税務ヘルプ](#)」の「[AWS Marketplace 販売者](#)」を参照してください。

ステップ 2: プロバイダーになるための登録を行う

プロバイダー AWS Data Exchange としてを使用するには、に登録された販売者であり AWS Marketplace、AWS Data Exchange チームによって認定されている必要があります。アカウントを AWS Marketplace 販売者として登録すると、そのアカウントは製品の登録販売者となり、報告と支払いに使用されます。すべての製品とそのパブリックオファーは、AWS Data Exchange およびで検出できます AWS Marketplace。

AWS Data Exchange 資格と登録プロセスが完了し、無料製品の公開から有料製品にアップグレードする場合は、[AWS Marketplace Seller Operations](#) チームにお問い合わせください。

Important

製品を一覧表示 AWS アカウント するために使用する を変更することはできません AWS Marketplace。そのアカウントによって公開された製品に含めることができるのは、そのアカウントが所有するデータセットのみです。でデータ製品を提供するために登録されている AWS Marketplace と のみが AWS アカウント 製品を公開 AWS Data Exchange できます。

AWS Data Exchange と のプロバイダーとして登録するには AWS Marketplace

1. ウェブブラウザから [AWS Marketplace 管理ポータル](#) を開きます。
2. [今すぐ登録] を選択して登録ウィザードを開きます。
3. 会社名または氏名を確認し、利用規約を読みます。利用規約に同意する場合は、[I have read and agree to these terms] (利用規約を読み、これらに同意します) をオンにします。
4. [Account Settings] (アカウント設定) ページで、[Add (追加)] を選択してパブリックプロファイルを追加します。
5. (オプション) 有料製品を AWS Marketplace または に送信する場合は AWS Data Exchange、税金と銀行情報を提供する必要があります。[Account Settings] (アカウント設定) ページの [Provide tax and banking information] (税金と銀行情報の提供) タブで [Start] (開始) を選択し

て、税金と銀行ウィザードを完了します。これにより、税金と銀行情報が に送信されます AWS Marketplace 管理ポータル。

Note

税務申告書は、電子的に署名して送信することを強くお勧めします。それ以外の方法を使用する場合、フォームを印刷し、署名セクションに署名して、税務情報インタビューで提供された住所に税務申告書のハードコピーを郵送する必要があります。これは、登録プロセスの遅れにつながります。

6. 登録済み AWS Marketplace 販売者であることに加えて、認定リクエストを送信 AWS Data Exchange する必要があります。Seller [AWS Marketplace Operations](#) チームでケースを作成します。資格と登録プロセスを完了するために連絡します。

ステップ 3: データの適格性を確認する

データの適格性を確認するには、「[の公開ガイドライン AWS Data Exchange](#)」をお読みください。

データセットの適格性について質問がある場合は、[AWS Marketplace Seller Operations チーム](#)にお問い合わせください。

でデータ製品の公開ガイドラインを確認し AWS Data Exchange、データセットをリストできることを確認したら、製品を作成できます。

の公開ガイドライン AWS Data Exchange

以下のガイドラインは、での製品の出品に関する制限の概要を示しています AWS Data Exchange。プロバイダーは、これらのガイドライン、[販売者の AWS Marketplace 利用規約](#)、および[AWS カスタマーアグリーメント](#)を遵守する責任があります。AWS は、これらのガイドラインを随時更新することがあります。は、これらのガイドラインに違反する製品 AWS をすべて削除し、プロバイダーによるサービスの今後の使用を停止する可能性があります。

プロバイダーは、AWS Marketplace 販売者向けの利用規約に基づくガイドラインを承諾し、それらに従うことに加えて、データ製品に関する以下の公開ガイドラインに従う必要もあります。

AWS Data Exchange データ製品の公開ガイドライン

1. データ製品に、違法なコンテンツ、ウイルス、マルウェア、または他者にとって有害なその他素材を含めることはできません。

2. データ製品に、デバイスまたは特定可能な個人を特定するために使用できる情報を含めることはできません。また、センシティブロケーションと特定するために使用できる情報を含めることはできません。センシティブロケーションには以下が含まれます：がん治療、HIV/AIDS治療、不妊治療/中絶クリニック、メンタルヘルス治療施設、緊急治療室外傷センター、宗教的礼拝所、矯正施設、依存症治療センター、依存症治療センター、家庭内暴力またはレイプ危機管理センター、LGBTQ+の身元やその他の性的指向を推測するために使用される可能性のある場所、軍事基地、政治などの一時的な集会所集会、行進、または抗議、そのような時期集会、行進、抗議活動、主に16歳未満の子どもを対象とする場所、露骨な性的コンテンツ、コンテンツ、行為への関与を推測するために使用される可能性のある場所、難民または移民の地位を推測するために使用される可能性のある場所（難民センターや入国管理局など）、福祉施設またはホームレスシェルター、ハーフウェイハウス、信用修理、債務返済サービス、破産サービス、給料日貸付などが行われる教育機関。

さらに、AWS Data Exchangeの認定データプロバイダーでない限り[the section called “拡張プロバイダープログラム \(EPP\)”](#)、データ製品には、公開情報でない限り、個人を特定するために使用できる情報が含まれない場合があります。一般公開情報とは、(1) 連邦、州、地方自治体の記録、公開法廷記録、または公開企業への提出書類を通じて合法的に公開された情報、または(2) データ主体が合法的に一般に公開している情報を指します。

3. 生体情報データもしくは遺伝子データ、医療、人種もしくは民族的出身、政治的見解、宗教的もしくは哲学的信念、性別もしくは性的指向、労働組合への加入、個人支払もしくは財務情報（信用履歴など）、センシティブロケーションの各カテゴリ、またはその他類似する機密情報のカテゴリに当てはまる情報は、データ製品内の個人を特定できないように集約または匿名化される必要があります。
 - に含めることができるデータセットの例 AWS Data Exchange – 公開企業の過去の株価、判事の名前とその法廷意見、および医薬品研究からの集計または匿名化された研究結果。
 - HCLS のユースケースでは、HIPAA 匿名化ガイドラインに準拠して、専門家による決定またはセーフハーバーの方法により匿名化されたデータを指します。
 - で禁止されているデータセットの例 AWS Data Exchange – 1996 年の医療保険の相互運用性と説明責任に関する法律 (HIPAA) に基づき、人種別に整理された名前、個人を特定するために使用できる地理的位置データ、保護対象の医療情報のリスト。
4. サブスクライバーがデータ製品をどのように使用、または使用しない可能性があるかを慎重に検討し、データサブスクリプション契約 (DSA) にこの情報を明記する必要があります。
5. 製品の出品説明は、正確で、有効な連絡先情報が含まれており、集約または匿名化されたデータがある場合はその旨が記載されている必要があります。

6. を使用して、非識別データ、キーコードデータ、匿名化データ、または米国政府関連のデータを含む、米国機密個人データの一括 AWS Data Exchange 提供または利用可能にすることはできません。これらはすべて、Executive Order 14117, Preventing Access to Americans' Bulk Sensitive Personal Data and United States Government-Related Data by Countries of concern [で](#)定義されている、米国司法省の最終規則で定義されています。
7. 互換性のない製品やソリューションを除き AWS Marketplace、AWS Data Exchange を使用して、に記載されていない他の製品やソリューションを宣伝することはできません AWS Marketplace。
8. お客様は、AWS Marketplace 販売者の利用規約に規定された法的資格要件を満たすデータセットを配布することに限定されます。何らかの方法でこれらの条件に違反した場合、禁止された製品は から削除 AWS Data Exchange され、サービスから停止される可能性があります。
9. 製品で API データセットを出品する場合:
 - 最初にその API を Amazon API Gateway に統合する必要があります。REST API を API Gateway に統合する方法の詳細については、「API Gateway デベロッパーガイド」の「[REST API の操作](#)」を参照してください。
 - データ製品に関するサブスクライバーからのサポート関連の質問には、1 営業日で回答する必要があります。このガイドラインに従わない場合、製品が削除される可能性があります AWS Data Exchange。
- 10 製品に追加されたロゴ、DSA、およびその他の添付ファイルは、実際のデータ製品が置かれている場所とは別に保存される場合があります。

Note

拡張プロバイダープログラムに登録されているプロバイダーは、上記のガイドライン 2 および 3 を補足するプロバイダーの利用規約の拡張 AWS Marketplace プロバイダープログラム補遺に規定された制限の対象となります。詳細については、「[拡張プロバイダープログラム \(EPP\)](#)」を参照してください。

データセットの適格性に関する質問がある場合は、以下を実行してください。

- [AWS Marketplace Seller Operations](#) チームまでお問い合わせください。

でデータ製品の公開ガイドラインを確認し AWS Data Exchange、データセットをリストできることを確認したら、製品を作成できます。

での新製品の公開 AWS Data Exchange

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソール [AWS Data Exchange](#) を使用して で新しい製品を公開するプロセスについて説明します。

トピック

- [ファイルベースのデータ AWS Data Exchange を含む での製品の公開](#)
- [APIs AWS Data Exchange を含む での製品の公開](#)
- [Amazon Redshift データセット AWS Data Exchange を含む での製品の公開](#)
- [Amazon S3 データアクセスを含む での AWS Data Exchange 製品の公開](#)
- [AWS Lake Formation データアクセス許可データセット AWS Data Exchange を含む での製品の公開 \(プレビュー\)](#)

次のビデオでは、AWS Data Exchangeで新しいデータプロダクトを公開する方法について詳しく説明しています。

ファイルベースのデータ AWS Data Exchange を含む での製品の公開

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソール [AWS Data Exchange](#) を使用してデータセットを作成し、 にファイルベースのデータ [AWS Data Exchange](#) を含む で新しい製品を公開するプロセスについて説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: アセットを作成する](#)
- [ステップ 2: データセットを作成する](#)
- [ステップ 3: リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 4: リビジョンにアセットをインポートする](#)
- [ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)
- [ステップ 6: \(オプション\) 製品をコピーする](#)

ステップ 1: アセットを作成する

アセットは のデータです [AWS Data Exchange](#)。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

新しいファイルベースのデータ製品を作成して公開する前に、以下を実行する必要があります。

1. ファイルを作成します。

AWS Data Exchange は、すべてのファイルタイプをサポートしています。

2. ファイルをオブジェクトとして Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) またはローカルコンピュータに保存します。

Amazon S3 でのファイルの保存に関する詳細については、「[Amazon S3 ユーザーガイド](#)」を参照してください。

ステップ 2: データセットを作成する

のデータセット AWS Data Exchange は動的で、リビジョンを使用してバージョン管理され、各リビジョンには少なくとも 1 つのアセットが含まれます。詳細については、「[のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

データセットを作成する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. [データセットタイプを選択] で [ファイル] を選択します。
5. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
6. (オプション) [タグを追加 - オプション] でタグを追加します。
7. [データセットを作成] を選択します。

ステップ 3: リビジョンを作成する

次の手順では、AWS Data Exchange コンソールでデータセットを作成した後にリビジョンを作成します。詳細については、「[改訂](#)」を参照してください。

リビジョンを作成する

1. データセットの詳細ページの [データセットの概要] セクションで以下を実行します。

- a. (オプション) [名前を編集] を選択してデータセットに関する情報を編集します。
- b. (オプション) [削除] を選択してデータセットを削除します。
2. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
3. [リビジョンを定義] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
4. (オプション) [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
5. [リビジョンを作成] を選択します。
6. 前のステップからの変更を確認、編集、または削除します。

ステップ 4: リビジョンにアセットをインポートする

次の手順では、データアセットをインポートし、AWS Data Exchange コンソールでリビジョンを確定します。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

リビジョンにアセットをインポートする

1. データセットの詳細ページの [インポートされたアセット] で、データセットのデータアセットが現在保存されている場所に基づいて [Amazon S3 からインポート] または [アップロード] (コンピュータからアップロードするため) を選択します。
2. 選択内容に応じて、プロンプトに従います。アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。
3. ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。
4. 追加するデータがある場合は、ステップ 1 を繰り返します。
5. [リビジョンの概要] で、リビジョンとそのアセットを確認します。
6. [リビジョンの最終処理] を選択します。

データセットのリビジョンが正常に確定されました。

リビジョンは、製品に追加する前に編集または削除できます。

トピック

- [リビジョンを編集する](#)
- [リビジョンを削除する](#)

リビジョンを編集する

確定後にリビジョンを編集する

1. [リビジョンの概要] で [確定解除] を選択します。

このリビジョンは確定済み状態ではなくなりましたというメッセージが表示されます。

2. リビジョンを編集するには、[リビジョンの概要] で、[アクション]、[編集] の順に選択します。
3. 変更を行ってから、[更新] を選択します。
4. 変更内容を確認してから、[確定] を選択します。

リビジョンを削除する

確定後にリビジョンを削除する

1. [リビジョンの概要] で [削除] を選択します。
2. [リビジョンを削除しますか?] ダイアログボックスに **Delete** を入力してから、[削除] を選択します。

Warning

これで、リビジョンとそのアセットのすべてが削除されます。このアクションを元に戻すことはできません。

ステップ 5: 新しい製品を公開する

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットが含まれるリビジョンを確定したら、そのデータセットを製品の一部として公開する準備が整います。詳細については、「[の製品ベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。製品とオファーに関する必要な詳細情報のすべてが揃っていることを確認してください。

新しい製品を公開する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) の左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
2. [製品] で [新しい製品を発行] を選択して [新しい製品を発行] ウィザードを開きます。

3. [製品の可視性] セクションで、製品の [製品の可視性オプション] と [機密情報] 設定を選択してから、[次へ] を選択します。詳細については、[での製品の可視性 AWS Data Exchange](#)および[機密情報のカテゴリ AWS Data Exchange](#)を参照してください。
4. [データの追加] セクションの [所有データセット] で、追加するデータセットの横にあるチェックボックスを選択し、[選択項目を追加] を選択します。

 Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは追加されません。

- a. [選択したデータセット] に移動して、選択内容を確認します。

データセットの名前、データセットのタイプ、データセットの最終更新時のタイムスタンプを確認できます。
 - b. [リビジョンアクセスルールを選択] に進み、この製品に含まれるデータセットに設定するリビジョンアクセスルールを選択し、[次へ] を選択します。詳細については、[のリビジョンアクセスルール AWS Data Exchange](#)を参照してください。
5. [製品を定義] セクションの [製品概要] で、製品名、製品ロゴ、お問い合わせ先情報、製品カテゴリなど、製品に関する情報を入力します。

詳細については、「[の製品ベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
 6. (オプション) 製品の定義セクションの「データディクショナリとサンプル」 – オプションで、データセット名の横にあるオプションボタンを選択してデータセットを選択し、「編集」を選択します。
 - a. 編集ダイアログボックスの「データディクショナリをアップロード」で、「ファイルを追加」を選択して新しいデータディクショナリをアップロードします。

.csv 形式の最大サイズが 1 MB のデータディクショナリを 1 つ選択できます。
 - b. コンピューターから保存されているデータディクショナリを選択し、[開く] を選択します。

データディクショナリの.csv ファイルが [編集] ダイアログボックスに表示されます。

Note

データディクショナリは、AWS Data Exchange データディクショナリテンプレートに準拠している必要があります。アップロードする保存済みデータディクショナリがない場合は、AWS Data Exchange コンソールで空のデータディクショナリテンプレートリンクまたはサンプルデータディクショナリリンクを選択できます。

- c. [データディクショナリのプレビュー] を選択してプレビューします。
- d. 「サンプル-オプション」で「サンプルをアップロード」を選択し、コンピューターからサンプルを選択して、[開く]を選択します。

サンプルは「編集」ダイアログボックスに表示されます。

Note

最大 10 個のサンプルをアップロードできます。最大サイズは 50 MB です。 .csv 形式のサンプルはプレビューできます。

- e. 商品詳細ページに表示される各サンプルの説明を入力します。
 - f. [保存] を選択します。
7. [商品定義] に、商品の [簡単な説明] と [詳細な説明] を入力します。

詳細説明にテンプレートを使用する場合は、[テンプレートを適用] を選択し、テンプレートの種類を選択してから、テンプレートに特定の商品情報を入力します。

8. [次へ] をクリックします。
 9. オファーを設定します。
- パブリックオファーを作成する場合は、[パブリックオファーを追加] セクションで、オファーを設定します。パブリックオファーは、可視性がパブリック に設定されているすべての AWS Data Exchange 製品に必須です。
 1. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
 2. 米国売上税の設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーを選択します。
 3. (オプション) [サブスクリプション検証] を設定します。これは、誰がこの製品をサブスクライブできるかを制御できるようにします。詳細については、「[のプロバイダーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

4. [オファーの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。
 5. [次へ] を選択します。
- プライベートオファーを作成している場合は、[カスタムオファーを追加] セクションでオファーの詳細を設定します。
 1. [サブスクライバーアカウント情報] セクションで、オファーを提示するサブスクライバーアカウントを少なくとも 1 つ追加します。
 2. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
 3. [Offer expiration date] (オファーの有効期限) を選択します。サブスクライバーはこの日までにオファーを受諾する必要があります。
 4. 米国売上税の設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーを選択します。
 5. [オファーの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。
 6. [次へ] を選択します。
10. [レビューと公開] セクションで製品情報を確認し、[製品ページのプレビュー] を展開してページが公開後にどのように見えるかを確認します。
 11. 製品とパブリックオファーをユーザー全員に表示し、利用可能にしてもよい場合は、[公開] を選択します。

これで、パブリックオファーでデータ製品を公開する手動の部分が完了しました。は、製品を AWS Data Exchange 準備して公開します。[製品の概要] ページの製品のステータスが[承認待ち]になり、公開されると [公開済み] に変更されます。

ステップ 6: (オプション) 製品をコピーする

最初の製品を作成したら、その詳細とパブリックオファーをコピーして新しい製品を作成することができます。

Note

パブリック、プライベート、公開済み、または未公開の製品をコピーできます。製品に関連付けられているカスタムオファーはコピーされませんが、パブリックオファーがコピーされます。

製品をコピーする

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で、コピーする製品の横にあるボタンをオンにします。
4. [アクション] ドロップダウンから [コピーを作成] を選択します。
5. [新しい製品を公開] ワークフローを続行します。ワークフローの詳細情報は、ステップ 3 で選択した製品に基づいて既に入力されています。詳細については、「[ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)」を参照してください。

APIs AWS Data Exchange を含む での製品の公開

以下のトピックでは、REST API データセットを作成し、APIs を含む新しい製品を公開するプロセスについて説明します AWS Data Exchange。このプロセスは、AWS Data Exchange コンソールまたはを使用して完了できます AWS Command Line Interface。

Amazon API Gateway REST API をセットアップしたら、AWS Data Exchangeで新しい API データセットを作成できます。その後、リビジョンを作成して、API アセットを追加できます。

API アセットを作成して公開すると、AWS Data Exchange エンドポイントへのサブスクライバークエストが API Gateway API にプロキシスルーできるようになります。次に、このデータセットを製品に追加し、料金を追加できます。その後、サブスクライバーは製品を表示し、カタログと AWS Data Exchange カタログで AWS Marketplace サブスクライブできます。

AWS Data Exchange リビジョンアクセスルール、プライベート製品、プライベートオファー、サブスクリプション検証などの機能を利用できます。

契約ベースの価格設定、従量制の原価価格 (契約価格は 0 ドル)、または従量制価格と契約価格の組み合わせのみを選択できます。

標準の従量制コストを選択することも、カスタムの従量制コストを指定することもできます。標準の従量制料金には、次の3つのタイプがあります。

- API リクエスト単位
- 成功 API リクエスト単位
- 転送されたデータ単位 (バイト)

Note

従量制コストは製品内のすべての API データセットに適用されます。そのため、異なる API データセットに対して同じディメンションに対して異なる価格を請求する場合は、これらのデータセットを異なる製品で作成することをお勧めします。

このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [前提条件](#)
- [ステップ 1: API リソースポリシーを更新する](#)
- [ステップ 2: API データセットを作成する](#)
- [ステップ 3: リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 4: リビジョンに API アセットを追加する](#)
- [ステップ 5: API が含まれる新しい製品を公開する](#)
- [ステップ 6: \(オプション\) 製品をコピーする](#)

前提条件

API が含まれる製品を発行するには、以下の前提条件を満たす必要があります。

- など AWS のサービス、を使用する前に AWS Data Exchange、にサインアップ AWS して管理ユーザーを作成する必要があります。詳細については、AWS IAM Identity Center ユーザーガイドの「[使用開始](#)」を参照してください。
- で製品を作成するには AWS Data Exchange、を AWS Marketplace 販売 AWS アカウント 者として登録する必要があります。データセットの作成にはこのアカウントを使用します。API Gateway

リソースを持つアカウントが、データセットを作成しているアカウントと同じアカウントである必要はありません。

- REST API は、Amazon DynamoDB や AWS Lambda など、データにアクセスするために適切なリクエストとレスポンスモデルを使用する統合が設定された Amazon API Gateway 上にある必要があります。詳細については、Amazon API Gateway デベロッパーガイドの「[API Gateway での REST API の開発](#)」と「[REST API の操作](#)」を参照してください。

Note

サポートされるのはパブリック API Gateway API のみです。

- API Gateway REST API は、AWS Data Exchange サービスプリンシパルからの呼び出しを認証および認可できる必要があります。から API AWS Data Exchange へのすべてのリクエストは、AWS Data Exchange 認証情報で署名された Signature Version 4 (SigV4) プロトコルを使用します。AWS Data Exchange は、カスタムドメインとドメインキーマッピングで動作します。

Note

AWS Data Exchange は、Amazon Cognito、No-Auth、および AWS Lambda オーソライザーをサポートしていません。

- API Gateway REST API が認証と認可にカスタムアイデンティティシステムを使用する場合は、IAM 認証を使用し、API を記述する OpenAPI スキーマをインポートするように設定します。AWS Data Exchange は、独自のサービス認証情報を使用して API Gateway REST API を呼び出し、アカウント ID などのサブスクライバー情報を含めます。
- バックエンドとの統合に対する責任は、API Gateway REST API が担います。これを行うには、以下のいずれかを実行します。
 - API Gateway REST API を通じて行われるすべてのリクエストに、バックエンドが検証できる継続期間の長い認証トークンをアタッチする。
 - API Gateway を使用して、認証情報の生成と API の呼び出しを実行できる Lambda 関数を呼び出す。

API は、[API 統合リクエスト仕様](#)に従って呼び出されます。

詳細については、以下の各トピックを参照してください。

トピック

- [API データセットのセキュリティ](#)
- [API 統合リクエスト仕様](#)
- [ヘッダー転送](#)

API データセットのセキュリティ

AWS Data Exchange は、Transport Layer Security (TLS) 1.2 を使用してトラフィックをエンドツーエンドで暗号化します。すべてのメタデータは保管時に暗号化されます。AWS Data Exchange は、サブスクライバーリクエストやバックエンドからのレスポンスを保存しません。抽出されるのは、料金の請求に必要な計測メタデータのみです。

API 統合リクエスト仕様

この API は、すべてのヘッダー（「」にリストされているヘッダーを除く[ヘッダー転送](#)）、本文、http メソッド、パス、クエリ文字列をそのままカスタマーリクエストから AWS Data Exchange パスルーし、次のヘッダーを追加します。

```
// These headers help prevent Confused Deputy attacks. They enable the SourceAccount
// and SourceArn variables in IAM policies.
'x-amz-source-account': ACCOUNT_ID,
'x-amz-source-arn': `arn:aws:dataexchange:${REGION}:${OWNER_ACCOUNT_ID}:data-sets/
${DATA_SET_ID}/revisions/${REVISION_ID}/assets/${ASSET_ID}`,

// These headers identify the API Asset in Data Exchange.
'x-amzn-dataexchange-asset-id': ASSET_ID,
'x-amzn-dataexchange-data-set-id': DATA_SET_ID,
'x-amzn-dataexchange-revision-id': REVISION_ID,

// This header identifies the Data Exchange Product.
'x-amzn-dataexchange-product-id': PRODUCT_ID,

// This header identifies the caller of Data Exchange. It will contain subscriber
// information.
'x-amzn-dataexchange-requester-account-id': REQUESTER_ACCOUNT_ID,

// Providers can attach custom metadata in the form of key/value pairs
// to a particular subscription. We will send these key/value pairs as stringified
// JSON.
'x-amz-dataexchange-subscription-metadata': STRINGIFIED_METADATA,
```

ヘッダー転送

AWS Data Exchange は、プロバイダーのバックエンドに転送する前に、認証または名前空間に関連するヘッダーをすべて Amazon に削除します。具体的に、AWS Data Exchange は以下のヘッダーを削除します。

- Authentication ヘッダー
- x-amz で始まるヘッダー

host ヘッダーは、プロキシの結果として上書きされます。

ステップ 1: API リソースポリシーを更新する

[前提条件](#)を満たす Amazon API Gateway REST API がある場合は、その API リソースポリシーを更新して、サブスクライバーが API のスキーマを取得するリクエストを実行するときに AWS Data Exchange が API を呼び出せるようにする必要があります。

API リソースポリシーを更新する

1. API のリソースポリシーに、以下のポリシーを追加します。

```
{
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {"Service": "dataexchange.amazonaws.com"},
  "Action": "execute-api:Invoke",
  "Resource": "*",
  "Condition": {"StringEquals": {"aws:SourceAccount": "<account-id>"}}
}
```

2. account-id は、API データセットを作成することになるアカウントに置き換えます。

API Gateway リソースを持つアカウントが、データセットを作成しているアカウントと同じアカウントである必要はありません。

このポリシーは、これらのアクセス許可を AWS Data Exchange サービスプリンシパルによって行われた呼び出しに制限し、アカウントのみが API との統合 AWS Data Exchange を許可できることを要求します。

Note

この呼び出しの実行 AWS Data Exchange を明示的に拒否するリソースポリシーがある場合は、この拒否を削除または制限する必要があります。

これで、[API データセットを作成する](#) 準備が整いました。

ステップ 2: API データセットを作成する

のデータセット AWS Data Exchange は動的で、リビジョンを使用してバージョンングされ、各リビジョンには少なくとも 1 つのアセットが含まれます。詳細については、「[のデータ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange コンソールまたは を使用して API AWS Command Line Interface データセットを作成します。

- [API データセットの作成 \(コンソール\)](#)
- [API データセットの作成 \(AWS CLI\)](#)

API データセットの作成 (コンソール)

API データセットを作成する (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[マイデータ] の [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. [データセットタイプを選択] で、[Amazon API Gateway API] を選択します。
5. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
6. (オプション) [タグを追加 - オプション] でタグを追加します。
7. [作成] を選択します。

これで、リビジョンを作成する準備が整いました。

API データセットの作成 (AWS CLI)

API データセットを作成する (CLI)

1. `create-data-set` コマンドを使用して、API データセットを作成します。

```
$ AWS dataexchange create-data-set \  
--asset-type API_GATEWAY_API \  
--description 'Data Set Description' \  
--name 'Data Set Name'  
  
{  
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/$DATA_SET_ID",  
  "AssetType": "API_GATEWAY_API",  
  "CreatedAt": "2021-09-11T00:16:46.349000+00:00",  
  "Description": "Data Set Description",  
  "Id": "$DATA_SET_ID",  
  "Name": "Data Set Name",  
  "Origin": "OWNED",  
  "UpdatedAt": "2021-09-11T00:16:46.349000+00:00"  
}
```

2. 新しいアセットタイプの `API_GATEWAY_API` に注目してください。

これで、リビジョンを作成する準備が整いました。

ステップ 3: リビジョンを作成する

以下の手順では、データセットの作成後にリビジョンを作成します。詳細については、「[改訂](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange コンソールまたは AWS Command Line Interface を使用してリビジョンを作成します。

- [リビジョンの作成 \(コンソール\)](#)
- [リビジョンの作成 \(AWS CLI\)](#)

リビジョンの作成 (コンソール)

リビジョンを作成する (コンソール)

1. データセットの詳細ページの [データセットの概要] セクションで以下を実行します。
 - a. (オプション) [名前を編集] を選択してデータセットに関する情報を編集します。
 - b. (オプション) [削除] を選択してデータセットを削除します。
2. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
3. [リビジョンを定義] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
4. (オプション) [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
5. [リビジョンを作成] を選択します。
6. 前のステップからの変更を確認、編集、または削除します。

これで、[リビジョンに API アセットを追加する](#)準備が整いました。

リビジョンの作成 (AWS CLI)

リビジョンを作成する (AWS CLI)

1. create-revision コマンドを使用して、リビジョンを作成します。

```
$ AWS dataexchange create-revision \  
--data-set-id $DATA_SET_ID \  
--comment 'First Atlas Revision' \  
{ \  
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/$DATA_SET_ID/  
revisions/$REVISION_ID", \  
  "Comment": "First Atlas Revision", \  
  "CreatedAt": "2021-09-11T00:18:49.160000+00:00", \  
  "DataSetId": "$DATA_SET_ID", \  
  "Finalized": false, \  
  "Id": "$REVISION_ID", \  
  "UpdatedAt": "2021-09-11T00:18:49.160000+00:00" \  
}
```

2. [リビジョンに API アセットを追加します](#)。

Note

ステージだけでなく、インポートする API Gateway REST API の ID も把握しておく必要があります。

ステップ 4: リビジョンに API アセットを追加する

API アセットには、サブスクライバーが API を呼び出すために必要な情報が含まれています。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

以下の手順では、データアセットをインポートし、その後リビジョンを確定します。

リビジョン AWS CLI にアセットを追加するには、AWS Data Exchange コンソールまたは [AWS CLI](#) を使用します。

- [リビジョンへの API アセットの追加 \(コンソール\)](#)
- [リビジョンへの API アセットの追加 \(AWS CLI\)](#)

リビジョンへの API アセットの追加 (コンソール)

リビジョンにアセットを追加する (コンソール)

1. データセットの詳細ページの [API アセット] セクションで、[追加] を選択します。
2. [API ステージを選択] にある [Amazon API Gateway API] で、入力ボックスに API を入力するか、ドロップダウンリストから以下のいずれかを選択します。
 - 別の の API AWS アカウント – これは、アクセス許可が付与されたクロスアカウント API です。
 - これ AWS アカウント – これは の API です AWS アカウント。
 - a. [別の AWS アカウントのAPI] を選択した場合は、入力ボックスに API ID と [API ステージ名] を入力します。
 - b. これ AWS アカウントを選択した場合は、ドロップダウンリストから API ステージ名を選択します。

Note

新しい API ステージを作成するには、[新規作成] を選択し、[Amazon API Gateway で新しい API を作成] モーダルの手順に従います。新しいステージが作成されたら、ステップ 2 を繰り返します。

3. [Advanced configuration – optional] (高度な設定 – オプション) では、[Connect existing Amazon API Gateway usage plan] (既存の Amazon API Gateway の使用量プランを接続) することを選択して既存の使用プランに定義されているスロットリングとクォータ制限を使用し、[API key] (API キー) を入力することができます。
4. [Document API for subscribers] (サブスクライバーのドキュメント API) で、サブスクライバーが製品をサブスクライブした後で表示される API に関する詳細を入力します。
 - a. [API 名] には、サブスクライバーが API アセットを識別するために使用できる名前を入力します。

Note

[この AWS アカウントの中で] が選択されている場合、[API 名] が自動入力されていますが、これは必要に応じて変更できます。

[別の AWS アカウントのAPI] が選択されている場合、[API 名] にデフォルトの名前が入力されます。これは、この API が何かをサブスクライバーが簡単に理解できるように変更してください。

- b. [OpenAPI 3.0 specification] (OpenAPI 3.0 仕様) には、以下のいずれかを実行します。
 - i. OpenAPI 3.0 仕様ファイルを入力するか、コピーして貼り付ける。
 - ii. [.JSON ファイルからインポート] を選択して、ローカルコンピュータからインポートする.json ファイルを選択する。

インポートされた仕様がボックスに表示されます。
 - iii. [Import from Amazon API Gateway] (Amazon API Gateway からインポート) を選択して、インポートする仕様を選択する。

インポートされた仕様がボックスに表示されます。

- c. [その他のドキュメント – オプション] には、サブスクライバーが API について知っておくと役に立つ追加情報を入力します。Markdown がサポートされています。

Note

このアセットをリビジョンに追加した後で、OpenAPI 仕様とその他のドキュメントを編集することはできません。

リビジョンが確定されていないときにこの情報を更新する場合は、アセットを置き換えることができます。

リビジョンが確定されているときにこの情報を更新する場合は、更新されたアセットで新しいリビジョンを作成できます。

5. [API ステージを追加] を選択します。

アセット (この場合は API) をデータセットにインポートするジョブが開始されます。

Note

Amazon API Gateway に API がない場合は、API を作成するように求められます。

6. ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。
7. 追加する API がある場合は、ステップ 2 を繰り返します。
8. [リビジョンの概要] で、リビジョンとそのアセットを確認します。
9. [確定] を選択します。

データセットのリビジョンが正常に確定されました。

リビジョンを製品に追加する前に、[リビジョンを編集する](#)、または [リビジョンを削除する](#) ことができます。

これで、[新しい API データ製品を公開する](#) 準備が整いました。

リビジョンへの API アセットの追加 (AWS CLI)

API アセットは、IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API ジョブを実行することによって追加できます。

リビジョンに API アセットを追加する (AWS CLI)

1. `create-job` コマンドを使用して、リビジョンに API アセットを追加します。

```
$ AWS dataexchange create-job \  
  --type IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API \  
  --details '{"ImportAssetFromApiGatewayApi":  
{  
  "DataSetId": "$DATA_SET_ID", "RevisionId": "$REVISION_ID", "ApiId": "$API_ID", "Stage": "$API_STAGE"  
  {  
    "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:jobs/$JOB_ID",  
    "CreatedAt": "2021-09-11T00:38:19.875000+00:00",  
    "Details": {  
      "ImportAssetFromApiGatewayApi": {  
        "ApiId": "$API_ID",  
        "DataSetId": "$DATA_SET_ID",  
        "ProtocolType": "REST",  
        "RevisionId": "$REVISION_ID",  
        "Stage": "$API_STAGE"  
      }  
    },  
    "Id": "$JOB_ID",  
    "State": "WAITING",  
    "Type": "IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API",  
    "UpdatedAt": "2021-09-11T00:38:19.875000+00:00"  
  }  
}  
  
$ AWS dataexchange start-job --job-id $JOB_ID  
$ AWS dataexchange get-job --job-id $JOB_ID  
{  
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:0123456789012:jobs/$JOB_ID",  
  "CreatedAt": "2021-09-11T00:38:19.875000+00:00",  
  "Details": {  
    "ImportAssetFromApiGatewayApi": {  
      "ApiId": "$API_ID",  
      "DataSetId": "$DATA_SET_ID",  
      "ProtocolType": "REST",  
      "RevisionId": "$REVISION_ID",  
      "Stage": "$API_STAGE"  
      "ApiEndpoint": "string",  
      "ApiKey": "string",  
      "ApiName": "string",  
      "ApiDescription": "string",  
      "ApiSpecificationDownloadUrl": "string",
```

```
        "ApiSpecificationDownloadUrlExpiresAt": "string"
    }
},
"Id": "$JOB_ID",
"State": "COMPLETED",
"Type": "IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API",
"UpdatedAt": "2021-09-11T00:38:52.538000+00:00"
}
```

2. `list-revision-assets` コマンドを使用して、新しいアセットが適切に作成されたことを確認します。

```
$ AWS dataexchange list-revision-assets \
  --data-set-id $DATA_SET_ID \
  --revision-id $REVISION_ID
{
  "Assets": [
    {
      "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/$DATA_SET_ID/
revisions/$REVISION_ID/assets/$ASSET_ID",
      "AssetDetails": {
        "ApiGatewayApiAsset": {
          "ApiEndpoint": "https://$API_ID.execute-api.us-
east-1.amazonaws.com/$API_STAGE",
          "ApiId": "$API_ID",
          "ProtocolType": "REST",
          "Stage": "$API_STAGE"
        }
      },
      "AssetType": "API_GATEWAY_API",
      "CreatedAt": "2021-09-11T00:38:52.457000+00:00",
      "DataSetId": "$DATA_SET_ID",
      "Id": "$ASSET_ID",
      "Name": "$ASSET_ID/$API_STAGE",
      "RevisionId": "$REVISION_ID",
      "UpdatedAt": "2021-09-11T00:38:52.457000+00:00"
    }
  ]
}
```

これで、[API データ製品を公開する](#)準備が整いました。

リビジョンを編集する

確定後にリビジョンを編集する

1. [リビジョンの概要] で [確定解除] を選択します。

このリビジョンは確定済み状態ではなくなりましたというメッセージが表示されます。

2. リビジョンを編集するには、[リビジョンの概要] で、[アクション]、[編集] の順に選択します。
3. 変更を行ってから、[Update] (アップデート) を選択します。
4. 変更内容を確認してから、[確定] を選択します。

リビジョンを削除する

確定後にリビジョンを削除する

1. [リビジョンの概要] で [削除] を選択します。
2. [リビジョンを削除しますか?] ダイアログボックスに **Delete** を入力してから、[削除] を選択します。

Warning

これで、リビジョンとそのアセットのすべてが削除されます。このアクションを元に戻すことはできません。

ステップ 5: API が含まれる新しい製品を公開する

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットが含まれるリビジョンを確定したら、そのデータセットを製品の一部として公開する準備が整います。詳細については、「[の製品ベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。製品とオファーに関する必要な詳細情報のすべてが揃っていることを確認してください。

AWS Data Exchange コンソールまたは AWS Marketplace Catalog API を使用して、API を含む APIs。AWS Marketplace Catalog API を使用して新しい製品を公開する方法に関する詳細については、「[AWS Marketplace Catalog API AWS Data Exchange での の使用](#)」を参照してください。

- [API が含まれる新しい製品の公開 \(コンソール\)](#)

API が含まれる新しい製品の公開 (コンソール)

API が含まれる新しい製品を公開する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#)の左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
2. [製品] で [新しい製品を発行] を選択して [新しい製品を発行] ウィザードを開きます。
3. 製品の可視性で

- a. 商品の商品表示オプションを [公開] または [非公開] から選択します。

可視性が Public に設定されているすべての AWS Data Exchange 製品には、パブリックオファァーが必要です。

詳細については、「[での製品の可視性 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

- b. 製品の機密情報設定を選択します。

詳細については、「[の機密情報のカテゴリ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

- c. [次へ] を選択します。

4. [データを追加] で:

- a. [所有データセット] で、追加するデータセットの横にあるチェックボックスを選択し、[選択項目を追加] を選択します。

Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは追加されません。

- b. [選択したデータセット] に移動して、選択内容を確認します。

データセットの名前、データセットのタイプ、データセットの最終更新時のタイムスタンプを確認できます。

- c. [リビジョンアクセスルールを選択] にスクロールして、この製品に含まれるデータセットに設定するリビジョンアクセスルールを選択し、[次へ] を選択します。

詳細については、「[のリビジョンアクセスルール AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

- d. [次へ] を選択します。

5. [製品を定義] では:

- a. [製品概要] に、製品名、製品ロゴ、お問い合わせ先情報、製品カテゴリなど、製品に関する情報を入力します。

詳細については、「[の製品ベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

- b. (オプション) [データディクショナリとサンプル — オプション] で、データセット名の横にあるオプションボタンを選択してデータセットを選択し、[編集] を選択します。
 - i. [編集] ダイアログボックスで [アップロード] を選択し、新しいデータディクショナリをアップロードします。

.csv 形式の最大サイズが 1 MB のデータディクショナリを 1 つ選択できます。

- ii. コンピューターから保存されているデータディクショナリを選択し、[開く] を選択します。

データディクショナリの.csv ファイルが [編集] ダイアログボックスに表示されます。

Note

AWS Data Exchange データディクショナリはデータディクショナリテンプレートに準拠している必要があります。アップロードするデータディクショナリが保存されていない場合は、AWS Data Exchange コンソールで空のデータディクショナリテンプレート リンクまたは サンプルデータディクショナリ リンクを選択できます。

- iii. [データディクショナリのプレビュー] を選択してデータディクショナリをプレビューします。
 - iv. 「サンプル-オプション」で「サンプルをアップロード」を選択し、コンピューターからサンプルを選択して、「開く」を選択します。

サンプルは「編集」ダイアログボックスに表示されます。

Note

最大 10 個のサンプルをアップロードできます。最大サイズは 50 MB です。.csv 形式のサンプルはプレビューできます。

- v. 商品詳細ページに表示される各サンプルの説明を入力します。
 - vi. [保存] を選択します。
6. [商品定義] に、商品の [簡単な説明] と [詳細な説明] を入力します。

詳細説明にテンプレートを使用する場合は、[テンプレートを適用] を選択し、テンプレートの種類を選択してから、テンプレートに特定の商品情報を入力します。

7. [次へ] をクリックします。
8. 「公開オファーを追加」(公開オファー用) または 「カスタムオファーを追加」(非公開オファー用) でオファーを設定します。

可視性が Public に設定されているすべての AWS Data Exchange 製品には、パブリックオファーが必要です。

- a. プライベートオファーのみ:
 - i. リストされているオファータイプから、プライベートオファー、更新済みのプライベートオファー、または Bring Your Own Subscription (BYOS) の中から 1 つを選択します。
 - ii. [サブスクライバーアカウント情報] セクションで、オファーを提示するサブスクライバーアカウントを少なくとも 1 つ追加します。
- b. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
- c. 従量制料金 (オプション) の場合は、[追加] を選択します。
 - i. 「従量制コストを追加」で、「タイプ」リストから API 呼び出しのコストの種類を選択します。
 - API リクエスト単位
 - 成功 API リクエスト単位
 - 転送されたデータ単位 (バイト)
 - 新しいカスタム従量制コスト
 - ii. 購読者の請求書に記載されているコスト表示名を入力または更新します。
 - iii. 事前に定義された従量制料金を使用している場合、キーは自動的に生成され、編集できないため、レスポンスヘッダーに送り返す必要もありません。
 - iv. 新しいカスタム従量制コストを作成する場合は、API レスポンスヘッダーの従量制コストの識別子であるキーを入力します (最大 15 文字)。

このキーは x-amz-dataexchange-metering レスポンスヘッダーの一部として送り返す必要があります。

Example カスタムキー

VertexCount というカスタムキーと別の **EdgeCount** というカスタムキーというがある場合、「x-amz-dataexchange-metering」レスポンスヘッダーの値はになることもあれば、2つの別々のヘッダー行を返すこともあります。

```
x-amz-dataexchange-metering: VertexCount=3
```

```
x-amz-dataexchange-metering: EdgeCount=10
```

- v. サブスクライバーがユニットごとに請求する価格を [価格/ユニット] に入力します。
- vi. (オプション) 単位数を入力すると、従量制料金計算ツールに費用の例が表示されます。
- vii. (オプション) 商品詳細ページに表示される従量制コストの簡単な説明を入力します。
- viii. [追加] を選択します。
- ix. (オプション) 同じ手順を繰り返して、その他の従量制料金を追加します。

従量制費用の順序は商品詳細ページに表示されます。並べ替えることはできません。

Note

オファーの作成後、従量制料金の価格と説明を編集できます。詳細については、「[で製品とオファーの詳細を更新する AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

- d. [オファーの有効期限] を選択します。サブスクライバーはこの日までにオファーを受諾する必要があります。
- e. 税の設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、返金ポリシー を選択します。
- f. (オプション) パブリック オファーの場合のみ、サブスクリプション検証 を設定します。これにより、この製品をサブスクライブできるユーザーを制御できるようになります。詳細については、「[のプロバイダーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
- g. [オファーの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。

- h. [次へ] を選択します。
9. 「レビューと公開」セクションで、商品情報を確認します。
 - a. 商品ページのプレビューを展開して、公開後に商品ページがどのように表示されるかを確認してください。
 - b. (オプション) 任意のセクションの [編集] ボタンを選択して、そのセクションを編集します。
 10. 製品とパブリックオファーをユーザー全員に表示し、利用可能にしてもよい場合は、[公開] を選択します。

これで、パブリックオファーでデータ製品を公開する手動の部分が完了しました。 は、製品を AWS Data Exchange 準備して公開します。

[製品の概要] ページの製品のステータスが[承認待ち] になり、公開されると [公開済み] に変更されま

ステップ 6: (オプション) 製品をコピーする

最初の製品を作成したら、その詳細とパブリックオファーをコピーして新しい製品を作成することができます。

Note

パブリック、プライベート、公開済み、または未公開の製品をコピーできます。製品に関連付けられているカスタムオファーはコピーされませんが、パブリックオファーがコピーされます。

製品をコピーする

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で、コピーする製品の横にあるボタンをオンにします。
4. [アクション] ドロップダウンから [コピーを作成] を選択します。
5. [新しい製品を公開] ワークフローを続行します。ワークフローの詳細情報は、ステップ 3 で選択した製品に基づいて既に入力されています。詳細については、「[ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)」を参照してください。

Amazon Redshift データセット AWS Data Exchange を含む での製品の公開

Amazon Redshift データセットには、Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有が含まれています。データ共有が含まれる製品を顧客がサブスクライブすると、データプロバイダーがデータ共有に追加するテーブル、ビュー、スキーマ、およびユーザー定義の関数に対する読み取り専用アクセス権が付与されます。

データプロバイダーとして、クラスターに Amazon Redshift データ共有 AWS Data Exchange 用のを作成します。次に、サブスクライバーがアクセスするスキーマ、テーブル、ビュー、およびユーザー定義の関数をデータ共有に追加します。次に AWS Data Exchange、データ共有を にインポートし、データセットを作成して製品に追加し、製品を公開します。サブスクライバーには、サブスクリプション時にデータ共有へのアクセス権が付与されます。

Amazon Redshift で Amazon Redshift のデータ共有を設定したら、AWS Data Exchange で新しい Amazon Redshift データセットを作成できます。その後、リビジョンを作成し、Amazon Redshift のデータ共有アセットを追加できます。これにより、AWS Data Exchange エンドポイントへのリクエストが Amazon Redshift データ共有にプロキシされます。次に、このデータセットを製品に追加し、料金を追加できます。その後、見込みサブスクライバーは製品を表示し、AWS Data Exchange カタログでサブスクライブできます。

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して Amazon Redshift データセットを作成し、Amazon Redshift データセットを使用して新しい製品を公開するプロセスについて説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: Amazon Redshift のデータ共有アセットを作成する](#)
- [ステップ 2: Amazon Redshift データセットを作成する](#)
- [ステップ 3: リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 4: リビジョンに Amazon Redshift のデータ共有アセットを追加する](#)
- [ステップ 5: Amazon Redshift のデータセットが含まれる新しい製品を公開する](#)
- [ステップ 6: \(オプション\) 製品をコピーする](#)

ステップ 1: Amazon Redshift のデータ共有アセットを作成する

アセットは のデータです AWS Data Exchange。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

Amazon Redshift のデータ共有アセットを作成する

1. Amazon Redshift クラスター内にデータ共有を作成します。

データ共有の作成方法の詳細については、「Amazon Redshift データベースデベロッパーガイド」の「プロデューサーとして AWS Data Exchange のデータ共有の使用」を参照してください。<https://docs.aws.amazon.com/redshift/latest/dg/welcome.html>

Note

データ共有はパブリックアクセス可能に設定することをお勧めします。そうしなければ、パブリックアクセス可能なクラスターを持つ顧客がデータを消費できなくなります。

2. [ステップ 2: Amazon Redshift データセットを作成する](#).

ステップ 2: Amazon Redshift データセットを作成する

Amazon Redshift データセットには、Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有が含まれています。詳細については、「[Amazon Redshift のデータセット](#)」を参照してください。

Amazon Redshift データセットを作成する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. [データセットタイプを選択] で、[Amazon Redshift のデータ共有] を選択します。
5. [データセットの定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
6. [タグを追加 - オプション] でタグを追加します。
7. [作成] を選択します。

ステップ 3: リビジョンを作成する

次の手順では、AWS Data Exchange コンソールでデータセットを作成した後にリビジョンを作成します。詳細については、「[改訂](#)」を参照してください。

リビジョンを作成する

1. データセットの詳細ページの [データセットの概要] セクションで以下を実行します。
 - a. (オプション) [名前を編集] を選択してデータセットに関する情報を編集します。
 - b. (オプション) [削除] を選択してデータセットを削除します。
2. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
3. [リビジョンを定義] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
4. [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
5. [作成] を選択します。
6. 前のステップからの変更を確認、編集、または削除します。

ステップ 4: リビジョンに Amazon Redshift のデータ共有アセットを追加する

次の手順では、Amazon Redshift データ共有アセットをリビジョンに追加し、AWS Data Exchange コンソールでリビジョンを確定します。詳細については、「[アセット](#)」を参照してください。

リビジョンにアセットを追加する

1. データセットの詳細ページの AWS Data Exchange [Amazon Redshift のデータ共有] セクションで [データ共有を追加] を選択します。
2. [AWS Data Exchange Amazon Redshift のデータ共有] でデータ共有を選択し、[データ共有を追加] を選択します。

Note

リビジョンには、最大 20 個のデータ共有を追加できます。

アセットをリビジョンにインポートするジョブが開始されます。

3. ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。
4. 追加するデータがある場合は、ステップ 1 を繰り返します。
5. [リビジョンの概要] で、リビジョンとそのアセットを確認します。
6. [確定] を選択します。

データセットのリビジョンが正常に確定されました。

リビジョンは、製品に追加する前に [編集](#) または [削除](#) できます。

ステップ 5: Amazon Redshift のデータセットが含まれる新しい製品を公開する

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットが含まれるリビジョンを確定したら、Amazon Redshift のデータセットが含まれる製品を公開する準備が整います。詳細については、「[の製品ベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。製品とオファーに関する必要な詳細情報のすべてが揃っていることを確認してください。

Amazon Redshift のデータセットが含まれる製品を公開する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) の左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
2. [製品] で [新しい製品を発行] を選択して [新しい製品を発行] ウィザードを開きます。
3. [製品の可視性] セクションで、製品の [製品の可視性オプション] と [機密情報] 設定を選択してから、[次へ] を選択します。詳細については、[での製品の可視性 AWS Data Exchange およびの機密情報のカテゴリ AWS Data Exchange](#) を参照してください。
4. [データを追加] セクションの [所有データセット] で、追加するデータセットの横にあるチェックボックスを選択し、[選択項目を追加] を選択します。

Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは追加されません。

- a. [選択したデータセット] に移動して、選択内容を確認します。

データセットの名前、データセットのタイプ、データセットの最終更新時のタイムスタンプを確認できます。

- b. [リビジョンアクセスルールを選択] に進み、この製品に含まれるデータセットに設定するリビジョンアクセスルールを選択し、[次へ] を選択します。

詳細については、[のリビジョンアクセスルール AWS Data Exchange](#) を参照してください。

5. [製品を定義] セクションの [製品概要] で、製品名、製品ロゴ、お問い合わせ先情報、製品カテゴリなど、製品に関する情報を入力します。

詳細については、「[の製品ベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

6. (オプション) 製品の定義セクションの「データディクショナリとサンプル」 - オプションで、データセット名の横にあるオプションボタンを選択してデータセットを選択し、「編集」を選択します。

詳細については、[のデータディクショナリ AWS Data Exchange](#)および[のサンプルデータ AWS Data Exchange](#)を参照してください。

- a. 編集 ダイアログボックスの「データディクショナリをアップロード」で、「ファイルを追加」を選択して新しいデータディクショナリをアップロードします。

.csv 形式の最大サイズが 1 MB のデータディクショナリを 1 つ選択できます。

- b. コンピューターから保存されているデータディクショナリを選択し、[開く] を選択します。

データディクショナリの.csv ファイルが [編集] ダイアログボックスに表示されます。

 Note

データディクショナリは、AWS Data Exchange データディクショナリテンプレートに準拠している必要があります。アップロードする保存済みデータディクショナリがない場合は、AWS Data Exchange コンソールで空のデータディクショナリテンプレートリンクまたはサンプルデータディクショナリリンクを選択できます。

- c. [データディクショナリのプレビュー] を選択してプレビューします。
- d. 「サンプル-オプション」で「サンプルをアップロード」を選択し、コンピューターからサンプルを選択して、[開く]を選択します。

サンプルは「編集」ダイアログボックスに表示されます。

 Note

最大 10 個のサンプルをアップロードできます。最大サイズは 50 MB です。.csv 形式のサンプルはプレビューできます。

- e. 商品詳細ページに表示される各サンプルの説明を入力します。
 - f. [保存] を選択します。
7. [商品定義] に、商品の [簡単な説明] と [詳細な説明] を入力します。

詳細説明にテンプレートを使用する場合は、[テンプレートを適用] を選択し、テンプレートの種類を選択してから、テンプレートに特定の商品情報を入力します。

8. [次へ] をクリックします。
9. オファーを設定します。
 - パブリックオファーを作成する場合は、[パブリックオファーを追加] セクションで、オファーを設定します。パブリックオファーは、可視性がパブリック に設定されているすべての AWS Data Exchange 製品に必須です。
 1. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
 2. 米国売上税の設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーを選択します。
 3. (オプション) [サブスクリプション検証] を設定します。これは、誰がこの製品をサブスクライブできるかを制御できるようにします。詳細については、「[「のプロバイダーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange」](#)」を参照してください。
 4. [オファーの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。
 5. [次へ] を選択します。
 - プライベートオファーを作成している場合は、[カスタムオファーを追加] セクションでオファーの詳細を設定します。
 1. [サブスクライバーアカウント情報] セクションで、オファーを提示するサブスクライバーアカウントを少なくとも 1 つ追加します。
 2. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
 3. [Offer expiration date] (オファーの有効期限) を選択します。サブスクライバーはこの日までにオファーを受諾する必要があります。
 4. 米国売上税の設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーを選択します。
 5. [オファーの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。
 6. [次へ] を選択します。
10. [レビューと公開] セクションで製品情報を確認し、[製品ページのプレビュー] を展開してページが公開後にどのように見えるかを確認します。

11. 製品とパブリックオファーをユーザー全員に表示し、利用可能にしてもよい場合は、[公開] を選択します。

これで、パブリックオファーでデータ製品を公開する手動の部分が完了しました。は、製品を AWS Data Exchange 準備して公開します。[製品の概要] ページの製品のステータスが[承認待ち] になり、公開されると [公開済み] に変更されます。

ステップ 6: (オプション) 製品をコピーする

最初の製品を作成したら、その詳細とパブリックオファーをコピーして新しい製品を作成することができます。

Note

パブリック、プライベート、公開済み、または未公開の製品をコピーできます。製品に関連付けられているカスタムオファーはコピーされませんが、パブリックオファーがコピーされます。

製品をコピーする

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で、コピーする製品の横にあるボタンをオンにします。
4. [アクション] ドロップダウンから [コピーを作成] を選択します。
5. [製品を公開] ワークフローを続行します。ワークフローの詳細情報は、ステップ 3 で選択した製品に基づいて既に入力されています。詳細については、「[ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)」を参照してください。

Amazon S3 データアクセスを含むでの AWS Data Exchange 製品の公開

AWS Data Exchange for Amazon S3 を使用すると、プロバイダーは Amazon S3 バケットまたは特定のプレフィックスと Amazon S3 オブジェクトへの直接アクセスを共有できます。また、プロバイダーは AWS Data Exchange を使用して、サブスクリプション、使用権限、請求、支払いを自動的に管理します。

データプロバイダーは、コピーを作成または管理しなくても、Amazon S3 バケット全体、または特定のプレフィックスと Amazon S3 オブジェクトへの直接アクセスを共有できます。これらの共有 Amazon S3 オブジェクトは、AWS Key Management Service (AWS KMS) または AWS マネージドキー (SSE-S3) に保存されているカスターマネージドキーを使用してサーバー側で暗号化できます。KMS キーのモニタリングおよび暗号化コンテキストの理解の詳細については、[the section called “Amazon S3 データアクセスのキー管理”](#) を参照してください。顧客がデータ製品に登録すると、AWS Data Exchange によって、Amazon S3 アクセスポイントが自動的にプロビジョニングされ、お客様に代わってリソースポリシーが更新され、サブスクライバーに読み取り専用アクセス権が付与されます。サブスクライバーは、Amazon S3 のデータにアクセスするために Amazon S3 バケット名を使用する任意の場所で、Amazon S3 アクセスポイントのエイリアスを使用できます。

サブスクリプションが終了すると、サブスクライバーの権限は取り消されます。サブスクライバーとの契約を早期に終了することを選択した場合は、[AWS サポート](#) にお問い合わせください。データ購読契約 (DSA) に購読条件を追加できます。

Amazon S3 データアクセスが含まれる製品を発行するには、以下の前提条件を満たす必要があります。

前提条件

- データをホストする Amazon S3 バケットが、Amazon S3 バケット所有者による強制設定で [ACL 無効] をオンにして設定されていることを確認します。詳細については、Simple Storage Service ユーザーガイドの[オブジェクトの所有権のコントロールとバケットに対する ACL の無効化](#)を参照してください。
- 共有オブジェクトにサブスクライバーが正常にアクセスするには、共有オブジェクトが Amazon S3 標準ストレージクラスに含まれるか、S3 インテリジェント階層化を使用して管理されている必要があります。他のストレージクラスに属している場合、またはディープアーカイブでインテリジェント階層化を有効にしている場合、サブスクライバーには RestoreObject の権限がないためエラーが表示されます。
- データをホストする Amazon S3 バケットで暗号化が無効になっているか、Amazon S3 マネージドキー (SSE-S3) または () に保存 AWS Key Management Service されているカスターマネージドキーで暗号化されていることを確認します AWS KMS。
- カスタマー管理キーを使用している場合は、次のものがが必要です。
 1. KMS キーに対する kms:CreateGrant への IAM 権限。これらのアクセス許可には、キーポリシー、IAM 認証情報、または KMS キーの AWS KMS 許可を使用してアクセスできます。キー管理と が KMS 許可 AWS Data Exchange を使用する AWS 方法の詳細については、「」を参照してください [AWS KMS 許可の作成](#)。

アクセス権限を付与するにはユーザー、グループ、またはロールにアクセス許可を追加します。

- 以下のユーザーとグループ AWS IAM Identity Center :

アクセス許可セットを作成します。「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[権限設定を作成する](#)」の手順に従ってください。

- IAM 内で、ID プロバイダーによって管理されているユーザー:

ID フェデレーションのロールを作成します。詳細については「IAM ユーザーガイド」の「[サードパーティー ID プロバイダー \(フェデレーション\) 用のロールを作成する](#)」を参照してください。

- IAM ユーザー:

- ユーザーが担当できるロールを作成します。手順については「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ユーザーのロールの作成](#)」を参照してください。

- (お奨めできない方法) ポリシーをユーザーに直接アタッチするか、ユーザーをユーザーグループに追加します。詳細については「IAM ユーザーガイド」の「[ユーザー \(コンソール\) へのアクセス権限の追加](#)」を参照してください。

ユーザーが の AWS 外部とやり取りする場合は、プログラムによるアクセスが必要です AWS Management Console。プログラムによるアクセスを許可する方法は、 がアクセスするユーザーのタイプによって異なります AWS。

ユーザーにプログラマチックアクセス権を付与するには、以下のいずれかのオプションを選択します。

プログラマチックアクセス権を必要とするユーザー	目的	方法
ワークフォースアイデンティティ (IAM アイデンティティセンターで管理されているユーザー)	一時的な認証情報を使用して、AWS CLI、AWS SDKs、または AWS APIs。	使用するインターフェイスの指示に従ってください。 • については AWS CLI、AWS Command Line Interface 「 ユーザーガイド 」の「 を使用する AWS CLI ように AWS IAM Identity Center を設定する」を参照してください。 • AWS SDKs、ツール、API については、SDK および AWS APIs 「 IAM Identity Center 認証 」を参照してください。AWS SDKs
IAM	一時的な認証情報を使用して、AWS CLI、AWS SDKs、または AWS APIs。	「IAM ユーザーガイド 」の「 AWS リソースでの一時的な認証情報の使用 」の手順に従います。

プログラマチックアクセス権を必要とするユーザー	目的	方法
IAM	(非推奨) 長期認証情報を使用して、AWS CLI、AWS SDKs、または AWS APIs。	<p>使用するインターフェイスの指示に従ってください。</p> <ul style="list-style-type: none"> • については AWS CLI、「AWS Command Line Interface ユーザーガイド」の「IAM ユーザー認証情報を使用した認証」を参照してください。 • AWS SDKs 「SDK とツールのリファレンスガイド」の「長期的な認証情報を使用した認証」を参照してください。AWS SDKs • API AWS APIs 「IAM ユーザーガイド」の「IAM ユーザーのアクセスキーの管理」を参照してください。

KMS キーのキーポリシーに追加する方法を示す JSON ポリシーの例を次に示します。

```
{
  "Sid": "AllowCreateGrantPermission",
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {
    "AWS": "<IAM identity who will call Dataexchange API>"
  },
  "Action": "kms:CreateGrant",
  "Resource": "*"
}
```

次のポリシーは、使用される IAM ID のポリシー追加例を示しています。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Sid": "AllowCreateGrantPermission",
      "Action": [
        "kms:CreateGrant"
      ],
      "Resource": [
        <Enter KMS Key ARNs in your account>
      ]
    }
  ]
}
```

Note

前のステップで KMS キーに対する `kms:CreateGrant` 権限を取得していれば、クロスアカウント KMS キーも許可されます。別のアカウントがキーを所有している場合は、上記の例で説明されているように、キーポリシーと IAM 認証情報に対する権限が必要です。

2. Amazon S3 バケットキー機能を使用して、必ず KMS キーを使用して Amazon S3 バケット内の既存のオブジェクトと新しいオブジェクトを暗号化してください。詳細については、Amazon Simple Storage Service ユーザーガイドの「[S3 バケットキーの設定](#)」を参照してください。
 - Amazon S3 バケットに追加された新しいオブジェクトについては、デフォルトで Amazon S3 バケットキー暗号化を設定できます。Amazon S3Bucket キー機能を使用せずに既存のオブジェクトを暗号化した場合、これらのオブジェクトは Amazon S3 バケットキーを使用して暗号化するように移行する必要があります。

既存のオブジェクトの Amazon S3 バケットキーを有効にするには、`copy` オペレーションを使用します。詳細については、「[バッチオペレーションを使用してオブジェクトレベルで Amazon S3 バケットキーを設定する](#)」を参照してください。

- AWS マネージド KMS キー または AWS 所有のキー はサポートされていません。サポートされていない暗号化スキームから現在サポートされている暗号化スキームに移行できます。詳細については、AWS ストレージブログの[Amazon S3暗号化の変更](#)」を参照してください。

- データをホストする Amazon S3 バケットを設定して、AWS Data Exchange 所有アクセスポイントを信頼します。これらの Amazon S3 バケットポリシーを更新して、Amazon S3 アクセスポイントを作成する AWS Data Exchange 権限を付与し、ユーザーに代わってサブスクライバーのアクセスを許可または削除する必要があります。ポリシーステートメントがない場合は、バケットポリシーを編集して Amazon S3 ロケーションをデータセットに追加する必要があります。

次にポリシーの例を示します。<Bucket ARN> を適切な値に置き換えてください。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "AWS": "*"
      },
      "Action": [
        "s3:GetObject",
        "s3:ListBucket"
      ],
      "Resource": [
        "<Bucket ARN>",
        "<Bucket ARN>/*"
      ],
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "s3:DataAccessPointAccount": [
            "337040091392",
            "504002150500",
            "366362662752",
            "330489627928",
            "291973504423",
            "461002523379",
            "036905324694",
            "540564263739",
            "675969394711",
            "108584782536",
            "844053218156"
          ]
        }
      }
    }
  ]
}
```

```
    }  
  ]  
}
```

を通じて Amazon S3 バケット全体にデータ共有 AWS Data Exchange を委任できます。ただし、データセット内で共有したいバケットの特定のプレフィックスとオブジェクトに委任の範囲を委任することができます。以下に、スコープ付きポリシーの例を示します。<Bucket ARN> と "mybucket/folder1/*" を自分の情報で置き換えます。

```
{  
  "Version": "2012-10-17",  
  "Statement": [  
    {  
      "Sid": "DelegateToAdxGetObjectsInFolder1",  
      "Effect": "Allow",  
      "Principal": {  
        "AWS": "*"  
      },  
      "Action": [  
        "s3:GetObject"  
      ],  
      "Resource": [  
        "arn:aws:s3:::mybucket/folder1/*"  
      ],  
      "Condition": {  
        "StringEquals": {  
          "s3:DataAccessPointAccount": [  
            "337040091392",  
            "504002150500",  
            "366362662752",  
            "330489627928",  
            "291973504423",  
            "461002523379",  
            "036905324694",  
            "540564263739",  
            "675969394711",  
            "108584782536",  
            "844053218156"  
          ]  
        }  
      }  
    }  
  ],  
}
```

```
{
  "Sid": "DelegateToAdxListObjectsInFolder1",
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {
    "AWS": "*"
  },
  "Action": "s3:ListBucket",
  "Resource": "arn:aws:s3:::mybucket",
  "Condition": {
    "StringLike": {
      "s3:prefix": [
        "folder1/*"
      ]
    }
  },
  "StringEquals": {
    "s3:DataAccessPointAccount": [
      "337040091392",
      "504002150500",
      "366362662752",
      "330489627928",
      "291973504423",
      "461002523379",
      "036905324694",
      "540564263739",
      "675969394711",
      "108584782536",
      "844053218156"
    ]
  }
}
```

同様に、アクセス範囲を1つのファイルのみに限定するには、プロバイダーは次のポリシーを使用できます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "DelegateToAdxGetMyFile",
      "Effect": "Allow",
```

```
"Principal": {
  "AWS": "*"
},
"Action": [
  "s3:GetObject"
],
"Resource": [
  "arn:aws:s3:::mybucket/folder1/myfile"
],
"Condition": {
  "StringEquals": {
    "s3:DataAccessPointAccount": [
      "337040091392",
      "504002150500",
      "366362662752",
      "330489627928",
      "291973504423",
      "461002523379",
      "036905324694",
      "540564263739",
      "675969394711",
      "108584782536",
      "844053218156"
    ]
  }
}
]
```

以下のトピックでは、AWS Data Exchange コンソールを使用して Amazon S3 データセットを作成し、Amazon S3 データセットを使用して新しい製品を公開するプロセスについて説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: Amazon S3 データセットを作成する](#)
- [ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを設定する](#)
- [ステップ 3: データセットを確認して完成する](#)
- [ステップ 4: AWS Data Exchange 製品に Amazon S3 データセットを追加する](#)
- [ステップ 5: Amazon S3 へのアクセスを含む新しい製品を公開する](#)

• [ステップ 6: \(オプション\) 製品をコピーする](#)

ステップ 1: Amazon S3 データセットを作成する

Amazon S3 データセットを作成するには

1. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. [データセットタイプを選択] で [Amazon S3 オブジェクト] を選択します。
5. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[データセットのベストプラクティス](#)」を参照してください。
6. (オプション) [タグを追加 – オプション] でタグを追加します。
7. [データセットを作成] を選択して、続行します。

ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを設定する

サブスクライバーに提供する Amazon S3 バケットまたは Amazon S3 バケットロケーションを選択します。Amazon S3 バケット全体を選択することも、Amazon S3 バケット内で最大 5 つのプレフィックスまたはオブジェクトを指定することもできます。Amazon S3 バケットをさらに追加するには、別の Amazon S3 データ共有を作成する必要があります。

Amazon S3 データ共有アクセスを設定する

1. 「Amazon S3 データアクセスの設定」ページで、「Amazon S3 ロケーションの選択」を選択します。
2. [Amazon S3 ロケーションの選択] で、検索バーに Amazon S3 バケット名を入力するか、Amazon S3 バケット、プレフィックス、または Amazon S3 ファイルを選択して [選択項目を追加] を選択します。次に、[アプリケーションを追加] を選択します。

Note

プロバイダーが共有するプレフィックスやオブジェクトを再設定する必要がないように、オブジェクトとプレフィックスの大半が保存されている最上位のフォルダを選択することをお勧めします。

3. 「設定の詳細」で、リクエスト支払い設定を選択します。2つのオプションがあります。
 - リクエスト支払いを有効にする (推奨) — リクエストは Amazon S3 バケット内のすべてのリクエストと転送に対して支払いを行います。このオプションをお勧めするのは、サブスクライバーのリクエストや送金による意図しないコストを防ぐのに役立つからです。
 - リクエスト支払いを無効にする — Amazon S3 バケット内のサブスクライバーのリクエストと転送に対して支払いを行います。

リクエスト支払いの詳細については、「Amazon Simple Storage Service デベロッパーガイド」の「[リクエスト支払いバケットのオブジェクト](#)」を参照してください。

4. ニーズに最適なバケットポリシーを選択してください。Amazon S3 バケット全体に1つのバケットポリシーを使用するには、[一般]を選択します。これは1回限りの設定で、future プレフィックスやオブジェクトを共有するために追加の設定を行う必要はありません。選択した Amazon S3 ロケーションに固有のバケットポリシーを使用するには、[特定]を選択します。共有 Amazon S3 バケットには、Amazon S3 データアクセスデータセットを正常に作成するためのバケットポリシーが必要で、ACL を有効にすることはできません。
 - a. ACL を無効にするには、バケット権限に移動し、[オブジェクト所有権] を [バケット所有者強制] に設定します。
 - b. バケットポリシーを追加するには、バケットステートメントをクリップボードにコピーします。Amazon S3 コンソールの Amazon S3 権限タブのバケットポリシーセクションで、[編集]を選択し、バケットポリシーをステートメントに貼り付けて、変更を保存します。
5. Amazon S3 バケットに AWS KMS カスタマーマネージドキーを使用して暗号化されたオブジェクトが含まれている場合は、そのようなすべての KMS キーをと共有する必要があります AWS Data Exchange。KMS キーを使用して Amazon S3 バケット内のオブジェクトを暗号化する際に必要な前提条件については、[the section called “Amazon S3 データアクセスの抑制”](#) を参照してください。これらの KMS キーをと共有するには AWS Data Exchange、以下を実行します。
 - Amazon Amazon S3 データアクセスの設定ページから、カスタマーマネージド KMS キーで、 から選択 AWS KMS keysするか AWS KMS key ARN を入力するを選択し、Amazon S3 共有ロケーションの暗号化にAWS KMS keys現在使用されているすべての のを選択します。は、これらの KMS キー AWS Data Exchange を使用して、サブスクライバーが共有ロケーションにアクセスするための許可を作成します。詳細については、「[AWS KMSの許可](#)」を参照してください。

Note

AWS KMS には、既存の許可を含め、KMS キーごとに 50,000 個の許可の制限があります。

6. Amazon S3 の場所、選択した KMS キー、設定の詳細を確認し、[保存して続行] を選択します。

ステップ 3: データセットを確認して完成する

新しく作成したデータセットを確認して完成させます。別の Amazon S3 データアクセスを作成して追加し、追加の Amazon S3 バケット、プレフィックス、オブジェクトへのアクセスを共有する場合は、[別の Amazon S3 データアクセスを追加] を選択します。

Note

これは、最初の Amazon S3 データアクセスで選択した Amazon S3 バケットとは別の Amazon S3 バケットでホストされているデータへのアクセスを共有する必要がある場合にお勧めします。

公開前に変更を加える場合は、[下書きを保存] を選択してデータセットをドラフトとして保存できます。次に、[データセットを確定] を選択して製品に追加します。

ステップ 4: AWS Data Exchange 製品に Amazon S3 データセットを追加する

以下の手順では、データセットを新しい製品または既存の AWS Data Exchange 製品に追加します。

データセットを新規または既存の AWS Data Exchange 製品に追加するには

1. [所有データセット] ページの [データセットの概要] で、[データセットの名前を編集]、[削除]、または [データセットから製品を作成] を行うことができます。
2. 製品の説明、ユースケース、メタデータ、価格、契約条件を指定して、製品の作成を完了します。
3. 完成したら、製品を確認して公開します。

Note

顧客があなたの製品を購読すると、顧客はあなたに代わって作成された Amazon S3 アクセスポイントを使用してデータを読み取り、使用するアクセス権を受け取ります。

ステップ 5: Amazon S3 へのアクセスを含む新しい製品を公開する

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットを含むリビジョンを確定させた後、Amazon S3 データ アクセスを使用して製品を公開できます。詳細については、「[の製品ベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。製品とオファーに関する必要な詳細情報のすべてが揃っていることを確認してください。

Note

Amazon S3 のロケーションが変更され、サブスクライバーがこれらのオブジェクトにアクセスできない場合を除いて、共有 Amazon S3 オブジェクトを更新するときに新しいリビジョンを作成する必要はありません。

Amazon S3 へのアクセス権が含まれる新しい製品を公開する

1. [AWS Data Exchange コンソール](#)の左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
2. [製品] で [新しい製品を発行] を選択して [新しい製品を発行] ウィザードを開きます。
3. [製品の可視性] セクションで、製品の [製品の可視性オプション] と [機密情報] 設定を選択してから、[次へ] を選択します。詳細については、[での製品の可視性 AWS Data Exchange](#)および [機密情報のカテゴリ AWS Data Exchange](#)を参照してください。
4. [データを追加] セクションの [所有データセット] で、追加するデータセットの横にあるチェックボックスを選択し、[選択項目を追加] を選択します。

Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは追加されません。

- a. [選択したデータセット] に移動して、選択内容を確認します。

データセットの名前、データセットのタイプ、データセットの最終更新時のタイムスタンプを確認できます。

- b. [リビジョンアクセスルールを選択] に進み、この製品に含まれるデータセットに設定するリビジョンアクセスルールを選択し、[次へ] を選択します。

詳細については、[のリビジョンアクセスルール AWS Data Exchange](#)を参照してください。

5. [製品を定義] セクションの [製品概要] で、製品名、製品ロゴ、お問い合わせ先情報、製品カテゴリなど、製品に関する情報を入力します。

詳細については、「[の製品ベストプラクティス AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

6. (オプション) 製品の定義セクションの「データディクショナリとサンプル」 – オプションで、データセット名の横にあるオプションボタンを選択してデータセットを選択し、編集を選択します。

詳細については、[のデータディクショナリ AWS Data Exchange](#)および[のサンプルデータ AWS Data Exchange](#)を参照してください。

- a. 編集ダイアログボックスの「データディクショナリをアップロード」で、「ファイルを追加」を選択して新しいデータディクショナリをアップロードします。

.csv 形式の最大サイズが 1 MB のデータディクショナリを 1 つ選択できます。

- b. コンピューターから保存されているデータディクショナリを選択し、[開く] を選択します。

データディクショナリの.csv ファイルが [編集] ダイアログボックスに表示されます。

Note

データディクショナリは、AWS Data Exchange データディクショナリテンプレートに準拠している必要があります。アップロードする保存済みデータディクショナリがない場合は、AWS Data Exchange コンソールで空のデータディクショナリテンプレートリンクまたはサンプルデータディクショナリリンクを選択できます。

- c. [データディクショナリのプレビュー] を選択してデータディクショナリをプレビューします。

- d. 「サンプル-オプション」で「サンプルをアップロード」を選択し、コンピューターからサンプルを選択して、「開く」を選択します。

サンプルは「編集」ダイアログボックスに表示されます。

 Note

最大 10 個のサンプルをアップロードできます。最大サイズは 50 MB です。.csv 形式のサンプルはプレビューできます。

- e. 商品詳細ページに表示される各サンプルの説明を入力します。
 - f. [保存] を選択します。
7. [商品定義] に、商品の [簡単な説明] と [詳細な説明] を入力します。

詳細説明にテンプレートを使用する場合は、[テンプレートを適用] を選択し、テンプレートの種類を選択して、テンプレートに特定の商品の詳細を入力します。

8. [次へ] をクリックします。
 9. オファーを設定します。
- パブリックオファーを作成する場合は、[パブリックオファーを追加] セクションで、オファーを設定します。パブリックオファーは、可視性がパブリックに設定されているすべての AWS Data Exchange 製品に必須です。
 1. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
 2. 米国売上税の設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーを選択します。
 3. (オプション) [サブスクリプション検証] を設定して、誰がこの製品をサブスクライブできるかを制御できるようにします。詳細については、「[のプロバイダーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
 4. [オファーの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。
 5. [次へ] を選択します。
 - プライベートオファーを作成している場合は、[カスタムオファーを追加] セクションでオファーの詳細を設定します。

1. [サブスクライバーアカウント情報] セクションで、オファーを提示するサブスクライバーアカウントを少なくとも 1 つ追加します。
 2. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
 3. [Offer expiration date] (オファーの有効期限) を選択します。サブスクライバーはこの日までにオファーを受諾する必要があります。
 4. 米国売上税の設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーを選択します。
 5. [オファーの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。
 6. [次へ] を選択します。
10. [レビューと公開] セクションで製品情報を確認し、[製品ページのプレビュー] を展開してページが公開後にどのように見えるかを確認します。
 11. 製品とパブリックオファーをユーザー全員に表示し、利用可能にしてもよい場合は、[公開] を選択します。

これで、パブリックオファーでデータ製品を公開する手動の部分が完了しました。は、製品を AWS Data Exchange 準備して公開します。製品概要ページでは、製品のステータスが「承認待ち」になっています。製品が公開されると、ステータスは「公開済み」に変わります。

ステップ 6: (オプション) 製品をコピーする

最初の製品を作成したら、その詳細とパブリックオファーをコピーして新しい製品を作成することができます。

Note

パブリック、プライベート、公開済み、または未公開の製品をコピーできます。製品に関連付けられているカスタムオファーはコピーできませんが、パブリックオファーがコピーできます。

製品をコピーするには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で、コピーする製品の横にあるオプションをオンにします。

4. [アクション]ドロップダウンリストから [コピーを作成] を選択します。
5. [製品を公開] ワークフローを続行します。ワークフローの詳細情報は、ステップ 3 で選択した製品に基づいて既に入力されています。詳細については、「[ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)」を参照してください。

AWS Lake Formation データアクセス許可データセット AWS Data Exchange を含む での製品の公開 (プレビュー)

このプレビュー中に AWS Lake Formation データアクセス許可データセットを含む製品の公開に関心がある場合は、[お問い合わせ](#)ください [AWS サポート](#)。

AWS Lake Formation データアクセス許可データセットには、[管理するデータの LF タグとアクセス許可のセット](#)が含まれています AWS Lake Formation。Lake Formation データ権限が含まれる製品を顧客がサブスクライブすると、データセットに追加された LF タグに関連するデータベース、テーブル、および列に対する読み取り専用アクセス権が付与されます。

データプロバイダーは、[で LF タグを作成し AWS Lake Formation](#)、それらのタグをサブスクライバーが利用できるようにするデータに関連付けることから始めます。Lake Formation でのリソースのタグ付けについては、「[AWS Lake Formation デベロッパーガイド](#)」の「[Lake Formation タグベースのアクセス制御](#)」を参照してください。次に、これらの LF タグと一連のデータアクセス許可をアセット AWS Data Exchange として [にインポート](#)します。サブスクライバーには、サブスクライブ時にそれらの LF タグに関連するデータへのアクセス権が付与されます。

以下のトピックで、AWS Lake Formation データアクセス権が含まれる製品を公開するプロセスを説明します。このプロセスには以下のステップがあります。

ステップ

- [ステップ 1: AWS Lake Formation データセットを作成する \(プレビュー\)](#)
- [ステップ 2: AWS Lake Formation データアクセス許可を作成する \(プレビュー\)](#)
- [ステップ 3: 確認して確定する](#)
- [ステップ 5: \(オプション \) リビジョンを作成する](#)
- [ステップ 6: AWS Lake Formation データセットが含まれる新しい製品を公開する \(プレビュー\)](#)
- [AWS Lake Formation データ権限データセット \(プレビュー\) を公開する際の考慮事項](#)

ステップ 1: AWS Lake Formation データセットを作成する (プレビュー)

AWS Lake Formation データセットを作成するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [所有データセット] で [データセットを作成] を選択し、[データセット作成のステップ] ウィザードを開きます。
4. 「データセットタイプを選択」 で、AWS Lake Formation データ権限を選択します。
5. [データセットを定義] で、データセットの [名前] と [説明] を入力します。詳細については、「[the section called “データセットのベストプラクティス”](#)」を参照してください。
6. [タグを追加 — オプション] で [新しいタグを追加] を選択します。
7. [データセットを作成]を選択して続行します。

ステップ 2: AWS Lake Formation データアクセス許可を作成する (プレビュー)

AWS Data Exchange は LF タグを使用してデータアクセス許可を付与します。共有するデータに関連付けられている LF タグを選択して、データに対するサブスクライバー権限を付与します。

AWS Lake Formation データアクセス許可を作成するには

1. 「Lake Formation のデータ許可を作成」 ページで、「LF タグを追加」を選択します。
2. キーを入力し、LF タグ値を選択します。
3. 「リソースをプレビュー」を選択すると、LF タグがどのように解釈されるかを確認できます。
 - 「リソースのプレビュー」から、関連するデータカタログリソースを選択します。

Note

以下のリソースの IAMAllowedPrincipals グループを必ず取り消してください。詳細については、IAM ユーザーガイドの「[IAM ロールの一時的なセキュリティ認証情報の取り消し](#)」を参照してください。

4. 下のダイアログボックスの LF タグ表現の解釈と、データセットに関連する権限を確認してください。
5. サービスアクセスでは、ユーザーに代わってロールを引き受け、Lake Formation データアクセス許可に対するエンタイトルメントへのアクセス、付与、取り消し AWS Data Exchange を許

可する既存のサービスロールを選択します。次に、「Lake Formation のデータ許可を作成を選択します。のロールの作成の詳細については AWS のサービス、[「にアクセス許可を委任するロールの作成 AWS のサービス」](#)を参照してください。

6. [製品を定義] セクションの [製品概要] で、製品名、製品ロゴ、お問い合わせ先 情報、製品カテゴリ など、製品に関する情報を入力します。

詳細については、「[「の製品ベストプラクティス AWS Data Exchange」](#)を参照してください。

7. (オプション) 製品の定義セクションの「データディクショナリとサンプル」 – オプションで、データセット名の横にあるオプションボタンを選択してデータセットを選択し、「編集」を選択します。

詳細については、[「のデータディクショナリ AWS Data Exchangeおよび「のサンプルデータ AWS Data Exchange」](#)を参照してください。

- a. 編集 ダイアログボックスの「データディクショナリをアップロード」で、「ファイルを追加」を選択して新しいデータディクショナリをアップロードします。

.csv 形式の最大サイズが 1 MB のデータディクショナリを 1 つ選択できます。

- b. コンピューターから保存されているデータディクショナリを選択し、[開く] を選択します。

データディクショナリの.csv ファイルが [編集] ダイアログボックスに表示されます。

Note

データディクショナリは、AWS Data Exchange データディクショナリテンプレートに準拠している必要があります。アップロードする保存済みデータディクショナリがない場合は、AWS Data Exchange コンソールで空のデータディクショナリテンプレートリンクまたはサンプルデータディクショナリリンクを選択できます。

- c. [データディクショナリのプレビュー] を選択してデータディクショナリをプレビューします。
- d. 「サンプル-オプション」で「サンプルをアップロード」を選択し、コンピューターからサンプルを選択して、「開く」を選択します。

サンプルは「編集」ダイアログボックスに表示されます。

Note

最大 10 個のサンプルをアップロードできます。最大サイズは 50 MB です。.csv 形式のサンプルはプレビューできます。

- e. 商品詳細ページに表示される各サンプルの説明を入力します。
 - f. [保存] を選択します。
8. [商品定義] に、商品の [簡単な説明] と [詳細な説明] を入力します。
- 詳細説明にテンプレートを使用する場合は、[テンプレートを適用] を選択し、テンプレートの種類を選択して、テンプレートに特定の商品の詳細を入力します。
9. [次へ] をクリックします。
 10. オファーを設定します。
- パブリックオファーを作成する場合は、[パブリックオファーを追加] セクションで、オファーを設定します。パブリックオファーは、可視性がパブリックに設定されているすべての AWS Data Exchange 製品に必須です。
 1. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
 2. 米国売上税の設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーを選択します。
 3. (オプション) [サブスクリプション検証] を設定して、誰がこの製品をサブスクライブできるかを制御できるようにします。詳細については、「[のプロバイダーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
 4. [オファーの自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファーの作成](#)」を参照してください。
 5. [次へ] を選択します。
 - プライベートオファーを作成している場合は、[カスタムオファーを追加] セクションでオファーの詳細を設定します。
 1. [サブスクライバーアカウント情報] セクションで、オファーを提示するサブスクライバーアカウントを少なくとも 1 つ追加します。
 2. サブスクリプションの [料金とアクセス期間] オプションを選択します。
 3. [Offer expiration date] (オファーの有効期限) を選択します。サブスクライバーはこの日までにオファーを受諾する必要があります。

4. 米国売上税の設定、データサブスクリプション契約 (DSA)、および返金ポリシーを選択します。
 5. [オファ어의自動更新] オプションを選択します。詳細については、「[AWS Data Exchange 製品のオファ어의作成](#)」を参照してください。
 6. [次へ] を選択します。
11. [レビューと公開] セクションで製品情報を確認し、[製品ページのプレビュー] を展開してページが公開後にどのように見えるかを確認します。
 12. 製品とパブリックオファ어를ユーザー全員に表示し、利用可能にしてもよい場合は、[公開] を選択します。

これで、パブリックオファ어でデータ製品を公開する手動部分が完了しました。は、製品を AWS Data Exchange 準備して公開します。製品概要ページでは、製品のステータスが「承認待ち」になっています。製品が公開されると、ステータスは「公開済み」に変わります。

ステップ 3: 確認して確定する

AWS Lake Formation データアクセス許可 (プレビュー) を作成したら、データセットを確認して確定できます。

確認して確定するには

1. ステップ 1 のデータセットの詳細とタグが正しいかどうかを確認してください。
2. LF タグ表現を確認し、別の Lake Formation データ権限 (オプション)、関連するデータカタログリソース、ジョブの詳細を追加します。

Note

ジョブは、作成されてから 90 日後に削除されます。

3. [確定] を選択します。

ステップ 5: (オプション) リビジョンを作成する

リビジョンを作成する

1. 「所有データセット」セクションから、リビジョンを追加したいデータセットを選択します。
2. [リビジョン] タブを選択します。

3. [リビジョン] セクションで [リビジョンを作成] を選択します。
4. 「Lake Formation データ権限を変更」 ページで、「LF タグを追加」を選択します。
5. 「データベース」と「テーブル」の権限を確認してください。
6. 「サービスアクセス」から、既存のサービスロールを選択し、「Lake Formation データ権限を作成」を選択します。

ステップ 6: AWS Lake Formation データセットが含まれる新しい製品を公開する (プレビュー)

少なくとも 1 つのデータセットを作成し、アセットを含むリビジョンを確定したら、AWS Lake Formation データセットを含む製品を公開する準備が整います。詳細については、「[the section called “製品のベストプラクティス”](#)」を参照してください。製品に関する必要な詳細情報のすべてが揃っていることを確認してください。

AWS Lake Formation データセットを含む新しい製品を公開するには (プレビュー)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で [新しい製品を発行] を選択して [新しい製品を発行] ウィザードを開きます。
4. 製品可視性セクションで、製品の製品可視性オプションと機密情報設定を選択し、次へを選択します。詳細については、[the section called “製品の可視性”](#) および [the section called “機密カテゴリの情報”](#) を参照してください。
5. [データを追加] セクションの [所有データセット] で、追加するデータセットの横にあるチェックボックスを選択し、[選択項目を追加] を選択します。

Note

選択するデータセットには、確定済みのリビジョンが必要です。確定済みのリビジョンがないデータセットは追加されません。

- a. [選択したデータセット] に移動して、選択内容を確認します。

データセットの名前、データセットのタイプ、データセットの最終更新時のタイムスタンプを確認できます。

- b. [リビジョンアクセスルールを選択]に進み、この製品に含まれるデータセットに設定するリビジョンアクセスルールを選択し、[次へ]を選択します。

詳細については、[のリビジョンアクセスルール AWS Data Exchange](#)を参照してください。

AWS Lake Formation データ権限データセット (プレビュー) を公開する際の考慮事項

最適なサブスクライバー エクスペリエンスを確保するため、製品にアクティブなサブスクライバーがいる Lake Formation データ セット (プレビュー) の AWS Data Exchange が含まれている場合、アクセス許可に対して次の変更を行わないことを強くお勧めします。

- AWS Lake Formation データセットを含む公開済み製品 AWS Data Exchange でに渡された IAM ロールを削除または変更しないことをお勧めします。このような IAM ロールを削除または変更すると、以下の問題が発生します。
 - AWS アカウント Lake Formation データアクセス許可にアクセスできる は、アクセスを無期限に保持する場合があります。
 - AWS アカウント 製品をサブスクライブしているが、Lake Formation データアクセス許可へのアクセスをまだ受け取っていない は、アクセスを受信できません。

AWS Data Exchange は、削除または変更した IAM ロールについて責任を負いません。

- AWS Lake Formation データセットを含む公開済み製品 AWS Data Exchange でに渡された IAM ロールから、付与された AWS Lake Formation データアクセス許可を取り消さないことをお勧めします。そのような IAM ロールから付与されたデータ権限を取り消すと、以下の問題が発生します。
 - AWS アカウント Lake Formation データアクセス許可にアクセスできる は、アクセスを無期限に保持する場合があります。
 - AWS アカウント 製品をサブスクライブしているが、Lake Formation データアクセス許可へのアクセスをまだ受け取っていない は、アクセスを受信できません。
- AWS Lake Formation データセットを含む公開済み製品へのアクティブなサブスクリプション AWS アカウント を使用して、 から付与された AWS Lake Formation データアクセス許可を取り消すことはお勧めしません。製品に登録されている AWS アカウント から付与されたデータ権限を取り消すと、それらのアカウントはアクセスできなくなり、カスタマー エクスペリエンスが低下します。
- AWS Lake Formation データセットを含む製品を公開する場合は、 のクロスアカウントバージョン AWS Glue Data Catalog をバージョン 3 に設定することをお勧めします。AWS Lake Formation データセットを含む製品を公開している間に Data Lake Catalog のクロスアカウント

バージョンをダウングレードすると、製品をサブスクリプション AWS アカウントしているが、Lake Formation データアクセス許可へのアクセスをまだ受け取っていないが、データへのアクセスに失敗する可能性があります。

の製品ベストプラクティス AWS Data Exchange

AWS Data Exchange コンソールで製品を公開するときは、製品の詳細を指定する必要があります。このセクションでは、製品の詳細を準備するときに考慮するベストプラクティスについて説明します。

トピック

- [での製品の可視性 AWS Data Exchange](#)
- [の機密情報のカテゴリ AWS Data Exchange](#)
- [AWS Data Exchange 製品の詳細](#)
- [のリビジョンアクセスルール AWS Data Exchange](#)
- [のデータディクショナリ AWS Data Exchange](#)
- [のサンプルデータ AWS Data Exchange](#)

での製品の可視性 AWS Data Exchange

で製品を作成するときは AWS Data Exchange、その可視性を選択します。[製品の可視性] は、[パブリック] または [プライベート] のどちらかにすることができます。

- **パブリック** – 製品は、AWS Data Exchange コンソールのパブリックカタログと [AWS Marketplace](#) に表示されます。パブリック製品にはパブリックオファーが関連付けられている必要があります。カスタムオファーを設定することも可能です。
- **プライベート** – 製品は AWS Data Exchange または [の](#)パブリックカタログには公開されておらず [AWS Marketplace](#)、カスタムオファーのみを作成できます。カスタムオファーを作成した特定のアカウントのみがこの製品を表示してサブスクリプションできます。サブスクリプションは、AWS Data Exchange の [製品オファー] タブで、サブスクリプション向けに作成されたカスタムオファーを確認できます。

Note

製品の作成後にその可視性を変更することはできません。

製品 (可視性がパブリックまたはプライベートに設定されたもの) の作成に関する詳細については、「[ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)」を参照してください。

の機密情報のカテゴリ AWS Data Exchange

で製品を作成するときは AWS Data Exchange、製品に個人データまたは機密カテゴリの情報が含まれているかどうかを指定する必要があります。

機密カテゴリの情報には、生体情報データもしくは遺伝子データ、医療データ、人種もしくは民族的出身、政治的見解、宗教的もしくは哲学的信念、性別もしくは性的指向、労働組合への加入、個人支払もしくは財務情報 (信用履歴など) などのカテゴリの情報、またはその他類似するカテゴリの情報が含まれます。

個人データとは、個人を特定するために使用できるデータです。

非公開のオファーを受け入れる前に、見込み購読者には、商品詳細ページに、他の方法では公開されていない機密性の高い個人情報や個人情報が含まれているという警告が商品詳細ページに表示されません。

で説明するプロセスの一環として[ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)、製品の機密情報設定のオプションを選択します。以下のオプションのいずれかを選択してください：

- オプション 1 - 他の方法で一般公開されていない個人データが含まれず、機密カテゴリの情報も含まれない

このオプションは、他の方法で一般公開されていない個人データと、機密カテゴリの情報のどちらも製品に含まれない場合に選択します。

例としては、金融市場データ、気象パターン、上場企業への提出書類などがあります。

- オプション - 個人データは含まれないが、機密カテゴリの情報が含まれる

このオプションは、個人情報ではない機密情報が製品に含まれる場合に選択します。

例としては、集約された多様性データや匿名化された財務データなどがあります。

- オプション 3 — (i) 機密カテゴリーの情報を含む個人データ、および/または (ii) その他の方法で公的に入手可能ではなく、1996 年医療保険の相互運用性および責任に関する法律 (HIPAA) に基づく保護医療情報 (PHI) は含まれない

このオプションは、他の方法で一般公開されていない個人データが製品に含まれる場合に選択します。製品には、HIPAA の対象である保護医療情報 (PHI) が含まれていない必要があります。

例としては、E メールアドレス、社会保障番号、生体情報、またはモバイル ID などの PII があります。

Note

このオプションは、プロバイダーの利用規約の拡張プロバイダープログラム補遺に同意した、拡張プロバイダープログラムに登録されている対象 AWS Marketplace プロバイダーのみが使用できます。詳細については、「[拡張プロバイダープログラム \(EPP\)](#)」を参照してください。

- オプション 4 - 1996 年の医療保険の相互運用性と説明責任に関する法令 (HIPAA) の対象である保護医療情報 (PHI)

このオプションは、HIPAA の対象である保護医療情報 (PHI) が製品に含まれる場合に選択します。

例としては、対象エンティティによって開示された患者情報などの PHI が含まれます。

Important

4 番目のオプションは、プライベート製品のみで使用できます。パブリック製品にこのようなデータを含めることはできません。

Note

オプション4は、以下の適格プロバイダーのみが利用できます。

- 3 番目と 4 番目のオプションは、AWS Marketplace プロバイダー向けの利用規約の拡張プロバイダープログラム付則に同意した、拡張プロバイダープログラムに登録済みの対象プロバイダーのみが使用できます。詳細については、「[拡張プロバイダープログラム \(EPP\)](#)」を参照してください。

- AWS 事業提携契約、および AWS 事業提携契約 AWS Data Exchange への契約に同意した対象プロバイダー。

⚠ Warning

延長プロバイダープログラムに登録していない場合、オプション 3 およびオプション 4 で説明されているデータまたは情報を含む製品の出品は、当社のに違反しますの[公開ガイドライン AWS Data Exchange](#)。は、これらのガイドラインに違反するすべての製品 AWS を削除し、プロバイダーによるサービスの将来の使用を停止できます。

製品の作成とデータの機密性ステータスの設定に関する詳細については、「[ステップ 5: 新しい製品を公開する](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange 製品の詳細

以下のトピックでは、の製品の詳細に関するベストプラクティスについて説明します AWS Data Exchange。

製品名

サブスクライバーは で製品の名前を検索するため AWS Data Exchange、製品名を意味のあるものにします。

製品ロゴ

製品ロゴは、コンソールと の製品 AWS Data Exchange カタログに表示されます AWS Marketplace。サポートされているロゴの形式は、.png、.jpg、および .jpeg です。

サポート連絡先

プロバイダーとして、有効な連絡先情報を含める必要があります AWS Data Exchange。これは、製品に関する質問がある顧客がサポートを受けるために使用する、マネージド E メールエイリアス、またはケース管理システムのリンクにすることができます。アドレスは公表されるため、個人用の E メールアドレスは使用しないことを強くお勧めします。

製品カテゴリ

すべての製品は、の 1 つ以上のカテゴリに分類されます AWS Data Exchange。製品に最大 2 つのカテゴリを指定することで、サブスクライバーが AWS Data Exchange と で製品をフィルタリングして検索するのに役立ちます AWS Marketplace。

製品の簡単な説明

製品概要テキストは、AWS Data Exchange コンソールの製品カタログ部分のタイルに表示されます。このフィールドには、製品の簡潔な説明を提供することをお勧めします。

製品の長い説明

サブスクライバーは、製品の公開後に製品詳細ページに製品の長い説明を表示します AWS Data Exchange。製品の機能、利点、使用状況、および製品に固有のその他の情報を一覧表示することをお勧めします。

説明内の製品情報は、サブスクライバーに提供されるデータを正確に表現している必要があります。これには、データの対象範囲 (30,000 個の金融商品、または 10,000 個の位置座標など) と、データセットの更新頻度 (毎日更新または毎週更新など) が含まれます。

Note

数多くの一般的な製品タイプの詳しい説明を作成する開始点として、Markdown テンプレートを使用することができます。詳細については、「[の製品説明テンプレート AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

製品の説明への追加情報

製品の説明を見込みサブスクライバーにとって魅力的なものにするため、製品の説明に以下の情報を追加することをお勧めします。

- データのデューデリジェンスアンケート (DDQ) – 通常、これにはデータセットを販売している会社に関する質問への回答が含まれます。DDQ の情報の例には、データを収集するためにプロバイダーが実行するプロセス、または品質管理手順と規制コンプライアンスに関する質問が含まれます。
- データセットスキーマ – 見込みユーザーに、データセットの構造と形式に関する詳しい説明を提供します。データセットスキーマの情報の例には、プライマリキーの識別情報、フィールド名、

フィールドの定義、各フィールドに期待される出力タイプ (文字列、整数など)、および各フィールドに許容される列挙体 (例えば 0~100%) などがあります。

- **トライアル製品の出品** – 多くの見込みサブスクライバーは、サブスクリプションを購入する前に、データセットのトライアルをリクエストします。トライアル製品は、サブスクライバー AWS Data Exchange が通常の有料製品と同様にサブスクライブできるように、で公開できます。
- **サンプルファイル** – サンプルファイルは通常、完全な実稼働データセットより小さいバージョン、またはそれより古い旧式のバージョンです。これらのサンプルファイルは、見込みユーザーがサブスクリプションを購入する前に、期待できる出力に関する洞察を提供します。
- **製品ファクトシート** – これらは、ドキュメント、ウェブリンク、またはそれら両方にすることができ、データセットの対象範囲、データセットの典型的なユースケース、およびデータセットを差別化するその他要素に関する詳細な統計情報をサブスクライバーに提供します。

説明にリンクを追加する方法については、「[製品の説明にリンクを含める](#)」を参照してください。

製品の説明にリンクを含める

AWS Data Exchange 製品の長い説明は Markdown をサポートしており、製品の詳細ページにリンクを含めることができます。次の手順では、AWS Data Exchange 製品説明にウェブサイトへのリンクを追加する方法を示します。

製品の出品ページに埋め込みリンクを含める

1. AWS コンソールにログインし、AWS Data Exchange ユーザーがアクセスできる [Amazon S3 バケット](#) に移動します。このバケットの内容はパブリック読み取り可能です。
2. 製品の出品ページに含めるファイル (例: PDF ファイルや Microsoft Excel ファイルなどのドキュメント) を Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) バケットにアップロードします。アップロードが完了したら、ファイル (1 つ、または複数) にパブリック読み取りアクセス許可を設定するようにしてください。
3. アップロードしたファイルのいずれかを選択します。[概要] タブにファイルの URL が表示されます。URL をクリップボードにコピーします。
4. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開きます。
5. 更新する製品を選択してから、[編集] を選択します。
6. [製品の説明] から、以下の Markdown 形式を使用して関連ファイル (先ほどコピーした URL リンクを使用) にリンク、またはウェブサイトなどの別の URL にリンクします。
 - S3 バケットに保存されているファイルにリンクする:

#####(Amazon S3 ##### URL)

#####。

- でトライアル製品リストにリンクするには AWS Data Exchange :

#####(URL)

#####。

7. [Save Changes] を選択します。数分後、AWS Data Exchange 製品出品ページが新しいリンクで更新されるはずです。

のリビジョンアクセスルール AWS Data Exchange

リビジョンアクセスルールは、サブスクライバーが製品をサブスクライブするときにアクセスできるリビジョンを指定します AWS Data Exchange。サブスクライバーが履歴リビジョンと将来のリビジョンを取得するためのオプションを選択します。

- 履歴リビジョンのオプション – 履歴リビジョンとは、サブスクリプションの開始日より前に発行されたリビジョンです。履歴リビジョンには 3 つのオプションがあります。
 - [All pre-existing revisions published prior to subscription] (サブスクリプションより前に発行されたすべての既存リビジョン) – サブスクライバーは、すべての履歴リビジョンにアクセスできます。
 - [A fixed number of trailing revisions published prior to subscription] (サブスクリプションより前に発行された、固定数の 2 番目以降のリビジョン) – サブスクライバーがアクセスできる履歴リビジョンの数 (1 ~ 100 個) を選択します。
 - [No historical revisions] (履歴リビジョンなし) – サブスクライバーは、履歴リビジョンにアクセスできません。このオプションを選択すると、サブスクリプション開始当初から次のリビジョンが発行されるまでの間、サブスクライバーには利用できるリビジョンがありません。
- 将来のリビジョンのオプション – 将来のリビジョンとは、サブスクリプションの開始後に発行されるリビジョンです。将来のリビジョンには 2 つのオプションがあります。
 - [All future revisions published during subscription duration] (サブスクリプション期間中に発行されるすべての将来のリビジョン) – サブスクライバーは、サブスクリプションの有効期限が切れるまで、発行されるすべてのリビジョンにアクセスできます。
 - [No future revisions] (将来のリビジョンなし) – サブスクライバーは、将来のリビジョンにアクセスできません。

Note

[No historical revisions] (履歴リビジョンなし) と [No future revisions] (将来のリビジョンなし) の両方を選択することはできません。両方を選択すると、リビジョンもデータもない製品が作成されます。

のデータディクショナリ AWS Data Exchange

データディクショナリは、 のデータセットの内容を視覚的に表現したものです AWS Data Exchange。

サブスクライバーは、製品をサブスクライブする前にデータディクショナリを表示およびダウンロードして、製品がニーズを満たしているかどうかを評価できます。

各データセットには、最大サイズ 1 MB のサイズで 1 つのデータディクショナリを追加できます。データディクショナリで使用できるファイルタイプは.csv です。

データディクショナリを作成するときは、データセットに含まれる列とその意味に関する詳細を含めます。データディクショナリは、AWS Data Exchange データディクショナリテンプレートに準拠している必要があります。AWS Data Exchange コンソールから空のデータディクショナリテンプレートをダウンロードできます。には、例として表示できるデータディクショナリの例 AWS Data Exchange も用意されています。

Note

データディクショナリは製品に添付され、データセットに関連付けられます。潜在的な利用者が評価できるように複数のデータディクショナリを用意したい場合は、同じデータセットを使用して同じ製品の 2 つ以上のバージョンを作成できます。次に、製品ごとに異なるデータディクショナリを追加します。

データディクショナリを製品に追加する方法の詳細については、[での新製品の公開 AWS Data Exchange](#)を参照してください。

のサンプルデータ AWS Data Exchange

サンプルは、 の製品内のデータのごく一部であり AWS Data Exchange 、データセット全体がどのようなものかを示すことを目的としています。

サブスクライバーは、製品を購読する前にサンプルを閲覧およびダウンロードして、製品がニーズを満たしているかどうかを評価できます。

各データセットには、最大 50 MB のサンプルを 10 個までアップロードできます。サンプルに使用できるファイル形式は、Amazon S3 で受け入れられているすべてのファイルタイプです。.csv 形式のサンプルはプレビューできます。

Note

サンプルは製品に添付され、データセットに関連付けられます。潜在的な購読者が評価できるように 10 個以上のサンプルを用意したい場合は、同じデータセットを使用して同じ製品の 2 つ以上のバージョンを作成できます。次に、各製品に最大 10 個のサンプルを追加します。

ストリームにデータを追加する方法の詳細については、[での新製品の公開 AWS Data Exchange](#) を参照してください。

の製品説明テンプレート AWS Data Exchange

に製品を一覧表示するときは AWS Data Exchange、サブスクライバーが製品が提供する内容を理解するために必要なすべての情報を含む長い説明を含める必要があります。製品の詳しい説明に関する詳細については、「[製品の長い説明](#)」を参照してください。

このセクションには、数多くの一般的な製品タイプの詳しい説明を作成する開始点として使用できる Markdown テンプレートが記載されています。

詳しい説明に以下のコンテンツをコピーして貼り付け、データ製品に該当するセクションを使用することができます。

トピック

- [製品の一般的な説明の AWS Data Exchange 長いテンプレート](#)
- [AWS Data Exchange 製品の金融サービスの詳細な説明テンプレート](#)
- [AWS Data Exchange 製品のヘルスケアとライフサイエンスの長い説明テンプレート](#)
- [のマーケティングと広告の長い説明テンプレート AWS Data Exchange](#)
- [AWS Data Exchange 製品のメディアおよびエンターテインメントのロング説明テンプレート](#)
- [AWS Data Exchange 製品の公共部門の説明テンプレート](#)
- [AWS Data Exchange 製品の小売およびロケーションの長い説明テンプレート](#)

製品の一般的な説明の AWS Data Exchange 長いテンプレート

に製品を一覧表示するときは AWS Data Exchange、サブスクライバーが製品が提供する内容を理解するために必要なすべての情報を含む長い説明を含める必要があります。以下は、長い説明のための汎用テンプレートです。

```
---
## PRODUCT TITLE Data Product Overview
Instructions: Provide a description of the data product and what it contains in this section.

---
## Use Cases
Instructions: Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.

---
## Metadata
Instructions: Provide metadata of your data using a table. Examples include but are not limited to:

Description | Value
----|-----
Update Frequency | ADD INFO HERE
Data Source(s) | ADD INFO HERE
Original Publisher of data | ADD INFO HERE
Data Creation Date | ADD INFO HERE
Data Modification Date | ADD INFO HERE
Geographic coverage | ADD INFO HERE
Time period coverage | ADD INFO HERE
Is historical data “point-in-time” | YES OR NO
Data Set(s) Format(s) | ADD INFO HERE
Raw or scraped data | ADD INFO HERE
Key Fields | ADD INFO HERE
Key Words | ADD INFO HERE
Number of companies/brands covered | ADD INFO HERE

---
## Key Data Points
Key data points include:

* Key Data Point:
* Key Data Point:
```

Additional Information

- * [Data Source] (*ADD LINK HERE*)
- * [Data Due Diligence Questionnaire] (*ADD LINK HERE*)
- * [Link to Corresponding ADX Trial Product/ Link to Corresponding ADX Paid Product] (*ADD LINK HERE*)

Pricing Information

If you would like to tell your subscribers that you would like them to inquire for custom pricing (ie you price based on other variables), you can explain here.

Regulatory and Compliance Information

If this section is applicable, provide an overview of the regulatory guidance and compliance for use of this product. Are there exemptions that need to be linked in order for the data product to be published?

Subscription Verification Request Information

If you are enabling subscription verification for your products, you may elect to indicate the information that you will require from the prospective subscriber i.e., EIN number, # of applications, # of users, # of Regions, etc.

Need Help?

- * *If you have questions about our products, contact us using the support information below.*

About Your Company

Provide a description and/or link about your company

- * [Company Fact Sheet] (*ADD LINK HERE*)

AWS Data Exchange 製品の金融サービスの詳細な説明テンプレート

に製品を一覧表示するときは AWS Data Exchange、サブスクライバーが製品が提供する内容を理解するために必要なすべての情報を含む長い説明を含める必要があります。以下は、金融サービス製品の詳細な説明のテンプレートです。

```
---
## PRODUCT TITLE Data Product Overview
Instructions: Provide a description of the data product and what it contains in this section.

---
## Use Cases
Instructions: Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.

---
## Metadata
Instructions: Provide metadata of your data using a table. Examples include but are not limited to:

Description | Value
----|-----
Update Frequency | YOUR INFO HERE
Data Source(s) | YOUR INFO HERE
Original Publisher of data | YOUR INFO HERE
Data Creation Date | YOUR INFO HERE
Data Modification Date | YOUR INFO HERE
Geographic coverage | YOUR INFO HERE
Time period coverage | YOUR INFO HERE
Is historical data “point-in-time” | YES OR NO
Data Set(s) Format(s) | YOUR INFO HERE
Raw or scraped data | YOUR INFO HERE
Key Fields | YOUR INFO HERE
Key Words | YOUR INFO HERE
Number of companies/brands covered | YOUR INFO HERE
Standard entity identifiers | YOUR INFO HERE, EXAMPLE BELOW

examples include(include your identifier above then delete this section)
* CUSIP Number: A unique identification number assigned to all stocks and registered bonds in the US & Canada
```

- * *ISIN: An International Securities Identification Number that uniquely identifies a specific securities issue (a series of stocks/bonds offered to raise funds from investors)*
- * *RIC: The Reuters Instrument Code is used to identify financial instruments/indices used in Refinitiv financial information networks*
- * *Bloomberg ID: 12-digit alpha-numeric ID used to identify securities*
- * *D-U-N-S Number: 9-digit identifier assigned to businesses by Dun & Bradstreet*

Tables

If this section is applicable, you can make a table and include information such as:

Description | Identifier | Format | Frequency

----|-----

FX FWD | FIGI | .CSV | Intraday

USD Deposits | CUSIP | .txt | End of Day

Interest Rate Swaps | ISIN | .json | Daily

Basis Swaps | CUSIP | .xml | Intraday

Key Data Points

Examples of key data points include:

- * *Symbol: Ticker symbol for the security*
- * *Exchange: Exchange MIC identifier*
- * *Currency: Trading currency code*
- * *Open: Opening price for the day*
- * *High: High price for the day*
- * *Low: Low price for the day*
- * *Last: Last price for the day*
- * *Volume: Trading volume for the day*
- * *Split Ratio: Ratio of new number of shares to old on the effective date*
- * *Cash Dividend: Cash dividend amount on the ex-dividend date*
- * *Dividend amount:*
- * *Extra dividends:*
- * *Total dividends paid this year:*
- * *Effective dates:*
- * *Textual descriptions of special dividends:*
- * *Dividend Currency: Currency for the cash dividend*

Additional Information

- * [Data Source] (*ADD LINK HERE*)
- * [Data Due Diligence Questionnaire] (*ADD LINK HERE*)

- * [Link to Corresponding ADX Trial Product/ Link to Corresponding ADX Paid Product] (*ADD LINK HERE*)

Pricing Information

If you would like to tell your subscribers that you would like them to inquire for custom pricing (ie you price based on other variables), you can explain here.

Regulatory and Compliance Information

If this section is applicable, provide an overview of the regulatory guidance and compliance for use of this product. Are there exemptions that need to be linked in order for the data product to be published?

Subscription Verification Request Information

If you are enabling subscription verification for your products, you may elect to indicate the information that you will require from the prospective subscriber i.e., EIN number, # of applications, # of users, # of Regions, etc.

Need Help?

** If you have questions about our products, contact us using the support information below.*

About Your Company

Provide a description and/or link about your company

- * [Company Fact Sheet] (*ADD LINK HERE*)

AWS Data Exchange 製品のヘルスケアとライフサイエンスの長い説明テンプレート

に製品を一覧表示するときには AWS Data Exchange、サブスクライバーが製品が提供する内容を理解するために必要なすべての情報を含む長い説明を含める必要があります。以下は、ヘルスケアおよびライフサイエンス製品の長い説明のテンプレートです。

```
---
## PRODUCT TITLE Data Product Overview
Instructions: Provide a description of the data product and what it contains in this section.

---
## Use Cases
Instructions: Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.

---
## Metadata
Instructions: Provide metadata of your data using a table. Examples include but are not limited to:

Description | Value
----|-----
Update Frequency | YOUR INFO HERE
Data Source(s) | YOUR INFO HERE
Original Publisher of data | YOUR INFO HERE
Data Creation Date | YOUR INFO HERE
Data Modification Date | YOUR INFO HERE
Geographic coverage | YOUR INFO HERE
Time period coverage | YOUR INFO HERE
Is historical data "point-in-time" | YES OR NO
Data Set(s) Format(s) | YOUR INFO HERE
Raw or scraped data | YOUR INFO HERE
Key Fields | YOUR INFO HERE
Key Words | YOUR INFO HERE
Number of companies/brands covered | YOUR INFO HERE

---
## Key Data Points
Key data points include:
```

** Key Data Point:*

** Key Data Point:*

Use Cases for the Data Set

Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.

Target Therapeutic Area / Disease Focus

Provide an overview of which therapeutic areas, diagnoses, procedures, medications, and more can be analyzed in the data listing, and can other data for different therapeutic areas be sourced.

Data Engineering Overview

Provide an overview of how the raw data was engineered. Questions to answer:

** What data models were applied?*

** What standards / terminologies applied?*

** Was NLP post-processing used in the curation of the data?*

Additional Information

** [Data Source] (ADD LINK HERE)*

** [Data Due Diligence Questionnaire] (ADD LINK HERE)*

** [Link to Corresponding ADX Trial Product/ Link to Corresponding ADX Paid Product]
(ADD LINK HERE)*

Pricing Information

If you would like to tell your subscribers that you would like them to inquire for custom pricing (ie you price based on other variables), you can explain here.

Regulatory and Compliance Information

If this section is applicable, provide an overview of the regulatory guidance and compliance for use of this product. Are there exemptions that need to be linked in order for the data product to be published?

Subscription Verification Request Information

If you are enabling subscription verification for your products, you may elect to

indicate the information that you will require from the prospective subscriber i.e., EIN number, # of applications, # of users, # of Regions, etc.

Need Help?

** If you have questions about our products, contact us using the support information below.*

About Your Company

Provide a description and/or link about your company

** [Company Fact Sheet] (ADD LINK HERE)*

のマーケティングと広告の長い説明テンプレート AWS Data Exchange

に製品を一覧表示するときは AWS Data Exchange、サブスクライバーが製品が提供する内容を理解するために必要なすべての情報を含む長い説明を含める必要があります。以下は、マーケティングおよび広告製品の長い説明のテンプレートです。

PRODUCT TITLE Data Product Overview

Instructions: Provide a description of the data product and what it contains in this section.

Use Cases

Instructions: Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.

Metadata

Instructions: Provide metadata of your data using a table. Examples include but are not limited to:

Description | Value

----|-----

Update Frequency | *YOUR INFO HERE*

Data Source(s) | *YOUR INFO HERE*

Original Publisher of data | *YOUR INFO HERE*

Data Creation Date | *YOUR INFO HERE*

Data Modification Date | *YOUR INFO HERE*

Geographic coverage | *YOUR INFO HERE*

Time period coverage | *YOUR INFO HERE*

Is historical data “point-in-time” | *YES OR NO*

Data Set(s) Format(s) | *YOUR INFO HERE*

Raw or scraped data | *YOUR INFO HERE*

Key Fields | *YOUR INFO HERE*

Key Words | *YOUR INFO HERE*

Number of companies/brands covered | *YOUR INFO HERE*

Data Channels | *Examples include web devices, mobile devices, CTV devices, offline purchases, household data, B2B data*

Data Set Specification

The following are examples of data set specifications that you may include if applicable:

The data sets are updated at midnight EST daily.

Custom data cuts are available if desired.

Additional Information

* [Data Source] (*ADD LINK HERE*)

* [Data Due Diligence Questionnaire] (*ADD LINK HERE*)

* [Link to Corresponding ADX Trial Product/ Link to Corresponding ADX Paid Product] (*ADD LINK HERE*)

Pricing Information

If you would like to tell your subscribers that you would like them to inquire for custom pricing

(ie you price based on other variables), you can explain here.

Regulatory and Compliance Information

If this section is applicable, provide an overview of the regulatory guidance and compliance for use of this product.

Are there exemptions that need to be linked in order for the data product to be published?

Subscription Verification Request Information

If you are enabling subscription verification for your products, you may elect to indicate the information

that you will require from the prospective subscriber i.e., EIN number, # of applications, # of users, # of Regions, etc.

Need Help?

** If you have questions about our products, contact us using the support information below.*

About Your Company

Provide a description and/or link about your company

** [Company Fact Sheet] (ADD LINK HERE)*

AWS Data Exchange 製品のメディアおよびエンターテインメントのロング説明テンプレート

に製品を一覧表示するときは AWS Data Exchange、サブスクライバーが製品が提供する内容を理解するために必要なすべての情報を含む長い説明を含める必要があります。以下は、メディアおよびエンターテインメント製品の長い説明のテンプレートです。

PRODUCT TITLE Data Product Overview

Instructions: Provide a description of the data product and what it contains in this section.

Use Cases

Instructions: Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.

Metadata

Instructions: Provide metadata of your data using a table. Examples include but are not limited to:

Description | Value

----|-----

Update Frequency | *ADD INFO HERE*

Data Source(s) | *ADD INFO HERE*

Original Publisher of data | *ADD INFO HERE*

Data Creation Date | *ADD INFO HERE*

Data Modification Date | *ADD INFO HERE*

Geographic coverage | *ADD INFO HERE*
Time period coverage | *ADD INFO HERE*
Is historical data “point-in-time” | *YES OR NO*
Data Set(s) Format(s) | *ADD INFO HERE*
Raw or scraped data | *ADD INFO HERE*
Key Fields | *ADD INFO HERE*
Key Words | *ADD INFO HERE*
Number of companies/brands covered | *ADD INFO HERE*

Table format examples

Data Set(s) Inventory

File Description | Format | Initial Size | Revision Frequency | Revision Type
----|-----

New Text Archives | .CSV | 100 GB | Hourly | Incremental
Image Library | .JSON | 1.5 TB | Weekly | Incremental
Ratings | .JSON | 50 MB | Every 5 Min | Republish

Key Data Points

Examples of key data points include:

- * Publisher or Studio*
- * Title*
- * Artist Name*
- * Producer Name*
- * Director Name*
- * Distributor*
- * Distribution Channel*
- * Release Date*
- * Publish Date*
- * Format*
- * Operating System*
- * Sale Price*
- * Number of Transactions*
- * Number of Streams*
- * Average rating*
- * Designated Market Area (DMA)*
- * Zip or Postal Code*

Additional Information

* [Data Source] (*ADD LINK HERE*)

* [Data Due Diligence Questionnaire] (*ADD LINK HERE*)

* [Link to Corresponding ADX Trial Product/ Link to Corresponding ADX Paid Product]
(*ADD LINK HERE*)

Pricing Information

If you would like to tell your subscribers that you would like them to inquire for custom pricing

(i.e., you price based on other variables), you can explain here.

Regulatory and Compliance Information

If this section is applicable, provide an overview of the regulatory guidance and compliance for use of this product.

Are there exemptions that need to be linked in order for the data product to be published?

Subscription Verification Request Information

If you are enabling subscription verification for your products, you may elect to indicate the information

that you will require from the prospective subscriber i.e., EIN number, # of applications, # of users, # of Regions, etc.

Need Help?

** If you have questions about our products, contact us using the support information below.*

About Your Company

Provide a description and/or link about your company

* [Company Fact Sheet] (*ADD LINK HERE*)

AWS Data Exchange 製品の公共部門の説明テンプレート

に製品を一覧表示するときは AWS Data Exchange、サブスクライバーが製品が提供する内容を理解するために必要なすべての情報を含む長い説明を含める必要があります。以下は、公共部門製品の長い説明のテンプレートです。

```
---
## PRODUCT TITLE Data Product Overview
Instructions: Provide a description of the data product and what it contains in this section.

---
## Applicable Industries for Data Product Usage
Provide a list of industries that this data product is applicable to.

---
## Use Cases
Instructions: Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.

---
## Metadata
Instructions: Provide metadata of your data using a table. Examples include but are not limited to:

Description | Value
----|-----
Update Frequency | YOUR INFO HERE
Data Source(s) | YOUR INFO HERE
Original Publisher of data | YOUR INFO HERE
Data Creation Date | YOUR INFO HERE
Data Modification Date | YOUR INFO HERE
Geographic coverage | YOUR INFO HERE
Time period coverage | YOUR INFO HERE
Is historical data “point-in-time” | YES OR NO
Data Set(s) Format(s) | YOUR INFO HERE
Raw or scraped data | YOUR INFO HERE
Key Fields | YOUR INFO HERE
Key Words | YOUR INFO HERE
Number of companies/brands covered | YOUR INFO HERE

---
## Additional Information
```

- * [Data Source] (*ADD LINK HERE*)
- * [Data Due Diligence Questionnaire] (*ADD LINK HERE*)

- * [Link to Corresponding ADX Trial Product/ Link to Corresponding ADX Paid Product] (*ADD LINK HERE*)

Pricing Information

If you would like to tell your subscribers that you would like them to inquire for custom pricing (ie you price based on other variables), you can explain here.

Regulatory and Compliance Information

If this section is applicable, provide an overview of the regulatory guidance and compliance for use of this product. Are there exemptions that need to be linked in order for the data product to be published?

Subscription Verification Request Information

If you are enabling subscription verification for your products, you may elect to indicate the information that you will require from the prospective subscriber i.e., EIN number, # of applications, # of users, # of Regions, etc.

Need Help?

** If you have questions about our products, contact us using the support information below.*

About Your Company

Provide a description and/or link about your company

** [Company Fact Sheet] ADD LINK HERE*

AWS Data Exchange 製品の small および ロケーションの長い説明テンプレート

に製品を一覧表示するときは AWS Data Exchange、サブスクライバーが製品が提供する内容を理解するために必要なすべての情報を含む長い説明を含める必要があります。以下は、small および ロケーション製品の長い説明のテンプレートです。

PRODUCT TITLE Data Product Overview

Instructions: Provide a description of the data product and what it contains in this section.

Use Cases

Instructions: Provide a handful of use-cases or guidance of best ways to utilize the data product.

Metadata

Instructions: Provide metadata of your data using a table. Examples include but are not limited to:

Description | Value

----|-----

Update Frequency | *YOUR INFO HERE*

Data Source(s) | *YOUR INFO HERE*

Original Publisher of data | *YOUR INFO HERE*

Data Creation Date | *YOUR INFO HERE*

Data Modification Date | *YOUR INFO HERE*

Geographic coverage | *YOUR INFO HERE*

Time period coverage | *YOUR INFO HERE*

Is historical data “point-in-time” | *YES OR NO*

Data Set(s) Format(s) | *YOUR INFO HERE*

Raw or scraped data | *YOUR INFO HERE*

Key Fields | *YOUR INFO HERE*

Key Words | *YOUR INFO HERE*

Number of companies/brands covered | *YOUR INFO HERE*

Data Channels | *Examples include web devices, mobile devices, CTV devices, offline purchases, household data, B2B data*

Data Set Specification

The following are examples of data set specifications that you can include if applicable:

The data sets are updated at midnight EST daily.

The data sets are tied to a home address, and attributes correspond to the household level.

Provider processes opt-outs on a daily basis and remove records from future files. Custom data cuts are available if desired.

Additional Information

* [Data Source] (*ADD LINK HERE*)

* [Data Due Diligence Questionnaire] (*ADD LINK HERE*)

* [Link to Corresponding ADX Trial Product/ Link to Corresponding ADX Paid Product] (*ADD LINK HERE*)

Pricing Information

If you would like to tell your subscribers that you would like them to inquire for custom pricing

(i.e., you price based on other variables), you can explain here.

Regulatory and Compliance Information

If this section is applicable, provide an overview of the regulatory guidance and compliance

for use of this product. Are there exemptions that need to be linked in order for the data product to be published?

Subscription Verification Request Information

If you are enabling subscription verification for your products, you may elect to indicate

the information that you will require from the prospective subscriber i.e., EIN number, # of applications, # of users, # of Regions, etc.

Need Help?

* *If you have questions about our products, contact us using the support information below.*

About Your Company

Provide a description and/or link about your company

* [Company Fact Sheet] (*ADD LINK HERE*)

AWS Data Exchange 製品のオファ어의作成

製品を使用可能にするには、AWS Data Exchange コンソールでオファ어를作成する必要があります。オファ어は、サブスクライバーが製品をサブスクライブするときに同意する条件を定義します。可視性が [パブリック] に設定されている製品には、すべてのサブスクライバーが利用できるパブリックオファ어が必要です。特定のサブスクライバーに対するカスタムオファ어를作成することも可能です。製品のオファ어를作成するときは、以下を定義します。

- データサブスクリプション契約。これは、見込みサブスクライバーが製品のサブスクリプションを購入する前に同意する必要がある条件を定義します。
- 利用可能な料金と期間の組み合わせ。
- 米国売上税が徴収されるかどうか。
- 返金ポリシーの諸条件 (ポリシーを設定する場合)。
- サブスクライバーがサブスクリプション検証を使用して、サブスクリプションをリクエストするためのアンケートに記入する必要があるかどうか。
- オファ어의自動更新を利用可能にするかどうか。

特定の AWS アカウントに提示するカスタムオファ어를作成することもできます。カスタムオファ어は、製品に特定の条件と料金を設定することを可能にします。以下のトピックでは、すべてのオファ어의作成について詳しく説明します。

トピック

- [オファ어의料金](#)
- [米国の消費税と使用税](#)
- [データサブスクリプション契約](#)
- [返金ポリシー](#)
- [サブスクリプション検証](#)
- [オファ어의自動更新](#)
- [でのプライベートオファ어의作成 AWS Data Exchange](#)
- [での Bring Your Own Subscription オファ어의作成 AWS Data Exchange](#)
- [AWS Data Exchange サブスクリプションの表示](#)

オファ어의料金

料金情報を定義するときは、サブスクリプションの合計料金と期間を定義します。期間は 1~36 か月です。パブリックオファ어의場合、単一のオファ어で最大 5 つの異なる期間を指定できます。

長期的にサポートしようと考えている期間を選択することをお勧めします。期間を中止すると、は、自動更新ポリシーをオプトインした影響を受けるサブスクライバーのサブスクリプション更新 AWS をキャンセルします。

料金設定にサポートされる通貨は米ドル (USD) のみです。料金は期間ごとに指定する必要があります。例えば、単一のオファ어内の 1 か月、6 か月、12 か月、24 か月、および 36 か月の期間には、異なる料金を指定できます。見込みサブスクライバーは、すべてのオプションを利用できます。見込みサブスクライバーがオファ어를サブスクライブするときには、単一の料金と期間を選択する必要があります。また、オファ어規約に同意して、購入料金を前払いする必要もあります。

米国の消費税と使用税

オファ어に対する米国売上税の徴収は、税金のネクサスの設定に基づいて有効にできます。詳細については、「[米国の消費税と使用税](#)」を参照してください。

データサブスクリプション契約

データサブスクリプション契約 (DSA) は、AWS Data Exchange デフォルトとして提供される標準契約テンプレートです。DSA には、データ製品の利用規約が規定されています。プロバイダーは、法的条件と使用権を管理します。これらの条件は、製品用に作成する各オファ어의一部です。

AWS Data Exchange コンソールでデフォルトの DSA テンプレートをダウンロードし、編集して独自の利用規約を追加できます。または、任意の DSA をアップロードして独自のカスタム用語を指定できます。は、製品のオファ어に指定した DSA を、それ以上変更することなく AWS Data Exchange 関連付けます。

DSA は、契約者およびプロバイダーのコミュニティと協力して、両当事者のニーズに対応するために開発されました。DSA は、使用、保証、補償、準拠法などの主要な契約条項にわたる共通点を積極的に定義しています。AWS Data Exchange プロバイダーは、セルフサービス取引やプライベートオファ어의 EULA として DSA を提供することができます。サブスクライバーは、DSA を提供するプロバイダーのデータを検索、サブスクライブ、使用したり、プライベートオファ어用の標準 DSA をリクエストしたりできます。プライベートオファ어의場合、サブスクライバーはプロバイダーに DSA テンプレートをリクエストできます。DSA 条件は、当事者間で合意されたカスタム取引要件に対応するように修正できます。

返金ポリシー

プロバイダーは、製品のサブスクライバーに対する返金ポリシーを管理します。AWS Data Exchange は返金の提供を必須としていませんが、オファーの詳細に返金ポリシーを明記する必要があります。サブスクライバーが質問やリクエストがある場合に連絡できるように、これらの詳細は明確かつ簡潔な方法で提供することをお勧めします。AWS は、プロバイダーが認可する返金をプロバイダーに代わって処理できますが、プロバイダーとして返金を認可する必要があります。

が承認された返金を処理する AWS には、AWS サポート を通じて [返金承認フォームを送信します](#) AWS Marketplace 管理ポータル。返金リクエストが処理され、サブスクライバーへの返金が行われます。AWS がプロバイダーに代わって処理したすべての返金は、毎月の請求済み収益レポートで確認できます。

サブスクリプション検証

プロバイダーは、 のデータ製品のサブスクリプション検証を有効にするオプションがあります AWS Data Exchange。詳細については、「[のプロバイダーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

オファーの自動更新

自動更新の利用可能性はプロバイダーが管理します。自動更新は、オファーの作成当初に有効化することを選択できます。これにより、自動更新が設定された製品をサブスクライブするオプションがサブスクライバーに提供されます。オファーが作成された後でこのパラメータを変更することはできません。

Note

カスタムプライベートオファーに柔軟な支払いスケジュールをセットアップする場合、オファーを自動更新に設定することはできません。

でのプライベートオファーの作成 AWS Data Exchange

AWS Data Exchange は、プロバイダーにプライベートオファーなどのカスタムオファーを作成するオプションを提供します。

データプロバイダーは、データ製品を、一般向けに提供されているオファー規約とは異なる条件でサブスクライバーに提供できます。一般公開されていない製品の場合、プライベートオファーは顧客

が利用できる唯一の条件であり、その製品はプライベートオファーを作成する顧客のみに表示されず。プライベートオファーでは、1つ、または複数の AWS アカウント向けにカスタムオファーを作成できます。プライベートオファーは、料金、期間、支払いスケジュール、データサブスクリプション契約、または払い戻しポリシーなどの面で他のオファーとは異なるものにすることができます。

プロバイダーは、製品を作成した後でプライベートオファーを作成し、選択したサブスクライバーのグループにそのオファーを提示することができます。一般公開されている製品の場合は、プライベートオファーを作成する前にパブリックオファーを作成する必要があります。

プライベートオファーを作成する

1. にサインイン AWS Management Console し、 [AWS Data Exchange コンソール](#)を開きます。
2. [コンソール](#) の左側にあるナビゲーションペインで [製品] を選択してから、プライベートオファーを作成する製品を選択します。
3. [プライベートオファー] タブで、[作成] を選択します。
4. [オファータイプの選択] ページで、[プライベートオファー]、または [更新されたプライベートオファー] を選択してから、[次へ] を選択します。

Note

これが有効期限切れのプライベートオファーの更新、または AWS Data Exchange でアップグレードされている既存のサブスクリプションである場合は、[更新されたプライベートオファー] を選択します。このオプションを選択した場合は、オファーが更新またはアップグレードであることを AWS 監査して確認します。AWS がこれを実行できない場合、当社はサブスクライバーへのオファーと使用権限を取り消すことがあります。

5. サブスクライバー AWS アカウント ID に、プライベートオファーを作成するアカウントの 12 桁のアカウント番号を入力します。複数のアカウントに単一のプライベートオファーを提示できるため、複数のアカウントを追加できます。
6. [説明] で、アカウントの簡単な説明 (アカウントの会社名など) を入力します。
7. [料金と期間] で、期間と料金の情報などのオファーの詳細を入力します。
8. サブスクライバーに対する [合計料金] を複数の支払いに分配する場合は、[支払いスケジュールを指定する] チェックボックスをオンにします。サブスクリプション時に請求される [前払い] を追加できます。次に、サブスクライバーが追加の月次支払い、またはカスタム支払いを行うように選択できます。[月次] オプションを選択すると、日付が自動的に入力されます。[カスタム] オプションを選択する場合は、請求日 (最大 36 回払い) を入力する必要があります。

Note

[オファーの有効期限] は、サブスクライバーがオファーを受諾する必要がある期限日です。この日付までにプライベートオファーが受諾されない場合、サブスクリプションにプライベートオファーを利用できなくなります。

有効期限は、2 回目の支払い日より前にする必要があります。

既に作成済みのオファーを有効期限より前に期限切れにする必要がある場合は、オファーページに戻って [期限切れにする] を選択します。そうすることで、すべての見込みサブスクライバーに対するオファーの有効期限が切れます。

9. 米国の売上税と使用税の設定、データサブスクリプション契約、自動更新設定、サポート情報を入力します。

10 [次へ] をクリックします。[更新されたプライベートオファー] を選択した場合は、更新されたプライベートオファーの条件に同意することを示すチェックボックスをオンにする必要があります。

11 情報が正しいことを確認してから、[発行] を選択します。

Note

プライベートオファーの作成後は、料金と請求日以外のすべてのフィールドを編集できません。

での Bring Your Own Subscription オファーの作成 AWS Data Exchange

AWS Data Exchange は、Bring Your Own Subscription (BYOS) オファーなどのカスタムオファーを作成するオプションをプロバイダーに提供します。

データプロバイダーには、データ製品のサブスクライバーが既に存在する場合があります。BYOS オファーを使用すると、追加料金なしで既存のサブスクリプションを AWS 移行して顧客に提供できます。

BYOS オファーでは、プロバイダーとサブスクライバー間の請求関係が継続されます。BYOS オファーはフルフィルメント料金の対象にはなりません。サブスクライバーは、サブスクリプションに対する AWS Marketplace 請求書を受け取りますが、料金は請求されません。BYOS オファーを作成すると、その内容を確認して、問題や質問がある場合はお客様に連絡します。

サブスクリプションのライフサイクルは の外部で開始されるため AWS Data Exchange、BYOS AWS Data Exchange を使用して既存のサブスクリプションを に移行するワークフローには、お客様とサブスクライバー間のコラボレーションが必要です。

Important

BYOS オファーでは、この製品の可用性より前のサブスクリプションを に移行します AWS。既存のサブスクリプション契約で BYOS オファーを検証する AWS 可能性があります。が BYOS オファーを検証 AWS できない場合、オファーと使用権限は予告なしに取り消される可能性があります。

で BYOS オファーを作成または承諾する前に AWS Data Exchange、プロバイダーとサブスクライバーは一緒に次の手順を実行する必要があります。

前提条件

1. プロバイダーとサブスクライバーが、BYOS AWS Data Exchange ソリューションの実装について連絡を取り合う。
2. サブスクライバーは、データ製品のサブスクライブに使用する AWS アカウント ID を提供します AWS Data Exchange。

プロバイダーである場合は、以下の手順を実行して BYOS オファーを作成します。

BYOS オファーを作成する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. 製品リストの製品名の横にあるオプションボタンを選択して、BYOS オファーを作成したい製品を選択します。
4. 「アクション」から「カスタムオファーを作成」を選択します。
5. 「オファータイプの選択」ページの「オファータイプ」で、「Bring Your Own Subscription (BYOS)」オプションを選択し、「次へ」を選択します。
6. 「既存のサブスクリプションの詳細を入力」ページの「既存の契約」で、「ファイルを追加」を選択して既存のサブスクリプションをアップロードし、契約が AWSで製品を作成したときよりも前の日付であることを確認します。

7. 「既存のサブスクリプション開始日」では、カレンダーアイコンを選択し、開始日を選択します。
8. [期間] には、該当する月数を入力します。
9. 「自動更新条件」で、「はい」または「いいえ」を選択して、既存の契約に現在のサブスクリプションの有効期限が切れたときの自動更新が含まれるかどうかを指定します。
10. [返金ポリシー] に、既存のサブスクリプション契約に記載されている返金ポリシーに関する情報を入力し、[次へ] を選択します。
11. サブスクライバーの詳細の入力ページで、サブスクライバーの詳細に、サブスクライバーの 12 桁のAWS アカウント ID と説明を入力し、次へを選択します。
12. [確認と公開] ページで、すべての情報を確認します。セクションを変更するには、[編集] をクリックします。
13. [承認] セクションでチェック ボックスをオンにして、AWSでこの製品が利用可能になる以前の既存のサブスクリプションを移行することを承認します。
14. [発行] を選択します。

Note

BYOS オファターの作成後に自動更新設定を変更することはできません。BYOS に追加できるAWS アカウントは 1 つだけです。複数のアカウントが必要な場合は、BYOS オファターを追加作成してください。

AWS Data Exchange サブスクリプションの表示

[製品の概要] ページを使用して、任意の製品のすべてのサブスクリプションを表示することができます。各オファターのサブスクリプションを表示することもできます。

製品のサブスクリプションの表示

製品のサブスクリプションを表示する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで [データを発行] を展開し、[製品] を選択します。
3. [製品] で、オファターを表示する製品を選択します。

4. [サブスクリプション] タブを選択します。このタブで、製品のすべてのサブスクリプションを表示することができます。

[サブスクリプション] タブの左上にあるドロップダウンから、現在アクティブなサブスクリプション、またはアーカイブされた (期限が切れて終了した) サブスクリプションをフィルタリングするように選択できます。

オファ어의サブスクリプションの表示

特定のオファ어의サブスクリプションを表示する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで [データを発行] を展開し、[製品] を選択します。
3. [製品] で、オファ어를表示する製品を選択します。
4. [パブリックオファ어] タブ、または [カスタムオファ어] タブを選択します。このタブから、オファ어의すべてのサブスクリプションを表示することができます。

[サブスクリプション] セクションの左上にあるドロップダウンから、現在アクティブなサブスクリプション、またはアーカイブされた (期限が切れて終了した) サブスクリプションをフィルタリングするように選択できます。

で製品を更新する AWS Data Exchange

以下のセクションでは、AWS Data Exchange 製品を更新する方法について説明します。この手順は、ユーザーが [のデータ AWS Data Exchange](#) に精通しているプロバイダであることを前提としています。製品の公開後は、製品の詳細とパブリックオファ어를編集できます。新しいリビジョンをサブスクライバーに発行することで、基盤となるデータセットを更新することもできます。詳細については、「[改訂](#)」を参照してください。

トピック

- [で製品とオファ어의詳細を更新する AWS Data Exchange](#)
- [でのデータディクショナリの更新 AWS Data Exchange](#)
- [でのサンプルの更新 AWS Data Exchange](#)
- [でのカスタムメタデータの更新 AWS Data Exchange](#)

- [で新しいデータセットリビジョンを公開する AWS Data Exchange](#)
- [で製品の公開を解除する AWS Data Exchange](#)
- [でのリビジョンの削除 AWS Data Exchange](#)
- [でのリビジョンへのアクセスの取り消し AWS Data Exchange](#)

で製品とオファーの詳細を更新する AWS Data Exchange

製品を公開したら、AWS Data Exchange コンソールを使用して製品の詳細を編集できます。また、製品のパブリックまたはカスタムオファーを編集して、オファー規約を変更することも可能です。製品のオファー規約を更新する場合、アクティブなサブスクリプションを持つサブスクライバーは、サブスクリプションがアクティブである限り、既存のオファー規約を保持します。自動更新を選択したサブスクライバーは、新しいオファー規約を使用します。

製品を更新するときは、以下の点に留意してください。

- オファーのサブスクリプション期間を削除または編集することはできません。これは、既存のサブスクライバーが引き続き更新機能を使用できることを確実にします。特定のサブスクリプション期間を提供する必要がなくなった場合は、既存の製品を発行解除してから、新しい製品を公開することができます。詳細については、「[で製品の公開を解除する AWS Data Exchange](#)」を参照してください。
- 製品の公開後は、その製品をサブスクライブしているサブスクライバーの人数にかかわらず、製品からデータセットを削除することはできません。
- API を含む製品の従量制料金を更新する場合:
 - 従量制料金の値下げは、新規サブスクライバーの商品詳細ページにすぐに表示されます。

Warning

従量制費用の値下げを取り消すと、従量制費用の価格が上昇することになります。従量制費用の値上げについて詳しくは、次の点を参照してください。

- 従量制料金の値上げは、既存の利用者の場合は値上げが提出されてから 90 日後、または更新時(どちらか早い方)にその月の初日に有効になります。価格変更が送信されると、メールは既存のサブスクライバーに送信されます。新しいサブスクライバーの場合、値上げはすぐに商品詳細ページに表示されます。

Example 例

5月10日に従量制コストの値上げを提出します。既存のサブスクライバーには、価格変更に関するメールが届きます。値上げは9月1日に発効します。

Warning

既存のサブスクライバーに値上げが有効になる前に値上げを取り消すことはできません（そのアクションにより価格が下がるため）。

製品、データセット、またはオファーの詳細を更新する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で、更新する製品を選択します。ステータスが [発行済み] であることを確認してください。
4. 製品の詳細から：
 - パブリック オファーを編集している場合は、[パブリックオファー] タブを選択し、[編集] を選択して、指示に従って製品を編集します。
 - プライベートオファーを編集する場合は、「カスタムオファー」タブを選択し、編集したいプライベートオファーの横にあるオプションボタンを選択し、「編集」を選択してから、指示に従って商品を編集します。
 - a. 従量課金制の API を含む製品の場合は、「従量課金 — オプション」で、編集する従量制費用のタイプの横にあるオプションボタンを選択し、「編集」を選択します。
 - b. 「従量制費用の編集」ダイアログボックスで、「価格/単位」または「説明」を更新します。
 - c. [Update] (更新) を選択します。

更新された従量制費用は [従量制費用 - オプション] に表示されます。

5. [データセット] の [機密情報] で [編集] を選択し、指示に従って情報を編集します。
6. 「データ評価」から、データディクショナリまたはサンプル名の横にあるオプションボタンを選択し、「アクション」を選択して、データディクショナリまたはサンプルを更新します。詳細

については、[でのデータディクショナリの更新 AWS Data Exchange](#)および[でのサンプルの更新 AWS Data Exchange](#)を参照してください。

7. オファertypeに応じてオファーを設定します。
 - 製品がパブリックオファーである場合は、[パブリックオファー]で[編集]を選択し、指示に従ってパブリックオファーを編集します。
 - 製品がカスタムオファーである場合は、[カスタムオファー]で[編集]を選択し、指示に従ってカスタムオファーを編集します。
 - 製品がプライベートオファーである場合は、[プライベートオファー]で[編集]を選択し、指示に従ってプライベートオファーを編集します。
8. [Update] (更新) を選択します。

でのデータディクショナリの更新 AWS Data Exchange

でデータディクショナリを更新するには、AWS Data Exchange まず既存のデータディクショナリを削除してから、新しいデータディクショナリをアップロードします。

データディクショナリを更新するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#)にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある[データを発行]で[製品]を選択します。
3. 「製品」から、更新する製品を選択し、そのステータスが「発行済み」であることを確認します。
4. [データ評価] タブを選択します。
5. 「データディクショナリとサンプル」で、プラスアイコンを選択してデータセットを展開し、データディクショナリ名の横にあるオプションボタンを選択してデータディクショナリを選択します。
 - a. [アクション]を選択し、[データディクショナリを削除]を選択します。

データディクショナリが削除されます。
 - b. データセットの横にあるオプションボタンを選択し、[アクション]を選択してから[データディクショナリをアップロード]を選択します。
 - c. [ファイルを追加]を選択します。
 - d. 新しいデータディクショナリを選択し、「開く」をクリックします。
 - e. [アップロード]を選択します。

6. (オプション) データディクショナリ名の横にあるオプションボタンを選択してデータディクショナリを選択し、[アクション] を選択してから [データディクショナリをダウンロード (CSV)] を選択してデータディクショナリをコンピューターにダウンロードします。

でのサンプルの更新 AWS Data Exchange

製品を公開したら、AWS Data Exchange コンソールを使用して製品サンプルを更新できます。

サンプルを更新するには

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. 「製品」から、更新する製品を選択し、そのステータスが「発行済み」であることを確認します。
4. [データ評価] タブを選択します。
5. [データディクショナリとサンプル] で、データセットの横にあるオプションボタンを選択します。
6. [アクション]、[メンバーを追加] の順に選択します。
 - a. [サンプルをアップロード] を選択します。
 - b. コンピューターから新しいサンプルを選択し、[開く] を選択します。
 - c. オプションの説明を入力し、[追加] を選択します。
7. (オプション) サンプル名の横にあるオプションボタンを選択し、「アクション」を選択してから、次のアクションのいずれかを選択します。
 - 選択したサンプルをダウンロードする
 - サンプルをプレビューする (CSV のみ)
 - 選択したサンプルを削除する

でのカスタムメタデータの更新 AWS Data Exchange

製品を公開したら、AWS Data Exchange コンソールを使用して製品のカスタムメタデータを編集できます。

カスタムメタデータを更新するには

1. ウェブブラウザを開き、AWS Data Exchange コンソールにサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で、更新する製品を選択します。ステータスが [発行済み] であることを確認してください。
4. (オプション) [サブスクリプション] で [カスタムメタデータを表示] を選択してメタデータを表示し、[閉じる] を選択します。
5. [サブスクリプション] で [カスタムメタデータを編集] を選択し、指示に従ってメタデータを編集します。
6. [Save] を選択します。

で新しいデータセットリビジョンを公開する AWS Data Exchange

AWS Data Exchange は動的に更新された製品をサポートします。サブスクライバーは製品を特定の期間サブスクライブし、サブスクリプションがアクティブである限り、すべての発行済みデータセットにアクセスします。例えば、プロバイダーが米国株式の日次終値が含まれた製品を提供したいとすると、この製品はその日の終値で毎日更新されることとなります。プロバイダーは、製品のデータセットで利用できる新しいリビジョンを作成して確定するか、新しいデータセットを製品に追加することができます。

製品には、サブスクリプションの一環として、すべて、または一部の履歴リビジョンと将来のリビジョンが含まれます。詳細については、「[のリビジョンアクセスルール AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

次の手順では、AWS Data Exchange コンソールを使用して既に公開されているデータセットの新しいリビジョンを作成して確定します。その後、データセットのリビジョンはデータセットが属するすべての製品に自動発行されます。詳細については、「[改訂](#)」を参照してください。

Important

プロバイダーは、コンソールまたは AWS Data Exchange API を使用して、リビジョンへのサブスクライバーアクセスを取り消し、リビジョンのアセットを削除できます。詳細については、「[でのリビジョンへのアクセスの取り消し AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

データセットの新しいリビジョンを製品に発行する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、更新するデータセットを選択します。
4. [製品] タブに移動して、データセットが発行済みの製品に関連付けられていることを確認します。
5. [リビジョン] タブで [リビジョンを作成] を選択し、[リビジョンを作成] ページを開きます。
 - a. (オプション) [リビジョンの設定] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
 - b. (オプション) [タグを追加 - オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
 - c. [リビジョンを作成] を選択します。

新しいリビジョンが作成されます。

6. 含めるアセットが所有する Amazon S3 バケットがローカルコンピュータのどちらに保存されているかに応じて、[ジョブ] セクションで [Amazon S3 からインポート] または [アップロード] (コンピュータからアップロードするため) を選択します。
 - a. 選択内容に応じて、プロンプトに従います。アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。
 - b. ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。
7. [リビジョンの概要] でリビジョンとそのアセットを確認してから、[確定] を選択します。

リビジョンが製品に発行され、サブスクライバーによる利用が可能になります。

ファイル配信タイプで発行された履歴データに対する推奨アプローチ

動的製品には、サブスクライバーがアクセスできる履歴的なコンテンツが含まれているものがあります。例えば、毎日の米国株式終値の 30 年分の履歴が製品に含まれている場合、サブスクライバーは毎日の動的更新に加えて、このデータにアクセスできることになります。

データの履歴的なレコードが含まれるこれらの種類の製品では、データセットの単一のリビジョンですべての履歴データを発行することがベストプラクティスです。リビジョン用のオプションのコメントを使用して、このリビジョンが特定の日付からのすべてのデータ履歴の単一アップロードであることを説明できます。

単一の履歴リビジョンに複数のオブジェクトの時系列が含まれている場合は、オブジェクト名にラベルを付けて、基盤となるデータの周期性を説明することを検討してください。例えば、それぞれに1週間分の履歴データが含まれる200個のファイルが単一の履歴リビジョンに含まれている場合、データ履歴が始まる週の日付で各ファイルを命名することができます。

アップデートに対する推奨アプローチ

データセットは多数の方法で動的に更新できます。以下は3つのアプローチ例です。これらはすべて更新ごとに新しいリビジョンを作成しますが、新しいリビジョンの内容が異なります。

- 更新ごとに最後のリビジョン以降に変更された項目のみが含まれる新しいリビジョンを使用する – 変更された項目だけが更新されるため、リビジョンのサイズが小さくなります。このアプローチは、更新の影響を受けるのがデータの小さなサブセットのみで、サブスクライバーが変更された項目にのみ着目するというデータセットに適しています。
- 更新ごとに更新されたデータが含まれる新しいリビジョンを使用する – 新しいリビジョンには、完全な更新済みファイルが含まれます。新しいリビジョンにはすべての項目が含まれており、これには最後のリビジョン以降変更されていないものも含まれます。このアプローチは、データについて単一の最新ファイルを保持したいサブスクライバーにとって便利です。サブスクライバーは、最新リビジョンのアセット(1つ、または複数)を同じ宛先にエクスポートし、以前のファイル(1つ、または複数)を上書きします。
- 更新ごとに完全な履歴と更新されたデータが含まれる新しいリビジョンを使用する – 新しいリビジョンにはデータの完全な履歴が含まれており、これにはデータの最新状態と以前のリビジョンの履歴が含まれます。このアプローチは、ストレージ負荷が高くなります。これは、サブスクライバーが、存在する可能性がある過去の修正や調整を含めたデータの履歴の最新の全体像に関心を持っているというデータセットに適しています。このアプローチでは、各リビジョンが自立しており、以前のリビジョンとの依存関係がないデータセット履歴の全貌を提供します。

で製品の公開を解除する AWS Data Exchange

製品が に公開されると AWS Data Exchange、製品の可視性設定に基づいて、すべての が検索してサブスクライブできるようになります。製品は、以下の結果を達成したい場合に発行解除することができます。

- [での新製品の公開 AWS Data Exchange](#) 演習で作成した製品を削除する。
- リソースをクリーンアップする。
- 公開されている製品から製品を削除します AWS Data Exchange。
- サブスクライバーが製品を自動更新しないようにする。

製品を発行解除するときは、以下の点に留意してください。

- 製品はいつでも発行解除できます。
- 製品の公開を解除すると、AWS Data Exchange カタログや [AWS Marketplace](#) に表示されなくなります。
- アクティブなサブスクリプションを持つサブスクライバーは、そのサブスクリプションの期限が切れるまでデータ製品へのアクセス権を保持します。
- 製品を未公開にした後で期限が切れたアクティブなサブスクリプションは、サブスクライバーが自動更新を有効にしても更新されません。
- 既存のサブスクライバーは、サブスクリプションの有効期限が切れるまで引き続き製品の詳細を表示できます。

製品を発行解除する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [製品] を選択します。
3. [製品] で、削除する製品を選択します。ステータスが [発行済み] であることを確認してください。
4. [製品の概要] で [発行解除] を選択し、製品を発行解除する手順を実行します。

Important

この操作は元に戻すことができません。

これらのステップが完了すると、製品のステータスが [発行解除済み] になります。発行解除した製品を再度発行することはできませんが、同じデータセット、製品の詳細、およびオファーの詳細が設定された新しい製品 (新しい製品 ID を使用) を作成できます。

でのリビジョンの削除 AWS Data Exchange

プロバイダーは、コンソールまたは AWS Data Exchange API を使用して、リビジョンへのサブスクライバーアクセスを取り消し、リビジョンのアセットを削除できます。詳細については、「[でのリビジョンへのアクセスの取り消し AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

リビジョンは、確定後、製品に追加する前に編集または削除できます。詳細については、以下の各トピックを参照してください。

- [リビジョンを編集する](#)
- [リビジョンを削除する](#)

でのリビジョンへのアクセスの取り消し AWS Data Exchange

のデータ製品のプロバイダーとして AWS Data Exchange、特定のリビジョンへのサブスクライバーアクセスはいつでも取り消すことができます。通常、このアクションはコンプライアンス上の理由からプロバイダーが行います。リビジョンを取り消しても、原資産は削除されません。リビジョンを取り消すと、すべてのサブスクライバーに、リビジョンが取り消されたという Amazon EventBridge (以前は CloudWatch Events と呼ばれていました) の通知が届きます。その後、利用者はリビジョンが取り消された理由を AWS Data Exchange のコンソールで確認できます。利用者は取り消されたリビジョン内のデータをエクスポートしたりクエリしたりすることはできません。

リビジョンを取り消すことができるようにするには、独自の IAM ポリシーを管理するプロバイダーが新しいアクションとして `dataexchange:RevokeRevision` を追加する必要があります。[の管理ポリシー AWS Data Exchange](#) を使用するプロバイダーは、変更を加える必要はありません。

リビジョンが取り消されたら、コンソールまたは AWS Data Exchange DeleteAsset API オペレーションを使用してリビジョンのアセットを削除できます。

トピック

- [AWS Data Exchange アセットリビジョンへのアクセスの取り消し \(AWS CLI\)](#)
- [プロバイダーとしての単一の AWS Data Exchange アセットリビジョンへのアクセスの取り消し \(コンソール\)](#)
- [プロバイダーとしての複数の AWS Data Exchange アセットリビジョンの取り消し \(コンソール\)](#)
- [プロバイダーとしての AWS Data Exchange アセット失効の理由の編集 \(コンソール\)](#)
- [サブスクライバーとして取り消し済みリビジョンを表示する \(コンソール\)](#)

AWS Data Exchange アセットリビジョンへのアクセスの取り消し (AWS CLI)

AWS Data Exchange データ製品のプロバイダーとして、を使用して、以下の手順を使用してリビジョンへのサブスクライバーアクセス AWS CLI を取り消すことができます。

リビジョンを取り消すには (AWS CLI)

1. `revoke-revision` コマンドを使用して、リビジョンを取り消す。

```
$ AWS dataexchange revoke-revision \  
--data-set-id $DATA_SET_ID \  
--revision-id $REVISION_ID \  
--comment 'Revoking Revision Example'  
  
{  
  "Id": "ab7859881EXAMPLEdd3e8a4b88fc6a8d",  
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:427362365172:data-sets/$DATA_SET_ID/  
revisions/$REVISION_ID",  
  "Comment": "Revoking Revision Example",  
  "CreatedAt": "2022-03-08T18:54:20.746Z",  
  "UpdatedAt": "2022-03-09T20:28:53.105Z",  
  "DataSetId": "24d30f8446a878237c35d011e7b22d0b",  
  "Finalized": true,  
  "Revoked": true,  
  "RevokedAt": "2022-03-09T20:28:53.105Z",  
  "RevocationComment": "revoking revision example"  
}
```

2. リビジョンが取り消されたら、AWS Data Exchange DeleteAsset API オペレーションを使用してリビジョンのアセットを削除できます。

プロバイダーとしての単一の AWS Data Exchange アセットリビジョンへのアクセスの取り消し (コンソール)

AWS Data Exchange データ製品のプロバイダーとして、AWS Data Exchange コンソールを使用して、以下の手順を使用して1つのリビジョンへのサブスクライバーアクセスを取り消すことができます。

プロバイダーとしてのリビジョンを取り消す (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、取り消すリビジョンがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブの [リビジョン] でリビジョンを選択します。
5. リビジョンページの [リビジョン概要] の [アクション] で、[取り消す] を選択します。
6. 「リビジョンを取り消す」ダイアログボックスに、リビジョンを取り消す理由の簡単な説明を入力します。サブスクライバーにはこの説明が表示されます。

7. [取り消す] を選択します。

リビジョンのステータスは [取り消し済み] に設定されます。

Warning

これで、リビジョンとそのアセットのすべてが取り消されます。利用者は取り消しの理由を確認できますが、アセットにアクセスしたりエクスポートしたりすることはできません。この操作は元に戻すことができません。

8. リビジョンが取り消されたら、リビジョンページに移動し、「インポートされたアセット」テーブルで削除するアセットを選択し、「削除」を選択することで、リビジョンのアセットを削除できます。

リビジョンが取り消された理由を編集するには、[プロバイダーとしての AWS Data Exchange アセット失効の理由の編集 \(コンソール\)](#) を参照してください。

プロバイダーとしての複数の AWS Data Exchange アセットリビジョンの取り消し (コンソール)

AWS Data Exchange データ製品のプロバイダーとして、AWS Data Exchange コンソールを使用して、次の手順を使用して複数のリビジョンへのサブスクライバーアクセスを取り消すことができます。

プロバイダーとしての複数のリビジョンを取り消すには (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、取り消すリビジョンがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、10 個までリビジョンを選択します。
5. [取り消す] を選択します。
6. 「{x} 件のリビジョンを取り消す」ダイアログボックスに、リビジョンを取り消す理由の簡単な説明を入力します。サブスクライバーにはこの説明が表示されます。次に、[取り消す] を選択します。

リビジョンのステータスは [取り消し済み] に設定されます。

⚠ Warning

これにより、リビジョンとすべてのアセットが取り消されます。利用者は取り消しの理由を確認できますが、アセットにアクセスしたりエクスポートしたりすることはできません。この操作は元に戻すことができません。

7. リビジョンが取り消されたら、リビジョンページに移動し、「インポートされたアセット」テーブルで削除するアセットを選択し、「削除」を選択することで、リビジョンのアセットを削除できます。

リビジョンが取り消された理由を編集するには、[プロバイダーとしての AWS Data Exchange アセット失効の理由の編集 \(コンソール\)](#) を参照してください。

プロバイダーとしての AWS Data Exchange アセット失効の理由の編集 (コンソール)

AWS Data Exchange データ製品のプロバイダーとして、AWS Data Exchange コンソールを使用して、以下の手順を使用して失効の理由を編集できます。

プロバイダーとして取り消しリビジョンを編集する (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データ製品を発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、取り消したリビジョンがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで、取り消したリビジョンを選択します。
5. リビジョンページで [取り消しの理由を編集] を選択します。
6. 「取り消しリビジョンを編集」ダイアログボックスに、リビジョンを取り消す理由の簡単な説明を入力します。
7. [保存] を選択します。

リビジョンのステータスが [取り消し済み] に設定されます。

更新された取り消しの理由はリビジョンページに表示されます。

サブスクライバーとして取り消し済みリビジョンを表示する (コンソール)

AWS Data Exchange データ製品のサブスクライバーは、コンソールを使用して、以下の手順を使用してリビジョンへのアクセスを取り消した理由 AWS Data Exchange を表示できます。

サブスクライバーとして取り消し済みリビジョンを表示する (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. 「製品」で製品を選択し、その製品の下にあるデータセットを展開すると、リビジョンのリストが表示されます。
4. データセットページの「リビジョン」タブに、リビジョンのステータス (発行済みまたは取り消し済み) が表示されます。
5. リビジョンを選んでください。
6. リビジョンの詳細ページの上部にリビジョンの理由が表示されます。

のプロバイダーのサブスクリプション検証 AWS Data Exchange

重要な規制の更新

2025年4月8日以降、AWS Data Exchange を使用して、バルクの米国機密個人データまたは米国政府関連データを含む製品を、懸念のある国または対象者に提供することはできません。これらは、[ここで](#)入手できる米国司法省の、懸念のある国および対象者による米国機密個人データおよび政府関連データへのアクセスの防止に関する最終規則 (「DOJ ルール」) で定義されています。DOJ ルールの遵守はお客様の責任となります。コンプライアンスをサポートするために、サブスクリプション検証がすべての AWS Data Exchange パブリックオファーで有効になり、サブスクライバーが懸念のある国にいるか対象者にいるかを特定する必要があります。

サブスクリプション認証では、潜在的なサブスクライバーの身元を確認し、そのサブスクライバーに製品の使用を承認することができます。製品へのサブスクリプションリクエストの承認は、製品を制限または規制している場合、またはアクセスを制限する製品がある場合に便利です。サブスクリプションの検証は、「新しい製品を発行する」ページの「パブリックオファーを追加」セクションにあります。

潜在的なサブスクライバーは、レビューのためにフォームに記入して送信する必要があります。フォームでは、以下の情報が必要になります。

- 見込みサブスクライバーの連絡先の詳細。連絡先名、会社名、Eメールアドレス、およびサブスクライバーが懸念のある国にいるか対象者にいるかなど。この要件の詳細については、「」を参照してくださいの[公開ガイドライン AWS Data Exchange](#)。
- 見込みサブスクライバーの意図されたユースケース。
- 見込みサブスクライバーの AWS アカウント ID。

Important

AWS Data Exchange は、見込みサブスクライバーから提供された情報をリクエストフォームで確認または検証しません。サブスクライバーが提供する情報の確認と検証は、お客様の責任となります。

すべての製品のすべてのサブスクリプション検証リクエストを表示、承認、または拒否するには、AWS Data Exchange コンソールの「公開先 AWS Marketplace」で、「サブスクリプションの検証」を選択します。詳細については、「[でのサブスクリプション検証のリクエストを承認または拒否する AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

Note

各サブスクリプションリクエストは、その ID を使用して一意に識別されます。ID は、プロバイダーとサブスクライバーの両方に表示されます。サブスクリプションリクエスト ID は、サブスクライバーとの通信で使用できます。

サブスクライバーがリクエストを行った後で製品のオファー規約が変更された場合、そのサブスクライバーの条件には、更新された条件ではなく、リクエストを行った時点での条件が反映されます。条件に対する変更の例には、料金、返金ポリシー、またはデータサブスクリプション契約などがあります。リクエストの送信後に製品オファー条件を変更した場合、AWS Data Exchange コンソールの承認ペインにメッセージが表示され、現在の条件とリクエストが行われた時点の条件に違いがあることを示します。

AWS Data Exchange コンソールはリクエストの履歴を保持します。サブスクライバーの連絡先詳細と個人を特定できる情報 (PII) を削除するタイミングはプロバイダーが制御します。リクエスト履歴の表示方法の詳細については、[サブスクリプション検証リクエストの表示](#) を参照してください。

以下のトピックでは、プロバイダーのサブスクリプション検証について詳しく説明します。

トピック

- [でのサブスクリプション検証に関する E メール通知 AWS Data Exchange](#)
- [サブスクリプション検証リクエストの表示](#)
- [でのサブスクリプション検証のリクエストを承認または拒否する AWS Data Exchange](#)

でのサブスクリプション検証に関する E メール通知 AWS Data Exchange

AWS Marketplace 登録済みの販売者の AWS アカウント E メールアドレスに E メールメッセージが送信され、AWS Data Exchange サブスクリプションリクエストが受信されたとき、またはステータスがキャンセルまたは期限切れに変更されたときに通知されます。サブスクリプションリクエストのステータス変更のほとんどは E メールで通知されますが、これらの E メールメッセージの送信はベストエフォートベースで行われます。

Note

プロバイダー自身が開始したサブスクリプションリクエストのステータス変更 (サブスクリプションの承認時など) に関する E メール通知は送信されません。

メールクライアントでルールを作成して、受信者検証 E メールを転送できます。これらの通知 E メールには、AWS Data Exchange 「- サブスクリプション検証リクエスト」という件名があります。

サブスクリプション検証リクエストの表示

パブリックオファーを公開し、サブスクリプション検証リクエストを受信したら、リクエストを表示できます。

サブスクリプション検証リクエストを表示するには

1. AWS 管理コンソールにサインインし、[AWS Data Exchange コンソール](#)を開きます。
2. 左側のナビゲーションペインの発行先 AWS Marketplaceで、サブスクリプションの検証を選択します。

3. 保留中のリクエストを表示するには、保留中のリクエストを表示するを選択します。[履歴を表示]を選択すると、他のすべてのリクエストが表示されます。

でのサブスクリプション検証のリクエストを承認または拒否する AWS Data Exchange

重要な規制の更新

2025年4月8日以降、AWS Data Exchange を使用して、バルクの米国機密個人データまたは米国政府関連データを含む製品を、懸念のある国または対象者に提供することはできません。これらは、[ここで](#)入手できる米国司法省の、懸念のある国および対象者による米国機密個人データおよび政府関連データへのアクセスの防止に関する最終規則（「DOJ ルール」）で定義されています。DOJ ルールの遵守はお客様の責任となります。コンプライアンスをサポートするために、サブスクリプション検証がすべての AWS Data Exchange パブリックオファーで有効になり、サブスクライバーが懸念のある国にいるか対象者にいるかを特定する必要があります。

サブスクリプション検証を通じて収集するサブスクライバー情報は、AWS Marketplace 利用規約に従って使用する必要があります。

のサブスクリプションリクエストを受け取った後 AWS Data Exchange、承認または拒否するまでに 45 日かかります。その期間内にリクエストを承認しないと、リクエストの有効期限が切れます。見込みサブスクライバーは、拒否されたリクエストをいつでも、何度でも再送信できます。

リクエストの承認

サブスクリプションリクエストを承認する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインの発行先 AWS Marketplace で、サブスクリプションの検証を選択します。
3. サブスクリプションの検証ページで、保留中のリクエストの表示を選択します。
4. [承認] を選択します。

API が含まれる製品に対するリクエストの承認

API が含まれる製品に対するサブスクリプションリクエストを承認できます。API が含まれる製品には、特定のサブスクリプションに対する各 AWS Data Exchange リクエストのヘッダーで送信されるカスタムメタデータを追加することもできます。カスタムメタデータはサブスクライバーには表示されません。

API が含まれる製品に対するサブスクリプションリクエストを承認する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインの発行先 AWS Marketplace で、サブスクリプションの検証を選択します。
3. サブスクリプションの検証ページで、保留中のリクエストを表示するを選択します。
4. [カスタム API メタデータを承認および追加] を選択します。
5. モーダルで、キーバリューペアを入力してから、[カスタム API メタデータを承認および追加] を選択します。

Note

必要に応じて、[追加] を選択してから追加のキーバリューペアを入力することで、キーバリューペアを追加できます。

6. [サブスクリプション検証] ページが再度表示されます。サブスクリプションリクエストを正常に承認したことを知らせるメッセージが表示されます。
7. カスタムメタデータを表示するには、[製品] に移動し、API を使用する製品を選択してから、[サブスクリプション] タブを選択します。
8. [Public and custom subscriptions] (パブリックサブスクリプションとカスタムサブスクリプション) では、以下を実行できます。
 - a. サブスクリプションを選択し、[View custom metadata] (カスタムメタデータを表示) を選択して、追加したキーバリューペアを確認する。
 - b. サブスクリプションを選択し、[(カスタムメタデータを編集)] を選択して、このサブスクリプションのキーバリューペアを編集、追加、または削除する。

Note

キーバリューペアを3つ以上追加する場合は、[パブリックサブスクリプションとカスタムサブスクリプション] 表の [API のカスタムメタデータ] 列に最初のキーバリューペアが表示され、最初のキーバリューペアの下にキーバリューペアの数が表示されます。例えば、**[keyExample-valueExample +2 個]** などです。

リクエストの拒否

サブスクリプションリクエストを拒否する

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインの発行先 AWS Marketplace で、サブスクリプションの検証を選択します。
3. サブスクリプションの検証ページで、保留中のリクエストの表示を選択します。
4. [拒否] を選択します。

でのプロバイダー生成通知 AWS Data Exchange

のプロバイダーは AWS Data Exchange、プロバイダーが生成した通知を送信して、データセットに関連する重要なイベントをサブスクライバーに通知できます。購読者に体系的に連絡を取り、利用資格のあるデータ関連のイベントをプロバイダー間で一貫した方法で処理できるように支援できます。

プロバイダーが生成する通知を使用して、購読者を支援するために次のことを行います。

- AWS Data Exchange コンソールまたは AWS SDK を使用して、データの更新、遅延、スキーマの変更、廃止の通知を送信します。
- 購読者がフォローすべきコメントや期待されるアクションを含めてください。

プロバイダーが生成した通知を購読者に送信するには、次の手順に従います。

1. [AWS Data Exchange コンソール](#) を開いてサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで、[通知] を選択します。
3. ドロップダウンメニューから [通知のタイプ] を選択します。通知のタイプには以下が含まれません。

- データ更新 — データソースが更新されました。
 - データ遅延 — データソースが期待どおりに更新されていません。
 - スキーマの変更 — データソースに構造的な変更が含まれる。
 - 非推奨 — データソースは更新されません。
4. ドロップダウンメニューから影響を受けるデータセットを選択し、サブスクライバーアクションの日付、時刻、リストの通知の詳細を表示します。また、このイベントの影響を受ける対象を特定するためのロケーションメタデータも提供できます。
 5. [通知をプレビュー] を選択し、通知を公開します。

AWS Data Exchange でのプロバイダー財務 AWS Marketplace

以下のトピックでは、を介したデータの提供に関する財務情報について説明します AWS Data Exchange。

AWS Data Exchange は と統合されています AWS Marketplace。AWS Data Exchange プロバイダーとして登録する場合は、まず AWS Marketplace 販売者として登録する必要があります。詳細については、[「ステップ 2: プロバイダーになるための登録を行う」](#)を参照してください。

AWS Data Exchange プロバイダーとして、販売者レポートや AWS Marketplace Commerce Analytics サービスなどの AWS Marketplace 機能を利用できます。詳細については、[「セラーレポートとデータフィード」](#)を参照してください。

支払い

AWS は、販売者として AWS アカウント 登録された に関連付けられた銀行口座から AWS Marketplace サービス料金を差し引いた金額を毎月直接支払います。支払いは、毎月の月初ではなく、アカウントが作成されたときに基づいて、毎月随時払い込まれます。資金が払い込まれるのは、サブスクライバーからの集金後のみです。詳細については、「AWS Marketplace 販売者ガイド」の [「支払い」](#)を参照してください。

米国の消費税と使用税

AWS Marketplace Tax Calculation Service を使用すると、既存製品と新製品の米国の消費税と使用税を計算して徴収できます。一部の州 AWS Marketplace では、課税対象製品の販売に起因する該当する消費税を徴収し、これらの州に拠点を置くサブスクライバーに納付することが法律で義務付けられているため、Tax Calculation Service の対象外となります。サービスを使用するには、プロバイダープロファイルの税金ネクサスを設定して、製品税コードを製品に割り当ててください。

税金ネクサスを設定する

- [AWS Marketplace 管理ポータル](#) を開きます。[設定] タブで、該当する税金ネクサスを設定します。

詳細については、「AWS Marketplace 販売者ガイド」の「[販売者登録プロセス](#)」を参照してください。

AWS Marketplace 販売者レポート

AWS Data Exchange プロバイダーは、製品のサブスクリプションアクティビティを詳述したレポートを受け取ります。毎日および毎月のデータを追跡するために、複数のレポートを利用できます。これらのレポートには、オファーに関するサブスクリプションアクティビティ、サブスクライバーから受け取った支払い、およびプロバイダーに払い込まれる金額に関する情報が含まれています。支払いは、AWS 顧客から支払いを受け取るまで行われません。詳細については、「AWS Marketplace 販売者ガイド」の「[販売者レポート](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange プライベートオファーに支払いスケジューラを使用するプロバイダーは、このデータを月次レポートで確認できます。詳細については、「AWS Marketplace 販売者ガイド」の「[月別請求済み収益レポート](#)」を参照してください。

サブスクライバーの返金リクエスト

プロバイダーは、製品の返金ポリシーを管理します。このポリシーは、製品の作成時に指定する必要があります。AWS Data Exchange 返金を提供する必要はありません。がユーザーに代わって返金リクエスト AWS を処理する前に、すべてのリクエストを承認する必要があります。

[返金承認フォーム](#) を送信します AWS サポート。彼らはあなたのリクエストを処理し、サブスクライバーに返金を行います。がユーザーに代わって AWS 処理したすべての返金は、月別請求収益レポートで確認できます。

のジョブ AWS Data Exchange

AWS Data Exchange ジョブは、非同期のインポートまたはエクスポートオペレーションです。

のデータ製品のプロバイダーとして AWS Data Exchange、製品に発行するデータセットを作成および管理できます。アセットやリビジョンは、Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) または署名付き URL にダウンロードまたはコピーできます。さらに、プロバイダーは Amazon API Gateway API からアセットをインポートしたり、Amazon Redshift データセットからアセットをインポートすることもできます。

サブスクライバーは、サブスクリプションを通じて権限を持っているデータセットを表示し、それらにアクセスすることができます。API オペレーションを使用して、権限のあるデータセットをダウンロード (エクスポート) または Amazon S3 にコピーし、さまざまな AWS 分析および機械学習サービスで使用できます。

アセットを作成またはコピーしたり、ジョブを介してリビジョンをコピーしたりするには AWS Management Console、AWS Command Line Interface (AWS CLI)、独自の REST アプリケーション、またはいずれかの AWS SDKs を使用できます。

ジョブは、作成されてから 90 日後に削除されます。

トピック

- [ジョブプロパティ](#)
- [AWS リージョン および ジョブ](#)
- [へのアセットのインポート AWS Data Exchange](#)
- [からのアセットのエクスポート AWS Data Exchange](#)
- [からのリビジョンのエクスポート AWS Data Exchange](#)

ジョブプロパティ

ジョブには以下のプロパティがあります。

- ジョブ ID – ジョブの作成時に生成された ID で、ジョブを一意に識別します。
- ジョブタイプ – 以下のジョブタイプがサポートされています。
 - Amazon S3 からのインポート

- AWS Lake Formation データ権限のインポート (プレビュー)
- 署名付き URL からのインポート
- Amazon API Gateway API からのインポート
- Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有からのインポート
- Amazon S3 データアクセスのインポート
- Amazon S3 へのエクスポート
- 署名付き URL へのエクスポート
- Amazon リソースネーム (ARN) – AWS リソースの一意的識別子。
- ジョブの状態 – ジョブの状態は、WAITING、IN_PROGRESS、COMPLETED、CANCELLED、ERROR、または TIMED_OUT です。ジョブが作成されると、そのジョブは開始されるまで WAITING 状態になります。
- ジョブの詳細 – エクスポート先の詳細やインポートソースの詳細など、ジョブが実行する操作の詳細です。

Example ジョブリソース

```
{
  "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:jobs/6cEXAMPLE818f7c7a23b3d0EXAMPLE1c",
  "Id": "6cEXAMPLE818f7c7a23b3d0EXAMPLE1c",
  "State": "COMPLETED",
  "Type": "IMPORT_ASSETS_FROM_S3",
  "CreatedAt": "2019-10-11T14:12:24.640Z",
  "UpdatedAt": "2019-10-11T14:13:00.804Z",
  "Details": {
    "ImportAssetsFromS3": {
      "AssetSources": [
        {
          "Bucket": "amzn-s3-demo-bucket",
          "Key": "MyKey"
        }
      ],
      "DataSetId": "14EXAMPLE4460dc9b005a0dEXAMPLE2f",
      "RevisionId": "e5EXAMPLE224f879066f999EXAMPLE42"
    }
  }
}
```

AWS リージョン および ジョブ

データセットのリージョン AWS リージョン とは異なる にある Amazon S3 バケットとの間でアセットをインポートまたはエクスポートする場合、Amazon S3 データ転送料金ポリシーに従って、データ転送コストが に請求 AWS アカウント されます。

署名付き URL にアセットをエクスポートする場合、Amazon S3 の [料金ポリシーに従って Amazon S3](#) 課金 AWS アカウント されます。

ファイルデータセット AWS Data Exchange の のサブスクリプションが終了しても、既にエクスポートしたファイルへのアクセスは保持されます。データサブスクリプション契約を確認して、サブスクリプションの終了時にエクスポートされたデータを削除することが契約で義務付けられているかどうかを確認してください。

へのアセットのインポート AWS Data Exchange

製品に発行するデータセットをインポートする AWS Data Exchange ジョブを作成できます。以下のセクションでは、これらのアセットをさまざまな場所からインポートする方法について説明します。

トピック

- [S3 バケットからの AWS Data Exchange アセットのインポート](#)
- [署名付き URL からの AWS Data Exchange アセットのインポート](#)
- [Amazon API Gateway API からの AWS Data Exchange アセットのインポート](#)
- [Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有からの AWS Data Exchange アセットのインポート](#)
- [からの AWS Data Exchange アセットのインポート AWS Lake Formation \(プレビュー\)](#)

S3 バケットからの AWS Data Exchange アセットのインポート

Amazon S3 から にアセットをインポートする場合 AWS Data Exchange、使用する AWS Identity and Access Management (IAM) アクセス許可には、AWS Data Exchange サービス S3 バケットに書き込み、アセットが保存されている S3 バケットから読み取る機能が含まれている必要があります。所有権にかかわらず、アクセス許可を持っている S3 バケットなら、どのバケットからでもインポートを実行できます。詳細については、「[Amazon S3 のアクセス許可](#)」を参照してください。

単一のジョブで最大 100 個のアセットをインポートできます。

トピック

- [S3 バケットからのアセットのインポート \(AWS SDK\)](#)
- [S3 バケットからのアセットのインポート \(コンソール\)](#)

S3 バケットからのアセットのインポート (AWS SDK)

Amazon S3 バケット (SDK) からアセットをインポートするにはAWS SDKs

1. `IMPORT_ASSETS_FROM_S3` タイプの `CreateJob` リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - `AssetSources`
 - `Bucket`
 - `Key`
 - `DataSetID`
 - `RevisionID`
3. ステップ 1 で返された `JobId` を必要とする `StartJob` 操作で `CreateJob` リクエストを開始します。
4. (オプション) アセットの作成後にアセットの `name` プロパティを更新します。

S3 バケットからのアセットのインポート (コンソール)

S3 バケットからアセットをインポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、更新するリビジョンがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで [リビジョンを作成] を選択し、[リビジョンを作成] ページを開きます。
 - a. [リビジョンの設定] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
 - b. [タグを追加 - オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
 - c. [作成] を選択します。

新しいリビジョンが作成されます。

5. [ジョブ] セクションで [Amazon S3 からインポート] を選択します。
6. [Amazon S3 からインポート] ウィンドウのプロンプトに従ってから、[アセットをインポート] を選択します。

アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

署名付き URL からの AWS Data Exchange アセットのインポート

署名付き URL を使用して、Amazon S3 に保存されていないアセットをインポートできます。

トピック

- [署名付き URL からのアセットのインポート \(AWS SDK\)](#)
- [署名付き URL からのアセットのインポート \(コンソール\)](#)

署名付き URL からのアセットのインポート (AWS SDK)

署名付き URL (AWS SDKs) からアセットをインポートするには

1. IMPORT_ASSET_FROM_SIGNED_URL タイプの CreateJob リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - AssetName
 - DataSetID
 - Md5Hash
 - RevisionID
3. ステップ 1 で返された JobId を必要とする StartJob 操作で CreateJob リクエストを開始します。
4. (オプション) アセットの作成後にアセットの name プロパティを更新します。
5. レスポンスの詳細には、ファイルをインポートするために使用できる SignedUrl が含まれています。

Note

署名付き URL は、作成されてから 1 分後に期限が切れます。

署名付き URL からのアセットのインポート (コンソール)

署名付き URL からアセットをインポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、更新するアセットがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで [リビジョンを作成] を選択し、[リビジョンを作成] ページを開きます。
 - a. [リビジョンの設定] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
 - b. [タグを追加 - オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
 - c. [作成] を選択します。

新しいリビジョンが作成されます。

5. [ジョブ] セクションで [アップロード] を選択します。
6. アップロードウィンドウのプロンプトに従ってから、[開く] を選択します。

アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

Amazon API Gateway API からの AWS Data Exchange アセットのインポート

AWS Data Exchange サブスクライバーは、IAM 認証情報と AWS SDKs を使用して、データプロバイダーから APIs を呼び出すことができます。は、認証とサブスクリプションの使用権限を処理することで APIs へのアクセス AWS Data Exchange を管理します。

Amazon API Gateway API からの API アセットのインポート (AWS SDK)

Note

現在、以下の SDK は SendApiAsset 操作をサポートしません。

- SDK for .NET
- AWS SDK for C++
- AWS SDK for Java 2.x

Amazon API Gateway API (AWS SDKs) からアセットをインポートするには

1. IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API タイプの CreateJob リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - ApiID
 - DataSetID
 - ProtocolType
 - RevisionID
 - Stage
3. ステップ 1 で返された JobId を必要とする StartJob 操作で CreateJob リクエストを開始します。
4. (オプション) GetJob 操作をポーリングして、ジョブが完了するのを待ちます。
5. (オプション) アセットの作成後にそれらの name プロパティを更新します。

Amazon API Gateway API からの API アセットのインポート (コンソール)

Amazon API Gateway API からアセットをインポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、更新するアセットがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで [リビジョンを作成] を選択し、[リビジョンを作成] ページを開きます。

- a. [リビジョンの設定] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
- b. [タグを追加 – オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
- c. [作成] を選択します。

新しいリビジョンが作成されます。

5. [API アセット] セクションで、[API ステージを追加] を選択します。
6. API ステージの追加ページで、AWS アカウント または別のアカウントから Amazon API Gateway API とステージ名を選択します。
7. [Document API for subscribers] (サブスクライバーのドキュメント API) で以下を実行します。
 - a. [API name] (API 名) を、サブスクライバーが理解できる明確で簡潔な名前に更新します。
 - b. フィールドに仕様を入力、[Import from .JSON file] (.JSON ファイルからインポート) を選択して仕様をインポート、または [Amazon API Gatewayからインポート] を選択して仕様をインポートすることによって、OpenAPI 3.0 仕様を文書化します。
8. [API ステージを追加] を選択します。

API アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有からの AWS Data Exchange アセットのインポート

Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有を使用してアセットをインポートすると、サブスクライブ後にサードパーティーの Amazon Redshift テーブルのクエリ、分析、運用を開始できます。

Amazon Redshift (AWS SDKs) AWS Data Exchange のデータ共有からのアセットのインポート

Amazon Redshift (AWS SDKs) AWS Data Exchange のデータ共有からアセットをインポートするには

1. `IMPORT_ASSETS_FROM_REDSHIFT_DATA_SHARES` タイプの `CreateJob` リクエストを作成します。

2. リクエストには以下を含めます。
 - AssetSources
 - DataShareArn
 - DataSetID
 - RevisionID
3. ステップ 1 で返された JobId を必要とする StartJob 操作で CreateJob リクエストを開始します。
4. (オプション) GetJob 操作をポーリングして、ジョブが完了するのを待ちます。
5. (オプション) アセットの作成後にアセットの name プロパティを更新します。

Amazon Redshift AWS Data Exchange のデータ共有からのアセットのインポート (コンソール)

Amazon Redshift アセットをインポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、更新するアセットがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで [リビジョンを作成] を選択し、[リビジョンを作成] ページを開きます。
 - a. [リビジョンの設定] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
 - b. [タグを追加 - オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
 - c. [作成] を選択します。

新しいリビジョンが作成されます。

5. [AWS Data Exchange datashares for Amazon Redshift] (Amazon Redshift のデータ共有) で、[Add datashares] (データ共有を追加) を選択します。
6. データ AWS Data Exchange 共有をリビジョンに追加するページで、追加するデータ共有を選択します。
7. [Add datashare(s)] (データ共有を追加) を選択します。

アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

からの AWS Data Exchange アセットのインポート AWS Lake Formation (プレビュー)

から AWS Lake Formation にアセットをインポートする場合 AWS Data Exchange、使用する IAM アクセス許可には次の機能が含まれている必要があります。

- Lake Formation の権限への書き込み、付与、取り消し
- テーブル、データベース、およびカタログのリソース共有の作成
- Lake Formation 以降のリソース共有のリソース共有の更新、削除、関連付け、関連付けの解除

必要となる IAM アクセス許可の詳細については、「[the section called “アイデンティティとアクセス権の管理”](#)」を参照してください。

(プレビュー) AWS Lake Formation からのアセットのインポート (AWS SDKs)

(プレビュー) AWS Lake Formation (AWS SDKs) からアセットをインポートするには

1. Import_Assets_From_Lake_Formation_Tag_Policy タイプの CreateJob リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - AssetSources
 - CatalogId
 - Database
 - Expression
 - TagKey
 - TagValues
 - Permissions
 - Table
 - Expression
 - TagKey
 - TagValues
 - Permissions

- DataSetId
 - RevisionId
3. JobId を必要とする StartJob 操作で CreateJob リクエストを開始します。
 4. (オプション)GetJob 操作をポーリングして、ジョブが完了するのを待ちます。
 5. (オプション) アセットの作成後にアセットの name プロパティを更新します。

(プレビュー) AWS Lake Formation からのアセットのインポート (コンソール)

(プレビュー) AWS Lake Formation からアセットをインポートするには (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、更新するリビジョンがあるデータセットを選択します。
4. [リビジョン] タブで [リビジョンを作成] を選択し、[リビジョンを作成] ページを開きます。
 - a. [リビジョンの設定] で、リビジョンの目的を説明するリビジョンのオプションのコメントを入力します。
 - b. [タグを追加 - オプション] で、リソースに関連付けられているタグを追加します。
 - c. [作成] を選択します。

新しいリビジョンが作成されます。

5. LLake Formation データ権限セクションでは、「LFタグを追加」を選択します。
6. 追加するキーと値を選択し、「LF タグを追加」を選択します。
 - (オプション) 「リソースをプレビュー」を選択すると、権限を付与している関連データカタログリソースが表示されます。
7. サービスアクセスで、AWS Lake Formation リソースをインポートするロールを選択します
AWS Data Exchange。
8. 「Lake Formation データの作成」権限を選択します。

アセットをデータセットにインポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

からのアセットのエクスポート AWS Data Exchange

プロバイダーとサブスクライバーの両方が、製品の公開されたリビジョンからデータセットをエクスポートできます AWS Data Exchange。これらのアセットは、S3 バケットまたは署名付き URL にエクスポートできます。以下のセクションでは、これを行う方法について説明します。

トピック

- [S3 バケットへの AWS Data Exchange アセットのエクスポート](#)
- [署名付き URL への AWS Data Exchange アセットのエクスポート](#)

S3 バケットへの AWS Data Exchange アセットのエクスポート

アセットを Amazon S3 にエクスポートする場合、使用する IAM アクセス許可には、AWS Data Exchange サービス S3 バケットから読み取り、アセットが保存されている S3 バケットに書き込む機能が含まれている必要があります。所有権にかかわらず、アクセス許可を持っている S3 バケットなら、どのバケットでもエクスポートを実行できます。詳細については、「[Amazon S3 のアクセス許可](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange は、データセットを Amazon S3 にエクスポートするときに設定可能な暗号化パラメータをサポートします。エクスポートされたオブジェクトに適用する Amazon S3 のサーバー側の暗号化設定は、エクスポートジョブの詳細で指定できます。Amazon S3-Managedキーによるサーバー側の暗号化 (SSE-S3) を使用するか、に保存されている による AWS KMS keys サーバー側の暗号化 AWS Key Management Service (SSE-KMS) を使用するかを選択できます。詳細については、「Amazon Simple Storage Service ユーザーガイド」の「[サーバー側の暗号化を使用したデータの保護](#)」を参照してください。

Important

データを Amazon S3 にエクスポートするときは、Amazon S3 のセキュリティ機能を検討することをお勧めします。一般的なガイドラインとベストプラクティスの詳細については、Amazon Storage Service ユーザーガイドの [Amazon S3 のセキュリティのベストプラクティス](#) を参照してください。

⚠ Important

プロバイダーが 1996 年の医療保険の相互運用性と説明責任に関する法律 (HIPAA) の対象となる保護医療情報 (PHI) を含む製品としてマークしている場合、製品のデータセットが HIPAA アカウントとして指定 AWS アカウント されていない限り AWS アカウント (「」の AWS 事業提携契約で定義)、そのデータセットを にエクスポートすることはできません [AWS Artifact](#)。

単一のジョブで最大 100 個のアセットをエクスポートできます。

トピック

- [S3 バケットへの AWS Data Exchange アセットのエクスポート \(AWS SDKs\)](#)
- [サブスクライバーとして S3 バケットに AWS Data Exchange アセットをエクスポートする \(コンソール\)](#)
- [プロバイダーとしての S3 バケットへの AWS Data Exchange アセットのエクスポート \(コンソール\)](#)

次の動画では、からアセットをエクスポートする方法について詳しく説明しています AWS Data Exchange。

S3 バケットへの AWS Data Exchange アセットのエクスポート (AWS SDKs)

次の手順を使用して、AWS SDKs を使用して AWS Data Exchange アセットを S3 バケットにエクスポートできます。

S3 バケット (AWS SDKs) にアセットをエクスポートするには

1. EXPORT_ASSETS_TO_S3 タイプの CreateJob リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - AssetDestinations
 - AssetID
 - Bucket
 - Key
 - DataSetID
 - Encryption

- KmsKeyArn
 - Type
 - RevisionID
3. ステップ 1 で返された JobId を必要とする StartJob 操作で CreateJob リクエストを開始します。
 4. (オプション) アセットの作成後にそれらの name プロパティを更新します。

Note

リビジョン全体の単一のジョブとしてのエクスポートについては、「[からのリビジョンのエクスポート AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

サブスクライバーとして S3 バケットに AWS Data Exchange アセットをエクスポートする (コンソール)

AWS Data Exchange データ製品のサブスクライバーは、コンソールを使用して、次の手順を使用してアセットを S3 バケットに AWS Data Exchange エクスポート AWS Data Exchange できます。

サブスクライバーとして S3 バケットにアセットをエクスポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. [権限を持つデータ] で、エクスポートするリビジョンがある製品を選択します。
4. [権限を持つデータセット] で、データセットを選択します。
5. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
6. [アセット] タブで、エクスポートするアセットの横にあるチェックボックスをオンにします。
7. [アクションをエクスポート] を選択してから、[選択したアセットを Amazon S3 にエクスポート] を選択します。
8. [Amazon S3 にエクスポート] ウィンドウのプロンプトに従ってから、[エクスポート] を選択します。

アセットをエクスポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

プロバイダーとしての S3 バケットへの AWS Data Exchange アセットのエクスポート (コンソール)

AWS Data Exchange データ製品のプロバイダーとして、コンソールを使用して、次の手順を使用してアセットを S3 バケットに AWS Data Exchange エクスポート AWS Data Exchange できます。

プロバイダーとして S3 バケットにアセットをエクスポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、エクスポートするアセットがあるデータセットを選択します。
4. [製品] タブに移動して、データセットが公開済みの製品に関連付けられていることを確認します。
5. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
6. [インポートされたアセット] セクションで、アセット名の横にあるチェックボックスをオンにします。
7. [アクションをエクスポート] を選択してから、[選択したアセットを Amazon S3 にエクスポート] を選択します。
8. [Amazon S3 にエクスポート] ウィンドウのプロンプトに従ってから、[エクスポート] を選択します。

アセットをエクスポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

署名付き URL への AWS Data Exchange アセットのエクスポート

署名URLs を使用して、Amazon S3 に保存されていない AWS Data Exchange アセットをエクスポートできます。

トピック

- [署名付き URL への AWS Data Exchange アセットのエクスポート \(AWS SDKs\)](#)
- [サブスクライバーとしての署名付き URL へのアセットのエクスポート \(コンソール\)](#)
- [プロバイダーとしての署名付き URL へのアセットのエクスポート \(コンソール\)](#)

署名付き URL への AWS Data Exchange アセットのエクスポート (AWS SDKs)

AWS SDKs、S3 バケット以外の宛先に AWS Data Exchange アセットをエクスポートできます。

署名付き URL (AWS SDKs) にアセットをエクスポートするには

1. EXPORT_ASSET_TO_SIGNED_URL タイプの CreateJob リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - AssetID
 - DataSetID
 - RevisionID
3. ステップ 1 で返された JobId を必要とする StartJob 操作で CreateJob リクエストを開始します。
4. (オプション) アセットの作成後にアセットの name プロパティを更新します。
5. レスポンスの詳細には、ファイルをインポートするために使用できる SignedUrl が含まれています。

Note

署名付き URL は、作成されてから 1 分後に期限が切れます。

サブスクライバーとしての署名付き URL へのアセットのエクスポート (コンソール)

AWS Data Exchange データ製品のサブスクライバーとして、コンソールを使用して、次の手順を使用して S3 バケット以外の宛先にアセットを AWS Data Exchange エクスポート AWS Data Exchange できます。

サブスクライバーとして署名付き URL にアセットをエクスポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. [権限を持つデータ] で、エクスポートするリビジョンがある製品を選択します。
4. [権限を持つデータセット] で、データセットを選択します。

5. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
6. [アセット] タブで、エクスポートするアセットの横にあるチェックボックスをオンにします。
7. [アクションをエクスポート] を選択してから、[選択したアセットをダウンロード] を選択します。

アセットをエクスポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

プロバイダーとしての署名付き URL へのアセットのエクスポート (コンソール)

AWS Data Exchange データ製品のプロバイダーとして、コンソールを使用して、次の手順を使用して S3 バケット以外の宛先にアセットを AWS Data Exchange エクスポート AWS Data Exchange できます。

プロバイダーとして署名付き URL にアセットをエクスポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、エクスポートするリビジョンがある製品を選択します。
4. [製品] タブに移動して、データセットが公開済みの製品に関連付けられていることを確認します。
5. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
6. [インポートされたアセット] セクションで、アセット名の横にあるチェックボックスをオンにします。
7. [アクションをエクスポート] を選択してから、[選択したアセットをダウンロード] を選択します。

アセットをエクスポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

からのリビジョンのエクスポート AWS Data Exchange

プロバイダーとサブスクライバーの両方が、アクセス許可を持つ S3 バケットにデータセットのリビジョンをエクスポートできます。

AWS Data Exchange は Amazon S3 にリビジョンをエクスポートするときに設定可能な暗号化パラメータをサポートします。エクスポートされたオブジェクトに適用する Amazon S3 のサーバー側の暗号化設定は、エクスポートジョブの詳細で指定できます。Amazon S3 マネージドキー (SSE-S3) によるサーバー側の暗号化、または AWS Key Management Service に保存された KMS キー (SSE-KMS) によるサーバー側の暗号化の使用を選択できます。詳細については、「Amazon Simple Storage Service デベロッパーガイド」の「[サーバー側の暗号化を使用したデータの保護](#)」を参照してください。

Important

プロバイダーが 1996 年の医療保険の相互運用性と説明責任に関する法律 (HIPAA) の対象となる保護医療情報 (PHI) を含む製品としてマークしている場合、HIPAA アカウントとして AWS アカウント 指定 AWS アカウント されていない限り、製品のデータセットをエクスポートすることはできません (「」のビジネス AWS アソシエイト補遺で定義) [AWS Artifact](#)。

トピック

- [からアセットリビジョンをエクスポートする際の主要なパターン AWS Data Exchange](#)
- [S3 バケットへの AWS Data Exchange アセットリビジョンのエクスポート \(AWS SDKs\)](#)
- [サブスクリイバーとしての S3 バケットへの AWS Data Exchange アセットリビジョンのエクスポート \(コンソール\)](#)
- [プロバイダーとしての S3 バケットへの AWS Data Exchange アセットリビジョンのエクスポート \(コンソール\)](#)
- [サブスクリイバーとして S3 バケットに AWS Data Exchange アセットリビジョンを自動的にエクスポートする](#)

次の動画では、AWS Data Exchange (2:18 から) からアセットをエクスポートする方法について詳しく説明しています。

からアセットリビジョンをエクスポートする際の主要なパターン AWS Data Exchange

アセットリビジョンを からエクスポートすると AWS Data Exchange、各アセットは S3 バケット内のオブジェクトになります。オブジェクトの名前は、ユーザー指定のキーパターンに基づきます。ア

セット属性を表す動的な参照を使用して、エクスポート中に自動生成される名前のパターンを作成できます。以下の表に記載されている動的な参照を使用します。

動的な参照	説明
<code>\${Asset.Id}</code>	アセットの ID。
<code>\${Asset.Name}</code>	アセットの名前。
<code>\${DataSet.Id}</code>	エクスポートされているデータセットの ID。
<code>\${DataSet.Name}</code>	エクスポートされるセットの名前。
<code>\${Revision.CreatedAt}</code>	YYYY-MM-DDTHH:MM:SSZ 形式を使用する、リビジョンが作成された UTC 日付と時刻。例: 2021-10-08T16:33:19.787Z
<code>\${Revision.CreatedAt.Day}</code>	リビジョンが作成された日。
<code>\${Revision.CreatedAt.Month}</code>	リビジョンが作成された月。
<code>\${Revision.CreatedAt.Year}</code>	リビジョンが作成された年。
<code>\${Revision.Id}</code>	エクスポートされているリビジョンの ID。

これらの動的な参照を使用して、アセット名のキーパターンを作成できます。2 つの Asset 動的参照 (`${Asset.Name}` と `${Asset.Id}`) の少なくとも一方を含める必要があります。

例えば、`${Revision.Id}/${Asset.Name}` をキーパターンとして使用すると、オブジェクト名としてスラッシュで区切られたリビジョン ID とアセット名を使用する Amazon S3 オブジェクトができます。

asset1 と asset2 という名前の 2 つのアセットを持つ ID が testRevisionId のリビジョンをエクスポートすると、アセットは以下の Amazon S3 ロケーションにエクスポートされます。

- `<bucket>/testRevisionId/asset1`
- `<bucket>/testRevisionId/asset2`

Note

結果として得られるオブジェクトには、一意の名前が必要です。それらに S3 バケット内の既存のオブジェクトと同じ名前が付けられている場合、エクスポートによって既存のオブジェクトが上書きされます。エクスポートしているリビジョンに一意でない名前がある場合 (同じ名前が付けられた 2 つのアセットなど)、エクスポートは失敗します。一意の動的参照は `${Asset.Id}` のみです。

S3 バケットへの AWS Data Exchange アセットリビジョンのエクスポート (AWS SDKs)

次の手順を使用して、AWS SDKs を使用して AWS Data Exchange アセットリビジョンを S3 バケットにエクスポートできます。

S3 バケット (AWS SDKs) にリビジョンをエクスポートするには

1. EXPORT_REVISIONS_TO_S3 タイプの CreateJob リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - DataSetId
 - Encryption
 - KmsKeyArn
 - Type
 - RevisionDestinations
 - Bucket
 - KeyPattern
 - RevisionId
3. ステップ 1 で返された JobId を必要とする StartJob 操作で CreateJob リクエストを開始します。
4. 新しく作成されたアセットには、元の S3 オブジェクトのキーと同一の name プロパティがあります。Amazon S3 オブジェクトキーは、デフォルトでキーパターン `${Asset.Name}` に設定されます。

アセットの name プロパティは、それらの作成後に更新できます。

キーパターンの詳細については、「[からアセットリビジョンをエクスポートする際の主要なパターン AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

Note

ダイナミックリファレンスとして DataSet.Name を使用する場合は、IAM 権限 dataexchange:GetDataSet が必要です。詳細については、「[AWS Data Exchange API アクセス許可: アクションとリソースのリファレンス](#)」を参照してください。

サブスクライバーとしての S3 バケットへの AWS Data Exchange アセットリビジョンのエクスポート (コンソール)

AWS Data Exchange データ製品のサブスクライバーは、コンソールを使用して、次の手順を使用してアセットを S3 バケットに AWS Data Exchange エクスポート AWS Data Exchange できます。

サブスクライバーとして S3 バケットにリビジョンをエクスポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. [権限を持つデータ] で、エクスポートするリビジョンがある製品を選択します。
4. [権限を持つデータセット] で、データセットを選択します。
5. [リビジョン] タブでリビジョンを選択してから、[Amazon S3 にエクスポート] を選択します。
6. [Export revision to Amazon S3] (リビジョンを Amazon S3 にエクスポート) で、宛先のオプションと Amazon S3 バケットフォルダの宛先を選択し、暗号化オプションを設定して、[エクスポート] を選択します。

リビジョンをエクスポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

プロバイダーとしての S3 バケットへの AWS Data Exchange アセットリビジョンのエクスポート (コンソール)

AWS Data Exchange データ製品のプロバイダーとして、コンソールを使用して、次の手順を使用してアセットを S3 バケットに AWS Data Exchange エクスポート AWS Data Exchange できます。

プロバイダーとして S3 バケットにリビジョンをエクスポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [データを発行] で [所有データセット] を選択します。
3. [所有データセット] で、エクスポートするリビジョンがある製品を選択します。
4. [製品] タブに移動して、データセットが公開済みの製品に関連付けられていることを確認します。
5. [リビジョン] タブで、リビジョンを選択します。
6. [インポートされたアセット] セクションで、アセット名の横にあるチェックボックスをオンにします。
7. [アクションをエクスポート] を選択してから、[選択したアセットを Amazon S3 にエクスポート] を選択します。
8. [Amazon S3 にエクスポート] ウィンドウのプロンプトに従ってから、[エクスポート] を選択します。

アセットをエクスポートするジョブが開始されます。ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

サブスクライバーとして S3 バケットに AWS Data Exchange アセットリビジョンを自動的にエクスポートする

プロバイダーが新しいリビジョンを発行するときに、新しいリビジョンを Amazon S3 バケットに自動的にエクスポートすることを選択できます。新しいリビジョンは、最大 5 つの S3 バケットにエクスポートできます。選択した S3 バケットに、新しいリビジョンが自動的に表示されます。

トピック

- [S3 バケットポリシー許可の前提条件](#)
- [サブスクライバーとしての S3 バケットへのリビジョンの自動エクスポート \(コンソール\)](#)
- [サブスクライバーとして S3 バケットにリビジョンを自動的にエクスポートする \(AWS SDKs\)](#)

Note

選択した S3 バケットにリビジョンを自動的にエクスポートするには、S3 バケットにデータをエクスポート AWS Data Exchange するためのアクセス許可が設定されているバケットポリシーが必要です。詳細については、「[S3 バケットポリシー許可の前提条件](#)」を参照してください。

S3 バケットポリシー許可の前提条件

Amazon S3 バケットにリビジョンを自動的にエクスポートする前に、リクエスト支払いを無効にし、Amazon S3 バケットにデータのエクスポート AWS Data Exchange を許可するアクセス許可が設定されているバケットポリシーが必要です。以下の手順では、これらの許可で既存の S3 バケットポリシーを編集する、またはこれらの許可を使用して S3 バケットポリシーを作成する方法に関する情報を提供します。

S3 バケットが SSE-KMS 暗号化用に構成されている場合、自動エクスポート ジョブを構成するユーザーは、AWS Data Exchange がオブジェクトを S3 バケットにコピーするための KMS キーに対する CreateGrant 権限を持っている必要があります。

Important

S3 バケットポリシー権限の前提条件が満たされていることを確認するために、自動エクスポートプロセス中に命名形式 `_ADX-TEST-ACCOUNTID#` のオブジェクトが S3 バケットに追加されます。

トピック

- [既存の S3 バケットポリシーの編集](#)
- [S3 バケットポリシーの作成](#)

既存の S3 バケットポリシーの編集

S3 バケットにバケットポリシーがある場合は、次の手順を実行して、AWS Data Exchange がバケットにデータをエクスポートできるようにします。

既存の S3 バケットポリシーを編集する

1. リビジョンをエクスポートするバケットにサインインします。
2. [アクセス許可] タブを選択し、バケットポリシーセクションで [編集] を選択します。
3. 以下のステートメントをコピーし、それをステートメントリストの末尾に貼り付けます。

```
{
  "Effect": "Allow",
  "Principal": {
    "Service": "dataexchange.amazonaws.com"
  },
  "Action": [
    "s3:PutObject",
    "s3:PutObjectAcl"
  ],
  "Resource": "arn:aws:s3:::<BUCKET-NAME>/*",
  "Condition": {
    "StringEquals": {
      "aws:SourceAccount": "<AWS ID>"
    }
  }
}
```

4. を S3 バケットの名前<BUCKET-NAME>に置き換え、 を AWS ID <AWS ID> に置き換えます。
5. [Save changes] (変更の保存) をクリックします。
6. 自動エクスポートジョブの宛先としてのバケットをさらに追加する場合は、この手順をステップ 1 から繰り返します。

S3 バケットポリシーの作成

S3 バケットにバケットポリシーがない場合は、次の手順を実行して がデータをエクスポート AWS Data Exchange できるように S3 バケットポリシーを作成します。

S3 バケットポリシーを作成する

1. リビジョンをエクスポートするバケットにサインインします。
2. [アクセス許可] タブを選択し、バケットポリシーセクションで [編集] を選択します。
3. 以下のバケットポリシーのすべてをコピーし、バケットポリシーエディタに貼り付けます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Service": "dataexchange.amazonaws.com"
      },
      "Action": [
        "s3:PutObject",
        "s3:PutObjectAcl"
      ],
      "Resource": "arn:aws:s3:::<BUCKET-NAME>/*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:SourceAccount": "<AWS ID>"
        }
      }
    }
  ]
}
```

4. を S3 バケットの名前<BUCKET-NAME>に置き換え、 を AWS ID <AWS ID> に置き換えます。
5. [Save changes] (変更の保存) をクリックします。
6. 自動エクスポートジョブの宛先としてのバケットをさらに追加する場合は、この手順をステップ 1 から繰り返します。

サブスクライバーとしての S3 バケットへのリビジョンの自動エクスポート (コンソール)

Note

選択した S3 バケットにリビジョンを自動的にエクスポートするには、S3 バケットにデータをエクスポート AWS Data Exchange するためのアクセス許可が設定されているバケットポリシーが必要です。詳細については、「[S3 バケットポリシー許可の前提条件](#)」を参照してください。

サブスクライバーとして S3 バケットにリビジョンを自動的にエクスポートする (コンソール)

1. ウェブブラウザを開き、[AWS Data Exchange コンソール](#) にサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインにある [マイサブスクリプション] で [権限を持つデータ] を選択します。
3. [権限を持つデータ] で、エクスポートするリビジョンがある製品を選択します。
4. [権限を持つデータセット] で、データセットを選択します。
5. [リビジョン] タブの [自動エクスポートジョブの宛先] で、[アクション] を選択してから [自動エクスポートジョブの宛先を追加] を選択します。
6. [自動エクスポートジョブの宛先を追加] で、[シンプル] または [アドバンスト] の宛先オプションを選択します。
 - a. [シンプル] オプションを選択する場合は、ドロップダウンリストから Amazon S3 バケットフォルダの宛先を選択し、暗号化オプションを選択して、[バケットの宛先を追加] を選択します。
 - b. [アドバンスト] オプションを選択する場合は、ドロップダウンリストから Amazon S3 バケットフォルダの宛先を選択し、[キー命名パターン](#) を選択して、それをパスに付加します。
7. [出力] を確認します。
8. [暗号化オプション] を設定し、[Amazon S3 の料金] を確認してから、[バケットの宛先を追加] を選択します。

Amazon S3 バケットの宛先が、[リビジョン] タブの [自動エクスポートジョブの宛先] に表示されます。

リビジョンを自動的にエクスポートするジョブが開始されます。

S3 バケットポリシー権限の前提条件が満たされていることを確認するために、命名形式 `_ADX-TEST-ACCOUNTID#` のオブジェクトが S3 バケットに追加されます。

ジョブが終了したら、[ジョブ] セクションの [状態] フィールドが [完了] に更新されます。

別の宛先を追加するには、[アクション] を選択してから [自動エクスポートジョブの宛先を追加] を選択します。

編集するには、編集する宛先を選択し、[アクション] を選択してから [宛先設定の編集] を選択します。

削除するには、[アクション] を選択してから [自動エクスポートジョブの宛先の削除] を選択します。

サブスクリイパーとして S3 バケットにリビジョンを自動的にエクスポートする (AWS SDKs)

Note

選択した S3 バケットにリビジョンを自動的にエクスポートするには、S3 バケットにデータをエクスポート AWS Data Exchange するためのアクセス許可が設定されているバケットポリシーが必要です。詳細については、「[S3 バケットポリシー許可の前提条件](#)」を参照してください。

S3 バケット (AWS SDKs) にリビジョンを自動的にエクスポートするには

1. Create_Event_Action リクエストを作成します。
2. リクエストには以下を含めます。
 - Action
 - ExportRevisionToS3
 - Encryption
 - KmsKeyArn
 - Type
 - RevisionDestination
 - Bucket
 - KeyPattern
 - Event
 - RevisionPublished
 - DataSetId
 - Tags
3. 必要に応じてキーパターンを変更します。Amazon S3 オブジェクトキーは、デフォルトでキーパターン {Revision.CreatedAt}/{Asset.Name} に設定されます。

キーパターンの詳細については、「[からアセットリビジョンをエクスポートする際の主要なパターン AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

S3 バケットポリシー権限の前提条件が満たされていることを確認するために、命名形式 `_ADX-TEST-ACCOUNTID#` のオブジェクトが S3 バケットに追加されます。

AWS Data Exchange クォータ

以下のセクションでは、のサービスクォータ、エンドポイント、間でのエクスポートおよびインポートジョブのガイドライン AWS リージョン、および AWS Data Exchange のリソースフィールドに関連する制約について説明します AWS アカウント。

Service Quotas

サービスクォータの詳細については、AWS 全般のリファレンスの[AWS Data Exchange 「エンドポイントとクォータ」](#)を参照してください。

サービスエンドポイント

サービスエンドポイントの詳細については、AWS 全般のリファレンスの[AWS Data Exchange 「エンドポイントとクォータ」](#)を参照してください。

エクスポートとインポートジョブのガイドライン

以下の表には、エクスポートジョブとインポートジョブのガイドラインが提供されています。詳細については、「[AWS リージョン および データセット](#)」を参照してください。

リソース、記述子、または操作	最大値	説明
署名付き URL からインポートされたアセットのファイルサイズ	5 GB	IMPORT_ASSET_FROM_SIGNED_URL を使用してインポートできるアセットの最大サイズ (GB 単位)。
Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) へのリビジョンのクロスリージョンエクスポートのファイルサイズ	1,000 GB	ExportRevision ジョブを使用して、プロバイダデータセットから別のリージョンにエクスポートできるリビジョンの最大サイズ (GB 単位) です。

リソース、記述子、または操作	最大値	説明
単一のジョブで署名付き URL からインポートできるアセットの数	1	単一の IMPORT_ASSET_FROM_SIGNED_URL ジョブを使用してインポートできるアセットの数です。
単一のクロスリージョン ExportRevision ジョブで Amazon S3 にエクスポートできるアセットの数	10,000	ExportRevision ジョブを使用して、1つのリージョンから別のリージョンにプロバイダーデータセットからエクスポートできるアセットの数です。
単一の ExportRevision ジョブで Amazon S3 にエクスポートできるアセットの数	10,000	ExportRevision ジョブを使用して Amazon S3 にエクスポートできるアセットの数です。
単一の ExportRevision ジョブで Amazon S3 にエクスポートできるリビジョンの数	1	ExportRevision ジョブを使用して Amazon S3 にエクスポートできるリビジョンの数です。
リソースあたりのイベントアクション	5	リソースあたりのイベントアクションの最大数です。
アカウントあたりのイベントアクション	50	アカウントあたりのイベントアクションの最大数です。
API Gateway からインポートされた API のペイロードサイズ	10 MB	Amazon API Gateway からインポートされた API の最大ペイロードサイズです。Amazon API Gateway API のクォータに関する詳細については、「Amazon API Gateway API デベロッパーガイド」の「 Amazon API Gateway のクォータと重要な注意点 」を参照してください。

リソース、記述子、または操作	最大値	説明
SendApiAsset	1 秒あたり 10 件のトランザクション (TPS)	リージョンごとの顧客 SendApiAsset に対する 1 秒あたりのデフォルトのリクエスト数。

リソースフィールドに対する制約

次の表は、データセット、リビジョン、製品、製品オファーを作成するときにプロバイダーが AWS Data Exchange コンソールで遭遇するリソースフィールドに関連する制約を示しています。この表には、サブスクリプションリクエストを実行するときにサブスクライバーが受けるリソースフィールドに関連する制約も記載されています。

[リソース]	フィールド	最大長またはサイズ
データセット	名前	256 文字
データセット	説明	16,384 文字
リビジョン	コメント	128 文字
製品の詳細	名前	72 文字
製品の詳細	簡単な説明	500 文字
製品の詳細	詳しい説明	30,000 文字
製品の詳細	ロゴ	100 KB
製品オファー	DSA	10 MB
製品オファー	返金ポリシー	200 文字

[リソース]	フィールド	最大長またはサイズ
サブスクリプションリクエスト	会社名	40 文字
サブスクリプションリクエスト	名前	40 文字
サブスクリプションリクエスト	E メールアドレス	100 文字
サブスクリプションリクエスト	想定されるユースケース	500 文字

でのログ記録とモニタリング AWS Data Exchange

モニタリングは、AWS Data Exchangeの優れたアーキテクチャの性質の重要な部分です。マルチポイント障害が発生した場合は、その障害をより簡単にデバッグできるように、AWS ソリューションの各部分からモニタリングデータを収集する必要があります。には、潜在的なインシデントを計画して対応 AWS Data Exchange できるように、のリソースとアクティビティをモニタリングするための複数のツール AWS が用意されています。

でのアクションとイベントのログ記録 AWS Data Exchange は、Amazon CloudWatch との統合によって実現されます。

以下のセクションでは、モニタリングとログインについて説明します AWS Data Exchange。

トピック

- [モニタリング AWS Data Exchange](#)
- [の Amazon EventBridge イベント AWS Data Exchange](#)
- [AWSAWS Data Exchange イベントのユーザー通知](#)
- [を使用した AWS Data Exchange API コールのログ記録 AWS CloudTrail](#)
- [AWS Data Exchange CloudTrail ログ記録の今後の変更](#)

モニタリング AWS Data Exchange

モニタリングは、およびその他の AWS Data Exchange AWS ソリューションの信頼性、可用性、パフォーマンスを維持する上で重要な部分です。AWS には、監視 AWS Data Exchange、問題発生時の報告、必要に応じて自動アクションを実行するための以下のモニタリングツールが用意されています。

- Amazon CloudWatch Events は、AWS リソースでの変更を説明するシステムイベントのほぼリアルタイムのストリームを配信します。CloudWatch Events によって、自動イベント駆動型コンピューティングが有効になります。特定のイベントを監視し、これらのイベントが発生したときに他の AWS サービスの自動アクションで応答するルールを作成できます。詳細については、「[Amazon CloudWatch Events ユーザーガイド](#)」を参照してください。
- Amazon CloudWatch Logs を使用すると、Amazon Elastic Compute Cloud (Amazon EC2) インスタンスやその他のソースからログファイルをモニタリング AWS CloudTrail、保存、およびアクセスできます。CloudWatch Logs は、ログファイル内の情報をモニタリングし、特定のしきい値が

満たされたときに通知します。高い耐久性を備えたストレージにログデータをアーカイブすることも可能です。詳細については、「[Amazon CloudWatch Logs ユーザーガイド](#)」を参照してください。

- CloudTrail は、によって、またはに代わって行われた API コールおよび関連イベントをキャプチャ AWS アカウントし、指定した Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) バケットにログファイルを配信します。が呼び出したユーザーとアカウント AWS、呼び出し元のソース IP アドレス、呼び出しの発生日時を特定できます。

の Amazon EventBridge イベント AWS Data Exchange

AWS Data Exchange は、以前は Amazon CloudWatch Events と呼ばれていた Amazon EventBridge と統合されています。EventBridge は、アプリケーションをさまざまなソースからのデータに接続するために使用できるイベントバスサービスです。詳細については、「[Amazon EventBridge ユーザーガイド](#)」を参照してください。

製品へのアクティブなサブスクリプションを持つサブスクライバーは、プロバイダーが新しいリビジョンを発行したり、既存の製品に新しいデータセットを追加したりする AWS Data Exchange たびに、からイベントを受け取ります。イベントには、発行された DataSetId と RevisionIds のリストが含まれています。

プロバイダは、データ更新、データ遅延、スキーマ変更、廃止に関する通知を送信できます。プロバイダーは、購読者がフォローすべきコメントや期待されるアクションを含めることができます。サブスクライバーは、Amazon EventBridge でこれらの通知をイベントとして受け取ります。イベントを使用して、自動化されたワークフローを構築したり、[AWS ユーザー](#)通知を使用して E メールやチャットプログラムに人間が読み取れる通知を配信したりできます。

データ製品関連のイベントは、プロバイダーがデータセットを発行 AWS リージョンしたで出力されます。これらのイベントを使用する EventBridge ルールを同じで設定するか AWS リージョン、その他のオプションについては「[間での Amazon EventBridge イベントの送受信 AWS リージョン](#)」を参照してください。

このトピックでは、次の表に示す各イベントに関する詳細情報を提供します。この表には、プロバイダーが製品にデータセットを追加したり、製品にリビジョンを追加したり、製品へのリビジョンを取り消したり、製品へのアクセスを削除したりしたときに、サブスクライバーが受信するイベントが含まれています。

アクション	受信したイベント	関連トピック
ファイルベースのデータセットを製品に追加し、発行する	Data Sets Published To Product	the section called “ファイルベースのデータセットを追加するイベント”
Amazon S3 データアクセスデータセットを製品に追加し、発行する	Amazon S3 Data Access Data Sets Published To Product	the section called “Amazon S3 データアクセスデータセットの追加に関するイベント”
AWS Lake Formation データアクセス許可データセットを追加して公開します	AWS Lake Formation Data Permission Data Set Published To Product	the section called “AWS Lake Formation データアクセス許可データセットを追加するためのイベント”
Amazon Redshift データセットを製品に追加し、発行する	Redshift Data Shares Data Sets Published To Product	Amazon Redshift データ共有データセットを追加するためのイベント
Amazon API Gateway データセットを製品に追加し、発行する	API Gateway API Data Sets Published To Product	the section called “Amazon API Gateway API データセットの追加に関するイベント”
ファイルベースのデータセットのリビジョンを製品に追加し、発行する	Revision Published To Data Set	リビジョンの追加に関するイベント
Amazon S3 データアクセスデータセットのリビジョンを製品に追加し、発行する	Revision Published to Amazon S3 Data Access Data Set	the section called “Amazon S3 データアクセスデータセットのリビジョンを追加する”
AWS Lake Formation データアクセス許可データセットリビジョンを製品に追加して公開します	Revision Published To Lake Formation Data Permission Data Set	the section called “AWS Lake Formation データアクセス許可データセットリビジョンを追加するためのイベント (プレビュー)”

アクション	受信したイベント	関連トピック
Amazon Redshift データ共有データセットのリビジョンを製品に追加し、発行する	Revision Published To Redshift Data Shares Data Set	Amazon Redshift データ共有データセットのリビジョンを追加する
Amazon API Gateway データセットのリビジョンを製品に追加し、発行する	Revision Published To API Gateway API Data Set	the section called “Amazon API Gateway API データセットのリビジョンをデータセットのリビジョンを追加する”
製品へのリビジョンを取り消します。	Revision Revoked	リビジョンを取り消すためのイベント
Amazon Redshift リソースに対して、サブスクライバーからのアクセスを削除する可能性のあるアクションを実行する	Action Performed On Redshift Data Share By Provider	Amazon Redshift リソースで実行されるアクションのイベント
Amazon Redshift リソースに対してサブスクライバーからのアクセスを削除するアクションを実行します	Redshift Data Share Access Lost	Amazon Redshift データ共有にアクセスできなくなった場合のイベント
データ更新の通知を送信します。	Data Updated in Data Set	プロバイダーが生成するデータ更新通知のイベント
スキーマ変更の通知を送信します。	Schema Change Planned for Data Set	プロバイダーが生成するスキーマ変更通知のイベント
データ遅延の通知を送信します。	Data Set Update Delayed	プロバイダーが生成するデータ遅延通知のイベント
データ廃止の通知を送信します。	Deprecation Planned for Data Set	プロバイダーが生成するデータ廃止通知のイベント

アクション	受信したイベント	関連トピック
データコンシューマーがデータ許可を受け入れるとイベントを送信します	Data Grant Accepted	データ許可を受け入れるためのイベント
データプロデューサーがデータ許可を拡張したときにイベントを送信します	Data Grant Extended	データ許可を拡張するためのイベント
データプロデューサーがデータ許可を取り消すとイベントを送信します	Data Grant Revoked	データ許可を取り消すためのイベント
自動エクスポートジョブ完了	Auto-export Job Completed	自動エクスポートジョブのイベントが完了しました
自動エクスポートジョブ失敗	Auto-export Job Failed	自動エクスポートジョブのイベントが失敗しました

Note

AWS Data Exchange は、ベストエフォートベースでイベントを発行します。イベント配信の詳細については、「[からのイベント AWS のサービス](#)」を参照してください。

ファイルベースのデータセットを追加するイベント

プロバイダーがファイルベースのデータセットを製品に追加して公開すると、サブスクライバーはData Sets Published To Product詳細タイプのイベントを受け取ります。

次の例は、詳細タイプのイベント本文を示しています。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Data Sets Published To Product",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
```

```
"time": "2020-07-29T18:24:04Z",
"region": "us-east-1",
"resources": [
  "prod-uEXAMPLEabc1d"
],
"detail": {
  "DataSetIds": [
    "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
    "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9"
  ],
  "DataSets": [
    {
      "Id" : "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
    },
    {
      "Id" : "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_Two"
    }
  ],
  "Product":
  {
    "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
    "Name": "Product_Hello_World"
  }
}
}
```

Amazon S3 データアクセスデータセットの追加に関するイベント

プロバイダーが Amazon S3 データアクセスデータセットを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは、詳細タイプ: Amazon S3 Data Access Data Set(s) Published To Product のイベントを受け取ります。

次の例は、詳細タイプのイベント本文を示しています。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "S3 Data Access Data Set(s) Published to Product",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2020-07-29T18:24:04Z",
```

```
"region": "us-east-1",
"resources": [
  "prod-uEXAMPLEabc1d"
],
"detail": {
  "DataSetIds": [
    "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
    "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9"
  ],
  "DataSets": [{
    "Id": "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
    "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
  },
  {
    "Id": "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9",
    "Name": "Data_Set_Hello_World_Two"
  }
  ],
  "Product": {
    "Id": "prod-uEXAMPLEabc1d",
    "Name": "Product_Hello_World"
  }
}
}
```

AWS Lake Formation データアクセス許可データセットを追加するためのイベント

プロバイダーが AWS Lake Formation データアクセス許可データセットを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは Lake Formation Data Permission Data Sets Published To Product 詳細タイプのイベントを受け取ります。

次の例は、詳細タイプのイベント本文を示しています。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Lake Formation Data Permission Data Sets Published To Product",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
```

```
"resources": [
  "prod-uEXAMPLEabc1d"
],
"detail": {
  "DataSetIds": [
    "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
    "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9"
  ],
  "DataSets": [
    {
      "Id": "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
    },
    {
      "Id": "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_Two"
    }
  ],
  "Product": {
    "Id": "prod-uEXAMPLEabc1d",
    "Name": "Product_Hello_World"
  }
}
}
```

Amazon Redshift データ共有データセットを追加するためのイベント

プロバイダーが Amazon Redshift データ共有データセットを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは Redshift Data Shares Data Sets Published To Product 詳細タイプのイベントを受け取ります。

次の例は、詳細タイプのイベント本文を示しています。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Redshift Data Shares Data Sets Published To Product",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "prod-uEXAMPLEabc1d"
  ]
}
```

```
  ],
  "detail": {
    "DataSetIds": [
      "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
      "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9"
    ],
    "DataSets": [
      {
        "Id" : "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
      },
      {
        "Id" : "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_Two"
      }
    ],
    "Product":
    {
      "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
      "Name": "Product_Hello_World"
    }
  }
}
```

Amazon API Gateway API データセットの追加に関するイベント

プロバイダーが Amazon API Gateway API データセットを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは Amazon API Gateway Data Sets Published To Product 詳細タイプのイベントを受け取ります。

次の例は、詳細タイプのイベント本文を示しています。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "API Gateway API Data Sets Published To Product",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "prod-uEXAMPLEabc1d"
  ]
}
```

```
  ],
  "detail": {
    "DataSetIds": [
      "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
      "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9"
    ],
    "DataSets": [
      {
        "Id" : "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
      },
      {
        "Id" : "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_Two"
      }
    ],
    "Product": {
      "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
      "Name": "Product_Hello_World"
    }
  }
}
```

リビジョンの追加に関するイベント

プロバイダーがデータセットを製品に追加して公開すると、サブスクライバーはRevision Published To Data Set 詳細タイプのイベントを受け取ります。

次の例は、詳細タイプのイベント本文を示しています。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Revision Published To Data Set",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2020-07-29T04:16:28Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66"
  ],
  "detail": {
    "RevisionIds": [
```

```
    "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7"  
  ],  
  "Revisions": [  
    {  
      "Id" : "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7",  
      "Comment": "Revision_Comment_One"  
    }  
  ],  
  "DataSets": [  
    {  
      "Id" : "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66",  
      "Name": "Data_Set_Hello_World_One"  
    }  
  ],  
  "Product": {  
    "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",  
    "Name": "Product_Hello_World"  
  }  
}  
}
```

Amazon S3 データアクセスデータセットのリビジョンを追加する

プロバイダーが Amazon S3 データセットリビジョンを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは Revision Published To Amazon S3 Data Access Data Set 詳細タイプのイベントを受け取ります。

次の例は、詳細タイプのイベント本文を示しています。

```
{  
  "version": "0",  
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",  
  "detail-type": "Revision Published to S3 Data Access Data Set(s)",  
  "source": "aws.dataexchange",  
  "account": "123456789012",  
  "time": "2020-07-29T04:16:28Z",  
  "region": "us-east-1",  
  "resources": [  
    "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66"  
  ],  
  "detail": {  
    "RevisionIds": [  
      "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7"  
    ]  
  }  
}
```

```
    ],
    "Revisions": [
      {
        "Id" : "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7",
        "Comment": "Revision_Comment_One"
      }
    ],
    "DataSets": [
      {
        "Id" : "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
      }
    ],
    "Product": {
      "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
      "Name": "Product_Hello_World"
    }
  }
}
```

AWS Lake Formation データアクセス許可データセットリビジョンを追加するためのイベント (プレビュー)

プロバイダーが AWS Lake Formation データアクセス許可データセットリビジョンを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは Revision Published to Lake Formation Data Permission Data Set 詳細タイプのイベントを受け取ります。

次の例は、詳細タイプのイベント本文を示しています。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Revision Published to Lake Formation Data Permission Data Set",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "prod-uEXAMPLEabc1d"
  ],
  "detail": {
    "DataSetIds": [
```

```
    "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
    "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9"
  ],
  "DataSets": [
    {
      "Id": "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
    },
    {
      "Id": "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_Two"
    }
  ],
  "Product": {
    "Id": "prod-uEXAMPLEabc1d",
    "Name": "Product_Hello_World"
  }
}
```

Amazon Redshift データ共有データセットのリビジョンを追加する

プロバイダーが Amazon Redshift データ共有データセットリビジョンを製品に追加して公開すると、サブスクライバーは Revision Published To Redshift Data Shares Data Set 詳細タイプのイベントを受け取ります。

次の例は、詳細タイプのイベント本文を示しています。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Revision Published To Redshift Data Shares Data Set",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66"
  ],
  "detail": {
    "RevisionIds": [
      "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7"
    ]
  },
}
```

```
    "Revisions": [
      {
        "Id" : "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7",
        "Comment": "Revision_Comment_One,"
      }
    ],
    "DataSets": [
      {
        "Id" : "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
      }
    ],
    "Product": {
      "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
      "Name": "Product_Hello_World"
    }
  }
}
```

Amazon API Gateway API データセットのリビジョンをデータセットのリビジョンを追加する

プロバイダーが Amazon API Gateway API データセットリビジョンを製品に追加して公開すると、サブスクライバーはRevision Published To API Gateway Data Set詳細タイプのイベントを受け取ります。

次の例は、詳細タイプのイベント本文を示しています。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Revision Published To API Gateway API Data Set",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66"
  ],
  "detail": {
    "RevisionIds": [
      "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7"
    ]
  }
}
```

```

    ],
    "Revisions": [
      {
        "Id" : "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7",
        "Comment": "Revision_Comment_One"
      }
    ],
    "DataSets": [
      {
        "Id" : "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
      }
    ],
    "Product": {
      "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
      "Name": "Product_Hello_World"
    }
  }
}

```

次の表は、API Gateway API データセットのリビジョンエラーコードを示しています。

エラーコード	メッセージ	説明
CLUSTER_DELETED	The datashare is unavailable because the provider deleted their cluster. Please contact the provider for more information.	このメッセージは、プロバイダがデータ共有を含むクラスターを削除したためにデータ共有が使用できなくなったときに送信されます。
CLUSTER_ENCRYPTION_DISABLED	The datashare is unavailable because the provider disabled encryption on their cluster. Please contact the provider for more information.	このメッセージは、プロバイダーがクラスターの暗号化を無効にしたためにデータ共有が使用できなくなったときに送信されます。データ共有を使用するには、プロバイダーとサブスクライバーの両方で暗号化が有効になっている必要があります。

エラーコード	メッセージ	説明
DATASHARE_DELETED	The datashare is unavailable because the provider deleted the datashare. Please contact the provider for more information.	このメッセージは、プロバイダーがデータ共有を削除したためにデータ共有が使用できなくなったときに送信されます。データに再びアクセスできるように、プロバイダーは新しいデータ共有を作成する必要があります。
DATASHARE_DEAUTHORIZED	The datashare is unavailable because the provider de-authorized the datashare . Please contact the provider for more information.	このメッセージは、プロバイダーがデータ共有を再承認したため、データ共有が利用できなくなったときに送信されます。データに再びアクセスできるように、プロバイダーは新しいデータ共有を作成する必要があります。

エラーコード	メッセージ	説明
DATASHARE_PUBLIC_CONSUMER_BLOCKED	You cannot access a non-publicly accessible datashare from a publicly accessible cluster. You must turn off public accessibility on your cluster to access this datashare . Please contact your provider for more information.	<p>このメッセージは、プロバイダーがデータ共有を含むクラスターで [パブリックアクセス可能] オプションを [無効] に設定したときに送信されます。サブスクライバーのクラスターの [パブリックアクセス可能] オプションが [無効] に設定されている場合、サブスクライバーのデータ共有へのアクセスには影響しません。サブスクライバーがデータ共有にアクセスするには、サブスクライバーがクラスターの [パブリックアクセス可能] オプションを [無効] に設定するか、プロバイダーがクラスターの [パブリックアクセス可能] オプションを [有効] に設定する必要があります。データ共有を含むクラスターでは無効にします。サブスクライバーのクラスターの [パブリックアクセス可能] オプションが [無効] に設定されている場合、サブスクライバーのデータ共有へのアクセスには影響しません。サブスクライバーがデータ共有にアクセスするには、サブスクライバーがクラスターの [パブリックアクセス可能] オプションを [無効] に設定するか、プロバイダーがクラスターの [パブリッ</p>

エラーコード	メッセージ	説明
		クアクセス可能] オプションを [有効] に設定する必要があります。

リビジョンを取り消すためのイベント

プロバイダーが製品のリビジョンを取り消して公開すると、サブスクライバーはRevision Revoked詳細タイプのイベントを受け取ります。

次の例は、詳細タイプのイベント本文を示しています。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Revision Revoked",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2022-02-17T21:25:06Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66"
  ],
  "detail": {
    "RevisionIds": [
      "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7"
    ],
    "RevocationComment": "example revocation comment",
    "Revisions": [
      {
        "Id" : "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7",
        "Comment": "Revision_Comment_One"
      }
    ],
    "DataSets": [
      {
        "Id" : "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
      }
    ],
    "Product": {
```

```
        "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
        "Name": "Product_Hello_World"
    }
}
}
```

Amazon Redshift リソースで実行されるアクションのイベント

プロバイダーが Amazon Redshift リソースに対して、サブスクライバーからアクセスを削除する可能性のあるアクションを実行すると、サブスクライバーは Action Performed On Redshift Data Share By Provider 詳細タイプのイベントを受け取ります。

たとえば、プロバイダーがデータ共有のパブリックアクセシビリティ設定を true から false に変更すると、サブスクライバーはイベントを受け取ります。

次の例は、詳細タイプのイベント本文を示しています。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Action Performed On Redshift Data Share By Provider",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:redshift:us-east-1:098765432123:datashare:01234567-2590-7654-1234-f57ea0081234/test_data_share"
  ],
  "detail": {
    "Message": "This is an example message which explains why you may have lost access.",
    "AssociatedProducts": [
      {
        "ProductId": "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66",
        "DataSetIds": [
          "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8"
        ],
        "DataSets": [
          {
            "Id" : "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
            "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
          }
        ]
      }
    ]
  }
}
```

```
    ],
    "Product": {
      "Id" : "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66",
      "Name": "Product_Hello_World"
    }
  }
]
}
```

Amazon Redshift データ共有にアクセスできなくなった場合のイベント

プロバイダーが Amazon Redshift リソースに対してサブスクライバーからアクセスを削除するアクションを実行すると、サブスクライバーは Redshift Data Share Access Lost 詳細タイプのイベントを受け取ります。

たとえば、プロバイダーが Amazon Redshift データ共有を削除したり、クラスターを削除したりすると、サブスクライバーはイベントを受け取ります。

次の例は、詳細タイプのイベント本文を示しています。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Redshift Data Share Access Lost",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2021-12-15T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:redshift:us-east-1:098765432123:datashare:01234567-2590-7654-1234-f57ea0081234/test_data_share"
  ],
  "detail": {
    "Message": "This is an example message which explains why you may have lost access.",
    "AssociatedProducts": [
      {
        "ProductId": "aae4c2cdEXAMPLE54f9369dEXAMPLE66",
        "DataSetIds": [
          "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8"
        ]
      }
    ],
    "DataSets": [
```

```
    {
      "Id" : "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
    }
  ],
  "Product": {
    "Id" : "prod-uEXAMPLEabc1d",
    "Name": "Product_Hello_World"
  }
}
]
```

自動エクスポートジョブのイベントが完了しました

自動エクスポートジョブが新しく公開されたファイルデータセットリビジョンのすべてのデータをサブスクライバーが選択した Amazon S3 バケットに移動すると、サブスクライバーは Auto-export Job Completed 詳細タイプのイベントを受け取ります。

次の例は、詳細タイプのイベント本文を示しています。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Auto-export Job Completed",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2020-07-29T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "prod-uEXAMPLEabc1d"
  ],
  "detail": {
    "RevisionIds": [
      "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7"
    ],
    "Revisions": [{
      "Id": "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe7",
      "Comment": "Revision_Comment_One"
    }],
    "DataSetIds": [
      "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
```

```
    ],
    "DataSets": [{
      "Id": "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEEe8",
      "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
    }],
    "Product": {
      "Id": "prod-uEXAMPLEabc1d",
    }
  }
}
```

自動エクスポートジョブのイベントが失敗しました

自動エクスポートジョブが失敗すると、サブスクライバーはAuto-export Job Failed詳細タイプのイベントを受け取ります。

次の例は、詳細タイプのイベント本文を示しています。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Auto-Export job failed",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2020-07-29T18:24:04Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "prod-uEXAMPLEabc1d"
  ],
  "detail": {
    "RevisionIds": [
      "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEEe7"
    ],
    "Revisions": [{
      "Id": "3afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEEe7",
      "Comment": "Revision_Comment_One"
    }],
    "DataSetIds": [
      "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEEe8",
      "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEEe9"
    ],
    "DataSets": [{
      "Id": "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEEe8",
```

```
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
    },
    {
        "Id": "5bgd734EXAMPLE100f7gdd9EXAMPLEe9",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_Two"
    }
],
"Product": {
    "Id": "prod-uEXAMPLEabc1d",
}
}
}
```

プロバイダーが生成するデータ更新通知のイベント

プロバイダーがデータ更新の通知を送信すると、サブスクライバーはData Updated in Data Set詳細タイプのイベントを受け取ります。

次の例は、詳細タイプのイベント本文を示しています。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Data Updated in Data Set",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2023-08-21T10:29:48Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:dataexchange:us-east-1::data-sets/b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6"
  ],
  "detail": {
    "DataSet": {
      "Id": "b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6",
      "Name": "Example Data Set",
      "AssetType": "S3_DATA_ACCESS"
    },
    "Product": {
      "Id": "prod-7ip6EXAMPLEhs",
      "Name": "Example Data Product",
      "ProviderContact": "no-reply@marketplace.aws"
    },
    "Notification": {
```

```
    "Comment": "This is a test DATA_UPDATE notification.",
    "Type": "DATA_UPDATE",
    "Details": {
      "DataUpdate": {
        "DataUpdatedAt": "2023-07-12T00:00:00Z"
      }
    },
    "Scope": {
      "S3DataAccesses": [{
        "KeyPrefixes": [
          "KeyPrefix"
        ],
        "Keys": [
          "KeyA",
          "KeyB"
        ]
      }]
    }
  }
}
```

プロバイダーが生成するスキーマ変更通知のイベント

プロバイダーがスキーマ変更の通知を送信すると、サブスクライバーはSchema Change Planned for Data Set詳細タイプのイベントを受け取ります。

次の例は、詳細タイプのイベント本文を示しています。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Schema Change Planned for Data Set",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2023-08-21T10:29:48Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:dataexchange:us-east-1::data-sets/b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6"
  ],
  "detail": {
    "DataSet": {
      "Id": "b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6",

```

```
    "Name": "Example Data Set",
    "AssetType": "S3_DATA_ACCESS"
  },
  "Product": {
    "Id": "prod-7ip6EXAMPLEhs",
    "Name": "Example Data Product",
    "ProviderContact": "no-reply@marketplace.aws"
  },
  "Notification": {
    "Comment": "This is a test SCHEMA_CHANGE notification.",
    "Type": "SCHEMA_CHANGE",
    "Details": {
      "SchemaChange": {
        "Changes": [{
          "Type": "ADD",
          "Description": "This object is being added to the bucket,
or a field is being added to the object.",
          "Name": "KeyA"
        },
        {
          "Type": "REMOVE",
          "Description": "This object is being removed from the
bucket or a field is being removed from the object.",
          "Name": "KeyB"
        },
        {
          "Type": "MODIFY",
          "Description": "The usage or meaning of this key prefix is
changing, or something is changing about every file under this key prefix.",
          "Name": "KeyPrefix"
        }
      ],
      "SchemaChangeAt": "2023-09-08T13:46:01Z"
    }
  },
  "Scope": {
    "S3DataAccesses": [{
      "KeyPrefixes": [
        "KeyPrefix"
      ],
      "Keys": [
        "KeyA",
        "KeyB"
      ]
    }
  ]
}
```

```
    ]
  }
}
```

プロバイダーが生成するデータ遅延通知のイベント

プロバイダーがデータ遅延の通知を送信すると、サブスクライバーは「データセット更新遅延」という詳細タイプのイベントを受信します。

次の例は、詳細タイプのイベント本文を示しています。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Data Set Update Delayed",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2023-08-21T10:29:48Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:dataexchange:us-east-1::data-sets/b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6"
  ],
  "detail": {
    "DataSet": {
      "Id": "b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6",
      "Name": "Example Data Set",
      "AssetType": "S3_DATA_ACCESS"
    },
    "Product": {
      "Id": "prod-7ip6EXAMPLEhs",
      "Name": "Example Data Product",
      "ProviderContact": "no-reply@marketplace.aws"
    },
    "Notification": {
      "Comment": "This is a test DATA_DELAY notification.",
      "Type": "DATA_DELAY",
      "Scope": {
        "S3DataAccesses": [{
          "KeyPrefixes": [
            "KeyPrefix"
          ]
        }
      ],
    }
  }
}
```

```
        "Keys": [
            "KeyA",
            "KeyB"
        ]
    }
}
```

プロバイダーが生成するデータ廃止通知のイベント

プロバイダーがデータ非推奨の通知を送信すると、サブスクライバーはDeprecation Planned for Data Set詳細タイプのイベントを受け取ります。

次の例は、詳細タイプのイベント本文を示しています。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Deprecation Planned for Data Set",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2023-08-21T10:29:48Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:dataexchange:us-east-1::data-sets/b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6"
  ],
  "detail": {
    "DataSet": {
      "Id": "b5538f9f45e4613d448eb9eEXAMPLEc6",
      "Name": "Example Data Set",
      "AssetType": "S3_DATA_ACCESS"
    },
    "Product": {
      "Id": "prod-7ip6EXAMPLEhs",
      "Name": "Example Data Product",
      "ProviderContact": "no-reply@marketplace.aws"
    },
    "Notification": {
      "Comment": "This is a test DEPRECATION notification.",
      "Type": "DEPRECATION",
      "Details": {
```

```
      "Deprecation": {
        "DeprecationAt": "2023-09-08T13:46:01Z"
      },
    },
    "Scope": {
      "S3DataAccesses": [{
        "KeyPrefixes": [
          "KeyPrefix"
        ],
        "Keys": [
          "KeyA",
          "KeyB"
        ]
      }]
    }
  }
}
```

データ許可を受け入れるためのイベント

データコンシューマーがデータ許可を受け入れると、データ所有者はData Grant Accepted詳細タイプのイベントを受け取ります。

次の例は、詳細タイプのイベント本文を示しています。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Data Grant Accepted",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2022-02-17T21:25:06Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:dataexchange:us-east-1::data-sets/4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8"
  ],
  "detail": {
    "DataSets": [
      {
        "Id" : "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
      }
    ]
  }
}
```

```
    ],
    "DataGrant": {
      "Arn" : "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-
grants/4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe9",
      "Name": "DataGrant_Hello_World"
    }
  }
}
```

データ許可を拡張するためのイベント

データ所有者がデータ許可を拡張すると、データコンシューマーはData Grant Extended詳細タイプのイベントを受け取ります。

次の例は、詳細タイプのイベント本文を示しています。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Data Grant Extended",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2022-02-17T21:25:06Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:dataexchange:us-east-1::data-sets/4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8"
  ],
  "detail": {
    "DataSets": [
      {
        "Id" : "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
      }
    ],
    "DataGrant": {
      "Arn" : "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-
grants/4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe9",
      "Name": "DataGrant_Hello_World"
    }
  }
}
```

データ許可を取り消すためのイベント

データ所有者がデータ許可を取り消すと、データコンシューマーはData Grant Revoked詳細タイプのイベントを受け取ります。

次の例は、詳細タイプのイベント本文を示しています。

```
{
  "version": "0",
  "id": "dc529cb6-2e23-4c5f-d020-EXAMPLE92231",
  "detail-type": "Data Grant Revoked",
  "source": "aws.dataexchange",
  "account": "123456789012",
  "time": "2022-02-17T21:25:06Z",
  "region": "us-east-1",
  "resources": [
    "arn:aws:dataexchange:us-east-1::data-sets/4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8"
  ],
  "detail": {
    "DataSets": [
      {
        "Id" : "4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe8",
        "Name": "Data_Set_Hello_World_One"
      }
    ],
    "DataGrant": {
      "Arn" : "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-grants/4afc623EXAMPLE099e6fcc8EXAMPLEe9",
      "Name": "DataGrant_Hello_World"
    }
  }
}
```

AWSAWS Data Exchange イベントのユーザー通知

[AWS ユーザー通知](#) を使用して、AWS Data Exchange イベントについて通知する配信チャンネルを設定できます。指定したルールにイベントが一致すると、通知を受け取ります。イベントの通知は、Eメール、チャットアプリケーションの Amazon Q Developer チャット通知、AWS Console Mobile Application プッシュ通知など、複数のチャンネルを通じて受信できます。ユーザー通知コンソールでコンソール通知センターを使用して AWS 通知を確認することもできます。AWS ユーザー通知は集

約をサポートしているため、特定のイベント中に受け取る通知の数を減らすことができます。詳細については、「[AWS ユーザー通知ユーザーガイド](#)」を参照してください。

AWS ユーザー通知を使用するには、正しい AWS Identity and Access Management (IAM) アクセス許可が必要です。IAM アクセス許可の設定の詳細については、[AWS 「ユーザー通知ユーザーガイドAWS」](#)の「ユーザー通知の設定」を参照してください。

次の表は、AWS ユーザー通知を使用して AWS Data Exchange イベントに対して設定できる通知の詳細を示しています。

アクション	サブスクライバーが受信した通知
ファイルベースのデータセットを製品に追加し、発行する	Data Sets Published To Product
Amazon Redshift データセットを製品に追加し、発行する	Redshift Data Shares Data Sets Published To Product
ファイルベースのデータセットのリビジョンを製品に追加し、発行する	Revision Published To Data Set
製品へのリビジョンを取り消します。	Revision Revoked
Amazon Redshift データセットのリビジョンを製品に追加し、発行する	Revision Published To Redshift Data Shares Data Set
Amazon Redshift リソースに対して、サブスクライバーからのアクセスを削除する可能性のあるアクションを実行します。	Action Performed On Redshift Data Share By Provider
Amazon Redshift リソースに対してサブスクライバーからのアクセスを削除するアクションを実行します	Redshift Data Share Access Lost
Amazon API Gateway データセットを製品に追加し、発行する	API Gateway API Data Sets Published To Product
Amazon API Gateway データセットのリビジョンを製品に追加し、発行する	Revision Published To API Gateway API Data Set

アクション	サブスクライバーが受信した通知
製品に AWS Lake Formation データセットを追加して公開する (プレビュー)	Lake Formation Data Permission Data Sets Published To Product (Preview)
AWS Lake Formation 製品にデータセットリビジョンを追加し、公開します (プレビュー)	Revision Published To Lake Formation Data Permission Data Set (Preview)
自動エクスポートジョブ完了	Auto-export Job Completed
自動エクスポートジョブ失敗	Auto-export Job Failed
データ更新の通知を送信する	Data Updated in Data Set
スキーマ変更の通知を送信する	Schema Change Planned for Data Set
データ遅延の通知を送信する	Data Set Update Delayed
データ廃止の通知を送信する	Deprecation Planned for Data Set

を使用した AWS Data Exchange API コールのログ記録 AWS CloudTrail

AWS Data Exchange は と統合されています。このサービスは AWS CloudTrail、ユーザー、ロール、または AWS のサービスによって実行されたアクションを記録するサービスです AWS Data Exchange。 は、AWS Data Exchange コンソールからの呼び出しや AWS Data Exchange API オペレーションへのコード呼び出しを含む、AWS Data Exchange API オペレーションへのすべての呼び出しをイベントとして AWS CloudTrail キャプチャします。

証跡を作成する場合は、 イベントを含む Amazon Simple Storage Service (Amazon S3) バケットへの CloudTrail イベントの継続的な配信を有効にすることができません AWS Data Exchange。証跡を設定しない場合でも、CloudTrail コンソールの [イベント履歴] で最新のイベントを表示できます。CloudTrail によって収集された情報を使用して、リクエストの実行元の IP アドレス AWS Data Exchange、リクエストの実行者、リクエストの実行日時などの詳細を確認できます。

⚠ Important

実行できるアクションの一部は、コンソール限定アクションです。AWS SDK または AWS Command Line Interface () に対応する API はありませんAWS CLI。これらは、製品の公開やサブスクライブなどの AWS Marketplace 機能に依存するアクションです。は、これらのコンソールのみアクションのサブセットに CloudTrail ログ AWS Data Exchange を提供します。CloudTrail ログが提供されるコンソール限定アクションについては、以下のリストを参照してください。

詳細については、[「とは」を参照してください AWS CloudTrail。](#)

は、すべての [AWS Data Exchange APIs](#) および対応するコンソールアクションの CloudTrail イベントに加えて、バックアップされたコンソールのみアクションのサブセットの CloudTrail AWS Marketplace証跡 AWS Data Exchange も提供します。AWS Data Exchange は、次のコンソールのみアクションの CloudTrail ログを提供します。

サブスクライバーアクション

- 製品をサブスクライブする
- サブスクリプション検証リクエストを送信する
- サブスクリプションの自動更新を有効にする
- サブスクリプションの自動更新を無効にする
- サブスクリプション検証リクエストをキャンセルする
- アクティブなサブスクリプションをリストする
- サブスクリプションのステータスを確認する
- ターゲットのプライベートオファーを一覧表示する
- 特定の製品およびオファーの詳細を表示する
- 特定のサブスクリプションの詳細を表示する
- 特定のサブスクリプション検証リクエストの詳細を表示する

プロバイダーアクション

- 製品を公開する
- 製品を非公開にする
- 製品を編集する

- カスタムオファーを作成する
- カスタムオファーを編集する
- サブスクリプション検証リクエストを承認する
- サブスクリプション検証リクエストを拒否する
- サブスクライバーの連絡先情報を削除する
- サブスクリプション検証リクエストをリストする
- 特定のサブスクリプション検証リクエストの詳細を表示する
- データセットの通知を送信

AWS Data Exchange CloudTrail の情報

CloudTrail は、 の作成時に有効になります AWS アカウント。でアクティビティが発生すると AWS Data Exchange、アクティビティは CloudTrail イベントとイベント履歴の他の AWS サービスイベントに記録されます。で最近のイベントを表示、検索、ダウンロードできます AWS アカウント。詳細については、「AWS CloudTrail ユーザーガイド」の「[CloudTrail イベント履歴でのイベントの表示](#)」を参照してください。

のイベントなど AWS アカウント、 のイベントの継続的な記録については AWS Data Exchange、証跡を作成します。CloudTrail は、この証跡を使用して S3 バケットにログファイルを配信します。デフォルトでは、コンソールを使用して証跡を作成すると、すべての に適用されます AWS リージョン。証跡は、すべてのリージョンからのイベントをログし、ユーザー指定の S3 バケットにログファイルを配信します。AWS の他のサービスを設定して、CloudTrail ログで収集されたイベントデータをさらに分析し、それに基づく対応を行うことができます。詳細については、以下を参照してください。

- [証跡を作成するための概要](#)
- [CloudTrail がサポートするサービスと統合](#)
- [CloudTrail の Amazon SNS 通知の設定](#)
- [CloudTrail ログファイルの複数のリージョンからの受け取り](#)
- [複数のアカウントから CloudTrailログファイルを受け取る](#)

すべての AWS Data Exchange アクションは AWS Data Exchange API リファレンスに記載されています。を除くすべての AWS Data Exchange アクションは SendAPIAsset、CloudTrail によってログに記録されます。例えば、CreateDataSet、StartImportAssetsFromS3Workflow、および

ListRevisionAssets API 操作への呼び出しによって、CloudTrail ログファイル内にエントリが生成されます。

すべてのイベントまたはログエントリには、誰がリクエストを生成したかに関する情報が含まれています。アイデンティティ情報は、以下を判別するのに役立ちます。

- リクエストがルート認証情報または AWS Identity and Access Management (IAM) 認証情報を使用して行われたかどうか。
- リクエストがロールまたはフェデレーションユーザーのテンポラリなセキュリティ認証情報を使用して行われたかどうか。
- リクエストが別の AWS サービスによって行われたかどうか。

詳細については、「[CloudTrail userIdentity 要素](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange ログファイルエントリについて

証跡は、ユーザー指定の S3 バケットにイベントをログファイルとして配信することを可能にする設定です。CloudTrail ログファイルには、1 つ、または複数のログエントリが含まれています。イベントは任意のソースからの単一のリクエストを表し、リクエストされたアクション、アクションの日時、リクエストパラメータなどに関する情報が含まれています。CloudTrail ログファイルは、パブリック API コールの順序付きスタックトレースではないため、順不同で表示されます。

Note

これらの例は、読みやすさを向上させるためにフォーマットされています。CloudTrail ログファイルでは、すべてのエントリとイベントが単一の行に連結されています。この例では、1 つの AWS Data Exchange エントリに制限されています。実際の CloudTrail ログファイルには、複数の AWS のサービスからのエントリとイベントが表示されます。

以下は、CreateDataSet 操作を示す CloudTrail ログエントリの例です。

```
{
  "eventVersion": "1.05",
  "userIdentity": {
    "type": "AssumedRole",
    "principalId": "AIDACKCEVSQ6C2EXAMPLE:account_name",
    "arn": "arn:aws:sts::123456789012:user/Mary_Major",
    "accountId": "123456789012",
```

```
    "accessKeyId": "AKIAIOSFODNN7EXAMPLE",
    "sessionContext": {
      "attributes": {
        "mfaAuthenticated": "false",
        "creationDate": "2018-06-20T18:32:25Z"
      },
      "sessionIssuer": {
        "type": "Role",
        "principalId": "AIDACKCEVSQ6C2EXAMPLE",
        "arn": "arn:aws:iam::123456789012:role/Admin",
        "accountId": "123456789012",
        "userName": "username"
      }
    }
  },
  "eventTime": "2018-06-20T19:04:36Z",
  "eventSource": "dataexchange.amazonaws.com",
  "eventName": "CreateDataSet",
  "awsRegion": "us-east-1",
  "sourceIPAddress": "203.0.113.12",
  "userAgent": "console.amazonaws.com",
  "requestParameters": {
    "Name": "MyDataSet",
    "AssetType": "S3_SNAPSHOT",
    "Description": "This is my data set"
  },
  "responseElements": {
    "Origin": "OWNED",
    "AssetType": "S3_SNAPSHOT",
    "Name": "MyDataSet",
    "CreatedAt": 1726255485679,
    "UpdatedAt": 1726255485679,
    "Arn": "arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/
DataSetIdentifier",
    "Id": "DataSetIdentifier",
    "Description": "This is my data set"
  },
  "requestID": "cb8c167e-EXAMPLE",
  "eventID": "e3c6f4ce-EXAMPLE",
  "readOnly": false,
  "eventType": "AwsApiCall",
  "recipientAccountId": "123456789012"
}>
```

AWS Data Exchange CloudTrail ログ記録の今後の変更

このセクションでは、の API コールのログ記録に関する今後の変更点をまとめ AWS CloudTrail ます AWS Data Exchange。この変更の発効日は 2023 年 9 月 1 日以降です。CloudTrail の使用状況を見直して、この変更がモニタリング、分析、または監査に影響しないことを確認することをお勧めします。質問や懸念事項については、[サポート](#) にメールメッセージを送信してください。

顧客ペルソナ	イベントの説明	前のeventName	新しいeventName	前のイベントソース	新しいイベントソース
サブスクライバー	製品をサブスクライブする	Subscribe	CreateAgreementRequest および AcceptAgreementRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com
サブスクライバー	サブスクリプション検証リクエストを送信する	Subscribe	CreateAgreementRequest および AcceptAgreementRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com
サブスクライバー	サブスクリプションの自動更新を有効にする	Subscribe	CreateAgreementRequest および AcceptAgreementRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com
サブスクライバー	サブスクリプションの自動	Unsubscribe	CreateAgreementRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com

顧客ペルソナ	イベントの説明	前のeventName	新しいeventName	前のイベントソース	新しいイベントソース
	更新を無効にする		および AcceptAgreementRequest		ce.amazonaws.com
サブスクライバー	サブスクリプション検証リクエストをキャンセルする	CancelAgreementRequest	CancelAgreementRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com
プロバイダー	製品を公開する	StartChangeSet	StartChangeSet	aws-marketplace.amazonaws.com	marketplacecatalog.amazonaws.com
プロバイダー	製品を編集する	StartChangeSet	StartChangeSet	aws-marketplace.amazonaws.com	marketplacecatalog.amazonaws.com
プロバイダー	製品を発行解除する	StartChangeSet	StartChangeSet	aws-marketplace.amazonaws.com	marketplacecatalog.amazonaws.com
プロバイダー	カスタムオファーを作成する	StartChangeSet	StartChangeSet	aws-marketplace.amazonaws.com	marketplacecatalog.amazonaws.com
プロバイダー	カスタムオファーを編集する	StartChangeSet	StartChangeSet	aws-marketplace.amazonaws.com	marketplacecatalog.amazonaws.com

顧客ペルソナ	イベントの説明	前のeventName	新しいeventName	前のイベントソース	新しいイベントソース
プロバイダー	サブスクリプション検証リクエストを承認する	AcceptAgreementApprovalRequest	AcceptAgreementApprovalRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com
プロバイダー	サブスクリプション検証リクエストを拒否する	RejectAgreementApprovalRequest	RejectAgreementApprovalRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com
プロバイダー	サブスクリバイダーの連絡先情報を削除する	UpdateAgreementApprovalRequest	UpdateAgreementApprovalRequest	aws-marketplace.amazonaws.com	agreement-marketplace.amazonaws.com

セキュリティ

のクラウドセキュリティが最優先事項 AWS です。お客様は AWS、セキュリティを最も重視する組織の要件を満たすように構築された複数のデータセンターとネットワークアーキテクチャを活用できます。

セキュリティは、AWS お客様とお客様の間の責任共有です。[責任共有モデル](#)では、これをクラウドのセキュリティおよびクラウド内のセキュリティとして説明しています。

- クラウドのセキュリティ – AWS は、で AWS サービスを実行するインフラストラクチャを保護する責任を担います AWS クラウド。は、お客様が安全に使用できるサービス AWS も提供します。当社のセキュリティの有効性は、[AWS コンプライアンスプログラム](#)の一環として、サードパーティーの監査者によって定期的にテストおよび検証されます。が適用されるコンプライアンスプログラムの詳細については AWS Data Exchange、[AWS 「コンプライアンスプログラムによる対象範囲内のサービス」](#)を参照してください。
- クラウドのセキュリティ – お客様の責任は、使用する AWS サービスによって決まります。ユーザーは、ユーザーのデータの機密性、組織の要件、および適用法と規制などのその他要因に対する責任も担います。

このドキュメントは、AWS Data Exchangeの使用時における責任共有モデルの適用方法を理解するために役立ちます。以下のトピックでは、セキュリティおよびコンプライアンスの目的を達成する AWS Data Exchange ように を設定する方法を示します。また、AWS Data Exchange リソースのモニタリングや保護に役立つ他の AWS サービスの使用方法についても説明します。

でのデータ保護 AWS Data Exchange

責任 AWS [共有モデル](#)、でのデータ保護に適用されます AWS Data Exchange。このモデルで説明されているように、AWS はすべての を実行するグローバルインフラストラクチャを保護する責任があります AWS クラウド。ユーザーは、このインフラストラクチャでホストされるコンテンツに対する管理を維持する責任があります。また、使用する「AWS のサービス」のセキュリティ設定と管理タスクもユーザーの責任となります。データプライバシーの詳細については、[データプライバシーに関するよくある質問](#)を参照してください。欧州でのデータ保護の詳細については、AWS セキュリティブログに投稿された [AWS 責任共有モデルおよび GDPR](#) のブログ記事を参照してください。

データ保護の目的で、認証情報を保護し AWS アカウント、AWS IAM Identity Center または AWS Identity and Access Management (IAM) を使用して個々のユーザーを設定することをお勧めします。

この方法により、それぞれのジョブを遂行するために必要な権限のみが各ユーザーに付与されます。また、次の方法でデータを保護することもお勧めします:

- 各アカウントで多要素認証 (MFA) を使用します。
- SSL/TLS を使用して AWS リソースと通信します。TLS 1.2 が必須で、TLS 1.3 をお勧めします。
- で API とユーザーアクティビティのログ記録を設定します AWS CloudTrail。CloudTrail 証跡を使用して AWS アクティビティをキャプチャする方法については、「AWS CloudTrail ユーザーガイド」の [CloudTrail 証跡の使用](#) を参照してください。
- AWS 暗号化ソリューションと、その中のすべてのデフォルトのセキュリティコントロールを使用します AWS のサービス。
- Amazon Macie などの高度な管理されたセキュリティサービスを使用します。これらは、Amazon S3 に保存されている機密データの検出と保護を支援します。
- コマンドラインインターフェイスまたは API AWS を介して にアクセスするときに FIPS 140-3 検証済み暗号化モジュールが必要な場合は、FIPS エンドポイントを使用します。利用可能な FIPS エンドポイントの詳細については、「[連邦情報処理規格 \(FIPS\) 140-3](#)」を参照してください。

お客様の E メールアドレスなどの極秘または機密情報を、タグ、または [名前] フィールドなどの自由形式のテキストフィールドに含めないことを強くお勧めします。これは、コンソール AWS Data Exchange、API、または SDK を使用して AWS CLI または他の AWS のサービス を操作する場合も同様です。AWS SDKs タグ、または名前に使用される自由記述のテキストフィールドに入力したデータは、請求または診断ログに使用される場合があります。外部サーバーに URL を提供する場合、そのサーバーへのリクエストを検証できるように、認証情報を URL に含めないことを強くお勧めします。

AWS Data Exchange には、データセットに存在するコンテンツの保護に役立つ以下のオプションが用意されています。

トピック

- [保管中の暗号化](#)
- [転送中の暗号化](#)
- [コンテンツに対するアクセス制限](#)

保管中の暗号化

AWS Data Exchange は、追加の設定を必要とせずに、保管中のサービスに保存されているすべてのデータ製品を常に暗号化します。を使用する場合、この暗号化は自動的に行われます AWS Data Exchange。

転送中の暗号化

AWS Data Exchange は、転送中の暗号化に Transport Layer Security (TLS) とクライアント側の暗号化を使用します。との通信 AWS Data Exchange は常に HTTPS 経由で行われるため、データは転送中に常に暗号化されます。この暗号化は、の使用時にデフォルトで設定されます AWS Data Exchange。

コンテンツに対するアクセス制限

ベストプラクティスとして、適切なユーザーのサブセットへのアクセスを制限する必要があります。では AWS Data Exchange、を使用するユーザー、グループ、ロールに適切なアクセス許可 AWS アカウント を付与することで、これを行うことができます。IAM エンティティのロールとポリシーの詳細については、「[IAM ユーザーガイド](#)」を参照してください。

Amazon S3 データアクセスのキー管理

このページは、プロバイダーが SSE-KMS を使用して暗号化されたオブジェクトを共有する Amazon S3 データアクセスタイプに固有のものです。サブスクライバーは、アクセスに使用するキーを付与されている必要があります。

Amazon S3 バケットに AWS KMS カスタマーマネージドキーを使用して暗号化されたデータが含まれている場合は、それらを AWS KMS keys と共有 AWS Data Exchange して Amazon S3 データアクセスデータセットを設定する必要があります。詳細については、「[the section called “ステップ 2: Amazon S3 データアクセスを設定する”](#)」を参照してください。

トピック

- [AWS KMS 許可の作成](#)
- [暗号化コンテキストと許可制約](#)
- [AWS KMS keys での のモニタリング AWS Data Exchange](#)

AWS KMS 許可の作成

Amazon S3 データアクセスデータセット AWS KMS keys の一部として を指定すると、AWS Data Exchange は AWS KMS key 共有される各に AWS KMS 許可を作成します。親権限と呼ばれるこの権限は、サブスクライバーに追加の AWS KMS 権限を作成する AWS Data Exchange アクセス許可を付与するために使用されます。これらの追加許可は子許可補助金と呼ばれます。各サブスクライバーには 1 つの AWS KMS 許可が付与されます。サブスクライバーは、 を復号するアクセス許可を取得します AWS KMS key。その後、共有されている暗号化された Amazon S3 オブジェクトを復号して使用できます。詳細については、「AWS Key Management Service デベロッパーガイド」の「[AWS KMSでの許可](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange は、AWS KMS 親グラントを使用して、作成する AWS KMS グラントのライフサイクルを管理します。サブスクリプションが終了すると、 は対応するサブスクライバー用に作成された AWS KMS 子許可を AWS Data Exchange 廃止します。リビジョンが取り消された場合、またはデータセットが削除された場合、 は AWS KMS 親許可を AWS Data Exchange 廃止します。AWS KMS アクションの詳細については、[AWS KMS API リファレンス](#)を参照してください。

暗号化コンテキストと許可制約

AWS Data Exchange は許可制約を使用して、リクエストに指定された暗号化コンテキストが含まれている場合にのみ復号オペレーションを許可します。Amazon S3 バケットキー機能を使用して Amazon S3 オブジェクトを暗号化し、共有できます AWS Data Exchange。バケットの Amazon リソースネーム (ARN) は Amazon S3 によって暗号化コンテキストとして暗黙的に使用されます。次の例は、 が AWS KMS 作成するすべての許可の許可制約としてバケット ARN AWS Data Exchange を使用することを示しています。

```
"Constraints": {
  "EncryptionContextSubset": "aws:s3:arn": "arn:aws:s3:::<Bucket ARN>"
}
```

AWS KMS keys での のモニタリング AWS Data Exchange

AWS KMS カスタマーマネージドキーを と共有する場合 AWS Data Exchange、[AWS CloudTrail](#)を使用して、AWS Data Exchange またはデータサブスクライバーが送信するリクエストを追跡できます AWS KMS。以下は、CreateGrantおよび Decrypt呼び出しで CloudTrail ログがどのように表示されるかの例です AWS KMS。

CreateGrant for parent

CreateGrant は、自体のために によって作成された親許可 AWS Data Exchange 用です。

```
{
  "eventVersion": "1.08",
  "userIdentity": {
    "type": "AssumedRole",
    "principalId": "AROAIKDTESTANDEXAMPLE:Provider01",
    "arn": "arn:aws:sts::<your-account-id>:assumed-role/Admin/Provider01",
    "accountId": "<your-account-id>",
    "accessKeyId": "AKIAIOSFODNN7EXAMPLE",
    "sessionContext": {
      "sessionIssuer": {
        "type": "Role",
        "principalId": "AROAIKDTESTANDEXAMPLE",
        "arn": "arn:aws:iam::<your-account-id>:role/Admin/Provider01",
        "accountId": "<your-account-id>",
        "userName": "Admin"
      },
      "webIdFederationData": {},
      "attributes": {
        "creationDate": "2023-02-16T17:29:23Z",
        "mfaAuthenticated": "false"
      }
    },
    "invokedBy": "datax.amazonaws.com"
  },
  "eventTime": "2023-02-16T17:32:47Z",
  "eventSource": "kms.amazonaws.com",
  "eventName": "CreateGrant",
  "awsRegion": "us-east-2",
  "sourceIPAddress": "datax.amazonaws.com",
  "userAgent": "datax.amazonaws.com",
  "requestParameters": {
    "keyId": "<Key ARN of the Key you shared with AWS Data Exchange>",
    "operations": [
      "CreateGrant",
      "Decrypt",
      "RetireGrant"
    ],
    "granteePrincipal": "dataexchange.us-east-2.amazonaws.com",
    "retiringPrincipal": "dataexchange.us-east-2.amazonaws.com",
    "constraints": {
```

```
        "encryptionContextSubset": { AWS:s3:arn": "arn:aws:s3:::<Your Bucket
ARN>"
      }
    },
    "responseElements": {
      "grantId": "<KMS Grant ID of the created Grant>",
      "keyId": "<Key ARN of the Key you shared with AWS Data Exchange>"
    },
    "requestID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "eventID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
    "readOnly": false,
    "resources": [
      {
        "accountId": "<Your Account Id>",
        "type": "AWS::KMS::Key",
        "ARN": "<Key ARN of the Key you shared with AWS Data Exchange>"
      }
    ],
    "eventType": "AwsApiCall",
    "managementEvent": true,
    "recipientAccountId": "<Your Account Id>",
    "eventCategory": "Management"
  }
}
```

CreateGrant for child

CreateGrant は、サブスクライバー用に によって作成された子許可 AWS Data Exchange 用です。

```
{
  "eventVersion": "1.08",
  "userIdentity": {
    "type": "AWSService",
    "invokedBy": "datax.amazonaws.com"
  },
  "eventTime": "2023-02-15T23:15:49Z",
  "eventSource": "kms.amazonaws.com",
  "eventName": "CreateGrant",
  "awsRegion": "us-east-2",
  "sourceIPAddress": "datax.amazonaws.com",
  "userAgent": "datax.amazonaws.com",
```

```
"requestParameters": {
  "keyId": "<Key ARN of the Key you shared with AWS Data Exchange>",
  "operations": [
    "Decrypt"
  ],
  "granteePrincipal": "<Subscriber's account Id>",
  "retiringPrincipal": "dataexchange.us-east-2.amazonaws.com",
  "constraints": {
    "encryptionContextSubset": {
      "aws:s3:arn": "arn:aws:s3:::<Your Bucket ARN>"
    }
  }
},
"responseElements": {
  "grantId": "<KMS Grant ID of the created Grant>",
  "keyId": "<Key ARN of the Key you shared with AWS Data Exchange>"
},
"requestID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
"eventID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE",
"readOnly": false,
"resources": [
  {
    "accountId": "<Your Account Id>",
    "type": "AWS::KMS::Key",
    "ARN": "<Key ARN of the Key you shared with AWS Data Exchange>"
  }
],
"eventType": "AwsApiCall",
"managementEvent": true,
"recipientAccountId": "<Your Account Id>",
"sharedEventID": "ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE ",
"eventCategory": "Management"
}
```

Decrypt

Decryptは、サブスクライバーがサブスクライブしている暗号化データを読み取ろうとしたときに呼び出されます。

```
{
  "eventVersion": "1.08",
  "userIdentity": {
    "type": "AWSAccount",
```

```
    "principalId": "AROAIKDTESTANDEXAMPLE:Subscriber01",
    "accountId": "<subscriber-account-id>",
    "invokedBy": "<subscriber's IAM identity>"
  },
  "eventTime": "2023-02-15T23:28:30Z",
  "eventSource": "kms.amazonaws.com",
  "eventName": "Decrypt",
  "awsRegion": "us-east-2",
  "sourceIPAddress": "<subscriber's IP address>",
  "userAgent": "<subscriber's user agent>",
  "requestParameters": {
    "encryptionContext": {
      "aws:s3:arn": "arn:aws:s3:::<Your Bucket ARN>"
    },
    "encryptionAlgorithm": "SYMMETRIC_DEFAULT"
  },
  "responseElements": null,
  "requestID": "\"ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE\"",
  "eventID": "\"ff000af-00eb-00ce-0e00-ea000fb0fba0SAMPLE\"",
  "readOnly": true,
  "resources": [
    {
      "accountId": "<Your Account Id>",
      "type": "AWS::KMS::Key",
      "ARN": "<Key ARN of the Key you shared with AWS Data Exchange>"
    }
  ],
  "eventType": "AwsApiCall",
  "managementEvent": true,
  "recipientAccountId": "602466227860",
  "sharedEventID": "bcf4d02a-31ea-4497-9c98-4c3549f20a7b",
  "eventCategory": "Management"
}
```

での ID とアクセスの管理 AWS Data Exchange

AWS SDK を使用してインポートジョブを作成する、AWS Data Exchange コンソールで製品をサブスクライブ AWS Data Exchange するなど、でオペレーションを実行するには、AWS Identity and Access Management (IAM) で承認済み AWS ユーザーであることを認証する必要があります。たとえば、コンソールを使用している場合は、サインイン認証情報を指定して ID AWS を AWS Data Exchange 認証します。

ID を認証すると、IAM は一連のオペレーションとリソースに対する一連の定義されたアクセス許可 AWS を使用して へのアクセスを制御します。アカウント管理者である場合、IAM を使用して、アカウントに関連付けられたリソースへの他のユーザーのアクセスをコントロールできます。

トピック

- [認証](#)
- [アクセスコントロール](#)
- [AWS Data Exchange API アクセス許可: アクションとリソースのリファレンス](#)
- [AWS の 管理ポリシー AWS Data Exchange](#)

認証

には、次のいずれかのタイプの ID AWS でアクセスできます。

- AWS アカウント ルートユーザー – を作成するときは AWS アカウント、アカウント内のすべての およびリソースへの AWS のサービス 完全なアクセス権を持つ 1 つのサインインアイデンティティから始めます。この ID は AWS アカウント ルートユーザーと呼ばれ、アカウントの作成に使用した E メールアドレスとパスワードでサインインすることでアクセスできます。日常的なタスクには、ルートユーザーを使用しないことを強くお勧めします。ルートユーザーの認証情報は保護し、ルートユーザーでしか実行できないタスクを実行するときに使用します。ルートユーザーとしてサインインする必要があるタスクの完全なリストについては、「IAM ユーザーガイド」の「[ルートユーザー認証情報が必要なタスク](#)」を参照してください。
- ユーザー – [ユーザー](#)は、特定のカスタム許可を持つ AWS アカウント 内のアイデンティティです。IAM 認証情報を使用して、AWS Management Console や AWS サポート センターなどの安全な AWS ウェブページにサインインできます。
- IAM ロール - [IAM ロール](#)は、アカウントで作成して特定の許可を付与できる IAM ID です。IAM ロールは、AWS アイデンティティができることとできないことを決定するアクセス許可ポリシーを持つアイデンティティであるという点で、IAM ユーザーと似ています AWS。ただし、ユーザーは 1 人の特定の人に一意に関連付けられますが、ロールはそれを必要とする任意の人が引き受けるようになっています。また、ロールには標準の長期認証情報 (パスワードやアクセスキーなど) も関連付けられません。代わりに、ロールを引き受けると、ロールセッション用の一時的なセキュリティ認証情報が提供されます。ロールと一時的な認証情報は、次の状況で役立ちます。
- フェデレーティッドユーザーアクセス – ユーザーを作成する代わりに、AWS Directory Service、エンタープライズユーザーディレクトリ、またはウェブ ID プロバイダーから既存の ID を使用できます。これらはフェデレーティッドユーザーと呼ばれます。は、ID プロバイダーを介してアクセスがリクエストされると、フェデレーティッドユーザーにロールを AWS 割り当

てます。フェデレーティッドユーザーの詳細については、「[フェデレーティッドユーザーとロール](#)」を参照してください。

- AWS のサービス アクセス – サービスロールは、ユーザーに代わってアカウントでアクションを実行するためにサービスが引き受ける IAM ロールです。AWS のサービス 環境には、セットアップ時にサービスが引き受けるロールを定義する必要があるものもあります。このサービスロールには、サービスが必要な AWS リソースにアクセスするために必要なすべてのアクセス許可が含まれている必要があります。サービスロールはサービスによって異なりますが、多くのサービスロールでは、そのサービスの文書化された要件を満たしている限り、許可を選択することができます。サービスロールは、お客様のアカウント内のみでアクセスを提供します。他のアカウントのサービスへのアクセス権を付与するためにサービスロールを使用することはできません。IAM 内部からサービスロールを作成、修正、削除できます。例えば、Amazon Redshift がユーザーに代わって Simple Storage Service (Amazon S3) バケットにアクセスし、そのバケットのデータを Amazon Redshift クラスターにロードすることを許可するロールを作成できます。詳細については、「[AWS サービスにアクセス許可を委任するロールの作成](#)」を参照してください。
- Amazon EC2 で実行されているアプリケーション – IAM ロールを使用して、Amazon EC2 インスタンスで実行され、AWS CLI または AWS API リクエストを行うアプリケーションの一時的な認証情報を管理できます。これは、Amazon EC2 インスタンス内にアクセスキーを保存するよりも望ましい方法です。AWS ロールを Amazon EC2 インスタンスに割り当て、そのすべてのアプリケーションで使用できるようにするには、インスタンスにアタッチされたインスタンスプロファイルを作成します。インスタンスプロファイルにはロールが含まれ、Amazon EC2 インスタンスで実行されるプログラムは一時的な認証情報を取得することができます。詳細については、「[IAMロールを使用してAmazon EC2インスタンス上で動作するアプリケーションに権限を付与する](#)」を参照してください。

アクセスコントロール

AWS Data Exchange リソースを作成、更新、削除、または一覧表示するには、オペレーションを実行し、対応するリソースにアクセスするためのアクセス許可が必要です。操作をプログラマ的に実行するには、有効なアクセスキーも必要です。

AWS Data Exchange リソースへのアクセス許可の管理の概要

すべての AWS リソースは によって所有され AWS アカウント、リソースを作成またはアクセスするアクセス許可はアクセス許可ポリシーによって管理されます。アカウント管理者は、ユーザー、グループ、およびロールにアクセス許可ポリシーをアタッチできます。一部のサービス (AWS Lambda など) は、リソースへの許可ポリシーのアタッチもサポートします。

Note

アカウント管理者 (または管理者) は、管理者権限を持つユーザーです。詳細については、「[IAM ベストプラクティス](#)」を参照してください。

アクセス権限を付与するにはユーザー、グループ、またはロールにアクセス許可を追加します。

- 以下のユーザーとグループ AWS IAM Identity Center :

アクセス許可セットを作成します。「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[権限設定を作成する](#)」の手順に従ってください。

- IAM 内で、ID プロバイダーによって管理されているユーザー:

ID フェデレーションのロールを作成します。詳細については「IAM ユーザーガイド」の「[サードパーティ ID プロバイダー \(フェデレーション\) 用のロールを作成する](#)」を参照してください。

- IAM ユーザー:

- ユーザーが担当できるロールを作成します。手順については「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ユーザーのロールの作成](#)」を参照してください。

- (お奨めできない方法) ポリシーをユーザーに直接アタッチするか、ユーザーをユーザーグループに追加します。詳細については「IAM ユーザーガイド」の「[ユーザー \(コンソール\) へのアクセス権限の追加](#)」を参照してください。

トピック

- [AWS Data Exchange リソースとオペレーション](#)
- [リソース所有権についての理解](#)
- [リソースへのアクセスの管理](#)
- [ポリシー要素 \(アクション、効果、プリンシパル\) の指定](#)
- [ポリシーでの条件の指定](#)

AWS Data Exchange リソースとオペレーション

には AWS Data Exchange、コントロールプレーンが異なる 2 種類のプライマリリソースがあります。

- の主なリソース AWS Data Exchange はデータセットとジョブです。 はリビジョンとアセット AWS Data Exchange もサポートしています。
- プロバイダーとサブスクライバー間のトランザクションを容易にするために、 AWS Data Exchange は製品、オファー、サブスクリプションなどの AWS Marketplace 概念とリソースも使用します。 AWS Marketplace Catalog API または AWS Data Exchange コンソールを使用して、製品、オファー、サブスクリプションリクエスト、サブスクリプションを管理できます。

リソース所有権についての理解

は、リソースを作成したユーザーに関係なく、アカウントで作成されたリソース AWS アカウントを所有します。具体的には、リソース所有者は、リソース作成リクエストを認証する AWS アカウント [プリンシパルエンティティ](#) (AWS アカウント ルートユーザー、ユーザー、またはロール) のです。以下は、この仕組みを説明する例です。

リソース所有権

正しいアクセス許可 AWS アカウント を持つ の IAM エンティティは、 AWS Data Exchange データセットを作成できます。IAM エンティティがデータセットを作成すると、その AWS アカウント がデータセットを所有します。公開されたデータ製品には、それらを AWS アカウント 作成した のみが所有するデータセットを含めることができます。

AWS Data Exchange 製品をサブスクライブするには、IAM エンティティには AWS Data Exchange、AWS Marketplace (関連するサブスクリプション検証に合格した場合) の `aws-marketplace:subscribe`、`aws-marketplace:aws-marketplace>CreateAgreementRequest`、および `aws-marketplace:AcceptAgreementRequest` IAM アクセス許可に加えて、 を使用するアクセス許可が必要です。サブスクライバーのアカウントには権限を持つデータセットに対する読み取りアクセス権がありますが、アカウントは権限を持つデータセットを所有しません。Amazon S3 にエクスポートされる権限を持つデータセットは、サブスクライバーの AWS アカウントが所有します。

リソースへのアクセスの管理

このセクションでは、 のコンテキストでの IAM の使用について説明します AWS Data Exchange。ここでは、IAM サービスに関する詳細情報を提供しません。完全な IAM ドキュメンテーションについては、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM とは](#)」を参照してください。IAM ポリシーの構文の詳細と説明については、「[IAM ユーザーガイド](#)」の「AWS Identity and Access Management IAM ポリシーリファレンス」を参照してください。

アクセスポリシーは、誰が何に対するアクセス権を持っているのかを説明します。以下のセクションでは、アクセス権限のポリシーを作成するためのオプションについて説明します。

IAM アイデンティティにアタッチされているポリシーは、[アイデンティティベース] のポリシー (IAM ポリシー) と呼ばれます。リソースにアタッチされたポリシーは、リソースベースのポリシーと呼ばれます。は、アイデンティティベースのポリシー (IAM ポリシー) のみ AWS Data Exchange をサポートします。

トピック

- [ID ベースのポリシーと権限](#)
- [リソースベースのポリシー](#)

ID ベースのポリシーと権限

AWS Data Exchange には、一連の管理ポリシーが用意されています。それらとそのアクセス許可の詳細については、「」を参照してください[AWS の管理ポリシー - AWS Data Exchange](#)。

Amazon S3 のアクセス許可

Amazon S3 から アセットをインポートする場合 AWS Data Exchange、AWS Data Exchange サービス S3 バケットに書き込むためのアクセス許可が必要です。同様に、 から Amazon S3 AWS Data Exchange にアセットをエクスポートする場合、AWS Data Exchange サービス S3 バケットから読み取るためのアクセス許可が必要です。これらの許可は前述のポリシーに含まれていますが、独自のポリシーを作成して、ユーザーに実行してもらいたい操作だけを許可することもできます。これらのアクセス許可は、名前aws-data-exchangeに を含むバケットに限定し、[CalledVia](#) アクセス許可を使用して、アクセス許可の使用をプリンシパル AWS Data Exchange に代わって によって行われたリクエストに制限できます。

たとえば、これらのアクセス許可 AWS Data Exchange を含む へのインポートとエクスポートを許可するポリシーを作成できます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "s3:GetObject",
      "Resource": "arn:aws:s3::*aws-data-exchange*",
      "Condition": {
```

```
        "ForAnyValue:StringEquals": {
            "aws:CalledVia":[
                "dataexchange.amazonaws.com"
            ]
        }
    },
    {
        "Effect": "Allow",
        "Action": [
            "s3:PutObject",
            "s3:PutObjectAcl"
        ],
        "Resource": "arn:aws:s3::*aws-data-exchange*",
        "Condition": {
            "ForAnyValue:StringEquals": {
                "aws:CalledVia":[
                    "dataexchange.amazonaws.com"
                ]
            }
        }
    },
]
}
```

これらのアクセス許可により、プロバイダーは を使用してインポートおよびエクスポートできます AWS Data Exchange。ポリシーには、以下の許可と制限が含まれています。

- s3:PutObject と s3:PutObjectAcl – これらの許可は、名前に aws-data-exchange が含まれる S3 バケットのみに制限されています。これらのアクセス許可により、プロバイダーは Amazon S3 からインポートするときに AWS Data Exchange サービスバケットに書き込むことができます。
- s3:GetObject – この許可は、名前に aws-data-exchange が含まれる S3 バケットに制限されています。このアクセス許可により、 から Amazon S3 AWS Data Exchange にエクスポートするときに AWS Data Exchange サービスバケットから読み取ることができます。
- これらの許可は、IAM CalledVia 条件で AWS Data Exchange を使用して行われたリクエストに制限されています。これにより、S3 アクセスPutObject許可は AWS Data Exchange コンソールまたは API のコンテキストでのみ使用できます。
- AWS Lake Formation および AWS Resource Access Manager (AWS RAM) – AWS Lake Formation データセットを使用するには、サブスクリプションを持つ新しいプロバイダーごとに AWS RAM 共有招待を受け入れる必要があります。AWS RAM 共有招待を受け入れるには、AWS

RAM 共有招待を受け入れるアクセス許可を持つロールを引き受ける必要があります。の AWS 管理ポリシーの詳細については AWS RAM、[「管理ポリシー」を参照してください AWS RAM。](#)

- AWS Lake Formation データセットを作成するには、IAM が にロールを渡すことを許可するロールを引き受けたデータセットを作成する必要があります AWS Data Exchange。これにより、AWS Data Exchange はユーザーに代わって Lake Formation リソースにアクセス許可を付与および取り消すことができます。以下のポリシーの例を参照してください。

```
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": "iam:PassRole",
  "Resource": "*",
  "Condition": {
    "StringEquals": {
      "iam:PassedToService": "dataexchange.amazonaws.com"
    }
  }
}
```

Note

ユーザーには、この例で説明されていない独自の S3 バケットとオブジェクトに対して読み取りまたは書き込みを行うための追加の許可も必要になる場合があります。

ユーザー、グループ、ロール、および許可の詳細については、[「IAM ユーザーガイド」](#)の「ID (ユーザー、グループ、ロール)」を参照してください。

リソースベースのポリシー

AWS Data Exchange はリソースベースのポリシーをサポートしていません。

Amazon S3 などの他のサービスは、リソースベースの許可ポリシーをサポートします。例えば、ポリシーを S3 バケットにアタッチして、そのバケットに対するアクセス許可を管理できます。

ポリシー要素 (アクション、効果、プリンシパル) の指定

を使用するには AWS Data Exchange、IAM ポリシーでユーザーアクセス許可を定義する必要があります。

最も基本的なポリシーの要素を次に示します。

- リソース – ポリシーでは、ポリシーが適用されるリソースを特定するために Amazon リソースネーム (ARN) を使用します。すべての AWS Data Exchange API オペレーションはリソースレベルのアクセス許可 (RLP) をサポートしていますが、AWS Marketplace アクションは RLP をサポートしていません。詳細については、「[AWS Data Exchange リソースとオペレーション](#)」を参照してください。
- アクション – アクションキーワードを使用して、許可または拒否するリソース操作を特定します。
- 効果 – ユーザーが特定のアクションをリクエストするときの効果 (許可または拒否) を指定します。リソースに対するアクセス権を明示的に付与 (許可) しない場合、アクセスは暗黙的に拒否されます。また、明示的にリソースへのアクセスを拒否すると、別のポリシーによってアクセスが許可されている場合でも、ユーザーはそのリソースにアクセスできなくなります。
- プリンシパル – ID ベースのポリシー (IAM ポリシー) で、ポリシーがアタッチされているユーザーが黙示的なプリンシパルとなります。リソースベースのポリシーでは、アクセス許可を受け取るユーザー、アカウント、サービス、またはその他のエンティティを指定します (リソースベースのポリシーにのみ適用されます)。AWS Data Exchange はリソースベースのポリシーをサポートしていません。

IAM ポリシーの構文と説明の詳細については、IAM ユーザーガイドの[AWS Identity and Access Management 「ポリシーリファレンス」](#)を参照してください。

ポリシーでの条件の指定

許可を付与するとき、IAM ポリシー言語を使用して、ポリシーが有効になる必要がある条件を指定できます。では AWS Data Exchange、`CreateJob`、`GetJob`、および `CancelJob` API `StartJob` オペレーションが条件付きアクセス許可をサポートします。許可は `JobType` レベルで提供できます。

AWS Data Exchange 条件キーリファレンス

条件キー	説明	[Type] (タイプ)
"dataexchange:JobType": "IMPORT_ASSETS_FROM_S3"	Amazon S3 からアセットをインポートするジョブに許可をスコープします。	String
"dataexchange:JobType": "IMPORT_ASSETS_FROM_LAKE_FORMATION_TAG_POLICY" (Preview)	AWS Lake Formation からアセットをインポートするジョブ	String

条件キー	説明	[Type] (タイプ)
	ブに対するアクセス許可の範囲を設定します (プレビュー)	
"dataexchange:JobType":"IMPORT_ASSET_FROM_SIGNED_URL"	署名付き URL からアセットをインポートするジョブに許可をスコープします。	String
"dataexchange:JobType":"IMPORT_ASSET_FROM_REDSHIFT_DATA_SHARES"	Amazon Redshift からアセットをインポートするジョブに許可をスコープします。	String
"dataexchange:JobType":"IMPORT_ASSET_FROM_API_GATEWAY_API"	Amazon API Gateway からアセットをインポートするジョブに許可をスコープします。	String
"dataexchange:JobType":"EXPORT_ASSETS_TO_S3"	Amazon S3 にアセットをエクスポートするジョブに許可をスコープします。	String
"dataexchange:JobType":"EXPORT_ASSETS_TO_SIGNED_URL"	署名付き URL にアセットをエクスポートするジョブに許可をスコープします。	String
"dataexchange:JobType":"EXPORT_REVISIONS_TO_S3"	Amazon S3 にリビジョンをエクスポートするジョブに許可をスコープします。	String

ポリシー言語での条件の指定に関する詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[条件](#)」を参照してください。

条件を表すには、事前定義された条件キーを使用します。には API オペレーション JobType の条件 AWS Data Exchange があります。必要に応じて使用できる AWS 全体の条件キーもあります。AWS 全体キーの完全なリストについては、「[IAM ユーザーガイド](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange API アクセス許可: アクションとリソースのリファレンス

(IAM) ID AWS Identity and Access Management (アイデンティティベースのポリシー) にアタッチできるアクセス許可ポリシーを設定[アクセスコントロール](#)して記述する場合は、次の表を参照として使用します。この表は、各 AWS Data Exchange API オペレーション、アクションを実行するためのアクセス許可を付与できるアクション、およびアクセス許可を付与できる AWS リソースを示しています。アクションは、ポリシーの Action フィールドで指定します。リソース値は、ポリシーの Resource フィールドで指定します。

Note

アクションを指定するには、API 操作名の前に `dataexchange:` プレフィックスを使用します (`dataexchange:CreateDataSet` のようになります)。

AWS Data Exchange API とアクションに必要なアクセス許可

AWS Data Exchange API オペレーション	必要な許可 (API アクション)	リソース	条件
CreateDataSet	<code>dataexchange:CreateDataSet</code>	該当なし	<code>aws:TagKeys</code> <code>aws:RequestTag</code>
GetDataSet	<code>dataexchange:GetDataSet</code>	データセット	<code>aws:RequestTag</code>
UpdateDataSet	<code>dataexchange:UpdateDataSet</code>	データセット	<code>aws:RequestTag</code>
PublishDataSet	<code>dataexchange:PublishDataSet</code>	データセット	<code>aws:RequestTag</code>
DeleteDataSet	<code>dataexchange>DeleteDataSet</code>	データセット	<code>aws:RequestTag</code>
ListDataSets	<code>dataexchange:ListDataSets</code>	該当なし	該当なし

AWS Data Exchange API オペレーション	必要な許可 (API アクション)	リソース	条件
CreateRevision	dataexchange:CreateRevision	データセット	aws:TagKeys aws:RequestTag
GetRevision	dataexchange:GetRevision	リビジョン	aws:RequestTag
DeleteRevision	dataexchange>DeleteRevision	リビジョン	aws:RequestTag
ListDataSetRevisions	dataexchange:ListDataSetRevisions	データセット	aws:RequestTag
ListRevisionAssets	dataexchange:ListRevisionAssets	リビジョン	aws:RequestTag
CreateEventAction	dataexchange:CreateEventAction	該当なし	該当なし
UpdateEventAction	dataexchange:UpdateEventAction	イベントアクション	該当なし
GetEventAction	dataexchange:GetEventAction	イベントアクション	該当なし
ListEventActions	dataexchange:ListEventActions	該当なし	該当なし
DeleteEventAction	dataexchange>DeleteEventAction	イベントアクション	該当なし
CreateJob	dataexchange>CreateJob	該当なし	dataexchange:JobType
GetJob	dataexchange:GetJob	ジョブ	dataexchange:JobType

AWS Data Exchange API オペレーション	必要な許可 (API アクション)	リソース	条件
StartJob**	dataexchange:StartJob	ジョブ	dataexchange:JobType
CancelJob	dataexchange:CancelJob	ジョブ	dataexchange:JobType
ListJobs	dataexchange>ListJobs	該当なし	該当なし
ListTagsForResource	dataexchange>ListTagsForResource	リビジョン	aws:RequestTag
TagResource	dataexchange:TagResource	リビジョン	aws:TagKeys aws:RequestTag
UntagResource	dataexchange:UntagResource	リビジョン	aws:TagKeys aws:RequestTag
UpdateRevision	dataexchange:UpdateRevision	リビジョン	aws:RequestTag
DeleteAsset	dataexchange>DeleteAsset	アセット	該当なし
GetAsset	dataexchange:GetAsset	アセット	該当なし
UpdateAsset	dataexchange:UpdateAsset	アセット	該当なし
SendApiAsset	dataexchange:SendApiAsset	アセット	該当なし

** 開始しているジョブのタイプによっては、追加の IAM 許可が必要になる場合があります。AWS Data Exchange ジョブタイプと関連する追加の IAM 許可については、以下の表を参照してください。ジョブの詳細については、「[のジョブ AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

Note

現在、以下の SDK では SendApiAsset 操作がサポートされていません。

- SDK for .NET
- AWS SDK for C++
- SDK for Java 2.x

AWS Data Exchange のジョブタイプのアクセス許可 **StartJob**

ジョブタイプ	必要となる追加の IAM 許可
IMPORT_ASSETS_FROM_S3	dataexchange:CreateAsset
IMPORT_ASSET_FROM_SIGNED_URL	dataexchange:CreateAsset
IMPORT_ASSETS_FROM_API_GATEWAY_API	dataexchange:CreateAsset
IMPORT_ASSETS_FROM_REDSHIFT_DATA_SHARES	dataexchange:CreateAsset , redshift:AuthorizeDataShare
EXPORT_ASSETS_TO_S3	dataexchange:GetAsset
EXPORT_ASSETS_TO_SIGNED_URL	dataexchange:GetAsset
EXPORT_REVISIONS_TO_S3	dataexchange:GetRevision dataexchange:GetDataSet

Note

IAM 権限 dataexchange:GetDataSet は、EXPORT_REVISIONS_TO_S3 ジョブタイプの動的参照として DataSet.Name を使用している場合にのみ必要です。

以下の例にあるように、ワイルドカードを使用することによって、データセットアクションをリビジョンまたはアセットレベルにスコープできます。

```
arn:aws:dataexchange:us-east-1:123456789012:data-sets/99EXAMPLE23c7c272897cf1EXAMPLE7a/
revisions/*/assets/*
```

一部の AWS Data Exchange アクションは AWS Data Exchange コンソールでのみ実行できます。これらのアクションは AWS Marketplace 機能と統合されています。アクションには、次の表に示す AWS Marketplace アクセス許可が必要です。

AWS Data Exchange サブスクライバーのコンソールでのみ実行できるアクション

コンソールアクション	IAM 許可
製品をサブスクライブする	aws-marketplace:Subscribe aws-marketplace:CreateAgreementRequest aws-marketplace:AcceptAgreementRequest
サブスクリプション検証リクエストを送信する	aws-marketplace:Subscribe aws-marketplace:CreateAgreementRequest aws-marketplace:AcceptAgreementRequest
サブスクリプションの自動更新を有効にする	aws-marketplace:Subscribe aws-marketplace:CreateAgreementRequest aws-marketplace:AcceptAgreementRequest
サブスクリプションの自動更新ステータスを表示する	aws-marketplace:ListEntitlementDetails

コンソールアクション	IAM 許可
	aws-marketplace:ViewSubscriptions aws-marketplace:GetAgreementTerms
サブスクリプションの自動更新を無効にする	aws-marketplace:Subscribe aws-marketplace:CreateAgreementRequest aws-marketplace:AcceptAgreementRequest
アクティブなサブスクリプションをリストする	aws-marketplace:ViewSubscriptions aws-marketplace:SearchAgreements aws-marketplace:GetAgreementTerms
サブスクリプションを表示する	aws-marketplace:ViewSubscriptions aws-marketplace:SearchAgreements aws-marketplace:GetAgreementTerms aws-marketplace:DescribeAgreement
サブスクリプション検証リクエストをリストする	aws-marketplace:ListAgreementRequests
サブスクリプション検証リクエストを表示する	aws-marketplace:GetAgreementRequest

コンソールアクション	IAM 許可
サブスクリプション検証リクエストをキャンセルする	aws-marketplace:CancelAgreementRequest
アカウントを対象とするすべてのオファーを表示する	aws-marketplace:ListPrivateListings
特定のオファーの詳細を表示する	aws-marketplace:GetPrivateListing

AWS Data Exchange プロバイダーのコンソールでのアクション

コンソールアクション	IAM 許可
製品にタグ付けする	aws-marketplace:TagResource aws-marketplace:UntagResource aws-marketplace:ListTagsForResource
オファーにタグ付けする	aws-marketplace:TagResource aws-marketplace:UntagResource aws-marketplace:ListTagsForResource
製品を公開する	aws-marketplace:StartChangeSet aws-marketplace:DescribeChangeSet dataexchange:PublishDataSet
製品を非公開にする	aws-marketplace:StartChangeSet aws-marketplace:DescribeChangeSet
製品を編集する	aws-marketplace:StartChangeSet aws-marketplace:DescribeChangeSet

コンソールアクション	IAM 許可
カスタムオファーを作成する	aws-marketplace:StartChangeSet aws-marketplace:DescribeChangeSet
カスタムオファーを編集する	aws-marketplace:StartChangeSet aws-marketplace:DescribeChangeSet
製品の詳細を表示する	aws-marketplace:DescribeEntity aws-marketplace:ListEntities
製品のカスタムオファーを表示する	aws-marketplace:DescribeEntity
製品ダッシュボードを表示する	aws-marketplace:ListEntities aws-marketplace:DescribeEntity
データセットまたはリビジョンが発行された製品をリストする	aws-marketplace:ListEntities aws-marketplace:DescribeEntity
サブスクリプション検証リクエストをリストする	aws-marketplace:ListAgreementApprovalRequests aws-marketplace:GetAgreementApprovalRequest
サブスクリプション検証リクエストを承認する	aws-marketplace:AcceptAgreementApprovalRequest
サブスクリプション検証リクエストを拒否する	aws-marketplace:RejectAgreementApprovalRequest
サブスクリプション検証リクエストからの情報を削除する	aws-marketplace:UpdateAgreementApprovalRequest

コンソールアクション	IAM 許可
サブスクリプションの詳細を表示する	aws-marketplace:SearchAgreements aws-marketplace:GetAgreementTerms

AWS の 管理ポリシー AWS Data Exchange

AWS 管理ポリシーは、によって作成および管理されるスタンドアロンポリシーです AWS。AWS 管理ポリシーは、ユーザー、グループ、ロールにアクセス許可の割り当てを開始できるように、多くの一般的なユースケースにアクセス許可を付与するように設計されています。

AWS 管理ポリシーは、すべての AWS お客様が使用できるため、特定のユースケースに対して最小特権のアクセス許可を付与しない場合があることに注意してください。ユースケースに固有の [カスタマー管理ポリシー](#) を定義して、アクセス許可を絞り込むことをお勧めします。

AWS 管理ポリシーで定義されているアクセス許可は変更できません。が AWS マネージドポリシーで定義されたアクセス許可 AWS を更新すると、ポリシーがアタッチされているすべてのプリンシパル ID (ユーザー、グループ、ロール) に影響します。AWS は、新しい が起動されるか、新しい API オペレーション AWS のサービス が既存のサービスで使用できるようになったときに、AWS マネージドポリシーを更新する可能性が高くなります。

詳細については「IAM ユーザーガイド」の「[AWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。

トピック

- [AWS 管理ポリシー: AWSDataExchangeFullAccess](#)
- [AWS 管理ポリシー: AWSDataExchangeProviderFullAccess](#)
- [AWS 管理ポリシー: AWSDataExchangeReadOnly](#)
- [AWS 管理ポリシー: AWSDataExchangeServiceRolePolicyForLicenseManagement](#)
- [AWS 管理ポリシー: AWSDataExchangeServiceRolePolicyForOrganizationDiscovery](#)
- [AWS マネージドポリシー: AWSDataExchangeSubscriberFullAccess](#)
- [AWS マネージドポリシー: AWSDataExchangeDataGrantOwnerFullAccess](#)
- [AWS 管理ポリシー: AWSDataExchangeDataGrantReceiverFullAccess](#)
- [AWS Data Exchange AWS 管理ポリシーの更新](#)

AWS 管理ポリシー: AWSDataExchangeFullAccess

AWSDataExchangeFullAccess ポリシーを IAM アイデンティティにアタッチできます。

このポリシーは、AWS Data Exchange および SDK を使用した および AWS Marketplace アクションへのフルアクセスを許可する管理アクセス許可を付与 AWS Management Console します。また、Amazon S3 と への選択アクセスを提供し、AWS Key Management Service 必要に応じて最大限に活用できます AWS Data Exchange。

このポリシーのアクセス許可を表示するには、AWS 「マネージドポリシーリファレンス[AWSDataExchangeFullAccess](#)」の「」を参照してください。

AWS 管理ポリシー: AWSDataExchangeProviderFullAccess

AWSDataExchangeProviderFullAccess ポリシーを IAM アイデンティティにアタッチできません。

このポリシーは、AWS Management Console および SDK を使用してデータプロバイダーに AWS Data Exchange および AWS Marketplace アクションへのアクセスを提供する寄稿者アクセス許可を付与します。また、Amazon S3 と への選択アクセスを提供し、AWS Key Management Service 必要に応じて最大限に活用できます AWS Data Exchange。

このポリシーのアクセス許可を表示するには、AWS 「マネージドポリシーリファレンス[AWSDataExchangeProviderFullAccess](#)」の「」を参照してください。

AWS 管理ポリシー: AWSDataExchangeReadOnly

AWSDataExchangeReadOnly ポリシーを IAM アイデンティティにアタッチできます。

このポリシーは、AWS Data Exchange および SDK を使用した および AWS Marketplace アクションへの読み取り専用アクセスを許可する読み取り専用アクセス許可を付与 AWS Management Console します。

このポリシーのアクセス許可を表示するには、AWS 「マネージドポリシーリファレンス[AWSDataExchangeReadOnly](#)」の「」を参照してください。

AWS 管理ポリシー: AWSDataExchangeServiceRolePolicyForLicenseManagement

IAM エンティティに AWSDataExchangeServiceRolePolicyForLicenseManagement をアタッチすることはできません。このポリシーは、ユーザーに代わって AWS Data Exchange がアクションを実行することを許可する、サービスにリンクされたロールにアタッチされます。これにより、が AWS 組織に関する情報を取得し AWS Data Exchange 、データ付与ライセンスを管理する AWS

Data Exchange ためのロールアクセス許可が付与されます。詳細については、このセクションで後述する[AWS Data Exchange ライセンス管理のサービスにリンクされたロール](#)を参照してください。

このポリシーのアクセス許可を表示するには、AWS 「マネージドポリシーリファレンス[AWSDataExchangeServiceRolePolicyForLicenseManagement](#)」の「」を参照してください。

AWS 管理ポリシー: AWSDataExchangeServiceRolePolicyForOrganizationDiscovery

IAM エンティティに `AWSDataExchangeServiceRolePolicyForOrganizationDiscovery` をアタッチすることはできません。このポリシーは、がユーザーに代わってアクションを実行できるようにするサービスにリンクされたロール `AWS Data Exchange` にアタッチされます。これにより `AWS Data Exchange`、が `AWS` 組織に関する情報を取得して、`AWS Data Exchange` データ付与ライセンス配布の適格性を判断するためのロールアクセス許可が付与されます。詳細については、「[での Organization Discovery AWS のサービスにリンクされたロール AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

このポリシーのアクセス許可を表示するには、AWS 「マネージドポリシーリファレンス[AWSDataExchangeServiceRolePolicyForOrganizationDiscovery](#)」の「」を参照してください。

AWS マネージドポリシー: AWSDataExchangeSubscriberFullAccess

`AWSDataExchangeSubscriberFullAccess` ポリシーを IAM アイデンティティにアタッチできません。

このポリシーは、AWS Management Console および SDK を使用した および AWS Marketplace アクションへの `AWS Data Exchange` データサブスクライバーアクセスを許可する寄稿者アクセス許可を付与します。また、Amazon S3 とへの選択アクセスを提供し、AWS Key Management Service 必要に応じて最大限に活用できます `AWS Data Exchange`。

このポリシーのアクセス許可を表示するには、AWS 「マネージドポリシーリファレンス[AWSDataExchangeSubscriberFullAccess](#)」の「」を参照してください。

AWS マネージドポリシー: AWSDataExchangeDataGrantOwnerFullAccess

`AWSDataExchangeDataGrantOwnerFullAccess` ポリシーを IAM アイデンティティにアタッチできません。

このポリシーは、AWS Management Console および SDK を使用した `AWS Data Exchange` アクションへのアクセス権をデータ許可所有者に付与します。SDKs

このポリシーのアクセス許可を表示するには、AWS 「マネージドポリシーリファレンス[AWSDataExchangeDataGrantOwnerFullAccess](#)」の「」を参照してください。

AWS 管理ポリシー: AWSDataExchangeDataGrantReceiverFullAccess

AWSDataExchangeDataGrantReceiverFullAccess ポリシーを IAM アイデンティティにアタッチできます。

このポリシーは、Data Grant レシーバーに および SDKs AWS Management Console を使用した AWS Data Exchange アクションへのアクセスを許可します。

このポリシーのアクセス許可を表示するには、AWS 「マネージドポリシーリファレンス [AWSDataExchangeDataGrantReceiverFullAccess](#)」の「」を参照してください。

AWS Data Exchange AWS 管理ポリシーの更新

次の表は、このサービスがこれらの変更の追跡を開始 AWS Data Exchange してからの AWS の管理ポリシーの更新に関する詳細を示しています。このページに対する変更 (および本ユーザーガイドに対するその他変更) に関する自動アラートについては、「[のドキュメント履歴 AWS Data Exchange](#)」ページの RSS フィードをサブスクライブしてください。

変更	説明	日付
AWSDataExchangeDataGrantOwnerFullAccess - 新しいポリシー	AWS Data Exchange は、Data Grant 所有者に AWS Data Exchange アクションへのアクセスを許可する新しいポリシーを追加しました。	2024 年 10 月 24 日
AWSDataExchangeDataGrantReceiverFullAccess - 新しいポリシー	AWS Data Exchange は、Data Grant レシーバーに AWS Data Exchange アクションへのアクセスを許可する新しいポリシーを追加しました。	2024 年 10 月 24 日
AWSDataExchangeReadOnly - 既存ポリシーへの更新	新しいデータ付与機能に必要なアクセス許可を AWSDataExchangeReadOnly AWS 管理ポリシーに追加しました。	2024 年 10 月 24 日
AWSDataExchangeServiceRolePolicyForLicenseManagement - 新しいポリシー	カスタマーアカウントのライセンス付与を管理するためのサービスにリンクされたロールをサポートする新しいポリシーを追加しました。	2024 年 10 月 17 日

変更	説明	日付
AWSDataExchangeServiceRolePolicyForOrganizationDiscovery - 新しいポリシー	Organization のアカウント情報への読み取りアクセスを提供するサービスにリンクされたロールをサポートする新しいポリシーを追加しました AWS。	2024 年 10 月 17 日
AWSDataExchangeReadOnly	ポリシーを読みやすくするためにステートメント IDs を追加し、ワイルドカードによるアクセス許可を読み取り専用 ADX アクセス許可の完全なリストに拡張し、新しいアクション <code>aws-marketplace:ListTagsForResource</code> および <code>aws-marketplace:ListPrivateListings</code> を追加しました。	2024 年 7 月 9 日
AWSDataExchangeFullAccess	削除されたアクション: <code>aws-marketplace:GetPrivateListing</code>	2024 年 5 月 22 日
AWSDataExchangeSubscriberFullAccess	ポリシーを読みやすくするためにステートメント IDs を追加し、新しいアクション <code>aws-marketplace:ListPrivateListings</code> を追加しました。	2024 年 4 月 30 日
AWSDataExchangeFullAccess	ポリシーを読みやすくするためにステートメント IDs を追加し、新しいアクション <code>aws-marketplace:TagResource</code> 、 <code>aws-marketplace:UntagResource</code> 、 <code>aws-marketplace:ListTagsForResource</code> 、 <code>aws-marketplace:ListPrivateListings</code> 、 <code>aws-marketplace:GetPrivateListing</code> 、 <code>aws-marketplace:DescribeAgreement</code> を追加しました。	2024 年 4 月 30 日

変更	説明	日付
AWSDataExchangeProviderFullAccess	ポリシーを読みやすくするためにステートメント IDs を追加しました。	2024 年 8 月 9 日
AWSDataExchangeProviderFullAccess	dataexchange:SendDataSetNotification データセット通知を送信するための新しいアクセス許可である を追加しました。	2024 年 3 月 5 日
AWSDataExchangeSubscriberFullAccess 、 AWSDataExchangeReadOnlyAWSDataExchangeProviderFullAccess 、 AWSDataExchangeFullAccess - 既存のポリシーの更新	すべてのマネージドポリシーにきめ細かいアクションを追加しました。新たに追加されたアクション: aws-marketplace:CreateAgreementRequest 、 aws-marketplace:AcceptAgreementRequest 、 aws-marketplace:ListEntitlementDetails 、 aws-marketplace:ListPrivateListings 、 aws-marketplace:GetPrivateListing 、 license-manager:ListReceivedGrants aws-marketplace:TagResource 、 aws-marketplace:UntagResource 、 aws-marketplace:ListTagsForResource 、 aws-marketplace:DescribeAgreement 、 aws-marketplace:GetAgreementTerms 、 aws-marketplace:GetLicense	2023 年 7 月 31 日
AWSDataExchangeProviderFullAccess – 既存のポリシーの更新	リビジョンを取り消すための新しい権限 dataexchange:RevokeRevision が追加されました。	2022 年 3 月 15 日

変更	説明	日付
AWSDataExchangeProviderFullAccess と AWSDataExchangeFullAccess - 既存のポリシーに対する更新	Amazon API Gateway から API アセットを取得するための新しい権限である <code>apigateway:GET</code> を追加しました。	2021 年 12 月 3 日
AWSDataExchangeProviderFullAccess と AWSDataExchangeSubscriberFullAccess - 既存のポリシーに対する更新	API アセットにリクエストを送信するための新しい許可である <code>dataexchange:SendApiAsset</code> を追加しました。	2021 年 11 月 29 日
AWSDataExchangeProviderFullAccess と AWSDataExchangeFullAccess - 既存のポリシーに対する更新	Amazon Redshift データセットへのアクセスを承認し、それらを作成するための新しい許可である <code>redshift:AuthorizeDataShare</code> 、 <code>redshift:DescribeDataSharesForProducer</code> 、および <code>redshift:DescribeDataShares</code> を追加しました。	2021 年 11 月 1 日
AWSDataExchangeSubscriberFullAccess - 既存ポリシーへの更新	データセットの新しいリビジョンを自動的にエクスポートするためのアクセスを制御する新しい許可である <code>dataexchange:CreateEventAction</code> 、 <code>dataexchange:UpdateEventAction</code> 、および <code>dataexchange>DeleteEventAction</code> を追加しました。	2021 年 9 月 30 日
AWSDataExchangeProviderFullAccess と AWSDataExchangeFullAccess - 既存のポリシーに対する更新	データセットの新しいバージョンを発行するためのアクセスを制御する新しい許可である <code>dataexchange:PublishDataSet</code> を追加しました。	2021 年 5 月 25 日

変更	説明	日付
AWS DataExchangeReadOnIy 、 AWSDataExchangeProviderFullAccess 、および AWSDataExchangeFullAccess – 既存のポリシーの更新	製品とオファ어의サブスクリプションの表示を可能にする aws-marketplace:SearchAgreements および aws-marketplace:GetAgreementTerms を追加しました。	2021 年 5 月 12 日
AWS Data Exchange が変更の追跡を開始しました	AWS Data Exchange は、AWS 管理ポリシーの変更の追跡を開始しました。	2021 年 4 月 20 日

AWS Data Exchangeのサービスにリンクされたロールの使用

AWS Data Exchange は AWS Identity and Access Management (IAM) [サービスにリンクされたロール](#)を使用します。サービスにリンクされたロールは、直接リンクされた一意のタイプの IAM ロールです AWS Data Exchange。サービスにリンクされたロールは によって事前定義 AWS Data Exchange されており、サービスがユーザーに代わって他の AWS サービスを呼び出すために必要なすべてのアクセス許可が含まれています。

サービスにリンクされたロールを使用すると、必要なアクセス許可を手動で追加する必要がなくなるため、 の設定 AWS Data Exchange が簡単になります。 は、サービスにリンクされたロールのアクセス許可 AWS Data Exchange を定義します。特に定義されている場合を除き、 のみがそのロールを引き受け AWS Data Exchange ることができます。定義される許可は信頼ポリシーと許可ポリシーに含まれており、その許可ポリシーを他の IAM エンティティにアタッチすることはできません。

サービスリンクロールを削除するには、最初に関連リソースを削除する必要があります。これにより、AWS Data Exchange リソースへのアクセス許可が誤って削除されないため、リソースが保護されます。

サービスにリンクされたロールをサポートする他のサービスの詳細については、[AWS 「IAM と連携するサービス」](#)を参照し、「サービスにリンクされたロール」列で「はい」があるサービスを探します。サービスリンクロールに関するドキュメントをサービスで表示するには、リンクで [はい] を選択します。

のサービスにリンクされたロールの作成 AWS Data Exchange

サービスリンクロールを手動で作成する必要はありません。ライセンスマネージャーを使用してデータ許可を配布すると、サービスにリンクされたロールが作成されます。

サービスリンクロールを作成するには

1. [AWS Data Exchange コンソール](#)でサインインし、Data Grant 設定を選択します。
2. データ付与設定ページで、統合の設定を選択します。
3. AWS Organizations 統合の作成セクションで、統合の設定を選択します。
4. AWS Organizations 統合の作成ページで、適切な信頼レベルの設定を選択し、統合の作成を選択します。

IAM コンソールを使用して、ユースケースでサービスにリンクされたロールを作成することもできます。AWS CLI または AWS API で、サービス名を使用して *appropriate-service-name*.amazonaws.com サービスにリンクされたロールを作成します。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[サービスリンクロールの作成](#)」を参照してください。このサービスリンクロールを削除しても、同じ方法でロールを再作成できます。

のサービスにリンクされたロールの編集 AWS Data Exchange

AWS Data Exchange では、サービスにリンクされたロールを編集することはできません。サービスリンクロールの作成後は、さまざまなエンティティがロールを参照する可能性があるため、ロール名を変更することはできません。ただし、IAM を使用してロールの説明を編集することはできます。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[サービスリンクロールの編集](#)」を参照してください。

のサービスにリンクされたロールの削除 AWS Data Exchange

サービスリンクロールを必要とする機能やサービスが不要になった場合は、ロールを削除することをお勧めします。そうすることで、積極的にモニタリングまたは保守されていない未使用のエンティティを排除できます。ただし、手動で削除する前に、サービスリンクロールのリソースをクリーンアップする必要があります。

Note

リソースを削除しようとしたときに AWS Data Exchange サービスがロールを使用している場合は、削除が失敗する可能性があります。失敗した場合は数分待ってから操作を再試行してください。

サービスにリンクされたロールを削除する前に、以下を行う必要があります。

- `AWSServiceRoleForAWSDataExchangeLicenseManagement` ロールで、受け取った AWS Data Exchange データ許可の AWS License Manager 配布された許可をすべて削除します。
- `AWSServiceRoleForAWSDataExchangeOrganizationDiscovery` ロールについては、AWS 組織内のアカウントが受け取った AWS Data Exchange データ付与の AWS License Manager 分散付与をすべて削除します。

サービスにリンクされたロールを手動で削除する

IAM コンソール、AWS CLI、または AWS API を使用して、サービスにリンクされたロールを削除します。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[サービスにリンクされたロールの削除](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange サービスにリンクされたロールでサポートされているリージョン

AWS Data Exchange は、サービス AWS リージョン が利用可能なすべての でサービスにリンクされたロールの使用をサポートします。詳細については、「[AWS リージョンとエンドポイント](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange ライセンス管理のサービスにリンクされたロール

AWS Data Exchange は という名前のサービスにリンクされたロールを使用します `AWSServiceRoleForAWSDataExchangeLicenseManagement`。このロールにより、AWS Data Exchange は AWS 組織に関する情報を取得し、AWS Data Exchange データ付与ライセンスを管理できます。

`AWSServiceRoleForAWSDataExchangeLicenseManagement` サービスリンクロールは、以下のサービスを信頼してロールを引き受けます。

- `license-management.dataexchange.amazonaws.com`

という名前のロールアクセス許可ポリ

シーAWSDataExchangeServiceRolePolicyForLicenseManagementにより AWS Data Exchange、 は指定されたリソースに対して次のアクションを実行できます。

- アクション:
 - `organizations:DescribeOrganization`
 - `license-manager:ListDistributedGrants`
 - `license-manager:GetGrant`
 - `license-manager>CreateGrantVersion`
 - `license-manager>DeleteGrant`
- リソース:
 - すべてのリソース (*)

AWSDataExchangeServiceRolePolicyForLicenseManagement ロールの詳細については、
「[AWS 管理ポリシー: AWSDataExchangeServiceRolePolicyForLicenseManagement](#)」を参照してください。

AWSServiceRoleForAWSDataExchangeLicenseManagement サービスにリンクされたロールの使用の詳細については、「」を参照してください[AWS Data Exchangeのサービスにリンクされたロールの使用](#)。

ユーザー、グループ、またはロールにサービスリンクロールの作成、編集、または削除を許可するには、アクセス許可を設定する必要があります。詳細についてはIAM ユーザーガイドの「[サービスにリンクされた役割のアクセス許可](#)」を参照してください。

での Organization Discovery AWS のサービスにリンクされたロール AWS Data Exchange

AWS Data Exchange は、 という名前のサービスにリンクされたロールを使用しますAWSServiceRoleForAWSDataExchangeOrganizationDiscovery。このロールにより、AWS Data Exchange は AWS 組織に関する情報を取得して AWS、Data Exchange データ付与ライセンス配布の適格性を判断できます。

Note

このロールは、AWS 組織の管理アカウントでのみ必要です。

AWSServiceRoleForAWSDataExchangeOrganizationDiscovery サービスリンクロールは、以下のサービスを信頼してロールを引き受けます。

- `organization-discovery.dataexchange.amazonaws.com`

という名前のロールアクセス許可ポリ

シーAWSDataExchangeServiceRolePolicyForOrganizationDiscoveryにより AWS Data Exchange、は指定されたリソースに対して次のアクションを実行できます。

- アクション:
 - `organizations:DescribeOrganization`
 - `organizations:DescribeAccount`
 - `organizations:ListAccounts`
- リソース:
 - すべてのリソース (*)

AWSDDataExchangeServiceRolePolicyForOrganizationDiscovery ロールの詳細については、「[AWS 管理ポリシー: AWSDDataExchangeServiceRolePolicyForOrganizationDiscovery](#)」を参照してください。

AWSServiceRoleForAWSDataExchangeOrganizationDiscovery サービスにリンクされたロールの使用の詳細については、このセクションの前[AWS Data Exchangeのサービスにリンクされたロールの使用](#)半の「」を参照してください。

ユーザー、グループ、またはロールにサービスリンクロールの作成、編集、または削除を許可するには、アクセス許可を設定する必要があります。詳細についてはIAM ユーザーガイドの「[サービスにリンクされた役割のアクセス許可](#)」を参照してください。

のコンプライアンス検証 AWS Data Exchange

AWS のサービスが特定のコンプライアンスプログラムの範囲内にあるかどうかを確認するには、[AWS のサービス「コンプライアンスプログラムによる対象範囲内」](#)を参照して、関心のあるコンプライアンスプログラムを選択します。一般的な情報については、[AWS「Compliance Programs Assurance」](#)を参照してください。

を使用して、サードパーティーの監査レポートをダウンロードできます AWS Artifact。詳細については、「[Downloading Reports in AWS Artifact](#)」を参照してください。

を使用する際のお客様のコンプライアンス責任 AWS のサービスは、お客様のデータの機密性、貴社のコンプライアンス目的、適用される法律および規制によって決まります。は、コンプライアンスに役立つ以下のリソース AWS を提供します。

- [セキュリティのコンプライアンスとガバナンス](#) – これらのソリューション実装ガイドでは、アーキテクチャ上の考慮事項について説明し、セキュリティとコンプライアンスの機能をデプロイする手順を示します。
- [HIPAA 対応サービスのリファレンス](#) – HIPAA 対応サービスの一覧が提供されています。すべての AWS のサービスが HIPAA の対象となるわけではありません。
- [AWS コンプライアンスリソース](#) – このワークブックとガイドのコレクションは、お客様の業界や地域に適用される場合があります。
- [AWS カスタマーコンプライアンスガイド](#) – コンプライアンスの観点から責任共有モデルを理解します。このガイドでは、複数のフレームワーク (米国国立標準技術研究所 (NIST)、Payment Card Industry Security Standards Council (PCI)、国際標準化機構 (ISO) など) にわたるセキュリティコントロールを保護および AWS のサービス マッピングするためのベストプラクティスをまとめています。
- 「[デベロッパーガイド](#)」の「[ルールによるリソースの評価](#)」 – この AWS Config サービスは、リソース設定が内部プラクティス、業界ガイドライン、および規制にどの程度準拠しているかを評価します。AWS Config
- [AWS Security Hub](#) – これにより AWS のサービス、内のセキュリティ状態を包括的に把握できます AWS。Security Hub では、セキュリティコントロールを使用して AWS リソースを評価し、セキュリティ業界標準とベストプラクティスに対するコンプライアンスをチェックします。サポートされているサービスとコントロールの一覧については、[Security Hub のコントロールリファレンス](#)を参照してください。
- [Amazon GuardDuty](#) – 不審なアクティビティや悪意のあるアクティビティがないか環境をモニタリングすることで AWS アカウント、ワークロード、コンテナ、データに対する潜在的な脅威

AWS のサービスを検出します。GuardDuty を使用すると、特定のコンプライアンスフレームワークで義務付けられている侵入検知要件を満たすことで、PCI DSS などのさまざまなコンプライアンス要件に対応できます。

- [AWS Audit Manager](#) – これにより AWS のサービス、AWS 使用状況を継続的に監査し、リスクの管理方法と規制や業界標準への準拠を簡素化できます。

PCI DSS コンプライアンス

AWS Data Exchange は、マーチャントまたはサービスプロバイダーによるクレジットカードデータの処理、保存、および送信をサポートし、Payment Card Industry (PCI) Data Security Standard (DSS) に準拠していることが確認されています。PCI コンプライアンスパッケージのコピーをリクエストする方法など、AWS PCI DSS の詳細については、[「PCI DSS レベル 1」](#)を参照してください。

の耐障害性 AWS Data Exchange

AWS グローバルインフラストラクチャは、AWS リージョン およびアベイラビリティゾーンを中心に構築されています。は、低レイテンシー、高スループット、高度に冗長なネットワークで接続された、物理的に分離および分離された複数のアベイラビリティゾーン AWS リージョン を提供します。アベイラビリティゾーンでは、アベイラビリティゾーン間で中断されることなく自動的にフェイルオーバーするアプリケーションとデータベースを設計および運用することができます。アベイラビリティゾーンは、従来の単一または複数のデータセンターインフラストラクチャよりも可用性、耐障害性、および拡張性に優れています。

AWS Data Exchange には、プロバイダーが提供するグローバルに利用可能な単一の製品カタログがあります。サブスクライバーは、使用しているリージョンにかかわらず、同一のカタログを表示できます。製品の基礎となるリソース (データセット、リビジョン、アセット) は、プログラムまたはサポートされているリージョンの AWS Data Exchange コンソールを通じて管理するリージョンリソースです。は、サービスが動作するリージョン内の複数のアベイラビリティゾーンにデータを AWS Data Exchange レプリケートします。サポートされるリージョンの詳細については、[「グローバルインフラストラクチャのリージョン表」](#)を参照してください。

AWS リージョン およびアベイラビリティゾーンの詳細については、[AWS 「グローバルインフラストラクチャ」](#)を参照してください。

のインフラストラクチャセキュリティ AWS Data Exchange

マネージドサービスである AWS Data Exchange は、AWS グローバルネットワークセキュリティで保護されています。AWS セキュリティサービスと [インフラストラクチャ AWS](#) を保護する方法については、[AWS 「クラウドセキュリティ」](#) を参照してください。インフラストラクチャセキュリティのベストプラクティスを使用して AWS 環境を設計するには、「Security Pillar AWS Well-Architected Framework」の [「Infrastructure Protection」](#) を参照してください。

AWS が発行した API コールを使用して、ネットワーク AWS Data Exchange 経由で にアクセスします。クライアントは以下をサポートする必要があります。

- Transport Layer Security (TLS)。TLS 1.2 が必須で、TLS 1.3 をお勧めします。
- DHE (楕円ディフィー・ヘルマン鍵共有) や ECDHE (楕円曲線ディフィー・ヘルマン鍵共有) などの完全前方秘匿性 (PFS) による暗号スイート。これらのモードは Java 7 以降など、ほとんどの最新システムでサポートされています。

また、リクエストにはアクセスキー ID と、IAM プリンシパルに関連付けられているシークレットアクセスキーを使用して署名する必要があります。または [AWS Security Token Service \(AWS STS\)](#) を使用して、一時的なセキュリティ認証情報を生成し、リクエストに署名することもできます。

AWS Data Exchange およびインターフェイス VPC エンドポイント (AWS PrivateLink)

仮想プライベートクラウド (VPC) と AWS Data Exchange 間のプライベート接続は、インターフェイス VPC エンドポイントを作成することで確立できます。インターフェイスエンドポイントは、インターネットゲートウェイ [AWS PrivateLink](#)、NAT デバイス、VPN 接続、または AWS Direct Connect 接続なしで AWS Data Exchange API オペレーションにプライベートにアクセスできるテクノロジである [AWS PrivateLink](#) を利用しています。VPC 内のインスタンスは、AWS Data Exchange API オペレーションと通信するためにパブリック IP アドレスを必要としません。VPC と 間のトラフィック AWS Data Exchange は Amazon ネットワークを離れません。

各インターフェイスエンドポイントは、サブネット内の 1 つ以上の [Elastic Network Interface](#) によって表されます。

Note

を除くすべての AWS Data Exchange アクション `SendAPIAsset` が VPC でサポートされています。

詳細については、「Amazon [VPC ユーザーガイド](#)」の「[インターフェイス VPC エンドポイント \(AWS PrivateLink\)](#)」を参照してください。

AWS Data Exchange VPC エンドポイントに関する考慮事項

のインターフェイス VPC エンドポイントを設定する前に AWS Data Exchange、Amazon VPC ユーザーガイドの [インターフェイスエンドポイントのプロパティと制限](#)を確認してください。

AWS Data Exchange は、VPC からのすべての API オペレーションの呼び出しをサポートしています。

AWS Data Exchange のインターフェイス VPC エンドポイントの作成

Amazon VPC コンソールまたは AWS Command Line Interface () を使用して、AWS Data Exchange サービスの VPC エンドポイントを作成できます AWS CLI。詳細については、Amazon VPC ユーザーガイドの [インターフェイスエンドポイントの作成](#)を参照してください。

次のサービス名 `com.amazonaws.region.dataexchange` を使用して用の VPC エンドポイントを作成します。

- `com.amazonaws.region.dataexchange`

エンドポイントのプライベート DNS を有効にすると、などの のデフォルト DNS 名 `com.amazonaws.us-east-1.dataexchange` を使用して AWS リージョンに API リクエストを行うことができます。

詳細については、「Amazon VPC ユーザーガイド」の「[インターフェイスエンドポイントを介したサービスへのアクセス](#)」を参照してください。

の VPC エンドポイントポリシーの作成 AWS Data Exchange

VPC エンドポイントには、AWS Data Exchange へのアクセスを制御するエンドポイントポリシーをアタッチできます。このポリシーでは、以下の情報を指定します。

- アクションを実行できるプリンシパル

- 実行可能なアクション
- アクションを実行できるリソース

詳細については、「Amazon VPC ユーザーガイド」の「[VPC エンドポイントによるサービスのアクセスコントロール](#)」を参照してください。

例: AWS Data Exchange アクションの VPC エンドポイントポリシー

以下は、の VPC エンドポイントポリシーの例です AWS Data Exchange。エンドポイントにアタッチすると、このポリシーは、すべてのリソースのすべてのプリンシパルに対して、リストされた AWS Data Exchange アクションへのアクセスを許可します。

この VPC エンドポイントポリシーの例では、からの bts の AWS アカウント 123456789012 ユーザーへのフルアクセスのみを許可します vpc-12345678。ユーザー readUser にはリソースの読み取りが許可されますが、その他のすべての IAM プリンシパルに対しては、エンドポイントへのアクセスが拒否されます。

```
{
  "Id": "example-policy",
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "Allow administrative actions from vpc-12345678",
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "AWS": [
          "arn:aws:iam::123456789012:user/bts"
        ]
      },
      "Action": "*",
      "Resource": "*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:sourceVpc": "vpc-12345678"
        }
      }
    },
    {
      "Sid": "Allow ReadOnly actions",
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
```

```
        "AWS": [
            "arn:aws:iam::123456789012:user/readUser"
        ]
    },
    "Action": [
        "dataexchange:list*",
        "dataexchange:get*"
    ],
    "Resource": "*",
}
]
```

AWS Marketplace Catalog API AWS Data Exchange での の 使用

この章には、AWS Data Exchange と AWS Marketplace Catalog API を使用するための補足情報が含まれています。AWS Marketplace Catalog API サービスは、AWS Marketplace プロバイダーとしてセルフサービスの発行機能にプログラムでアクセスするための API インターフェイスを提供します。

この API は、製品を表示して管理するための幅広い操作をサポートしています。API 統合 AWS Marketplace を使用して内部ビルドまたはデプロイパイプラインを に拡張し、製品更新プロセスを自動化できます。この API 上に独自の内部ユーザーインターフェイスを作成して、AWS Marketplace の製品を管理することも可能です。

AWS Marketplace Catalog API を使用して AWS Data Exchange 製品を更新できます。製品を表示するには、ListEntities および DescribeEntity API 操作を使用できます。AWS Data Exchange 製品を更新するには、新しい変更セットを作成する必要があります。これは、製品の管理に使用される非同期オペレーションを表す Catalog API リソースです。詳細については、「[AWS Marketplace Catalog API リファレンス](#)」を参照してください。

Catalog API の使用時には、以下の点に留意してください。

- 各 AWS Data Exchange 製品は、Catalog API で [エンティティ](#) として表されます。
- AWS Data Exchange 製品には、DataProduct として [EntityTypes](#) が存在します。
- 各製品では、一度に 1 つの変更セットしか実行できません。つまり、最初の変更セットの実行が完了するまでは、2 番目の変更セットを作成できないことになります。

トピック

- [データセットを に追加する AWS Data Exchange](#)

データセットを に追加する AWS Data Exchange

Note

タイプ AddDataSets の Catalog API 変更セットを使用して追加されたデータセットには、デフォルトで製品の発行メソッドが設定されます。

AWS Data Exchange 製品にデータセットを追加するには、タイプの変更セットを開始します AddDataSets。これを実行するには、StartChangeSet API 操作を使用して、変更タイプ、製品識別子、製品タイプ、およびデータセットの Amazon リソースネーム (ARN) を含めた詳細を指定することができます。

チュートリアル: 公開済みのデータ製品への新しいデータセットの追加

このチュートリアルでは、公開済み製品に新しい AWS Data Exchange データセットを追加する詳細な手順について説明します。このチュートリアルのおおまかな手順は以下のとおりです。

トピック

- [IAM 許可をセットアップする](#)
- [AWS Marketplace Catalog API にアクセスする](#)
- [AWS Data Exchange コンソールから製品 ID を取得する](#)
- [変更リクエストを開始する](#)
- [変更セットのステータスをチェックする](#)

IAM 許可をセットアップする

開始する前に、AWS Marketplace Catalog API を使用するための AWS Identity and Access Management (IAM) アクセス許可が必要です。これらのアクセス許可は、を使用するために必要なアクセス許可に加えて付与されます AWS Data Exchange。

1. ブラウザを IAM コンソールに移動し、IAM アクセス許可を管理 **AWS アカウント できる** を使用してサインインします。
2. 左側のナビゲーションペインで [ポリシー] を選択します。
3. [ポリシーを作成] を選択します。
4. [JSON] タブを選択して、以下の許可を入力します。これにより、AWS Marketplace Catalog API へのフルアクセスが提供されます。アクセス権は、ユースケースの必要に応じて制限できます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
```

```
"aws-marketplace:CancelChangeSet",
"aws-marketplace:ListChangeSets",
"aws-marketplace:DescribeEntity",
"aws-marketplace:StartChangeSet",
"aws-marketplace:ListEntities",
"aws-marketplace:DescribeChangeSet",
"dataexchange:PublishDataSet"
],
"Resource": "*"
}
]
}
```

5. [次へ: レビュー] を選択します。
6. ポリシーの名前 (**CatalogAPIFullAccess** など) を入力してから、[ポリシーを作成] を選択します。
7. IAM コンソールを使用して、ポリシーをアタッチするユーザー、グループ、またはロールを選択します。

AWS Marketplace Catalog API にアクセスする

AWS Marketplace Catalog API にアクセスするには、次の HTTP クライアントエンドポイントを使用します。

```
catalog.marketplace.us-east-1.amazonaws.com
```

AWS Data Exchange コンソールから製品 ID を取得する

AWS Marketplace Catalog API を使用して新しいデータセットを発行する前に、AWS Data Exchange コンソールから製品 ID を取得します。[Product] (製品) ダッシュボードに移動して、データセットを発行する製品 ID をコピーします。[AWS Marketplace Catalog API](#) は、**DataProduct@1.0** エンティティタイプと共に `ListEntities` アクションを使用することで、製品 ID を検索するためにも使用できます。

変更リクエストを開始する

変更リクエストを開始してテスト製品にデータセットを追加する

1. 「[AWS Data Exchange コンソールから製品 ID を取得する](#)」の手順に従って取得できるエンティティ ID をコピーします。

2. AddDataSets 変更タイプを使用して StartChangeSet リクエストを実行します。

Note

AWS Marketplace Catalog API での変更セットの操作については、[「変更セットの操作」](#)を参照してください。エンティティの識別子の使用に関する詳細については、[「識別子」](#)を参照してください。

リクエストの例

```
https://catalog.marketplace.us-east-1.amazonaws.com/StartChangeSet
```

リクエストボディの例

```
{
  "Catalog": "AWSMarketplace",
  "ChangeSetName": "Adding Data Set to my test Data Product",
  "ChangeSet": [
    {
      "ChangeType": "AddDataSets",
      "Entity": {
        "Identifier": "entity-id@1",
        "Type": "DataProduct@1.0"
      },
      "Details": "{ \"DataSets\": [ { \"Arn\": \"data-set-arn\" } ] }"
    }
  ]
}
```

レスポンスの例

```
{
  "ChangeSetId": "cs-bnEXAMPLE4mkz9oh",
  "ChangeSetArn": "arn:aws:aws-marketplace:us-east-1:account-id:AWSMarketplace/ChangeSet/cs-bnEXAMPLE4mkz9oh"
}
```

変更セットのステータスをチェックする

StartChangeSet API 操作を使用して変更リクエストを開始したら、DescribeChangeSet 操作を使用してそのステータスをチェックできます。StartChangeSet API レスポンスで返された変更セット ID を入力します。

リクエストの例

```
https://catalog.marketplace.us-east-1.amazonaws.com/DescribeChangeSet?
catalog=AWSMarketplace&changeSetId=cs-bnEXAMPLE4mkz9oh
```

リクエストボディの例

```
{
  "changeSetId": "cs-bnEXAMPLE4mkz9oh"
}
```

レスポンスの例

```
{
  "ChangeSetId": "cs-bnEXAMPLE4mkz9oh",
  "ChangeSetArn": "arn:aws:aws-marketplace:us-east-1:account-id:AWSMarketplace/
ChangeSet/cs-bnEXAMPLE4mkz9oh",
  "ChangeSetName": "Adding Data Set to my test Data Product",
  "StartTime": "2018-09-20T19:45:03.115+0000",
  "EndTime": "2018-09-20T19:48:12.517+0000",
  "Status": "SUCCEEDED",
  "FailureDescription": null,
  "ChangeSet": [
    {
      "ChangeType": "AddDataSets",
      "Entity": {
        "Type": "DataProduct@1.0",
        "Identifier": "entity-id@1"
      },
      "ErrorList": []
    }
  ]
}
```

AddDataSets 例外

AWS Marketplace Catalog API を で使用すると、次の例外が発生する可能性があります AWS Data Exchange。

DATA_SET_NOT_FOUND

これは、リクエストされたデータセットが見つからなかった場合に発生します。この問題を解決するには、データセット ARN にタイプミスがなく、 がデータセット AWS アカウント を所有していることを確認してください。

INVALID_INPUT

無効な入力が原因で、リクエストを処理できませんでした。この問題を解決するには、リクエストにタイプミスがないことと、製品がデータセットの許容最大数を越えていないことを確認してください。

DATA_SET_ALREADY_PUBLISHED

これは、製品にデータセットが既に追加されている場合に発生します。

DATA_SET_DUPLICATE_PROVIDED

これは、リクエスト内で同じデータセットが複数回提供されている場合に発生します。

のドキュメント履歴 AWS Data Exchange

以下の表は、本リリースの「AWS Data Exchange ユーザーガイド」のドキュメントを説明するものです。このドキュメントの更新に関する通知については、RSS フィードにサブスクライブできます。

RSS の更新をサブスクリプションするには、使用しているブラウザで RSS プラグインを有効にする必要があります。

変更	説明	日付
新しい管理ポリシーと既存のポリシーの更新	AWS Data Exchange に新しい <code>AWSDataExchangeDataGrantOwnerFullAccess</code> および <code>AWSDataExchangeDataGrantReceiverFullAccess</code> AWS マネージドポリシーが追加されました。AWS <code>AWSDataExchangeReadOnly</code> AWS 管理ポリシーを編集しました。詳細については、「 AWS マネージドポリシー 」を参照してください。	2024 年 10 月 24 日
新しい AWS 管理ポリシーとサービスにリンクされたロールを追加	<code>AWSDataExchangeServiceRolePolicyForLicenseManagement</code> と <code>AWSDataExchangeServiceRolePolicyForOrganizationDiscovery</code> AWS 管理ポリシーを追加しました。詳細については、「 AWS Data Exchange の AWS マネージドポリシー 」を参照してください。また、 <code>AWSServiceRoleForA</code>	2024 年 10 月 17 日

WSDataExchangeLicenseManagement およ
びAWSServiceRoleForAWSDataExchangeOrganizationDiscovery サービスにリンクされたロールも追加されました。詳細については、「[AWS Data Exchange のサービスにリンクされたロールの使用](#)」を参照してください。

既存のポリシーに対する更新

ワイルドカードによるアクセス許可を読み取り専用 ADX アクセス許可の完全なリストに拡張し、aws-marketplace:ListTagsForResource と aws-marketplace:ListPrivateListings を追加しましたAWSDataExchangeReadOnly 。

2024 年 7 月 9 日

既存のポリシーに対する更新

AWSDataExchangeFullAccess および aws-marketplace:GetPrivateListing からアクションを削除しましたAWSDataExchangeProviderFullAccess 。

2024 年 5 月 22 日

既存のポリシーに対する更新

2024 年 4 月 30 日

ステートメント IDs と次の新しいアクションがこれらのポリシーに追加されました。AWSDataExchangeReadOnly 管理ポリシー: aws-marketplace:ListTagsForResource および aws-marketplace:ListPrivateListings 、 AWSDataExchangeSubscriberFullAccess 管理ポリシー: aws-marketplace:TagResource aws-marketplace:UntagResource 、 、 aws-marketplace:ListTagsForResource 、 aws-marketplace:ListPrivateListings 、 aws-marketplace:GetPrivateListing および aws-marketplace:ListPrivateListings AWSDataExchangeFullAccess 管理ポリシー: aws-marketplace:DescribeAgreement 。 詳細については、「[AWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。

既存のポリシーの更新

次の新しい権限がAWSDataExchangeProviderFullAccess マネージドポリシーに追加されました:dataexchange:SendDataSetNotification 詳細については、「[AWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。

2024 年 3 月 5 日

データ許可を作成する機能が利用可能になりました

データ所有者は、販売者として登録 AWS Data Exchange することなく、AWS Marketplace を使用してデータを共有できるようになりました。詳細については、「[AWS Data Exchangeでのデータ許可の作成](#)」を参照してください。

2023 年 12 月 14 日

プロバイダ生成通知が利用可能になりました

プロバイダは、データ更新、データ遅延、スキーマ変更、廃止に関する通知を送信できます。サブスクライバーは、これらの通知を Amazon EventBridge のイベントとして受け取ります。イベントを使用して、自動化されたワークフローを構築したり、AWS ユーザー通知を使用して E メールやチャットプログラムに人間が読み取れる通知を配信したりできます。詳細については、「[プロバイダ生成通知](#)」を参照してください。

2023 年 10 月 31 日

[自動エクスポートジョブで利用できる新しいサブスクライバイベント通知](#)

サブスクライバーは、「自動エクスポートジョブ完了」と「自動エクスポートジョブ失敗」の2つの新しいイベントの通知を受け取ることができます。詳細については、「[自動エクスポートジョブが完了したときのイベント](#)」と「[自動エクスポートジョブが失敗したときのイベント](#)」を参照してください。

2023年10月4日

[サブスクライバーが Amazon S3 バケットから直接ファイルをダウンロードする機能](#)

サブスクライバーは、AWS Data Exchange コンソールからプロバイダーの Amazon S3 バケットから直接ファイルをダウンロードできるようになりました。詳細については、「[Amazon S3 データ アクセスを含む新しい製品の公開](#)」を参照してください。

2023年9月5日

[AWS Marketplace Agreement Service \(MPAS\) の変更 AWS Data Exchange AWS CloudTrail と移行](#)

AWS Data Exchange は、AWS Data Exchange CloudTrail イベントの変更を引き起こす AWS Marketplace Agreement Service に移行しています。詳細については、「[AWS Data Exchange CloudTrail ログ記録の今後の変更](#)」を参照してください。

2023年6月1日

[AWS ユーザー通知を使用する機能](#)

AWS ユーザー通知は、アカウント、およびのサービス間で関連するすべての AWS 通知を設定 AWS リージョン および表示するための内の AWS Management Console 1 つの場所をユーザーに提供します。ユーザーは、電子メール、チャット、モバイルプッシュ通知など、通知の配信チャンネルを設定できます。詳細については、「[AWS Data ExchangeのAWS ユーザー通知](#)」を参照してください。

2023 年 5 月 18 日

[Amazon S3 データアクセスを含む製品を公開およびサブスクライブする機能](#)

Amazon S3 データアクセスを含むデータ製品のサブスクリプションと公開が一般に利用可能になりました。詳細については、「[Amazon S3 データアクセスを含む新しい製品の公開](#)」および「[Amazon S3 データアクセスを含む製品へのサブスクリプション](#)」を参照してください。

2023 年 3 月 14 日

[サブスクライバーが Amazon S3 データアクセスデータセットリソースの通知を受信する機能](#)

プロバイダが Amazon S3 リソースに対してアクションを実行したときに、サブスクライバーが通知を受け取ることができるようになりました。詳細については、[Amazon EventBridge イベント](#) を参照してください。

2023 年 2 月 10 日

[Amazon S3 \(テスト製品\) AWS Data Exchange に含めるようにチュートリアルを更新 \(プレビュー\)](#)

次のチュートリアルでは、AWS Data Exchange カタログを参照して AWS Data Exchange Amazon S3 (テスト製品) (プレビュー): [チュートリアル: Amazon S3 \(テスト製品\) \(プレビュー\) AWS Data Exchange の](#) をサブスクライブする方法を示します。

2023 年 2 月 6 日

[Amazon S3 データアクセスを含む製品を公開およびサブスクライブする機能 \(プレビュー\) データサブスクライバーが を介して AWS GlueAWS Lake Formation テーブルにアクセスする機能 \(プレビュー\)](#)

プロバイダは Amazon S3 データアクセスを含む製品を作成できるようになりました。詳細については、「[Amazon S3 データ アクセスを含む新しい製品の公開 \(プレビュー\)](#)」を参照してください。サブスクライバーは、データプロバイダーの Amazon S3 データセットからデータを検索、サブスクライブ、使用できるようになりました。詳細については、「[Amazon S3 データアクセスを含む製品のサブスクリプション \(プレビュー\)](#)」を参照してください。サブスクライバーは、AWS Lake Formation を通じてライブで ready-to-use サードパーティーの AWS Glue テーブルを検索してサブスクライブできます。これらのテーブルは、基盤となるファイルを抽出、変換、ロードすることなくクエリおよび分析できます。詳細については、「AWS Lake Formation データセットを含む製品をサブスクライブしてアクセスする (プレビュー) [Amazon S3 データアクセスを含む製品をサブスクライブする \(プレビュー\)](#)」を参照してください。サブスクライバーは、 を通じて、すぐに ready-to-use ライブの サードパーティー AWS Glue

2022 年 11 月 30 日

テーブルを検索してサブスクライブできます。AWS Lake Formation により、基盤となるファイルを抽出、変換、ロードすることなく、クエリや分析を行うことができます。詳細については、[AWS Lake Formation 「データセットを含む製品をサブスクライブしてアクセスする \(プレビュー\)」](#)を参照してください。

[現在、イスラエルは適格な管轄区域となっています](#)

イスラエル在住者は AWS Data Exchange で販売者になれます。詳細については、「[プロバイダとして開始する](#)」を参照してください。

2022 年 8 月 29 日

[拡張プロバイダプログラム](#)

拡張プロバイダプログラム (EPP) が一般利用可能になりました。詳細については、「[拡張プロバイダプログラム \(EPP\)](#)」を参照してください。

2022 年 8 月 9 日

[エクスポートファイルのサイズ制限の引き上げ](#)

Amazon S3 へのリビジョンのクロスリージョンエクスポートのファイルサイズ制限が 100 GB から 1,000 GB に引き上げられました。単一のクロスリージョンジョブで Amazon S3 にエクスポートできるアセットの数が 2,000 から 10,000 に増加しました。詳細については、「エクスポートおよびインポートジョブのガイドライン」を参照してください。

2022 年 8 月 4 日

[類似製品](#)

サブスクライバーは商品詳細ページの下部に類似商品のリストを表示できるようになり、検索結果ページに戻らなくても閲覧を続けることができます。詳細については、「[製品へのサブスクリプションとアクセス](#)」を参照してください。

2022 年 7 月 28 日

サブスクリプション後の機能強化

異なるタイプのデータセットを含む製品をサブスクライブすると、サブスクライバーは異なるタイプのデータセットを表示するアイコン付きのカードを別々に表示できるようになりました。サブスクライバーはデータセットに関する詳細情報を確認でき、サブスクリプション後のページから利用資格のあるデータに直接アクセスできます。さらに、S3 データセットを含む製品のサブスクライバーは、サブスクリプション後のページで直接手動または自動エクスポートを設定できます。詳細については、「[製品へのサブスクリプションとアクセス](#)」を参照してください。

2022 年 7 月 25 日

リビジョンのエクスポート時にデータセット ID とデータセット名をエクスポートする機能

Amazon S3 バケットにリビジョンをエクスポートする際、プロバイダとサブスクライバーの両方が、データセット ID とエクスポートされるデータセットの名前をエクスポートできるようになりました。詳細については、「[リビジョンのエクスポート](#)」を参照してください。

2022 年 7 月 14 日

[での Open Data との統合 AWS](#)

の有無にかかわらず、誰でも AWS アカウントプロジェクトの [Open Data AWS](#) からデータ製品を検索および検索できるようになりました。詳細については、「[AWS データセットでのオープンデータの使用](#)」を参照してください。

2022 年 6 月 21 日

[データセットエクスポートの 動画](#)

動画を追加するためのドキュメントのみの更新: サードパーティーデータセットの 1 回限りのエクスポート AWS Data Exchange。詳しくは、「[アセットのエクスポート](#)」と「[リビジョンのエクスポート](#)」を参照してください。

2022 年 5 月 27 日

[API 製品の従量制コストを指定し、従量課金制で API 製品をサブスクリプションで きます](#)

プロバイダは API 製品の従量制コストを指定できるようになりました。詳細については、「[APIを含む製品の公開](#)」を参照してください。サブスクライバーは、従量課金制でサードパーティー API を検索してサブスクライブできるようになりました。この機能により、毎月のデータファイルサブスクリプションと比較して、サブスクリプション契約者の初期費用が削減されます。詳細については、「[APIを含む製品へのサブスクリプションとアクセス](#)」を参照してください。

2022 年 5 月 19 日

[プロバイダとしてサブスクリプション検証リクエストを表示および編集する機能](#)

プロバイダとしてのサブスクリプション検証リクエストの表示と編集の方法が明確になるように、ドキュメントのみを更新しました。詳細については、「[プロバイダのサブスクリプション検証](#)」を参照してください。

2022 年 5 月 6 日

[データディクショナリとサンプルを含むようにチュートリアルを更新しました](#)

次のチュートリアルには、データディクショナリとサンプルが含まれるようになりました。[チュートリアル: AWS Data Exchange でハートビートをサブスク AWS Data Exchange ライブする](#)、[チュートリアル: で APIs AWS Data Exchange の をサブスクライブする \(テスト製品\) AWS Data Exchange](#)、[チュートリアル: で Worldwide Event Attendance をサブスクライブする \(テスト製品\) AWS Data Exchange](#)。

2022 年 4 月 13 日

[データディクショナリとサンプルを含む製品を提供およびサブスクライブする機能](#)

プロバイダは、データディクショナリとサンプルを含むデータ製品を作成および更新できるようになりました。詳細については、「[データディクショナリとサンプル](#)」を参照してください。サブスクライバーは、データディクショナリとサンプルを含む製品をサブスクリプション前に評価できません。詳細については、「[データディクショナリとサンプル](#)」を参照してください。サブスクライバーは、[新しいトピック「サブスクリプションの管理」](#)でサブスクリプションの管理方法について詳しく知ることができます。

2022 年 3 月 31 日

[製品動画の公開](#)

動画を追加するためのドキュメントのみの更新: 製品を公開します AWS Data Exchange。詳細については、「[新しい製品を公開する](#)」を参照してください。

2022 年 3 月 18 日

[既存のポリシーの更新](#)

次の新しい権限がAWSDataExchangeProviderFullAccess マネージドポリシーに追加されました:dataexchange:RevokeRevision
詳細については、「[AWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。

2022 年 3 月 15 日

リビジョンを取り消す機能

プロバイダは、サブスクライバーのリビジョンへのアクセス権を取り消したり、リビジョンのアセットを削除したりできます。詳細については、「[トークンの取り消し](#)」を参照してください。サブスクライバーには、リビジョンへのアクセスが取り消されたことと取り消しの理由を通知する Amazon EventBridge イベントが届きます。詳細については、[Amazon EventBridge イベント](#) を参照してください。

2022 年 3 月 15 日

API データセットを含む製品にサブスクライブするためのチュートリアルを追加しました

次の新しいチュートリアルが追加されました。[チュートリアル: の APIs \(テスト製品\) AWS Data Exchange のをサブスクライブする AWS Data Exchange](#)。

2022 年 1 月 14 日

[Amazon Redshift サブスクリプション製品を公開およびサブスクライブする機能](#)

プロバイダは、Amazon Redshift データセットを作成、ライセンス供与できるようになりました。詳細については、「[Amazon Redshift データセットを含む製品の公開](#)」を参照してください。サブスクライバーは、データプロバイダの Amazon Redshift データセットからデータを検索、サブスクライブ、使用できるようになりました。詳細については、「[Amazon Redshift データセットを含む製品のサブスクリプション](#)」を参照してください。サブスクライバーは、プロバイダが Amazon Redshift リソースに対してアクションを実行したときに通知を受け取ることもできます。詳細については、[Amazon EventBridge イベント](#) を参照してください。次のチュートリアルが追加されました:
[チュートリアル: AWS Data Exchange でワールドワイドイベントアテンダンス\(テスト製品\)にサブスクライブする。](#)

2022 年 1 月 4 日

既存のポリシーに対する更新

Amazon API Gateway から API を取得するための次の新しいアクセス許可が AWS マネージドポリシーに追加されました。AWSDataExchangeProviderFullAccess および AWSDataExchangeFullAccess : apigateway:GET 。詳細については、「[AWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。

2021 年 12 月 3 日

既存のポリシーに対する更新

API アセットにリクエストを送信するための次の新しいアクセス許可が AWS マネージドポリシーに追加されました: AWSDataExchangeProviderFullAccess および AWSDataExchangeSubscriberFullAccess : dataexchange:SendApiAsset 。詳細については、「[AWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。

2021 年 11 月 29 日

[サードパーティー API を提供 およびサブスクライブする機 能](#)

プロバイダーは、AWS Data Exchange を使用して API データ製品を作成し、AWS Data Exchange を使用して、サブスクライバーの認証、料金、請求、REST APIs pay-as-you-goを管理できるようになりました。詳細については、「[新しい API データ製品の公開](#)」を参照してください。サブスクライバーは、AWS クラウドでサードパーティー REST API からの API ベースのデータを検索してサブスクライブできるようになりました。AWS ネイティブ認証とガバナンスを使用し、AWS 生成された SDKs を使用して API コールを行うことができます。詳細については、「[API データ製品のサブスクリプション](#)」を参照してください。

2021 年 11 月 29 日

既存のポリシーに対する更新 (パブリックプレビュー)

Amazon Redshift データセットへのアクセスを許可し、作成するための次の新しいアクセス許可が、AWS マネージドポリシー (パブリックプレビュー): `AWSDataExchangeProviderFullAccess` および `AWSDataExchangeFullAccess` : `redshift:AuthorizeDataShare`、`redshift:DescribeDataSharesForProducer`、およびに追加されました `redshift:DescribeDataShares`。詳細については、「[AWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。

2021 年 11 月 1 日

[Amazon Redshift データ製品を公開してサブスクライブする機能 \(パブリックプレビュー\)](#)

プロバイダーは、を使用して Amazon Redshift データ製品を作成およびライセンスできるようになりました AWS Data Exchange。詳細については、「[新しい Amazon Redshift データ製品の公開 \(プレビュー\)](#)」を参照してください。サブスクライバーは、データプロバイダの Amazon Redshift データセットからデータを検索、サブスクライブ、使用できるようになりました。詳細については、「[Amazon Redshift データ製品のサブスクリプション \(プレビュー\)](#)」を参照してください。

2021 年 10 月 19 日

[既存のポリシーの更新](#)

データセットの新しいリビジョンを自動的にエクスポートするためのアクセスを制御するための次の新しいアクセス許可が、AWS マネージドポリシー `AWS DataExchangeSubscriberFullAccess` に追加されました。 `dataexchange:CreateEventAction`、`dataexchange:UpdateEventAction`、および `dataexchange:DeleteEventAction`。詳細については、「[AWS マネージドポリシー](#)」を参照してください。

2021 年 9 月 30 日

[リビジョンを自動的にエクスポートする機能](#)

サブスクライバーは、リビジョンを自動的にエクスポートできるようになりました。詳細については、「[サブスクライバーとしての S3 バケットへのリビジョンの自動エクスポート \(コンソール\)](#)」を参照してください。

2021 年 9 月 30 日

[ジョブの使用方法に関する手順を更新](#)

ジョブを使用してアセットのインポートとエクスポート、およびリビジョンのエクスポートを実行する方法を明確にするために、「[AWS Data Exchange のジョブ](#)」セクションが更新されました。

2021 年 9 月 7 日

[データ製品のサブスクリプションを解除する方法に関する手順を追加](#)

「[AWS Data Exchange でのデータ製品のサブスクリプション](#)」セクションが再編成され、製品のサブスクリプションを解除する方法を明確にするための新しいサブセクションが追加されました。詳細については、「[で製品のサブスクリプションを解除する AWS Data Exchange](#)」を参照してください。

2021 年 8 月 11 日

[AWS License Manager を使用したライセンスの共有のサポート](#)

ライセンスは、AWS 組織内の他のアカウントと購入した製品と共有できます。詳細については、「[組織内でのライセンスサブスクリプションの共有](#)」を参照してください。

2021 年 8 月 4 日

リビジョンを自動的に発行する機能	プロバイダは、データセットにリビジョンを自動的に発行できるようになりました。詳細については、「 自動リビジョン発行を使用した新しいデータセットリビジョンの発行 」を参照してください。既存のデータセットを自動リビジョン発行に移行する方法については、「 既存製品の自動リビジョン発行への移行 」を参照してください。	2021年7月22日
製品説明テンプレートを更新	次の製品説明テンプレートが更新されました: メディアとエンターテイメントの詳細な説明テンプレート と 小売と場所の詳細な説明テンプレート 。	2021年7月19日
より適格な管轄区域	現在、AWS Data Exchange 香港特別行政区とカタールで販売者になる資格があります。詳細については、「 AWS Data Exchange 製品の対象管轄区域 」を参照してください。	2021年6月24日
マネージドポリシーに対する変更を表示する機能	の AWS 管理ポリシーに加えられた変更を確認できるようになりました AWS Data Exchange。これらは、「 AWS Data Exchange 向けの AWS マネージドポリシー 」トピックで追跡されます。	2021年5月25日

支払いスケジューラを追加	支払いスケジュールを使用して、プライベートオファーや更新されたプライベートオファーのサブスクリイパーに料金を請求できるようになりました。詳細については、「 プライベートオファーを作成する 」を参照してください。	2021 年 5 月 24 日
データセットをプログラムの追加する機能を追加	AWS Marketplace Catalog API サービスを使用してデータセットを追加できるようになりました。詳細については、 AWS Marketplace 「カタログ API AWS Data Exchange での使用」 を参照してください。	2020 年 8 月 23 日
希望通貨のサポート	AWS Data Exchange サブスクリプションのお支払いには、ご希望の通貨を使用できません。詳細については、「 料金 」を参照してください。	2020 年 7 月 27 日
より適格な管轄区域	現在、AWS Data Exchange バレーン、ノルウェー、スイス、アラブ首長国連邦 (UAE) で販売者になる資格がありません。詳細については、「 AWS Data Exchange 製品の対象管轄区域 」を参照してください。	2020 年 6 月 16 日

[データセットのエクスポート に対する暗号化のサポートを 追加](#)

AWS Data Exchange は、データセットを Amazon S3 にエクスポートするときに、設定可能な暗号化パラメータをサポートするようになりました。詳細については、「[Amazon S3 バケットへのデータセットのエクスポート](#)」を参照してください。

2020 年 4 月 27 日

[AWS Data Exchange が一般公開されました](#)

AWS Data Exchange は、お客様が AWS クラウドでファイルベースのデータセットを簡単に AWS 作成、更新、保守、および安全に交換できるようにするサービスです。

2019 年 11 月 13 日

翻訳は機械翻訳により提供されています。提供された翻訳内容と英語版の間で齟齬、不一致または矛盾がある場合、英語版が優先します。